



おどろおどろ

vol. 6

# 目次

---

## 駒.zone vol.6

エラー 清水らくは

ツクモさん、叩きすぎです！ 贅楽夢

将棋短歌

七割未満 清水らくは  
少女の追い越すスピード ーバトル・サンクチュアリ・一回戦ー 上石三郎

フォーチュンテラー・奈々 皐倫藍那

月子のチェス日記 金本月子

**life is lovely 2** ジェームズ・千駄ヶ谷

鑑賞物としての詰将棋作品論 会場健大

ふれあう将棋3 ふりごま

駒zoneとわたし～ちょっと私的な清水らくは論 ぜいらむ

駒とおむすびとペンギン 浮島

どうぶつ化するポスト将棋 清水らくは

作者紹介

あとがき

突然、縁談が進んだ。

この家に戻ってきて以来、全てのことは私に関係なく決まっていた。だから、別段今回のことを驚くわけでもない。とはいえ高校を出たらすぐに同居するべし、と言われた時はすぐには首を縦に振ることができなかった。

「綜馬、お前は大変立派な役目を果たすことになるのだ。荣誉なことなのだぞ」

父、黒山銀次郎は、低すぎる声で言った。この威圧感の前では、黙ることはできても拒むことはできない。この人はただ座るだけで、多くの人々を震え上がらせてきた。名人でさえ、「黒山とはできれば対局したくない」と言ったそうである。

「どうした。返事は」

「はい」

「そうか。相手は病弱だが教養もあり器量もいいお嬢さんだ。相手として申し分がない」

「……はい」

ただ、肯定する言葉を繰り返した。私にはそうするしかすべがなかったのだ。もはやこの世に母はいない。私が頼りにするのはこの男しかいないのだ。

「それと綜馬、お嬢さんにあったら将棋の話をしっかり聞きなさい。わけあってこちらの世界に来ることはなかったが、実力は決してプロに引けを取らない」

「わかりました」

そんな人がなぜ、という言葉は胸の奥にしまった。会えばわかることだ。

「お嬢さんには専属の世話人がいる。できれば結婚しても今の家に暮らしたいということだった。婿養子のように言われることもあるかもしれないが、我慢できるか」

「大丈夫です」

「そうか。それでこそ我が息子だ」

このようにして、私の人生は一マス進んでいった。先代名人の隠し子と結婚することになった。

前名人、乙川洋。才能は歴代一位と言われながら、在位中に病に倒れ惜しまれながら引退した。四十三歳の時だった。

目覚ましい活躍をしながらも、私生活は謎に包まれていた、と聞く。仕事以外では一切棋士と会わず、自宅に居ることもまれだったと言う。家族でさえ普段何をしているのか知らない。タイトル戦で赴く先でも単独行動をし、深夜になっても部屋に戻らないことが多かった。「実は彼は妖怪なのではないか」という噂さえ広まったのだそうだ。

そんな乙川に隠し子がいることは、父以外の棋士は知らないことらしい。なぜ父がそれを知ることになったのかはわからない。ただ、執念がそうさせたのではないかと私は思っている。

緩やかに減速していく車体。バスを乗り継いで訪れた先は、絵に描いたような田舎だった。稲の刈り取られた乾いた田んぼ。ポロポロになったトタン屋根の小屋。今は働いていない、小さなショベルカー。たった一人の乗客であった私をおろして、バスは静かに発車した。

地図を確認するが、迷うような道は見当たらない。ただこの道を進んでいけばいいようだ。そしてしばらく経ったところで、一軒の屋敷が視界に入ってきた。周囲には畑と林しかなく、あれが目指す場所で間違いなさそうである。

玄関にたどり着くまでに五分以上かかった。屋敷はもはや視界に収まりきらないほどの大きさになっている。木造平屋で、相当に古いのだろうが手入れがされている。

「すみません」

ベルも何も見当たらなかった。表札には「風岡」と書かれている。

「はいはいはい」

引き戸がすっと秋、ごま塩の頭が目の前に現れた。口髭がちょこんと乗っており、喜劇役者でもやっついそうな顔立ちの男だった。

「黒山綜馬と言います。こちら、乙川さんのお宅ですか」

「ああ、ああ。聞いていますよ。ささ、こちらへ」

「お邪魔します」

入ると、十畳はあろうかという玄関の広さに圧倒された。天井も高く、ここだけで一つのロジのようなのである。

「ああ、申し遅れました。私、ここで生駒様のお世話係をしております、風岡と言います」

「風岡……では、ここはあなたの家なのですか」

「ええ、まあ……話すとき長いのでまずはお入りください」

促されるままに、風岡の後についていく。がらんとした何も置かれていない畳の部屋を二つ抜けると、そこには小さな炬燵がちょこんと置かれていた。

「ここが私の部屋なんですよ、まあお座りください」

「はい」

私が腰掛けると、風岡はお茶を入れ始めた。茶棚もテレビも、小さく古いものだった。大きな屋敷であることを忘れてしまうほどに、全てがこじんまりとした空間だった。

「安いものですが、どうぞ」

「ありがとうございます」

「それで、何から話しましょうかな。ああ、このお屋敷のことでしたな」

「はい」

風岡は私の前に腰かけると、首を傾けて窓の外を眺めた。まるで、そこになにか映像が映っているかのように見入っていた。

「……ご存知かと思いますが生駒お嬢様は乙川名人のお子様です。そして、名人は私の師匠でもあります」

「え」

「お嬢様の母親も立場のあるお方で、名人の子ができたと周囲には打ち明けられず、生駒お嬢様を殺してしまう寸前のところだったのです。師匠はすんでのところを助け、当時奨励会を退会してすることのなかった私にお嬢様を託したのです」

「そういうことでしたか」

「お嬢様が名人の子であるということは隠さねばなりませんでした。私はこの家と養育費を師匠からもらい、私の子として育ててきました」

風岡は目をつぶった。

「ですが、お嬢様は物心ついたらすぐ、私が父でないことに気が付きました。さすが名人の子です。そして私も、実の子として接することをやめました。……解放されたのです」

「……」

私も母のもとで育てられ、まだ見ぬプロ棋士の父を恨んで育った。しかしそれでも、風岡と生駒の苦勞の足元にも及ばないのだろう、そう思った。ただ、そんなことは多くの場合気を遣っても仕方がないのである。

「とにかく、一度会ってみなくては始まりませんね」

「はい」

「今は多分寝ているでしょうから……もう少ししたら、お嬢様の部屋に案内します」

「わかりました」

お茶が冷めていく。私はこの家に慣れることができるだろうか。

「ここです」

入口は、ふすまではなかった。セメントの壁に白いペンキが塗られ、ところどころ花の絵が描かれていた。そして扉には、ナンバー式の鍵がかかっていた。まるで、実験室の入り口のようなものである。

「これは……」

「お嬢様は決められた方以外とは決して会ってはならないのです。私と調理係の小島、そして定期的に訪れるお医者様。そこに今日から、綜馬様が加わります」

風岡は右手の人差し指で数字を次々と10個ほど押した。するとかちやり、と錠の外れる音がした。

「いずれ番号はお教えしますので」

「あ……はい」

扉を開くと、まず目に飛び込んできたのは水色の絨毯だった。壁が白いので、部屋全体が雲の中を表わしているかのようだった。

「お嬢様、綜馬様がいらっしゃいましたよ」

「あら。入ってもらって」

琴の音のようだ、と思った。少し高くて、澄んでいるようで粘りもあって、震えた声。

「はい。では綜馬様、どうぞ中へ」

風岡は動かなかった。一人で入れということらしい。

「では、失礼します」

部屋に二歩入ったところで、ガタンという音がした。振り返ると扉が占められていた。

「いらっしゃい」

声は右側から聴こえる。そこには大きなベッドと、そこに寝転ぶ女性の姿があった。青いワンピースに身を包んだ彼女は、まっすぐ天井を見上げていた。大きな瞳はしっかりと見開かれていて、まるで天井の何かを読んでいるかのようにくるくと動いていた。

「……こんにちは」

「綜馬ね。話は聞いている。ちょっと待ってて」

左手を、まっすぐ上に伸ばす彼女。爪の先が、ピカリと光った。カタ、と機械的な音がした。部屋の隅にある、大きなスピーカーからだ。もしやと思って天井を見上げると、そこには大きな将棋盤があった。いや、正確には将棋盤を映し出すモニターだ。ベッドと同じ大きさぐらいはあるだろうか、それほどのモニターの中で、将棋が指されているのだった。

どうやら左手のなかにあるものが電波を出していて、それがマウスの代わりになっているようだ。

強くないので、盤面についてはよくわからない。ただ、持ち時間は生駒が13分なのに対して、相手は3分しかない、というのは見てわかった。

よく見ると、生駒側には「七段」という表記があった。相手は五段。この道場のシステムはわからないが、七段が相当強いであろうことは容易に推測できる。

「勝ったわ」

数分後、穏やかな声で彼女は言った。相手が投了したのだ。

「それはよかった」

「あなた、将棋は」

「かなり弱いです」

「そう。でも、黒山さんの血を引いているんでしょ」

「でも、一緒に暮らしたのは数か月だから」

「そうみたいね」

生駒は横になり、こちらを向かないままだった。

「君は、いいのかい」

「なにが？」

「結婚」

「仕方ないわ」

「そうかい」

「あなただってそうだったんでしょ。私たちは逆らえない運命なの。あの人たちの子どもとして生まれてしまったのなら」

ずっと、天井を見て過ごしてきたのだろうか。まるでこの部屋が、彼女の全てであるかのよ

うだ。

「そうなのかもしれない」

「こっち来て」

少しだけ首を横にずらして、手招きをする生駒。私はそれに従い、側まで行ってベッドの隅に腰かけた。

「私は、確実に名人の子。将棋から逃れられない」

「プロになりたいのかい」

「なれないわ。たとえ体が丈夫で、全てのプロに勝てたとしてもなれない」

「どうして……」

「ここを触って」

生駒は、右手で後頭部を指し示す。私は身を乗り出して、頭を抱えた。黒髪の奥にある感触は、異様に角ばっていて、硬かった。

「どういうことなんだい」

「頭のなかに、コンピューターが入っているの」

「えっ」

「そうしなければ生きていけなかったから。考えたり、記憶したりする場所は全て自分のもの。でも、呼吸したり、動いたりするためには機械が必要な。それに、これを入れてから異様に思考の処理が速くなった。確かに私が考えているけれど、その速度はコンピューターが画期的に上げてくれる。これは、不公平よ」

悲しい顔などは見せなかった。それが無ければ生きていけないのならば、プロを諦めるのはしょうがないということか。実際、どれほど棋力に関わっているのだろうか。

名人になれる力があるかもしれないのに、小さな部屋で暮らす少女がいるという現実を、ほとんどの人は知らない。

「やれば、勝てると思うかい？」

「自信はあるわ。でも……」

「でも？」

「それは、私たちの子どもに託しなさい、あの人たちはそう思っているということよね」

初めて、生駒の唇が少し歪んだ。私たちがこうして結婚させられる理由。それは、黒山と乙川の血を引きついだ者を作るため。そんなことは重々承知だ。

でも。すでに名人の子はすごい実力を持っているように見える。ただ、違法な力も加わっているかもしれないだけで。実際には生駒が思い込んでいるだけで、高速処理も本人の実力かもしれない。しかし、だからと言ってそんな理屈は世間には認められないだろう。

運命。

私は、しばらく生駒の頭に触れたままだった。これから妻となる人の、感触を覚えたかったのである。

私の部屋は、屋敷の一番端、離れの一室ということになった。どこでもいいと言われたのだが、そう言われれば選ぶ場所は決まっていた。最も東にある部屋である。

荷物はほとんどなかったが、風岡がいろいろと用意してくれた。家具からスーツまで、私が来ると決まった日に注文したという。申し訳ないと思ったのが顔に出たのか、風岡は「師匠はお金の使い方を知らないんですよ。遊ぶこともなければ、騙されるほどの愚かさもない。だからこの家だけが、浪費できる場所なんです」

前名人は現役時代、勝ちまくっていた。お金も相当稼いだのだろう。父もお金がないわけではなかったが、遊びも知っていたし、騙されるともあった。

強い日差しが、頬を焼いていくのがわかった。朝日だ。

母と二人で暮らしていた部屋は、東向きのとて日当たりのいい部屋だった。朝早くからパートに行くため、母とても早起きだった。私はといえば、朝日が目覚まし代わりだった。起きると既に母はいないが、朝食と弁当が用意してあった。

父に要求すれば、働かなくていいだけの養育費はもらえたのだと思う。けれども、母はそうしなかった。誇りとかなんとか名前は付けられるだろうが、その感情の正体は、私にはわからない。

。

母は、もういない。けれどもあの時と同じように、朝日はある。

目が覚めた私は、この部屋がかつてのあの部屋でないことを知り、少しさびしくなった。しかしもうふり払わなければならない過去だ。私は母でもなく、また父でもないこと人たちと暮らしている。

離れには洗面所も風呂場もあり、ここだけで一家族が暮らせるだけ設備が整っていた。私は着替えた後顔を洗い、歯を磨いた。和風旅館に泊まりに来たような趣だが、それにしては静かすぎる。この家には私以外には、風岡と生駒しかいないのだ。

渡り廊下を越え、何も置かれていない八畳間を通り過ぎ、私は食堂に向かった。入ってみると、小さなテーブルに椅子が二つあるだけ、とても豪邸の中にあるとは思えない質素な部屋だった。

。

「ああ、綜馬様。お早いのですね」

奥の方から声が聞こえる。引き戸を開けるとそこは台所で、風岡が調理しているところだった。

「朝日と共に起きるようにしています」

「それはいい。いや、今作っているところなのでお待ちくださいね。何せ朝食を二人分作るなんて初めてで。お嬢様はお昼しか食べませんから」

風岡は生駒を預かってから、ずっとここで孤独な朝食を採っていたのだろうか。生駒があの部屋にずっといる中、この広い屋敷を一人で支えていくことの苦労は、いかほどのものだったのだろうか。

父は孤独な人だった。私がそばにいても、決して心を開いて何かを口にすることはなかった。風岡と生駒はどうなのだろうか。二人には血のつながりが無い。けれども、二人には憎しみ合う必要も、無視をする理由もない。

私もまた、試されている。これから二人とどのように過ごしていけるのだろうか。

温かく、懐かしい香りが漂ってくる。少なくとも風岡は、父よりも母に近い。

「ここです」

朝食の後風岡につれてこられたのは、地下室だった。そんなものがあることすら驚きだが、何よりびっくりしたのはシェルターのようなその造形である。やたらと白い照明と、クリーム色のつるつるの床。そしてコンピューターとモニターがいくつも並んでいて、押しではいけないような赤く光るボタンもずっしりとあった。

「これは……」

「生駒の部屋の制御室です」

「え、これだけのもので？」

「そうです。もちろん将棋をするためのものもありますが、ごく一部です。除菌や温度調整、湿度の管理から……」

「頭の中の機械、ですか」

「お聞きになりましたか。そうです、そちらの動作も確認できます。非常に繊細な機械ですから、メンテナンスが大変なんです。そしてあれが止まってしまえば、お嬢様の命は絶たれてしまいます」

風岡はいくつかの数値をチェックして回り、そして私を手招きした。

「綜馬様にも、管理できるようになってもらいます」

「え」

「私はいつも不安でした。私がもしも何らかの事情でいなくなってしまうたら、お嬢様も生きていけなくなるのだと。けれどももう、私一人ではありません。綜馬様が、お嬢様を支えていけるのです」

とても、言葉通りには見えなかった。風岡は喜びに引きずられた、悲しみの表情をしていた。

そうだこれは。娘が誰かに盗られてしまう、そういう時の少しだけの達成感を含んだ、悲しみの顔だ。

「わかりました。早く覚えられるよう、頑張ります」

そしてそんな人間を安心させる、つまり諦めさせるには、盗っていく男がしっかりするしかない。

「八段になってしまったわ」

生駒は言った。天井を見ると確かに「I-comet 八段」の表記を見ることができた。

「おめでとう」

「ありがとう。でも、もうすぐ目標がなくなってしまう」

対局が終わり、ネット道場入場者一覧画面に戻る。生駒の名前は一番上にあり、二番目の人と

20点以上の開きがあった。

「もう、生駒より強い人がいないってこと？」

「この時間には。夜になったら八段の人が何人か現れるの。きっとプロ」

「その人たちとは対戦しないの？」

「してもいいけれど……もし勝ってしまったら、何のために強くなればいいのか」

生駒はプロではない。強くなることはお金のためでも、名誉のためでもない。ただ強さだけが、彼女を将棋へと向かわせている。もし将棋がなくなれば、生駒はこの部屋の中で何をして生きていけばいいのだろうか。もちろん私がそれを支えなければならないのだけれど、けれど……今の私はまだ、圧倒的に他人なのだ。生駒のことはほとんど何もわからない。

「じゃあ生駒は……名人に勝てると思うかい」

「名人……父ではなくて、今の？」

「ああ。南牟婁名人に」

「勝てないわ。異常な強さだもの」

乙川名人引退後、連覇しているのが南牟婁名人だった。それ以前にも三冠を保持し続けるなど、将棋界で最も強いのは彼ということで関係者の見解は一致していた。乙川名人が幾度も壁となり名人を渡さなかったが、今はもうその役割を果たす者はいない。現在は五冠だが、いずれ七冠全てを制覇するだろうと言われている。

「じゃあ、勝ちたい？」

「もちろん、そう」

父は、奴とは対局したくない、勝てる気がしないと言っていた。その時点で名人に届く器でないと思う。

もし生駒が病気でなければ。プロになって、活躍して、名人に挑戦できただろうか。しかし病気でなければ、生駒の頭に機械を入れることはなかった。そうすると、今の強さは得られなかっただろうか。

仮定の話は、どこまでも仮定の話だ。

プロの世界では認められないかもしれない。けれども今の生駒がプロと戦えばどうなるのか、それは興味があってもいいではないか。そして生駒も、より強い人と対戦したがるている。

「綜馬は、何かしたいことはある？ ずっとここにいたら息が詰まるでしょ」

「いや、楽しいよ」

「そうなの？ 変な人」

息が詰まったのは、父との生活だ。親子として振る舞わなければいけないことは、大変な苦痛だった。

生駒との関係は、これから自由に描いていけばいい。随分と楽である。

「でも、私人のことなんてあんまり知らないな。風岡と、お医者さんぐらいにしか会わないから」

「そうか。じゃあ告白すると、俺変な人じゃないよ」

「そうなのね」

ここは、心地いい。

バスを二本乗りついで、電車に乗って、二時間。下りた駅から歩いて十五分。私は、とある温泉街の旅館にたどり着いた。

旅行に来たのでも、湯治に来たのではない。

中に入っていくと、案内の看板が出ていた。指示通り進むと、受付のテーブルが見えた。受付を済ませ、千円払って部屋に入る。

中に入ると既に多くの人が座布団に腰掛けていた。大きな和室のなかに多くのおじさんたち。そして一番前には、大きなモニターが設置されていた。

今日この旅館では、タイトル戦が行われている。南牟婁五冠が、若手挑戦者を迎え撃つシリーズの開幕戦なのである。そして私が来ている部屋は、その大盤解説場。プロ棋士たちが、目の前で対局の解説をしてくれるらしい。

十分ほどして、なんとか六段と女流の何とかさんが現れた。正直なところ、将棋界のことは偏った知識しかなく、多くのプロ棋士のことをまったく知らない。ただ、二人の話はとてもうまく、将棋を知らなくても楽しめるほどだった。

対局室の様子が映し出されている。和服を着た二人だったが、圧倒的に名人の方が似合っていた。タイトル戦で何回も着ている南牟婁名人に対し、挑戦者は初めての和服らしい。動きもどこかぎこちない。

部屋に誰かが入ってきた。見覚えがある顔……父だった。なぜ父が、対局者でも解説者でもないのに……

「立会人の黒山九段ですね」

どうやら、立会人と呼ばれる立場らしかった。そんなものがあることすら知らなかった。

父もまた、和服だった。似合っていた。タイトルを獲得したこともあるし、いまだにA級棋士である。家に居る時とは違い、貫録があった。

しばらく聞いていたが、会場の熱気が息苦しくなってきた。ここにいる人たちの視線が、吐息が、熱を放ち続けているのだ。私は、部屋を出た。

「綜馬」

廊下にあった椅子に腰かけていると、声をかけられた。聞き覚えがある。

「父さん」

「どうしたんだ、こんなところで」

「プロの世界を知りたかったので、見に来ました」

「そうか。乙川の娘とはうまくいっているか」

「はい」

「それはよかった」

顔色一つ変えず、義務のように声を紡ぐ父。表情の作り方を知らないのだ。

「父さん、質問があります」

「なんだ」

「名人は、自分を打ち負かすような相手がいたら、プロでなくとも戦いたくなるでしょうか」

「なんだ、それは。そんな人間がいるとも思えないが。しかし、名人なら対戦を欲することは有り得る」

「そうですか。そういうものですか」

「お前、あの娘がそれをできると思っているのか」

「……はい。ただ、彼女がそれを許される存在かどうかはわかりません。あの力が彼女だけの力と言えるのかどうか」

「綜馬、乙川に会いに行くがいい。答えが見つかるかもしれない」

「え、前名人にですか」

「お前の義父だ。私が話をしておこう。今から解説を代わるので、あとでまた連絡をする」

父は、解説会場の中へと入って行ってしまった。

何となくだが、父が仕事をする姿は見たくなかった。父が出てくるまで、ぼうっと椅子に座り続けていた。

「ねえ、綜馬。夫婦って、どうすればいいのかわからないの」

「え」

いつものように、私は生駒の部屋にいた。毎日二時間ほど訪れるのが、決まりになっていた。

「人と会うこともほとんどないから、恋人とか、友達とか、そういう関係がよくわからないの。知っているのは女の子と世話人の関係だけ」

「俺もよくわからないよ。結婚するのは初めてだもの」

「それはそうね」

実際、これでいいのか、と思うことはある。生駒は起きていられる時間が短いし、私が部屋にいと余分なメンテナンスが必要になってしまう。父親たちが望むように、子どもを生んだり育てたりといったことが可能なのだろうか。

「生駒……今度、君の父親に会いに行くよ」

「父に……？」

「挨拶さ」

「私もしたことがないのに」

「君の分までしておくよ」

手を伸ばして、頭を撫でてみた。生駒はそれを拒否しなかった。ごつごつとした感触、それは生駒らしさだと思った。

続く

ツクモさん、叩きすぎです！

---

ツクモさん、叩きすぎです！

贅楽夢

それは、いつもの研究会での何気ない一言だった。

人は他人と意思の疎通を図るために言葉を用いるが、言葉はいつも冗長でそれでいてとても不自由なものだ。伝えたい思いを言葉にのせる。言葉を聞いて思いを押し量る。だがどれだけ言葉の糸を手繰り寄せたとしても、本当の思いは言葉の先には繋がってなどいない。思いすぎと曲解の危うすぎるバランスの上に構築されるコミュニケーションは、まるで未完成の3Dジグソーパズルのようだ。

完成する保証はなく。

次の瞬間には音を立てて崩れ落ちてしまいそうで。

それでも人は、それを懸命に積み上げ続ける。積み上げることをやめたら、それは壊れることと同じだから。一度壊れたら終わりだとそう思っているから。

人との絆を断たれるのが嫌で、必死に追い立てられるように言葉を紡ぐ。そして紡ぐほどにそれは縫れていく。手繰り寄せた糸の先に何もなかったとしても、手を伸ばせばあるいはその先にある何かを掴めたのではないか？あるいは……差し伸べられていたその手を前に、見て見ぬふりをしていただけではないのか？

これから僕が語る物語は、そんな取り返しのつかない後悔の物語でもある。

街では寒風吹きすさぶ2月初めのある日の午後。棋士仲間である千場桂市四段が主催している研究会でのことだった。参加していたとある奨励会員との練習将棋の対局。戦いはいよいよこれから中盤へ入って行こうかという局面。

――▲1五歩。

パチ、という静かな駒音とともに僕が敵陣の端へ向かって攻撃を開始したその時、確かに彼はこう言ったのだ。

「死のう――と、思ったことはありますか？」

【1】

「……はあ……」

世間には溜息をひとつつくと幸せがひとつ逃げる、という言葉があるそうだが果たしてそうだろうか？ 大体、人が幸せであるかどうかなんて人それぞれの物差しでしか計れないのであって「貯金が一千万あれば幸せ」だとか「起業して社長になれたら幸せ」だとか「議員になってやがて大臣になれたら幸せ」だとか「学生時代のクラスのマドンナ（死語）と結婚できたら幸せ」だとか、そんな単純なものではないだろうし、そんな明確な基準があるわけではないだろう。それが誰かの目標であり、そしてその目標を達成したのだとしても、そこで人生が終わるわけではない。人生には双六のように「上がり」があるわけではなく、あるとすればそれは「死ぬこと」でしかないのだ。目標を達成した後不幸が訪れることだってあるだろう。溜息の多い人は

そうでない人より比較的不幸であるという可能性は否定できないものの、かと言って溜息をついたから不幸になったのかと言えばそうとも言いきれない。溜息をつくから幸せが逃げるのではなく、むしろ先に幸せが逃げていったからこそ、それを儂んで溜息がもれるのだと、そう思う。今日の僕はそう思わざるをえない。……とまあ、そんな取りとめもないことを考えながら、僕は一昨日から何度も溜息をついているのだった。多分、今ので107回目くらい。

ここは、都内某所のとある賃貸アパートの3階。お昼に食べたレトルトカレーのかぐわしい匂いが充満する自室に置かれた小さな四角いテーブル。その上に載せたノートパソコンの画面上に広げたWEBブラウザには、昨夜アップされたばかりの「ものぐさ将棋観戦ブログ」、その最新エントリが映し出されていた。

――昨日のことである。

将棋界では第〇期・将棋女流名人位戦5番勝負の最終局が行われていた。美少女フィギュアなんて1つも置かれていない僕の自室の棚の上の時計の針が午後3:30を示した頃、全世界注目のこの対局はいよいよ最終盤を迎えていた。というより既に終局間近だった。中継ブログで伝えらえる両対局者の様子、将棋盤の上の状況、ツイッターの将棋TLの喧嘩、それら全てが新しい女流名人誕生の瞬間が近づいていることを、確信と同時に祝福もしていた。それは、将棋界の美しすぎる女神・弥内美砂子女流名人のタイトル失冠が現実のものとなる瞬間が忍び寄ってきている、ということでもある。

「……くっ……弥内さん……はぁ……」

将棋はゲームであり文化でもあるが、それとは別に身体運動による競技――つまりスポーツとしての一面もある。見た目以上に体力を使うのだ。サッカーボールを蹴るインパクトの瞬間に選手が息を止めるように、将棋では本気で手を読んでいると気が付かないうちに呼吸を止めていることがある。持ち時間がなくなり極限まで集中する終盤の局面になるとさらにそうだ。

息苦しさのあまり部屋中の酸素を貪りながら、必死で弥内さんの逆転の筋を探す。史上最強とも言われる埴生名人ですら、一手詰めの頓死を喰らって大逆転負けを喫したことがあるのだから、将棋は最後の最後まで何が起こるか判らない。そして勝負は理屈だけで完結するわけではないのだ。神の見えざる手による、ほんのちょっとした悪戯で勝敗がひっくり返ることがないとは言えない。一つだけ心配事があるとすれば、天界の女神たちが弥内さんの美しさに嫉妬してはいないかという点であり、そしてそれは大いにありうる話ではあった。古代中国の玄宗皇帝が楊貴妃に入れあげて政治を疎かにした結果、大規模な内乱が発生してしまい、そのため件の妃が「傾国の美女」と呼ばれることになった――という故事があるが、楊貴妃が傾国の美女なら弥内さんは傾天の美女と言えよう。いや天界どころか時空そのものが歪みかねない。「何か……何かあるはずだ！……はぁ……はぁ」

息苦しさが尋常ではない。朝から部屋の換気を全くしていなかったことを後悔しつつ、弥内さんを想いながら必死に読む。敵の王将を仕留めるための手順を探す。

理屈の上ではこの将棋は既に終わっている。女流名人が勝つには相手のミスを生かすしかない状況なのだが、挑戦者の指し手はここまで完璧でミスの出る気配など微塵も感じられない。

挑戦者は、蒲尾向日葵女流二段、15歳。現役の女子高生であり、女流棋界に彗星の如く現れた天才女流棋士であった。弥内さんほどではないにせよ、というか足元にも及ばないにせよ、ファ

ンの人気も上々だ。上々というか、変な意味で注目を浴びている子だった。とにかくファッションがおかしい。いつもいつも同じような服しか着ていない僕も大概だが、将棋会館で蒲尾向日葵のその姿を初めて見た時はさすがに引いたものだった。……つまり。

魔法の衣装を着用しているのである。

黒そして時には赤い、膝上丈のワンピースの魔法衣（ローブ）に、爪先の尖った短めの黄朽葉色のブーツ。やや栗色の髪のが黄金比の弧を描いてカールして、その頭の上に三角帽子を乗せている。時にそれと同系色のマントを羽織っていることもあった。全くもってどこにも隙の見当たらない魔法っ子だ。

しかし、しかしである。

将棋会館はコミケ会場ではないのだ。「金は引く手に好手あり」という将棋の格言があるが引きすぎて将棋盤から落っこちてしまいそうなくらいのドン引きだった。

マスコミでも紹介されていて、どちらかと言えば「将棋を指す魔法コスプレの変な女の子がいるらしい」というのが世間一般の最大公約数的評価と言えるかもしれない。唯一の救いと言えば重要な対局の時は、さすがに学校の制服に着替えていることだった。聞くところによると今回の女流名人位戦開幕前、本人は魔法っ子で行くことを周囲に漏らしていたものの、捏長郁夫将棋連盟会長の必死の説得があったらしい。あの……と言っては何だが、あの会長に非常識を注意されるとは大物ぶりにも程があるというものである。

ということで、今回は学校の制服だった。しかもあろうことかセーラー服である。上下黒のセーラー服。スカーフと襟と袖口にうっすらと引かれた3本のラインは水色だった。膝までの長さのスカートに黒ソックス。太もも全開のミニではなく、膝小僧がチラチラ見える長さというのがポイントが高い。弥内さんほどではないにせよ、これはこれで眼福だ。

中継ブログには、対局場に現れた朝の「魔法っ子向日葵ちゃん」の写真が無駄にたくさん掲載されていた。魔法っ子で出勤して対局前にセーラー服に着替えたらしい。

どうでもいいがこの季節、あのコスチュームで寒くないのだろうかと他人事ながら心配になる。見ているこっちが風邪をひきそうになるが、見た目より暖かいのかもしれない。そんな魔法が掛っているのかもしれない。

「似合ってる、と言えば、まあ似合ってはいるんだけどなあ……」

これでは彗星の如く現れたというよりホウキに跨って飛んできたような感じがする。そしてその奇抜なファッションセンスそのままに、彼女の将棋はどこか魔術的だった。形勢判断の難しい局面であっても、いやむしろそういう局面であればあるほど、相手を幻惑するような指し回しを見せ訳のわからないうちに勝利をもぎ取っていく。俗に「向日葵のマジカル終盤術♡」と呼ばれる独特のテクニックは、女流棋士だけでなく男性棋士も既に5名ほど餌食になっている。餌食になっているのは今のところ低段の若手棋士だけではあるが、それにしてもデビュー以来、男性棋士と5戦して全勝とは恐れ入る。若手の低段というのは弱いから低段なのではなく、これから上がっていく才能ある棋士も多いのだ。例えば僕のように。

ともあれ、蒲尾向日葵の才能を疑うものは、今や将棋界にもツイッター界にも存在しない。史上最強の呼び声高い埴生名人からも「素晴らしい才能ですね。えー、えー。蒲尾さんは天然で天才だと思います。えーえー」とのお墨付きが出ているのだ。そんなお墨は「隻腕の元・天才」と

呼ばれているこの僕だって付けてもらっていない。墨と言うか黒星なら頼めば何度でも付けてもらえそうだけど。頼まなくても対局さえ出来れば付けてもらえそうだけど。いや別に付けてもらいたくはないけれど。……それはさておき。



魔女っ子の描写に時間をかけすぎた。

語りたいのは魔女っ子じゃなくて女神様の方なわけで。つまり、弥内さん。

弥内さんの方は魔女っ子ファッションでも高校の制服でもなく（当たり前だ）、和服着用である。薄い桜色の着物に紺の袴。帝國華〇団の真宮〇さ〇らもかくやと思わせるほど見事に袴姿が決まっていた。

「これでブーツ履いてたらまさに大正浪漫って感じだなあ……ハアハア……」

だがブーツを履いたまま畳の上で正座して将棋は指せない。残念だ。しかし、こうして見ているとまるで袴の方が弥内さんに着ていただいて感激しているかのようですらある。

現在、女子大生の卒業式での礼装として着用されることの多いこの形式の和装と袴のデザインは明治時代後半に定着したと言われている。ということは一世紀ほどの歴史があるわけだがこの袴のデザインが考案された時の最初のモデルは弥内さんのご先祖さまだったと判断してまず間違いないだろう。あるいは当時の人が思い描いた理想の女性が、まさに今の弥内さんだった可能性

もある。デザイナーが理想を求めすぎて、意識が時空を超えたのだろうか。邪気眼の持ち主だったのかもしれない。……等と。

和装に関する歴史的(?)な考察(!?)などしているうちに、ふっと我に返って改めて局面を眺めてみると。

形勢はますます悪化していた。……袴に見蕩れている場合ではなかったのだった。中継ブログにアップされる弥内さんの表情も苦しそうだ。

……………苦悶する弥内さんの表情もなかなか……………いやそんなことを考えてる場合じゃない。

悶々としながら(将棋の内容についてであって袴やセーラー服にではないし、苦悶する弥内さんの表情についてでもない。そここのところは誤解しないで欲しい)弥内さんの逆転の筋を探し続けた。ただ、対局者ではない僕がたとえ一発逆転の妙手を見つけたとしても、実は全く意味はなく、発見すべきは弥内さん自身でなければならないのだった。少なくとも弥内さんに伝わらなければいけない。僕の見つけた絶妙手を(まだ見つけてないけど)どうやって弥内さんに伝えようかとか、そんなことの検討まで開始し始めた何事にもぬかりのない僕だった。

とまあ、そんなことをしていたら。

「パシッ」

中継サイトの向うから駒音が響く。

「123手目、▲4一銀打。――後手玉は受けなし。ここで弥内が投了した」

棋譜コメントが残酷な現実を宣告して。

懸命な応援も虚しく。

賢明な時代考証も虚しく。

「……………はあ……………」

蒲尾向日葵新女流名人の誕生である。

窓の外から不吉極まる鴉の啼き声が、けたたましく流れて込んできていた。

## 【2】

「悲報：弥内美砂子さん女流名人位失冠！」

衝撃のニュースが全世界に打電されていく中、僕はふて寝を決め込んで、そして暗黒時代の訪れたこの世界の丸一日をたくさんの溜息とともに過ごし、そして今日、僕はこうして「ものぐさ将棋観戦ブログ」を読んでいるのだった。ちなみに正座で。

このブログはプロ・アマを問わず、少なくともネットを用いる将棋関係者の間では知らぬ者はいないと言われるほどの超有名ブログだ。特にタイトル戦が行われた後に公開される記事に到っては、単なる観戦記の域を遥かに超えた考察が行われる。対局の様子レポートだけに留まらない。ブログ主の深い教養と洞察力に裏打ちされた文章は将棋の対局の裏に秘められた人間ドラマをも浮かび上がらせ、読者を深い感動へと誘うのだ。このブログのファンとおぼしきとあるツイッター民は「将棋のタイトル戦はものぐさブログで総括されて本当の終わりを迎え、そしてそこからまた新たな戦いが始まるのだ」とまで言い切っている。そこまで言いきる程のファンがいる。それが「ものぐさ氏」なのである。

ブログ主はツイッターの将棋クラスタの間では「巨匠」の異名で知られ、かつ恐れられており

、そのアカウント (@shogitygoo) はプロ棋士間にも広く知れ渡っている。実は昨年、僕が「新人王戦」という棋戦で優勝した折に記事にさせていただいたことがあり、その過大な評価に恐縮しまくったものだった。——と言いつつ、嬉しすぎて本垢と別垢さらには隠し垢2つと、都合4つのツイッターアカウントでその記事を紹介するというステマをやらかすあたり、やはり僕にはぬかりがないのだった。

今回の記事でも、ものぐさ氏は前女流名人・弥内さんの功績や対局態度、その将棋の高いレベルをリスペクトしつつ、新女流名人と新しい時代への期待感を高らかに謳いあげていた。名文ここに極まれりという感じであるが、しかし若干「向日葵ちゃん」に対してメロメロになっている気がするの気のせいだろうか？いや、そもそも巨匠は全ての棋士にメロメロなところがあるのだが、それにしても向日葵ちゃんに関する部分の文章だけ様子がおかしい。かなりおかしい。まるで親戚のおじさんが身贔負で喜んで、祝杯をあげつつ酔っぱらいながら書いているみたいだった。日の丸扇子を両手に歓喜の舞に興じている姿すら目に浮かぶ。

しかし……巨匠の身贔負がどうであれ、この「空気」は世間の現実を如実に表してもいて、確かに女流棋界は新しい時代を迎えようとしているのかもしれない。暗黒時代を迎えたのかもしれない。

そんなわけで。

ものぐさ将棋観戦ブログの女流名人位戦総括記事を読み終えた僕は。

「……はあ……」

一昨日から数えて多分108回目くらいの大きな溜息をついていた。108と言えば人間の煩惱の数と同じであるらしい。僕の煩惱の容れ物は今や全て弥内さんへの想いだけで満たされてしまったと言っても過言ではないが、しかしこの過言は色々と誤解を招きそうな比喩だった。しかし言ってしまったものはしょうがない。覆水盆に返らずだ。

「全く、まだ外は明るいというのに。換気もしないでこんな時間帯からPC眺めてハァハァしてるとは何事ですかっ!？」

ガラッという音とともに僕の周囲を冷たい風が通りぬけ、カレーの匂いと一緒に鬱積していた気分も吹き飛んでいった。ていうか寒くなった。

顔をあげると —— 巫女がいた。

透き通るように映えた白衣とそれを際立たせるように紅い緋袴を身に着けた一人の少女。歳の頃は十代半ば程、つまり蒲尾向日葵新女流名人と同じくらい……に見える。

「いやハァハァとかしてないし。溜息をついてただけだし」

”はあ……”と”ハァハァ”は似て非なるものである。

「しまくってたじゃないですか。しかも一昨日から。キモい喘ぎ声が窓の外まで盛大に響きわたっていましたよ？」

「え!? そんなに?」

「ええ、まるで総選挙を目前に控えた政治家の街宣車のような大音量でした」

「やばい! 恥ずかしくてもうご近所を素顔を晒して歩けない!」

そう言えば「弥内さん@大正浪漫」を妄想してハァハァ言ってたかもしれない。記憶にございませんけど。

「お気の毒ですが、既に女流名人位戦の中継を見ながらハアハア言っているプロ棋士の様子を  
実況したツイートまとめがツギッターの方に……」

「それ絶対お前の仕業だろ！」

ご近所どころか将棋会館にも行けなくなる。

「……つか、勝手に部屋に入ってくるなと何度言えば判るんだ!？」

「今さら何を言ってるんですか？まんざら知らぬ仲でもあるまいし」

「いや、まあ確かに知人ではあるけれども」

知人ではあるが友人ではない。むしろ仇敵と言ってもいい。

この少女、名を月萌（つくも）という。以前、僕がまだプロの将棋指しになる前、つまりプロ  
棋士養成機関である「奨励会」に所属していた頃、ちょっとした気の迷いで立ち寄ってしまった  
長考寺という、今にして思えばどうしてあんな所に入ってしまったのだろうという後悔の念しか  
沸き上がってこない怪しさ満点の禅寺で、僕は巫女装束の少女と出会い、将棋を指し、そして『  
紅の斧（アックストルネード）』とかいうわけの判らない凶器で左腕を奪われた。

その上、さらに脳天をかち割られそうになって。

田沼泥鰯という怪しげな住職に助けられたのだった。

その時の住職の計らいで、20歳までに将棋のタイトルを取るという条件で命拾いを、僕はした  
のだったが、それが今から約1年半ほど前のことである。しかし20歳の誕生日を一週間後に控えた  
この時点で、タイトル獲得どころか挑戦の目すらない。

月萌と出会った時まだ奨励会員だった僕は、その後すぐに奨励会を卒業し、四段――晴れてプ  
ロ棋士になれたのだが、さすがにすぐにタイトル奪取とまでは行かなかった。行けるわけがなか  
った。

ところが――。

半年前の事件――幾人かの奨励会員をも巻き込んだ、文字通りの意味で血も涙も凍りつくよう  
な事件を経験して。

僕と月萌はお互いを救いあって。あるいは傷つけあって。

その時の経緯があって、20歳の約束の件は、まあ何となくうやむやになっていた。うやむやに  
することについて、うやむやすぎるほどの暗黙の了解を、僕たちはしたのだった。

だって20歳までにタイトル獲得とかどう考えても無理だもん！埴生世代の先輩たちが強すぎて  
勝ち残れないんだもん！巨匠（@shogitygoo）も「懸にはいずれはタイトルを獲得する可能性を  
感じるが、今はまだ埴生世代の壁が厚すぎるかもしれない」って埴生名人の天下が続くことが何  
だかとても嬉して嬉しくて仕方がないみたいな感じでブログに書いてたもん！

「事情はお察ししますが、泣き言ばっかり言ってないで、なるべく早くタイトル取ってくださ  
いよ？……頭かち割りますよ？」

この物騒な台詞は、好意的に聞けば棋士としての僕を激励してくれているように聞こえなくも  
ないのだが、実はそんなことはなくて普通に物騒な台詞なのだった。

勝手に考えました

月萌さんに切られた  
懸くんの左手が  
どうなったのかというと…



懸香太郎20歳一週間前



魔界の何でも屋で



「気弱な店主に



デレながら  
押し売られました

将来名人になる男の左手だから  
高く買いなさい



くさいだけは  
くさいだけは  
……

彼女は――この悪霊は人間から身体のパーツを奪い、それを魔界に売り飛ばすことを生業としている……らしい。僕の左腕もそうやってお金(?)に換えたらしいのだ。奪われた方の僕は特に痛みもなくこうして元気に生きているのだが、このあたりのメカニズムというか、世界観がどうなっているのやら僕にはよく判っていない。月萌も教えてくれない。というか月萌も判っていないような気がする。もう面倒くさいので、そこら辺も含めて、まるぺけ(@maruX)さんが「駒.zone」に図解とか描いてくれないかなーと思ったりもするのだが、いくら何でもそれは無茶ぶりだった。あまり投げると「原作：まるぺけ、文：贅楽夢」になりかねない。

「つか、髪型変わったな」

つい最近まで、腰まで届く長いストレートの黒髪だったが、今は両側の髪を少しまとめて、あとの後ろ髪は腰より少し高い位置まで垂らしている。いわゆるツーサイドアップ。しっかりと水引で髪を結わえたツーサイドアップ巫女。しかもところどころ茶髪が入っていた。月萌さんはお年頃なのだった。“好きな人”でも出来たのかもしれない。

ところで、将棋界には棋界初の女性棋士誕生間近との呼び声高い金本月子(@tsukiko\_sann)という奨励会三段の女の子がいるのだが、これがまた絵に描いたようなツインテ・ニーソ美少女で、実際にまるぺけさんの手によって絵に描かれてもいるわけだが、というか月子さんは本当は二次元世界の住人だったのに、まるぺけさんの絵の不思議な力で実体を得て三次元の人間になったのだという都市伝説もあったりするくらいなのだが、間違いなく月萌のこの髪型は月子さんのツインテを意識したものに違いないのだ。とかく月萌は月子さんに対抗意識を燃やしている。しかし髪型まで張り合うとは。なぜそんなところで勝とうとするのかは不明だが、恐らく将棋では勝てないからかもしれない。何しろ月子さんは強くて、その才能は蒲尾向日葵をはるかに凌駕しているとも言われている。というか僕より既に強いかもしれない。

どうしよう？僕より先に月子さんがタイトルを取ってしまったらどうしよう？そもそも、タイトルを取れる日が僕に訪れることがあるのだろうか？僕の場合さっさとタイトルを獲らないと、若くして命を落とすことになりかねないわけで、月子さんは僕にとっても気になる存在なのだった。気になる絶対領域の持ち主なのだった。

いずれにせよ、この巫女装束の少女に一度ならず『紅の斧(アックストルネード)』で襲われた過去を持つ僕としては、声を大にしてこう言いたいのだった。

――迷惑だから、さっさと成仏してくれないかな？と。

本音を言えば「さっさと死ね」と言いたいところではあったがそれは叶わぬ願いというものであろう。何故なら。

月萌は生前、江戸時代の将棋の家元・大橋分家に仕えていたメイド(?)の幽霊なのである。とっくに死んでいるのだった。死んでいるのに死にきれず、こうして漂っているのだった。そう思うと少し可哀相な奴、という気もしないこともない。まあこんな奴でも少しはいいところもあるのだ。少しは。

「弥内さんは確かに残念でしたが、でも内容はほぼ互角でしたし、これからまだ巻き返しの可能性もありますよ」

……そうそう、こんな風に優しい言葉をかけてくれる月萌は

「とは言うものの、向日葵ちゃんはまだ十代ですし今後の伸び代を考えると弥内さんの女流名人

復位は少々厳しいかもしれませんがね。少々という言い方は楽観的すぎると言わざるを得ないくらいかなり厳しいかもしれませんね」

2秒で手の平を返して現実を突きつける嫌な奴でもあった。さっさと成仏していなくなってしまうえばいいのに。

「しかし新女流名人は女流棋界のトップに君臨し続けるには可愛いすぎますね。ちゃんと将棋に打ち込み続けることが出来るでしょうか？悪い虫が寄ってこなければいいのですが。というか寄ってくると確信していますが。たとえば懸さんとか懸さんとか懸さんとか」

「3回ゆーな、やかましい」

僕が愛する人は弥内さんだけなのだ。

「それはそうと懸さん。昨日の中継ブログを見ていて思ったのですが、棋士というのは対局場へ自前の座布団を持参するものなのですか？」

普通はしない。普通でなくてもしない。そもそも座布団は持ち歩くような代物ではないはずだ。月萌が言うには、両者が対局場に入る様子を写した写真の1つに、小脇に座布団らしきものを抱える魔女っ子向日葵ちゃんのものがあったという。もしかして女子高生の間で流行しているのだろうか？中継ブログは何度もチェックしていた僕だったけれど、というかパソコンの画面に穴が開くほどの熱視線を浴びせていたけれど、ひたすら弥内さんだけを凝視していたので、向日葵ちゃんの膝小僧なんて一瞬も見えていないと断言してもいいくらい、ひたすら弥内さんだけをガン見していたので、座布団のことなど全然気づいていなかった。

「んー、座布団なんて持ってたっけ？」

ノートパソコンを覗きこみ、改めて女流名人位戦中継ブログの過去記事を探してみると、確かに濃い紫色をしたふくよかな、全体的には四角い形の何かを抱えた向日葵ちゃんの写真があった。その物体の角には黄土色をした房がぶら下がっている。なるほど、これを見れば日本人なら誰もが座布団だとしか思わないだろう、というぐらいに座布団すぎた。三遊亭○楽が座っていてもおかしくないくらいの座布団の中の座布団だった。

「意表をついて実はハンドバッグでした……ってことはないよなあ」

「これがハンドバッグだとしたら斬新すぎますね」

確認は出来ないが、表面には何だかおかしな模様が描かれているようにも見える。が、大して違和感のようなものは感じない。というより将棋の対局場に魔女っ子が登場しているという状況が既に斬新過ぎるため、その他全ての情報が霞んでしまっている。ドラ●エの魔法「マヌーサ」を掛けられたみたいに霞んでいた。座布団なんかどうでもいいのだった。

「……あれ？」

不意に月萌が目を細めてPCの画面の一カ所を指し示す。

「まっ！このコ、ペンダント付けてますよ！ガキのくせに生意気な」

幽霊のくせに生意気なことを言っていた。

「しかしこの紋様……どこかで見たことがあるような気がします……」

紋様、と月萌が言うのは先にぶら下がったペンダントトップのデザインことだろう。シルバーのネックレスチェーンのその先に丸い飾りがぶら下がっているのだが、サイトの写真では細かい所まではよく見えない。まあ魔除けか何かのつもりなのだろう。魔女っ子だけに全てのアイテムが魔法具に見えてしまう。どこかで……というよりも、この手のアクセサリーであれば誰もがど

こかで見たことがあるはずだ。近くのショッピングモールに行けば軽く500種類ぐらいは入手できそうだ。お金さえあれば。先立つものさえあれば。

「うーん……何でしょう？この紋様……」

いつになく真剣な表情をするツーサイドアップ巫女を見ながら、次は向日葵ちゃんに対抗してペンダントの収集でも始めるつもりなのかと、そんなありきたりで他愛のない能天気な感想を、この時の僕は抱いたのだった。

### 【3】

地獄の獄卒に囲まれていたような奨励会時代を卒業し、晴れてプロとなった棋士は、さてどんな日々を過ごしているかと言えば、あに凶らんや相変わらず地獄の日々が続くのである。八大地獄といって地獄には八つの相があると言われていたが、奨励会という等活地獄を終えた戦士に待ち構えているのは、順位戦という阿鼻叫喚地獄なのだった。無間地獄かもしれない。

――順位戦。下からC級2組、C級1組、B級2組、B級1組、そして将棋界最高峰の実力者が集い、名人への挑戦権が争われるA級、とクラス分けされており、毎年各クラスの上位数名が昇級し、逆に下位数名が降級していく。

中でもA級順位戦最終局が行わる日は「将棋界の一番長い日」というタイトルで毎年テレビで生中継されるほど、将棋ファンからの熱い注目を集めている。

余談だが「将棋界の一番長い日」を扱った「ものぐさ将棋観戦ブログ」のエントリは実に絶品である。過去記事を読みたい方は「ものぐさ将棋観戦ブログ集成」というタイトルで電子書籍化されているのでそちらをチェックしてみたい。過去記事はブログでも読めるが、電子書籍版はテーマ毎に分類されているので格段に読みやすい。印刷すれば寝転がって読むことも出来る。いや僕は正座して読んでますけど。ちなみに表紙イラストは、まるぺけ (@maruX) さんである。実はこの表紙イラストによって巨匠の正体が明かされている、というのだから驚きだ。最強の将棋ブロガーの正体が一体何者であるのか、気になったそこの君は今すぐダウンロードだ！……それはそうと、僕にとってこの電子書籍版の最大の衝撃は、解説を書いている人の名前を目にした時だった……という話は、この物語の伏線でもなんでもないので、余談はこれくらいにしておこう。

現在僕が所属しているC級2組でも、激しい生存競争が日夜繰り広げられている。将来ある若手棋士が一刻も早くここから上へ抜け出そうとする一方、引退を掛けた綱渡りのような成績で苦しむ棋士もいる。まさに生き地獄。それでも、ここは――将棋を生業とする者にとっての人生そのものであり、現在進行形の生きた証でもあるのだ。必死で戦い続ける棋士たちの偽りのない本物の生き様があるのだった。

さて。

今年の順位戦C級2組最終局を勝利したものの、8勝2敗の成績で、星一つの差で昇級を逃してしまった自分に失望しながら足取り重く深夜に帰宅して、そのまま寝たのが今から数時間前。あまり眠れないまま目が覚めて、傍らのケータイで時刻を確認すると既に午前10時を回っていた。倦怠感はとれていない。当然、二度寝を貪りたいところであったが、猛烈な喉の乾きを自覚して仕方なく半身を起こした。

「@Zeirams むむむ、なかなかやりますねえ。SHOGI24で10級の人にぼこぼこにされたから11級以下とかおっしゃってましたが、もしかしてぎりぎり初段くらいあるんじゃないですか？」

「@tsukumo\_sann いやいやそんな初段だなんてトンデモない。嫌気がさしちゃってあれ以来ネット将棋やってないし。将棋指すこと自体、今日は久しぶりなんですよ……ってことでここで三択チャンス！」

「@Zeirams え？ここで！？ …… むう……月子から聞いてはいましたが、聞きしに勝るドSっぷりですね、ぜいらむさん……」

「@tsukumo\_sann 月萌さんこそ下僕を一人飼って毎日足蹴にしてるらしいじゃないですか、この天然どS」

「@Zeirams いやいや、そんなに褒められると照れちゃいますー(\*^▽^)」

……なんていうやりとりが僕の視界に入ってきた。よく見たらそれは僕のノートパソコンだ。ここは僕の部屋だしPCのデスクトップ壁紙が史上最強クラスに可愛い白鬼院りり●よ様の○○○な姿だから間違いない。あの壁紙は特注品なのだ。

月萌さんが僕のPCでSHOGIったーなう、だった。

「何をやっとなじゃボケー！」

蹴った。

女の子にはいかなる暴力もふるわない主義だが、この場合は相手が幽霊だから特例として許されるのである。案の上、全く効いていない。後頭部にケンカキックを入れられた件についてはスルーを決めて、月萌さんは爽やかにこちらを振り返った。

「あれ？懸さん起きたんですか？ついさっきまで抱き枕にしがみつきながら『ほむ〇かわいいよほ〇ら、や、やめろよ、そんな、そこっ……あぁっ//』と寝言をおっしゃっていただけでもうしばらく寝てるかと思ってましたのに」

「そんな寝言を僕が言うはずがないし、それより今、僕達が問題にすべきことは、なんでお前が勝手にこの部屋に入ったあげく、あろうことか僕のパソコンでぜいらむタンとSHOGIったーをしているのか？ということだ！」

ちなみにSHOGIったーとは、ツイッターアカウントでログイン可能なWEB上のオンライン将棋対局サイトである。連動してツイッターに呟くことも出来るし、対局中にChatで会話も出来る。普通はツイッターで相互フォローの関係にある者同士で行われるし、持ち時間設定も特になく、のんびり対局できるので気軽に将棋を指したいファンに人気のシステムだ。

「だって私、長考寺に自分のPC置きっぱなしで使えないんですよ。今、お金がなくてネットカフェにも行けないし。自由に使えるPCは懸さんのくらいしかなくて」

なぜ僕のPCは自由に使っていいのかとか、こいつネットカフェに通っていたのかとか、何だかつっこみどころ満載のセリフだったが、そんな僕の気持ちにお構いなく月萌はまだSHOGIったーを続けていた。

「あ、これ、ただのSHOGIったー対局ではありませんよ？ いいですか？」

月萌はちっちち……と人差し指を立てて振り、そして僕に向かってビシッと人差し指を向けながら

「これは清水らくは(@rakuha)さん発行『駒.zone』の大人気企画！ その名もズバリ『三択将棋』なのです！ どーん！」

とWEB雑誌の広報担当よろしく宣言したのだが、別にカッコよくも何ともなかった。

三択将棋とは、まあ要するに下手（したて）が好きなタイミングで「三択チャンス！」を宣言すると、上手（うわて）はそこで自分が次に指す手の候補を3つ提示しなければならず、すると下手がその中から相手の次の指し手を指定することができる、そして「三択チャンス」を使えるのは一局中3回まで……という特別ルールで行われる将棋のことだ。らくはさん考案による特別ルールであり、そして僕が知る限り全く流行っていなかった。コツとしては良い手もしくは悪くはない手が2つぐらいしかない局面で「三択チャンス」を宣言することだろうか。

残り1つの悪手を指定すれば局面をリード出来るだろう。詳しくは「駒.zone Vol.1」を参照して欲しい。ダウンロードしてから参照して欲しい。

そんなことより。

月萌よ、それより早くそこをどけ。

そのノートパソコンには僕の人生の九割一分が詰まっているのだから。

「ふふん♪ まあ確かにこのPCの中身が衆目の下に晒されたら、懸さん色々終わってしまいそうですしねー」

「まあね。その中には僕の【将棋の】研究成果の全てがデータベース化されているからな。それがライバル棋士にダダ漏れしたらいろいろまずい……」

「なんですって？この大量の『美少女腹筋画像』の数々が、将棋の研究成果だと言うのですかっ！？」

「そんな訳の分からん画像は保管していない！」

美少女腹筋画像——それは、この世に生を受けてからもうすぐ20年になろうとしている僕が初めて耳にする語彙だった。広辞苑の最新版には載ってるんだらうか？

「言っておきますがこの場合の『腹筋』は、たるんだお腹を引き締めるトレーニングのことではありませんよ？」

「どんな場合であろうと僕のPCのフォルダにはそんな画像は保存されてないから」

「……ひょっとして懸さんは美少女の割れた白い腹筋に興味はないのですか？」

「残念ながらそこまでフェチ過ぎる趣味はないな」

興味もないし、そもそも美少女の腹筋が割れている必要は全くないと思う。柔らかい方がいいと思う。というかそんな妙な画像を所持していないことを不思議がられても困るのだった。

「スクール水着は好きなくせに」

「否定はしないけど！」

「わたしの巫女装束の下のスク水が好きで好きでたまらないくせに！」

「それは否定する」

月萌は50着以上の巫女装束用アンダーウェア水着を所有しており、その一部はまるぺけ (@maruX) さんから貰ったらしいのだが真偽の程は定かではない。

それはともかく、普通のスク水のデザインだとそもそも腹筋は見えないはずだから、スク水好きと腹筋好きは両立しないと思うのだが、しかしそれはホントにどうでもいい考察だった。

「ちなみにわたし、腹筋にはちょっと自信があります！」

何だかホントに自信有り気である。ドヤ顔をしていた。

「そ、そうか、これからも腹筋の維持のために頑張れよ！」

「……………実はわたし、腹筋には、か・な・り、自信があります！」

「この短い会話の間に、さらに自信をつけている！？」

凄い成長速度だ。天才腹筋の持ち主かもしれない。

「わたし、某SNSで『フッキン・アイドル』と呼ばれてるんですよ？」

「なんだ、その某幼児向け(?)料理番組のパクリみたいな二つ名は？」

「ひらめき☆きらめき♪レッツ！腹筋♪」

「残念ながら全然可愛くない！」

「今度、ニコ●で放送する予定ですのでぜひご覧ください」

「内容が全く想像できないのだが！？」

「おいしい料理でえ～、みんな～、はっぴはっぴ腹筋～♪」

「料理するのか！？バラ肉の料理番組なのかつ！？」

いや、バラ肉が腹の肉なのかどうか知らんけど。

「ネットでは、そろそろFKN48として芸能界デビューもあるのではないかと噂される程の人気です！」

「どんだけ割れてるんだお前の腹筋は」

48個に割れているのか？総選挙でセンターの腹筋を決めるのか！？

「それにしても二次元美少女画像ばかり収集して、現実の美少女腹筋画像は一つも保存していないとは、懸さんにはがっかりです」

将棋の成績ではなく腹筋画像の不所持でがっかりされる新人王戦で優勝した期待の若手棋士。それが懸香太郎の今の姿なのだった。嘆かわしいにもほどがある。まあ何というか……これからはパソコンのセキュリティを見直した方が良さそうだ。最低限、起動時パスワードを設定しておく必要がある。世間では情報漏洩事件が社会問題となるケースが後を絶たないし。

「それはまあともかくとしてですね……」

人のPCを勝手に覗きまくるという犯罪的行為を棚にあげて、月萌は正義を体現する審問官の如き威厳を漂わせながら、僕に向かって人差し指を向けてきた。

「これ以上、このエロ画像保管PCを私に使われなくなかったら、さっさと長考寺に行って私のノートPC取ってきていただきますでしょうかあ！」

「何でそんなに強気なんだお前は……」

自分で行けよ。幽霊なんだから、ひとつ飛びだろうに。僕のことを下僕扱いするんじゃない。

精一杯、心の底から面倒くさそうな表情をしてみせた僕に向かって、巫女装束の幽霊少女はこんなことを言った。

「いや、それがどうも変な結界が張ってあるみたいでして……最近、あのお寺に出入りできなくなっただですよ」

——何ですと？

「いや、ですからわたし、最近、長考寺に入れなくなっただですよ。あのみすぼらしい山門の辺りで跳ねのけられちゃうんです！ ええい！ 忌々しい！ ケシカラン！ ケシカラン！ バン！ バン！ バン！」

「バンバン言いながらテーブルを叩くな」

おかしい。少なくとも半年前までは普通に入れていたはずだ。月萌と2人であの寺の山門をくぐった。あの時確かに山門の向こうへと命からがら倒れ込むように逃げ込んだのだ。住職が何かしたのだろうか？何か良からぬ状況の変化でもあったのだろうか。……いや、普通にうざくなっただけだな、きっと。何しろこの僕も出来ることならこの部屋に月萌除けの結界を張ってしまいたいぐらいなのだから。

「言うておくが、もうこれ以上僕のパソコンを勝手に使うのは禁止だからな」

「そ、それは困ります！ ネットがないと生きていけません！ もう死んでるけど！」

「このネット廃人め。もう死んでるくせに。ネットは自分のパソコンでやれっつーの」

「ああっ！一刻も早く私のPCを取り返さないと……！」

「取り返さないとツイッターもネット将棋も出来ないもんな」

「住職に、秘蔵の美少女腹筋画像を覗かれてしまいます！」

「お前が集めてたのかよ！」

しかしその腹筋画像が気になるな。……いや僕は決して美少女の腹筋を見たいわけではない。彼女の場合「美少女の写真から腹筋部分をトリミングしているだけ」とは言い切れないところがあるからなのだ。何しろこの幽霊少女は僕の左腕をトリミングした前科がある。左腕の写真じゃなくてリアルな左腕を、だ。「人間の身体の一部だけを消し去る」という不思議なスキルを、この巫女コスプレ悪霊少女は持っている。僕のあずかり知らないところで、いたいけな美少女たちと将棋を指し、負けた相手のお腹に「紅の斧」を振り下ろしていないとも限らないではないか。

腹筋画像ではなくて腹筋そのものを集めていた、なんてこともありうる。……しかし腹筋がなくなった美少女って、どういう状況なんだか想像もつかないなあ。お腹のたるんだ美少女になるのだろうか？

「わかった。近いうちにお寺に行ってみるよ」

ついでに月萌秘蔵の腹筋画像とやらを覗いてみよう。……猟奇的な写真だったら警察に突き出してしまおう……とひそかに誓う僕だった。幽霊を逮捕できるのかどうか知らんけど。

「ところで、将棋連盟所属棋士である懸さんに折り入って相談があるのですが……」

「うん？何だ？PC以外にも忘れ物があるならついでに取ってきてやるよ」

「金本月子の腹筋画像は手に入りませんか？」

「そんなもん手に入るかー！」

月子さんは町を出歩く時に、足は出しても腹は出さないのだ。多分だけど。「駒.zone」のグラビアに登場して、コーラの飲みすぎでほどよくたるんでいると噂のお腹を披露する、なんてことはないと思う。多分だけど。いずれにせよマネージャー、というか作者さんの許諾が必要だ。

「じゃあ、作者さんのツイッターにDMで」

僕のPC上で起動しているツイッタークライアントでらくはさんにDMを送ろうとする仕事の早い幽霊がここにいるぞ、おい誰かアイツを止めろ。

「D rakuha らくはさん？ 月子の腹筋画像を…… って、ああっ！何てこと！？」

「ど、どうした！？」

「らくはさんにDMが送れません！わたし、らくはさんをフォローしてるのに！？」

「リフォローされてないんじゃないか？」

ツイッターのDMはフォローされている相手にのみ送信できたはず。ちなみに相互フォローである必要はないらしい。

「ど、どうしたらフォローしてもらえるんでしょうか？」

「うーん、アカウントの存在自体知られてない可能性もあるからなあ」

ツイッターはアクセスしている時間軸がズレていたりすると、そもそもツイートを目にしないこともあるし、かと言ってタイムラインを遡るにも限界がある。ちょっと忙しいとフォローされていたことすら気が付かずいつの間にか放置、ということだってあるのだ。

「とりあえず存在を知ってもらわんとあ。@でリプ飛ばして『フォローしてー』って頼むのもアレだし、かと言ってフォロー関係がないのにいきなり腹筋画像の撮影を頼むのは失礼だよなあ」

たとえ相互フォロー関係があったとしても、らくはさんに腹筋画像の撮影を頼むなど、もはや失礼を通り越した反社会的行為であるはずなのだが、どういうわけかこの時の僕たちからはそんな大事な倫理観すら失われていたのだった。

「あ、そうだ！ソムリエ(@yamajunn21)にたくさんリツイートしてもらえば、らくはさんの目に止まるよきっと！」

そう、こんな時こそソムリエの出番であろう。

通称・ソムリエ。またの名を「とある将棋の序盤ソムリエ」。古今東西ありとあらゆる定跡書、何とその数10万3千冊を自宅の押し入れに収納し、プロの対局はどんなに注目されているタイトル戦であっても序盤しか観戦せず、戦いが中盤に入ったところでツイッターのタイムラインから姿を消すといわれる将棋の序盤マニア。

一度ソムリエに「終盤には興味ないんですか？」と聞いたことがあったのだが

「終盤？……私は『将棋の序盤ソムリエ』だ。それ以上でも、それ以下でもない」

と、コアなファンにしか判らない地味なガンダムネタで切り返されたものだった……という程の筋金入りの序盤ソムリエなのだった。というか筋金入りのガ●ダム・ソムリエだった。筋金入りというよりもルナ・チタニウム合金入りと言った方がいい程のモビルスーツ・ソムリエぶりをいつも発揮しているのだった。もしかするとアナハイム・エレクト●ニクス社の回し者なのかもしれない。そう言えばソムリエは極度の銀冠フェチとしても知られており、フェチがたたって「銀冠ショップ」という銀冠グッズだらけのオンラインショップを運営しはじめたらしいのだが、ショップの売り上げは、きっとアナハイム社の資金源となっているに違いない。

ともあれ。

何しろソムリエは多くの将棋クラスタにフォローされているっぽいので、氏にRTしてもらえれば、らくはさんの目に止まるであろうことは想像に難くない。

「なるほど。……で、どうしたらソムリエにRTしてもらえるんでしょう？」

「そりゃ、泣く子も黙る将棋の序盤ソムリエにして極度の銀冠フェチだから……」

「ソムリエでフェチだから？」

「やっぱりガンダムネタをツイートしまくるしかないな！」

「やっぱり！では早速……『らくは、私を見て』こうですか！？」

「初手にガ○ダムXのティファのセリフだと……？『さらにやるようになったな月萌！』」

すかさずファースト○ンダムネタできり返す僕。このやりとりはある意味、戦いだ。宇宙世紀におけるニュータイプ同士の戦いにも比肩しうる魂を削るような戦いなのだ。将棋の対局に似ていると言えなくもないだろう。「棋は対話」という名言が将棋界にはあるし。

「らくはさん、「駒.zone」ダウンロードしました。これから読みます。ところで今回の「駒.zone」に……『月子は出ているか？』」

「『は？』」

「『月子は出ているか』と聞いているう！」

「ガンダ○Xコンボで来たか！やはり『大橋分家のメイドはダテじゃない！』」

間髪入れずに逆シ○アで対抗する。プロになってからの僕のガン○ムスキルは、いやまずばかりなのだった。ソムリエの指導の賜物である。師匠の恩に報いるためにも、月萌には将棋で負けてもガンダ●ネタで負けるわけにはいかない。

いずれにせよ、どの○ンダム作品であってもソムリエは反応してくれるだろうし、一体何のソムリエだかよく判らないスキルを発揮して、非公式RTという名の切れ味鋭いリプを返してくれるはずである。ただしガ○ダムネタがいくらRTされたところで、らくはさんがそれに興味を示すとはあまり思えないのが玉にキズだった。ここはむしろ「聖闘○星○」で行くべきだったかもしれない。あるいは「無限の●人」とか。ただし、こちらのネタにはソムリエはあまり興味を示さないのだ。実に残念なことである。ていうか普通に将棋ネタをツイートしろよ、という話だった。

「なッ！？『諸君らが愛してくれた、らくはさん向けのガンダ●ネタはスベった！何故だ！？』」

「『聖闘士（セイント）』だからさ」

ガンダ●ネタと聖●士星矢ネタを混ぜてみた。

「懸さん、こうなったらもう懸さんが月子の腹筋を隠し撮りしてきてくださいな」

「無茶ゆーな」

いっそのこと月子さんに直接頼むという手もあるが「……ちょっと三東先生に相談してみます……」という感じにやんわりと拒絶されるのがオチだろう。無理やり上着をひん剥いて腹を露出させるか？……ダメだ。無理ゲーすぎる。らくはさんに確認するまでもなく倫理的に許される行為ではないだろう。というかそれは普通に犯罪だった。犯罪ではあるが法の裁きの前に、先に三東先生や辻村君に裁かれてしまうかもしれない。棋士だからむしろ捌かれるのかもしれない。ひよんなことから新たな「捌きのアーティスト」の誕生だった。

「そうだ！いっそのことぜいらむタソに頼んでみてはいかがでしょう？」

「ああ、そう言えばあの人は自分の妄想を念写出来る能力者だって聞いたことがある」

いつまでも果てることのない内容のない会話だった。こんな会話で盛り上がりながらも何だかこそこそと「SHOGIった一三択将棋」は続いていたようだが、形勢は月萌の方が芳しくない。当たり前だ。このルールは相手が初心者レベルじゃないと上手が苦しすぎるのだ。そしてぜいらむタソの指し手は、少なくとも初心者のそれではなさそうだった。

――と、そこで。

唐突に僕のケータイの着信が鳴り、月子さんの腹筋画像強奪計画は読者の皆様にはまことに申

し訳ないのだが、ここで頓挫することになる。

ケータイのモニタを見ると、世界一可愛い白鬼院〇りちよ様の待受画像が消え、代わりに「千場桂市」の文字が浮かび上がっていた。千場さんは僕が参加している将棋の研究会を主催している。次の例会の連絡かな、めんどくさいな……と棋士にあるまじきことを考えながら電話に出ると。

「懸…… 樹原が…… 自殺した……」

携帯電話の向こう側から震えるように漏れてきた千場さんのその声が、今回の事件の始まりを静かに告げたのだった。

#### 【4】

病棟へ行くと消毒液の匂いがした。ここは病院なのだと思っても感じさせられる独特の匂い。

一般外来と入院病棟の間には、世界を隔てる見えない壁のようなものがある。エレベーターに入り、目的の階へ到着し、またエレベーターの扉が開いた瞬間、日常が終わりを告げたような感覚におそわれた。この先で暮らしてる人々にとってこの世界はどのように存在しているのだろうか？入院経験のない僕には、そのことはわかるべくもなかった。

僕は、ナースステーションで目的の部屋を確認しそこへと向かった。気が急いてつい徒競争でもしているような歩き方になってしまう。

駆けつけた病室のベッドの上で。

僕の視線の先で。

奨励会員・樹原九郎二段が静かに眠っていた。

ベッド脇には2つのパイプ椅子が置かれ、千場さんと樹原の師匠・杜野八段が、青ざめた表情で座っていた。簡単に挨拶をして、杜野八段からは樹原の両親には連絡したこと、医師の話や樹原の現在の容態、そして僕の方は自分が知る限りの樹原の最近の様子などについて話し、互いに情報交換をする。

——そう、彼はかろうじて一命を取り留めていた。自殺は未遂で終わったのだ。

樹原は数名の棋士仲間とともに将棋会館の一室で指していた練習将棋の途中で席を外したらしい。その数分後、別の棋士がトイレに立ち、そこで首を吊っている彼を発見したのだという。発見と救出が早かったために何とか助かったのだ。一時は意識不明の重体だったが、今は持ち直し、こうして個室ではあるが一般病棟の病室のベッドの上で点滴を受けながら眠っている。医師の話では、相当に後遺症は残るだろうとのことらしい。首を絞めた事による酸素不足で脳に障害が出るかもしれないし、身体に麻痺が残るかもしれない。たとえ身体的な問題をクリアしたとしても精神的な問題が深く残る可能性も高い。いずれにせよ……彼がまた将棋を指せるまでに回復するには、相当の時間が掛かるだろうと思われる。奨励会の対局はしばらく出来ないだろうし、あるいはもうプロ棋士——四段への道は閉ざされたのかもしれない。

樹原二段は僕と同年で、真面目に将棋に取り組んでいる……というよりも将棋以外のことをしている印象がないという人物だ。5つ以上の研究会に所属しつつスケジュール調整も完璧にこなしていて1つの欠席もない、という。ちなみに僕は千場研究会にのみ参加。出席率は4割で全盛期のイ〇ローの打率より高いのだけが自慢という体たらくだった。

「懸の場合は将棋以外のことしかしていない印象しかないもんなあ」と千場さんはひどいことを

言うのだが、ここに来る前に月萌と腹筋トークで盛り上がっていた身としては反論の余地がないのだった。

「超がつくほど真面目な奴ってさ……」

腕組みをする千場さんは起き上がりこぼしが服を着ているようにしか見えない。

「見方を変えれば……樹原の様子を思い返してみれば、いつも思いつめてたような……いつも何かに悩んでいたような……そんな気もするよな」

研究会主催者として、何がしかの責任を感じているのかもしれない。基本的に面倒見がよく、誰にでも好かれるタイプなのである。勝負師としては、それは損なことなのかもしれないけれど。

「やはり将棋のことで悩んでいたのかな……」

杜野八段が口を開いた。そう思うのも無理はない。樹原は、二段までは割と順調に昇級・昇段を果たしていて三段リーグ入りも間もなくだろう、というのが周囲の評価だったのだ。「ゴキゲン中飛車」と呼ばれる戦法を主力にし、大胆に駒を捌いていくその棋風は棋士仲間からも高く評価されていた。ところが、順調に見えた樹原二段の将棋人生に大ブレーキを掛ける事件が起こる。それは彼自身「憧れの存在」と公言しかつお手本としていた綾小路二冠のタイトル失冠である。振り飛車党の雄であり樹原と同じく「ゴキゲン中飛車」を駆使しその鮮やかな駒捌きから「捌きのアーティスト」の異名を取っていた綾小路二冠は、しかし昨年からその勢いは失速し、今年度既にタイトル1つを失っていた。

そして現在、残る1つのタイトル「棋王戦」5番勝負でもここまで1勝2敗とカド番に追い込まれていた。猛威を奮っていた「ゴキ中」の勢いを止めるその原動力となったのは居飛車側の「超速」と呼ばれる戦法で、この新手法の登場によってそれまで高勝率を上げていた振り飛車党の棋士たちの勢いが一気に下落し始めることになる。そして綾小路棋王の失速に歩調を合わせるかのように樹原もまた調子を崩していったのだった。

「超速」打倒の対策を練るも勝率の上がない彼は、やがて一つの決断をする。それは、ゴキゲン中飛車の封印と居飛車党への一時的な転向だった。先日の研究会で僕と指した時、彼は居飛車の王道中の王道である矢倉戦法を指していた。研究家の彼らしく、中盤までは見事な差し回しだったように思う。最後は、新人王の貫禄を見せつけて僕がねじ伏せてしまったわけだが。格の違いを見せつけたわけだが。……それを気に病んで、ってことはないよな……いやそんなまさか……。

「『超速』が出てから樹原君も勝てなくなってたからねえ……」

「今ちょっと全体的にゴキ中の勝率落ちてますからね……研究熱心な奴ですから色々工夫はしていたみたいなんですけど」

杜野八段が嘆息し千場さんがそれに答えていた。かく言う千場さんも棋界有数の研究家として知られており、千場さん考案の対「ゴキ中」新手もあるというのだから将棋界は恐ろしい。生き馬の目を抜くとはこのことである。千場さんも僕も樹原の心配はしていても「ゴキ中」の心配なんかしていないし、あんな戦法絶滅すればいいのに、とすら思っているのだ。

……しかし実際どうなのだろう？将棋の戦法の毀誉褒貶は何も今に始まったことではない。一世を風靡した戦法が新しい対策の前に表舞台から消えさったり「対策の対策」が開発されて息を

吹き返したり……そうやって将棋の定跡は進化してきたのだ。僕自身は戦法へのこだわりはなく、その時流行っている勝率の良い戦法にあっさり乗り換えてしまったりする。見境がないとも言われるが要はオールラウンダーなのであって、臨機応変にあらゆる戦型に対応できてしまう辺り、さすがに僕は今年度の新人王戦優勝にふさわしい才能の持ち主なのだった。

という内心での自慢話はおいといて。

奨励会員というのはプロ棋士ではない。つまり職業ではない。一生そのままにいるというわけにはいかないのである。年齢制限もあり、満26歳の誕生日を含む三段リーグ終了時までには四段になれなかった場合は強制退会となってしまう。調子を落として急に勝てなくなると「もうプロにはなれないのではないか……？」という恐怖に苛まれることもあるだろう。急激に調子を落とした樹原が、そういう恐怖と戦っていたとしても不思議ではない。

とは言え。

本当のところは判らないのだ。樹原が何故自殺を図ったのか。彼の心の闇など誰にも見えない。そもそも将棋指しだからと言って悩みが将棋だけとも限らないだろう。色恋沙汰かもしれないし家族の問題かもしれない。僕が――左腕を失った僕自身がそうであるように、人は皆それぞれ自分だけの悩みを抱えているはずだ。自分だけの世界に拘泥しているものなのだ。

そう、千場さんにだって……あるのだ。あの時、胸が押しつぶされそうな思いをしたはずなのだ。

何となく僕が半年前の事件のことを思い返していると、それを見透かしたように、その思いを遮るかのように千場さんが声をかけてきた。

「アイツ……最近、お前に何か言ってなかった？」

「……別に……」

「……相談を持ちかけられたりなんてことは……」

「……いえ……」

「だよな。お前ってアニメの話しか乗ってこないもんな」

ほっとけ。超ほっとけ。

しかし言われてみれば千場さんとは将棋とガンダ●以外の話をしたことがほとんどない。ちなみに千場さんは、プロ棋士でありながらどこかの大学院にも所属しており「将棋を指せる指先の器用なモビルスーツの開発」の研究をしているという、ソムリエとはまた違ったベクトルのガン●ムマニアなのだが、今はそんな話をしている場合ではない。

静かに寝息をたてている樹原を前にして将棋の話（例えば最新の「ゴキ中」対策の話とか）をするのも憚られるし、杜野八段もそばにいるというのに●ンダムネタで盛り上がるわけにもいかない。……というわけで、それからしばらくの間他愛のない世間話をしてから、千場さんと杜野八段は先に病室を出て行き、病室にはベッドの上で眠る樹原と僕だけが残されたのだった。……いや、もう一人。

「懸さん、ホントは何か心当たりがあるんじゃないですか？」

背後に控える月萌だった。彼女の姿は普通の人間の目には映らない。声さえも聴こえない。

「心当たりというか何と言うか……えーと、ああ、そう言えば……」

そして僕は記憶の糸をたぐり寄せる。絡みついた糸をほぐすように記憶をまさぐる。あれは今

月初めのC級2組順位戦第9局を間近に控えた2月某日。千場さん宅で行われた研究会にて僕は樹原二段と将棋盤を挟んで対峙していた。戦型は相矢倉。三七銀戦法と呼ばれる攻撃型を敷く先手の僕に対して、後手の樹原が専守防衛に徹する作戦に出ていた。最近ではあまり見かけない戦型ではあるものの、昔から指されていてタイトル戦でも幾度となく登場している王道的な戦い方でもある。従来の研究をさらに掘り下げた彼なりの新研究があったのだと思う。ジリジリとした駆け引きが続き、やがて戦いが始まり、いよいよ僕が意を決して総攻撃を開始しようとした、まさにその時だった。

確かに彼はこう呟いたのだ。

「死のう……と、思ったことはありますか？」と。

搾り出すような声で。

ツイッターの呟きとは全く違う生の声で。生々しいまでの肉声で。

僕に向かって僕の顔を見もせずポツリと一呟いたのだった。

「……で？」

「で？って？」

「懸さんは、それになんて答えたんですか？」

そう、僕はあの時、間髪入れずにこのたまったのだ。しかもドヤ顔で。生の声なのにそれはツイッター並みのネタ呟きだった。

「『り●ちよ様が可愛すぎて生きているのがツライ』（どーん！）」

ドヤ顔で言ってみたら、月萌がおなじみの三白眼になってしまった。コイツもうバカだから死ねばいいのに、とその目が語っている。死のうと思ったことがあればいいのに、と言わんばかりだった。ここは「メニアック！」とつつこんでくれると思ったのに。でもよく考えたらボケちゃいけないシーンなのだった。

「懸さんが『死のう』と思ったことがあればいいのに」

ホントに言われた！

「コイツもうバカだから死ねばいいのに」

さらりと言われちゃった！

……だけど。ひどいことを言われたけれど。

こうして樹原を見ていると、こうも思う。ホントにひどい奴なのは僕の方だったのかもしれないのだ、と。樹原はもしかしたら僕にSOSを出していたのかもしれないのに、と。

「……懸さん……」

ゆらぁ……っと、月萌の周囲に陽炎が立ち上がったような気配がしてさすがにびくっとしたが彼女は別に「紅の斧」を取りだすのでもなく、ただただ怪訝そうな表情を浮かべつつベッドの上を指差していた。

「この方、手に何かひっかかっていますよ？」

見ると。

少しはだけたシーツの隙間から樹原の右手が突き出していて、その手の中から少し太めの糸状の物体が1本覗いている。

「何だろう？」

そっと引っ張ってみると簡単に取れてしまった。少しくすんだ感じの黄土色で、所々焼け焦げたような黒い痕がある。何本もの刺繍糸をよりあわせて作られたソレは、確かに僕にも月萌にも見おぼえのあるはずのものだった。

「これって……もしかして、座布団の房じゃありませんか？」

女流名人位戦中継ブログの写真が脳裏に浮かぶ。これは……これは蒲尾向日葵が小脇に抱えていた座布団の房の糸とそっくりじゃないか……。



期せずして月萌と顔を見合わせた僕は、その時確かに聞いたような気がした。

「ひ……まわ……り……ちゃん」

という、未だ眠りから覚めない樹原九郎二段の搾り出すようなか細い声を。

【5】

樹原の容態は芳しくなく、関係者一同重苦しい気分のまま数日が過ぎた。彼の事は気になるが、そうは言っても今の僕に出来ることは何もなく、せいぜい将棋を指すことぐらいだ。世の中でどんな事件が起こっても、当事者以外には何一つ変わらない日常が繰り返されていく。変わる事のない毎日が浪費されていく。思えばそれは、何と残酷な事実であることだろう。

ぼくはただ将棋を指すだけの日々を過ごして。

その間に20歳の誕生日を迎えて。

2年前の事件で「タイトルを獲ること」を条件に「紅の斧」の魔の手から一度は逃れ、半年前の事件でうやむやになってしまった案件の、問題の誕生日もさらっと過ぎていた。思い返せばその日は、僕らしく呪われた誕生日ではあったのだけれど。

僕の誕生日の数日前の3月3日には今期A級順位戦全日程が終了し、その結果、轍板九段が名人挑戦権を獲得していた。埴生名人との間で来月より争われる名人戦七番勝負。その第1局は4月10日に東北地方のとある旅館で行われることになっている。将棋連盟では、それにあわせて一般ファン向けの解説会を将棋会館で開催する予定なのだが、その解説会への出演。つまり解説役を僕は仰せつかっていた。

ということで。

僕はここ一都内某所に屹立する将棋会館を訪れていた。解説会についての打ち合わせのためである。

相変わらずクリーニングしたてのような清潔感溢れるブレザーに身を固めてはいるけれど両足にスネコスリが取り憑いた辻村君とか、辻村君の視線の先でピコピコとツインテールを震わせながらオドオド歩いている金本月子さんとか、辻村君に声をかけるタイミングを向こうの柱の影からこっそり狙っている皆川許心さんとかを見かけたけれど、そこは華麗にスルーして事務室へ向かい、小一時間ほどの打ち合わせの後、今度は帰りしなに、今や「棋界最強の名伯楽というか月子さんの師匠だなんて人生勝ち組すぎるだろチクショー！」という感じに向けられる若手男性棋士からの強烈な嫉妬の視線を交わしながら歩いているためにどうしても拳動不審に見えてしまう三東先生を見かけたが、これも鮮やかにスルーした。というか見なかったことにした。三東先生の周囲に良からぬモノが「視えた」からである。今の僕がいちいち視えるモノ全てに関わっていたら身が持たない。今関わったら番外編の小説一本分が書きあがってしまいそうだった。必要以上に他人に関わるとロクなことはない。そんなことより、さっさと帰宅して読みかけの電子書籍「ものぐさ将棋観戦ブログ集成」の続きを、僕は読みたいのだった。

ちゃんと正座して熟読したいのだった。

とまあ、そんな感じで君子危うきに近寄らずを決め込んで将棋会館を出ようとした時だった。

――空間に亀裂が入ってしまいそうなくらいの高く鋭い悲鳴が轟いたのは。

「きゃあー！！」

「弥内さんっ！？」

普段聞いたこともない悲鳴を聞いただけで声の主が弥内さんだと判ってしまう僕も大概だが、というより第三者的には、それはむしろ気持ち悪いと思われることなのかもしれないが、そ

れはともかく僕は弥内さんの声のした方へと走った。跳ねた。最後には歩の餌食になってしまう桂馬のように高飛びして僕がたどり着いたその先は――。

そこは、女子トイレの前だった。

周囲には誰もいない。あの悲鳴が聴こえなかったのだろうか？もしかするとそれは僕が思っているよりもずっと小さな声だったのかもしれない。だとするとそれを聴きわけてしまうとは我ながら気持ち悪くなるぐらいの弥内さんへの心酔ぶりである……等と妙な感慨に耽っているヒマはなかった。今は弥内さんの危機なのだ。それは世界の全ての事象に優先して対応すべき案件であろう。僕は今「万障お繰り合わせの上」を正しく実行する機会を得たのだった。そして夢にまで見た秘密の花園、女子トイレへとダイブする。いやそれは言いすぎだ。いくらなんでも夢にまでは見ていない。

「弥内さん！」

「……懸くん！？……あ、あれを……早く助けて！」

初めて聞く弥内さんの僕に対する呼称が「懸くん」だったことにマリアナ海溝よりも深い感動を覚えつつ、いやそれどころではないと弥内さんの指差した先を見ると「ドサッ」という音とともに何かが落ちた。人が倒れている。人が上から落ちた？……慌てて駆け寄り表情を伺う。

場所が場所だけに当たり前だが女性だった。十代後半ぐらいだろう。奨励会員だろうか？顔は見たことがあるが名前は忘れてしまっていた。口元に耳を近づけると微かに息をしている。

えーと、こういう時の救命活動ってどうやるんだっけ？とか、そう言えば以前、将棋会館で救命講習やってなかったっけ？しかもそれ弥内さん参加してなかった？とか、そうだこの場で弥内さんがまず僕を相手に救命実地訓練を行い、しかる後に僕が実際の救命活動を行うというのはどうだろう？とか、そう言えばAEDってどこに置いてあったっけ？とかそもそも息をしてる時ってAED使っていいんだっけ？とか、まあそういったことを僅か0.005秒という、宇●刑事ギャ●ンが蒸着するより短い時間で考えた後、とりあえず僕は叫んだ。というか怒鳴った。弥内さんに怒鳴ってしまった。

「救急車！あと誰か人を呼んでください」

走り去る弥内さんのバイオリンのように美しい背中ラインをしっかりとガン見してから僕は床に崩れ落ちている人物の様子を伺う。傍に椅子が倒れ、首には紺地に金色の刺繍が施されたストールが掛かっていた。

「……これ、あの時と同じ……？」

床に少しくすんだ黄土色の物体が落ちていた。刺繍糸を寄りあわせて作られている。焼けたような黒い痕。……と、いうことは。

天井を見上げてこれは首吊り自殺を凶ったのだと断定した。天井の排気口の枠にストールを結びつけて首を掛けたものの、結び目の強度が足りずにほどけてしまったのだろう。出来もしない応急処置を試してみる勇氣はなく、近いうちに救命講習を受講しようとは本気で決心していると、急に悪寒を感じて、トイレの中の個室の一つに視線をやった。やった視線は凝固した。

「な……なんだアレは……?!」

平均的小学高学年生の身長程の高さの巨大な顔がそこにあった。黒ずんだ凶悪そうな顔が……凶悪相がそこにあった。長い頭髪を振り乱し禍々しい殺気を放射している。顔に比して小さめの胴体には白い死装束を纏っていた。袖口からちょこんという感じに短めの腕が生えていてその両の手は長い髪先端部分をしっかりと握り締めている。ソレは赤ん坊の頭ほどの大きさの目玉で僕を視る。ホウズキのように赤い目で睨みつけている。ギョロリ……という擬音が聞えてきそうだった。突然のことに僕は息を飲み、全身を硬直させてしてしまっていた。

そうして、硬直したままでいると。

……巨大な顔の化け物は、僕の目を凝視したまま、そのままの姿でうっすらと、空間に滲んでいくように徐々に色を失っていき、徐々に輪郭が薄らいでいき――やがて、姿を消してしまっただった。

それからどれくらいの時間が経過したのか。実際はほんの数分であろう。いつの間にか周囲は喧騒に満ちていた。関係者が続々と駆けつけ、救急隊員も到着し、気がつけば僕は女子トイレからつまみ出された上に事務室で将棋連盟の理事から尋問を受けていた。先日の樹原に続いての自殺未遂騒動である。関係者全員がピリピリしているのが判る。そして僕は1件目は同じ研究会メンバーとして、今回は発見者の一人として、間接的ながら当事者となってしまうていたのだ。しかし理事から何を聞かれても特に答えることはない。答えられることはないのだ。僕は知っているようで何も知らない。知っていることでも話せることは何もない。

それにしても。

――単なる自殺未遂じゃなかったのか。

樹原九郎の言葉を思い起こす。あの時、彼は「死のう……と思ったことはありますか」と言ったのだ。「死にたい」ではなく「死のう」と。前触れもなく、突然に。

いつ、どこでそれを思ったのか。

なぜそう思ったのか。

――樹原もアレに行き逢ったのか？

半年前のあの体験が脳裏に蘇る。封じ込めたはずの心的外傷が黄泉返る。

事務室を出てふらふらと会館の出口へと向かった僕は、その時視界の端に確かに彼女を捕らえていた。暗い影を捉えていた。黒にオレンジ色の縁取りがされた魔法衣と三角帽子。首にいつものペンダント、小脇に座布団を抱えた女流名人――蒲尾向日葵の姿を。

【6】

「ひさしぶりじゃないか懸君。坐禅組みに来たのかい？」

田沼泥鰯がいつもの作務衣姿で、作務衣を着ていなければ悪徳訪問販売員にしか見えない怪しい表情で言う。禿頭がワックスをかけたように光り輝いていた。勿論僕の返事は「いえ坐禅は遠慮しておきます」だ。

長考寺。

僕が左腕を失う事件の発端となった場所である。寺務所へ行き来訪の目的を告げると、ここ一奥の和室にあっさり通された。信者でもないのにすっかり常連さんである。檀家の方に申し訳ないくらいの特別待遇のような気もする。一銭のお布施もしたことがないんだけど。

和室は二辺が廊下に面していてその外側はガラス付の戸で仕切られている。和室の周囲の障子は全て開け放たれていたのだから、外の手入れの行き届いた庭がガラス越しに見えた。禅寺の庭は自然の姿を模して造られており、これを「枯山水」一一と呼ぶのだそうだ。しかし寒い。部屋には火鉢1つあるだけだ。せめて障子閉めてくれたらいいのにと思ったが口には出さないことにした。禅僧にそんなことを言ったりしたら警策でぶたれかねない。親父にもぶたれたことないのに。

「久しぶりだねえ……3ヶ月ぶりぐらい？」

そう。あの時以来だった。辻村君に憑いたアレが視えた時。ほっといたけど。ほったらかしだけど。

「ご無沙汰してました」

「困ったときの神仏頼み、とはよく言ったものだ。ホントに君は、何か困ったことでもない顔も見せないね。友達甲斐がないよなあ……まあ仕方ないか、対局や研究会で忙しいだろうし」

将棋よりもむしろツイッターの方が忙しい一一とはあえて言うまい。

「でもツイッター見てたら君がいつ研究してるのかよくわからないけどね」

バレていた。ブロックしておくべきだったか。

「ともあれ、懸くんは今とても困った状況にあるということか。また妖怪絡みかい？」

私は妖怪変化の専門家じゃないんだけどなあ……と嘯きながら、住職はお茶をすすり始めた。

一一まあ他でもない友達の懸君の悩み事なら聞こうじゃないか、悩みを聞くのも坊主の仕事だ。そうやって僕の友達であるこの住職は、田沼泥鰯は、僕の眸をじっと見るのだった。射るように見るのだった。僕が「視た」モノを見透かそうとするかのように。そして僕は。

「住職一一。人を自殺に追い込む妖怪って、いるんでしょうか？」

今回の奨励会員連続自殺未遂事件の顛末を話したのだった。

「仏教は自殺が苦手だ」

というか私だけが苦手なのかなあ……そういう問題を扱うことが。

僕の話聞き終えた住職はそんな風にぼそっと呟いた。

「仏教が生まれた時代、インドでは輪廻転生の考え方が当たり前だった。前提だったと言ってもいい。そして仏教が目指す“解脱”とは、この輪廻の輪から抜け出すことなんだ」

輪廻転生。生まれ代わり。魂の不滅。人は死んだら『六道』つまり、天・人・修羅・畜生・餓鬼・地獄のいずれかの世界へ生まれ変わり、生まれ直し、そしてそれを永劫の時間繰り返すという。

「お釈迦様も輪廻転生を信じていたんですか？」

「さあね。そのことについて仏典には『捨置記』とある。捨て置け……つまりいくら考えても解決しない問題は考えても無駄だからほっておけってことだね」

「答えてないんですか？」

「だってこんなの、考えても結論は出せないだろう？ 実験も証明もできない。試しに死んでみるわけにもいかない。議論して解答が得られる目途はないんだから。考察に値する材料が揃っていないわけだから、現時点で判らないものは判らないと宣言するのは、ある意味とても科学的な態度だと私は思うけどね。そうだ、月萌君に聞いてみたら？ 死んだことがあるみたいだし。というかあの子は死にっぱなしのままだから、転生したってわけじゃなさそうだけど」

——そうだった。月萌は、伝説の棋士・天野宗歩と戦った大橋宗珉所縁の者らしいのだが、その出自は謎のままだ。住職は宗珉が所持していた駒の付喪神のようなモノではないかと言い、一方、ぜいらむ(@Zeirams)氏によれば、いやそんなはずはないアレは大橋分家に仕えたメイドの幽霊だという。いずれにせよ彼女は僕の左腕をこの世から消失させたり、一旦は住職の手によって封じ込められたりしているわけだから、普通の人間ではありえない。間違いなくあれはお化けだ。たとえ彼女がひどいツイッター中毒で、かつ1記事につき平均4,000ビューを超えるというアルファ将棋ブロガーであったとしても、だ。

もし本当に幽霊なのだとなれば、生きてはいないのだから。死にっぱなしなのだから。

輪廻転生した——ことにはならないだろう。

「さて輪廻転生の真実がどうであれ、ゴータマ・シッダールタが問題としたのは『今ここにある人生』なんだ。そして釈尊は、人生とは苦である、とおっしゃられている」

人生楽ありあ苦もあるさ——ではないんだ……。

「そう、苦。どこまでいっても苦。それがお釈迦様の人生観だった。そして魂は転生する。辛いからといって自殺しても生まれ変わった生にはまた”苦”が待っている。そもそもどんな世界に生まれ変わるかすらわからない。人間に生まれ変わる保証もない。地獄に落ちるかもしれないし、人としての生を得ても、負け組人生のまま悔しい悔しいと泣きながら一生を終えるかもしれない。どこまで行っても苦、苦、苦、苦……解脱しない限り、それは変わらない」

辛い人生を生き、死に、そしてまた生まれ、生まれたその生にはまた苦が待っているというのか。

「生きていることが辛いのならいっそのこと死んでしまってもいいのかもしれないけれど、生まれ変わったら、前よりもっと辛かったりするものなのさ。前世の記憶とやらがらない限り、どっちの人生がよりマシだったかなんて比較は出来ないけどね。人生はなぜ”苦”なのか、その問いを解決しない限り、人は何度生まれ変わっても、死んだ方がマシの人生を繰り返すんだらうね」

嫌な、それは嫌な見解で、人生観で、宗教観だった。自殺するほど苦しむ人を宗教は救えないのか。死を選びたいほど辛い人生を送っている人に向かって「解脱しなければ、死んだ後生まれ変わってもやっぱり辛い人生が待っている」とそういうことしか言ってあげられないのか。

「さっきも言ったけど、仏教は『今ここにある生』の苦しみを癒すことがテーマなんだ。人生は苦であると。ちなみにここで言う『苦』とは換言すると要するに『決して満たされることのない思い』のことなんだね。人間にはあらゆる欲がありそれは尽きることがないが決して満たされることもない。欲望——つまりは煩悩が苦の原因なんだとさ。だから煩悩を滅せば、苦しみが苦しみになくなる。『苦』だと思っていたことが単なる思い込みだ気付くこと。それが悟るということ、なのかもしれないね」

苦だと思っていたことは単なる思い込みだと思ひ込むこと——という言い方も出来るけどね...  
...と悪戯っぽく笑いながら、ほとんど邪悪と言ってもいいような笑みを浮かべながら、田沼泥鮒は続ける。

「ただ実際問題、社会は複雑化している。坊主がいくら『アナタの苦しみは単なる思い込みなんです』と言ったところで、その言葉だけを聞いて納得する人なんていない。いるはずがない」

仏陀の教えは言葉では伝えられないし、真理は『体験』することでしか理解しえないんだから。と言って住職は、また一口お茶をすすめるのだった。僕も一口お茶をすすってみる。地味に美味しい。

「欲も無くしがらみも無くこだわりも無ければ、明日、道端で野たれ死んで野犬に食われて終わる人生だってアリだろう。死体の残りかすはバクテリアが分解してくれて後は骨だけが残る。犬の糞は大地に吸収されて堆肥となり大地には草が生い茂りやがて花を咲かせるかもしれない。生命はそうやって流転していく。それこそが真理だ。生に執着せず、死を恐れず、死を避けない。それが悟った生き方なのだとすれば、苦から逃れようとして最期に自殺という形で死を選んだ人生と結果としてどう違いがあるのか、とも思うね。生きることに絶望した人が、死の瞬間にこれでやっと救われると、幸せな気分になっていないだなんてどうして言いきれぬだろうか？.....死は、難しい。私もこの寺に来て随分経つけど、いまだによく判らない。懸くん、君はどう思う？」

「どう、思うって.....」

それじゃまるで、死にたければ自殺してもいいって言っているみたいじゃないか——。

「そういうわけでもないんだけどね。.....いやだから、この話に結論はないんだよ。だから言っただろう？私は自殺の話は苦手なんだってば」

廊下の向こうのガラス戸がガタガタと揺れ始めていた。風が強くなってきたのだろう。ビューっという音も聴こえてくる。庭の.....枯山水の砂も、きっと乱れてしまうのだろう。

住職は羊羹を一切れ、口に入れていた。僕も一口食べてみたらこれも地味に美味かった。

「高い橋の上から女性が飛び降りようとしているところに、たまたま君が通りかかったと仮定しよう。落ちれば命はない。.....君ならどうする？」

「えーと、多分、止めると思いますよ.....」

呆気にとられて何も出来ずにいて、みすみす飛び降りさせてしまう、という方が可能性が高いとも思ったが。

「その女性がそれでも『死なせて』と訴えたら？『生き続けることが辛い』と慟哭したら？.....その女性が実は●●●で●●●●●●で●●●で●●●●だったら？それでも君はその人に『生きる』と言えるのかい？死よりもつらい生を選択しろと説得できるのかな？」

住職のセリフに絶句する。それは絶望的すぎて文章が所々文字化けしてしまうほどに衝撃的な言葉だった。というかホントに文字化けしてしまっている。自主規制とも言う。

「仏教の哲学は深遠だが『今この瞬間に苦しんでいるその人』を救えないんだ。今ここで死のうとしている人に、言葉は無効だ。まあ警策で叩いて気絶させて自殺を食い止めるという手もあるけど.....案外それが一番いい方法かもしれないけど」

その人は、人生の問題について考え直す余裕などないのだから。議論する気力が残っていないのだから。人生とは何かについて語る言葉を、もう失ってしまっているのだから。

「目の前で自殺しようとしている人を見た時、私に言えることがあるとすれば『首くくるヒマがあったらまあ坐れ』ってことだけだね」

「今度、自殺しようとしている人を見かけたら、そう言うことにしますよ」

それぐらいなら言えるかもしれない。それしか言えないかもしれない。僕はあの時、樹原にそう言ってあげれば良かったのか……住職のように「坐禅組んでみない？」とでも。その機会は永遠に失われてしまったのかもしれないけれど。一期一会とはこういうことを言うのかもしれない。その瞬間に正しい言葉を選択できなかったことで、僕は一人の奨励会員を救う機会を、たった一度の機会を逃してしまったのかもしれない。取り返しがつかないすぎる……。そして、住職は僕に、あの時樹原に言うべきだった言葉を教えてくれたのかもしれないと、そうも思ったのだった。

風の音が止んだと思ったら、今度はザーっという雨音が聴こえてきた。今日の降水確率は30%だと言っていたはずだが……。そう言えば2年前、初めてこの寺を訪れた時も雨が降っていた。あの日、あの時、雨宿りのために訪れたこの寺で月萌に出会って、僕の人生の歯車は大きく狂ってしまったのだった。ゴースト・ストーリーは突然に、だ。出来ることなら、僕らはいつまでも見知らぬ2人のままでいたかった。

「さて首を吊る、と言えよ」

唐突に、まるでそれまでの自殺談義はなかったことになったみたいに、住職が立ち上がった。部屋の隅へ行き、小さな棚に立てかけてあった一冊の本を手にとってからまた戻ってくる。

「確かこの本に載っていたなあ……」

「桃山人夜話」という本らしい。住職は、とあるページを開き畳の上に広げて僕に向け、そこに描かれた絵を指差す。

――そこには「死神」と、そう記されていた。

人家を覗く上半身裸のモノ――全体的には人型のモノが描かれている。四肢を持ち頭部には乱れた短髪。しかしその顔は……表情は、悪念の塊としかいいようのないものだ。人間ではない。人に見えても人でなし。

これが死神なのか……。フードを被って鎌を振りかざす西洋のそれとは全く趣を異にする姿だった。住職は絵の隣りのスペースに書きこまれた文字を指し示しながら読みはじめた。

「『この絵の死神の一度見いれる時は必ず横死の難あり。自害し首くくりなどするもみな此のものさそひてなすことなり』とあるね。むやみに死にたくなる。生を投げ出したくなる。死に魅入られる……というのはつまり死神に憑かれているのではないかと、そういうことなんだろう。仏教には元々“死神”という概念はないから私にはよく判らないけれど、しかし懸君、君が見た巨大な顔のバケモノがこの死神の一種なのだとしたら……二人の奨励会員が自殺を凶ったのは、そのせいかもしれないね」

この絵の死神は、将棋会館で見たモノとはまるで違う姿だ。しかし「首をくくらせる」という

能力の持ち主ではあるらしい。

死神。それが樹原に「死のう」と思わせたのだろうか。そしてあの女性に。

「さてどうだろう？順番が逆かもしれない。死神に逢ったせいで自殺しようとしたのではなく自殺したいほど苦しむ人がそこにいたから、あるいは死を想うほどの悪念がそこに澱んでいたからこそ死神が現れたのかもしれない。君の目に巨大な顔の化け物として映ったのかもしれない。現象や想念が妖怪の姿として視えてしまうのは、君の得意技だろう？」

スネコスリの時と同じようにね——。と住職が僕を見つめながら言う。いや別に得意技にしているわけではないのだけれど。知らない間に変な体質になっただけなんですけど。

「樹原はやっぱりつらいことがあって——死にたがっていたと言うんですか？」

「人間というのはね——生きてがると同時に死にたがってもいるものだよ。生を望む以上に死を望むものだよ。自分の死を、そして周囲の誰かの死をね。ふとした拍子に、他の誰かに対して死んでしまえばいいのにと思ったり口走ったりしたすることってあるだろう？私はないけど」

それは……まあたとえば月萌などに対しては毎日のように思っていることではあった。あいつ幽霊だけど。

「まあ、死ぬとまでは思わずとも自分にとって都合の悪い人間がいなくなってしまういいのにと、一瞬でも思ったことのない人間はいないんじゃないかな？私は一瞬たりとも思ったことはないけど」

……それもまた月萌に対しては毎日のように、一瞬とは言わず息をしている間はずっと思っていることではあった。しかし住職は嘘つきだな——。地獄に落ちて閻魔様に舌抜かれればいいのに。

「仏教では『因縁生起』といって、すべてのものやできごとは、直接間接に関わりあって生じている、と教えているんだけど、どうだい？人と人の絆なんてのも裏を返せば案外、悪念の連鎖で繋がっていて、それでこの世の森羅万象は生じているのかもしれないよ」

将棋界ほど苛烈な生存競争が行われている世界もないだろう？……あいつなんかいなくなってしまうと、内心そう思ってる棋士もたくさんいるんじゃないのかい？賊心、遺恨、意地悪、怨念、邪気、毒気……そういった無意識のうちにはびこる悪念こそが……奨励会員たちの周囲に死神を呼び寄せたのかもしれないよ。……と、そんなことを、そんな嫌なことを、住職は僕に言うのだった。

もう一つ気がかりなことがあった。今回の事件の周囲に見え隠れする蒲尾向日葵の姿だ。

「うん？死神を呼んだのはその向日葵ちゃんだとでも言うのかい？あるいは……向日葵ちゃんの意識の底にある悪念が死神となって人を襲ったとでも？」

そうかもしれない、と実は思ったりもしたのだ。そう思い始めると、あの衣装もただのコスプレではなく本物の魔女だったりして……だなんてバカな考えも頭をよぎってきたりもする。

「魔女ねえ……。まあ君の周囲には化け物がよく現れるからねえ……本物の魔法使いだって寄ってくるかもしれないけど……」

とは言え、今回の被害者2人は女流名人と直接の利害関係がないのが引っ掛かる。つまり2人は蒲尾向日葵とライバル関係にあるわけではないのだ。彼女に悪念があったとするならその切っ先

はむしろタイトルを争う女流棋士……そう、例えば、弥内さんのような人に向かうはずではないのか？しかし女流名人位戦の最中、弥内さんの身には何も起こっていないはずだ。

……まあ弥内さんは女神様だからなあ。女流棋戦に「女神戦」ってのが出来たら弥内さんが「弥内初代女神」になったあげく5年後には「弥内永世女神」になってしまうことが既に確定しているぐらいの女神だもんな。死神なんかには負けられないぜ！

「……まあ蒲尾向日葵女流名人が全然関係ないってことはないんだろうけど。手掛かりは座布団の房だ。謎に迫る鍵は今のところそれしかない。……ということで懸君、とりあえずその女流名人と会って話してみたら？」

「蒲尾向日葵さんは現役の女子高生ですけど？」

「何か問題でも？」

……っ！？何だと！？世間では知人からの紹介もなしに女子高生に話しかけてもいいことになっているのか？いやちょっと待て、この住職は色々非常識だし嘘つきだから信用できないぞ、やはり僕みたいな奴がいきなりジョシコーセーに話しかけるだなんてそんな大それたことをしていいはずがないじゃないか！……えーと、そうだ！将棋会館の近くの曲がり角で食パンをくわえた向日葵ちゃんと偶然ぶつかって、倒れた拍子に向日葵ちゃんのパンツが見えたりして、それをきっかけに最初は反発し合いながらも徐々に打ち解けていくみたいな展開ではどうだろう？…  
…いやいやいや……。

「そんなに頭を抱えて悩むことでもないだろう……交際を申し込めとは言っていないよ。君たちは棋士なんだから、将棋指そうって言えば済むことじゃないか」

「なるほど！」

それは盲点だった。秒読みに追われて簡単な5手詰めを逃したような気分である。そうか将棋指しませんか？って誘えばいいのか。よし今度その手を弥内さんに試してみよう……と、そんなことを固く心に誓って。

その後、月萌の美少女腹筋画像が収録されているらしきノートパソコンを住職から受け取って。受け取る時にも何だかんだと一悶着あって。それから――。

長考寺を後にした。

実はこの時、あ、そう言えば、この寺に月萌が入れなくなっているんだったよなー、理由を住職に尋ねるの忘れてたなー……なんてことを山門を通り抜けた後に思い出したのだが、まあどうでもいいや、と僕は帰路を急いだのだった。そのことが及ぼす結果について想像をめぐらすこともなく……さっさと帰ってしまったのだった。

「早く帰って『ものぐさ将棋観戦ブログ集成』の続きを読もうっと。ちゃんと正座して読もうっと」

そんなことを考えながら。

「化け物とは何ですか！化け物とは！」

バン！バン！バン！バン！……と巫女装束のツーサイドアップ少女がテーブルを叩いている。将棋の格言に「三步あったら継ぎ歩に垂れ歩」とあるが四歩あったのもう一発叩きの歩を入れてみましたみたいな猛烈な勢いで叩きまくっていた。テーブルの上のノートパソコンがピョンピョン跳ねている。

長考寺へ行った翌日、つまり昨日。将棋会館内で、例の座布団を胸元に抱きしめてウロウロ歩いている女流名人・蒲尾向日葵を見かけた僕は颯爽と声を掛けたのだったが――。

女流名人は相変わらずの魔女っ子さんだった。やや暗めのオレンジ色の魔法衣に三角帽子。爪先の尖った短めの黄朽葉色のブーツ。今日はマントも羽織っている。ヒラヒラのワンピースの魔法衣の裾からは、生足の膝小僧が元気よく顔を覗かせていて、それは何だかとっても寒そうだった。……それにしても実にすばらしい膝である。もう月子さんの、陶器のように白い艶めかしい絶対領域は卒業することにして、これからは膝小僧推しでいくことにしよう。

「カ>maお±ωレま〃<〃Uよう(≠〃±Uマ世ωカ>?)」

ついギャル文字で書いてしまったが、要するに噛んでしまって自分でも何を言っているのかさっぱりわからなくなってしまったのだ。あんな破壊力抜群の膝小僧を「これでもか！これでもか！」と見せつけられては、新人王戦で優勝して「ものぐさ将棋観戦ブログ」デビューしたさすがの僕でも噛むしかない。いや膝は噛んでないけど。噛まないけど。噛みたいとか全然思っていないけど。

「ちょっ……懸先生……何かとてもいやーな、ていうかイヤなしい感じがすぬんですけど？」

勇気を振り絞って話しかけた（噛んだけど）僕に向かって、向日葵ちゃんは何故かワンピースの裾を押さえながらそんなことを言った。

「か、懸先生を見ていぬだけで……さ、寒気がしてきますっ」

……いやそれは風邪をひいているんじゃないのかな？寒そうだし。鼻かな？喉かな？そう言えば、さっきから「らりるれろ」の発音が「なにぬねの」になっているっぽい。鼻だなこれは。膝じゃなくて鼻を噛まなくては。

「こ、こっちを見ないでください。身の毛がよだちますっ」

……もしかして嫌われているのか？そんな！ちょっと噛んだだけなのに！ていうか、まず向日葵ちゃんが鼻を噛むべきではないのか。

彼女はどこに隠し持っていたのか、おもむろにステッキを取り出すと床にびびーと線を引く仕草をしてから、てくてくてく、と3mほど後方へと下がった後

「そこかなこっちに来ないでくださいっ」

何故か涙目でそう言った。泣かれてしまった。こっちが泣きたいくらいだった。

しかし奨励会員連続自殺未遂事件解決のためにここで引き下がるわけに行かない僕は、よせばいいのに一歩一歩ヒタツヒタツとにじり寄りながら、しかもワナワナと震える右手を前方へと差し出しつつ

「そ、その座布団を、俺に見せろおおお――！！！」

とわざわざダミ声で叫んでしまったのだった。ちょっとだけバイオ●ザードのゾンビのノリで。悪ノリとも言う。魔女っ子を見ていたのでつい遊びたくなかったのは確かだ。基本的に僕はお茶目な奴なのである。そう言えば、本来であれば将棋の対局を申し込むはずだったのに、そんな昔のことは既に忘却の彼方だった。

「ヒィィィィィィィ！！！！！！」

しまった！泣くな！泣きわめくな！人が来るから！

この状況で人が来たら人生に必至が掛かってしまうので、シマリスのようなつぶらな瞳を潤ませている女流名人を必死の思いでなだめる僕だった。

「わ、わたしの座布団をどうすぬ気ですか！……はッ！？判にましたよ？持ち帰ってクンカクンカすぬ気ですね！」

「しねーよ！そりゃどこの変態紳士だよ！女子高生の座っていた座布団をクンカクンカするわけないだろ！……弥内さんの座布団ならともかく」

女子高生に向かって普通に話しかけることは出来なくせにツッコミだけは切れ味鋭い僕だったが、しかしこれは弥内さんに聞かれていたら人生が終わってしまいかねない危険なツッコミであり同時にちょっとお茶目なボケでもあった。

こうなったらもう乗りかかった舟囲いという奴で、この際なので将棋の対局はすつとばして本題を切り出すことにした。戦いは臨機応変でなくてはならないのだ。そう、つまり居飛車穴熊に囲おうとしたら相手が急戦を狙ってきたので急遽左美濃にスイッチする、みたいな感じで。

「持ち帰ったりなんかするもんか、その座布団の房と、それと表に何か書いてあるだろう？その模様を見せてくれるだけでいいんだ」

向日葵ちゃんが訝しげに首をひねる。ひとつひとつの動作が、まるで齧歯類の小動物のようだ。なるほど終盤の急所でこういう仕草をされた若い男性棋士たちが、不可解極まる謎の手順で逆転負けしてしまうのも仕方ないと思った。全く煩惱まみれでケシカランなあ、みんな長考寺に行って坐禅組んでくればいいのに。

とまあそうやってしばらく睨みあっていると……僕の側から見た主観的な表現をすれば、新人王戦で優勝して「ものぐさ将棋観戦ブログ」にも登場した期待の若手棋士と、新女流名人であり、かつ巨匠(@shogitygoo)から思いっきり贖罪されている現役の女子高生がじっと見つめ合っていると。熱く見つめ合っていると。情熱的な視線をしつこく絡めあっていたら。

しばらくして、彼女は座布団を両手に持ち、おもむろにその柄を僕の方へと向けてくれたのだった。



「魔方陣？」

「魔法陣です」

魔方陣は算数パズルだった。僕の無知のせいではなくPCの誤変換のせいにしておく。不思議な紋様が座布団の紫の布地に白で染め抜かれていた。円形の図像の中に何やら怪しげな文字、記号、図形が配されている。はっきり言ってこれが何なのか僕にはさっぱりわからない。

「それ、何のおまじないなんだ？」

「こういうのは人に言っちゃいけないことになってぬんです」

そういうものか。仕方ない、ではわかる人に見てもらおうしかない。ということで僕はポケットから現代文明最高の利器を取り出した。

「写メを撮らせてもらうぞ」

「まさかっ、私の恥ずかしい写真を撮って私の学校のウナサイトにタネコミする気じゃ……」

「お前の学校、裏サイトとかあるのか？」

管理人捕まえてすぐ閉鎖させろ。そんなの陰湿なイジメの温床でしかないんだぞ。

「我が校のウナサイトにイジメなど存在しません！不適切な発言は私がちゃんと削除すぬなり発言者に修正を求めぬなり……」

「お前が管理人なのかよ！」

将棋の女流名人が学校裏サイトの管理人だなんてマスコミにバレたら前代未聞のスキャンダルに仕立て上げられかねないぞ。……しかし要らない情報を入手してしまったものである。この設定これからどうしよう？「七割未満」の方で使ってもらえないだろうか？無理か。

「とにかく、ここは僕を信じろ」

「懸先生のどこに人を信用させぬ要素があぬのかさっぱに判にません！」

全くそのとおりだった。しかし何だかなあ。女子高生に面と向かってここまで言われると自殺したくなってくるな。……こうやって人は自らの命を絶つのだろうか……とふと思ったりしたのだが、よく考えたら僕の場合は単なる自業自得だった。

さて。

改めて座布団を見てみると角の房は2つしかない。と、いうことは……。

「その座布団の房、足りないみたいだけど？」

「……あ、あっちへ行ってください！人を呼びますよ！」

絶賛鼻風邪中の蒲尾向日葵が座布団をぎゅっと握りしめ、その膝小僧はブルブル震えだし、目からは警戒信号を発し始めていた。やはり何かあるのだろう。しかしここで人を呼ばれたらたまったもんじゃないな……と内心びくびくしつつ、僕は声を押し殺して蒲尾に告げた。カマをかけた。

左腕を……前腕部つまり肘から先が消え去ってしまった左腕を、ゆっくりと上げながら。

「蒲尾、僕の左腕は怪我で失ったんじゃない。この世ならざる存在……あの世から現れた化け物に奪われたんだよ。憑かれて、奪われて、生命を狙われて、それでも僕は生き残った。生き延びたんだ……僕なら君を、助けられるかもしれない」

重さに換算すると1mgぐらいバイアスの掛かったセリフであることは自覚していたが、大体合ってるから問題ないだろう。それと、このついでに月萌を化け物扱いしてしまったが、実際お化けなんだからしょうがない。でも出来れば、このことは月萌に知られたくないな……。

――という出来事が昨日あって。

蒲尾には結局逃げられてしまい、未だに最重要参考人からの情報は得られないままだったがそれはともかく月萌さんは化け物扱いされてひどくご立腹なのだった。正真正銘の化け物のくせに、何と言う理不尽な怒りであろうか。ていうか、あの時月萌は近くにいたのか。皆川さんのように柱の影から僕らを見張っていたのかもしれない。どおりで向日葵ちゃんが「いやな感じがする」というわけだ。風邪の悪寒でもなく僕への警戒心でもなく、この悪霊に対する靈感が働いたに違いない。あー良かった僕が気持ち悪がられていたわけじゃなかったんだと、そこは前向きに考えて、ほっと胸を撫で下ろしたのだった。

「まあ、あれはその場の方便だから。嘘も方便、ってことで」

まあ、嘘だとは今も思ってないけどね。お前、幽霊じゃん。お化けじゃん。

「膝小僧ばかり見てイヤらしい！ケシカラン！ケシカラン！バン！バン！バン！」

今度はバン！バン！バン！を口で言っていた。手が痛くなったのかもしれない。

「別に膝小僧ばかり見ていたわけじゃないよ。辻村君のスネコスリを発見して以来、僕は人と会う時はつい足元ばかり見てしまう癖がついてしまったんだ」

僕の膝フェチは辻村のせいなのだった。……ってことは結局、膝ばかり見ていたという月萌の指摘は全くそのとおりののだが、彼女はアホの子だったのでその辺りのツッコミはなく代わりに「大体ですね！今回私の扱いが軽くないですか？何となくストーリーの本筋と全く関係ないパートでしか登場していない気がするんですけど！」

怒りの矛先が明後日の方角へ向かっていた。気が散るのが早い巫女だなあ。

「まあ、ぶっちゃけ月萌は月子さんへのオマージュ的なキャラだからなあ。今回の小説のタイトルを『ツクモさん、オマージュです』にしてもいいくらいオマージュ的なキャラだからなあ……ほら最近、月子(@tsukiko\_sann)さんって皆川(@MinagawaMotomi)さんに出演回数押されてるじゃん？向こうの存在感が薄くなると月萌にも影響するんだよきっと」

「何というメタ理論……。しかし懸さん、一見して人気があるように見えますが、実のところ皆川さんのことを好きなのは実ほうきしま(@amubaruwaria)さんだけだという噂もありますよ？」

うきしまさんはヤンデレのお姉さんが好きらしいんだけど……皆川さんってそんなキャラだっけ？しかし考えてみれば確かにそういう素養があるような気がする。かなりする。将棋会館の柱の影から辻村君の姿をじと一と監視していたあの姿を思い起こすとそんな気がしてくる。案外、辻村君にトドメをさしてしまうのはその身に巢食ったスネコスリではなくて、ヤンデレ覚醒した皆川さんの方なのかもしれない。まあ結末がどうなるろうとも辻村君と皆川さんの血塗られた愛憎劇は、きつとうきしまさんが美しい詩に仕上げてくれることだろう。「駒.zone」誌上で。もしかすると「無責任」誌上で。

「でもさ……ぜいらむタソもツイッターで皆川さんに結構絡んでるみたいだけど？」

「あれは普通に嫌ってるだけではないでしょうか？月子の時と違ってセクハラに愛が感じられませんか」

「愛のあるセクハラなんてあるのか……」

「ありますね、愛のあるセクハラ。ぜいらむたんは月子のツインテとニーソを、それはもう深く深く愛していらしゃるように見受けられます」

「随分とパーツを絞った愛だな」

しかもニーソなのか。ミニスカとニーソの合間に見える、何人も冒すことの出来ない神秘の絶対領域ではなくて。何という歪んだ愛だ。ぜいらむタソは本当に月子さんが好きなのか？

「あの2人、あれで結構怪しいですよ？私のフォロワーさんの情報によれば、某SNSでイチャイチャ会話をしてるらしいです！ケシカラン！ケシカラン！バン！バン！バン！」

口で擬音を立てながらついでにテーブルも叩くな。W攻撃かよ。ノートPCがピョンピョンする。ハードディスクが破損してしまうかもしれない。

「いやその某SNSって『chess.c●m』じゃね？」

軽いSNS的機能を備えたチェスの対局サイトがあって、二人はそこでお友達になっているとい

う噂を聞いたことがある。ホントかどうかは知らない。多分デマだと思う。ツイッター情報の8割はデマらしいし。

「いえいえ、それが筋からのタレコミ情報によれば、SNSだけでなく二人っきりのオフ会で何度も逢瀬を繰り返しているとか……」

「辻村くんが聞いたら卒倒するな！」

つーか作者(@rakuha)さんが卒倒するわ！傷心して旅に出るわ！一人で。沖縄あたりまで。

「らくはさん沖縄に行かれるんですか？貝を拾いにですかっ！？」

「随分古いネタを知ってるな」

月萌の方はフォローされてないのに、一方的にそんならくは情報は知っているとは。過去ログ調査したのだろうか？そんな昔のログが残っているのか。

「フォローされてない？ああ、でもどうやらわざわざ別垢つくって私をフォローしてるみたいですよ。らくはさんはあれで結構ツンデレなんです」

らくはさんってツンデレだったのか。本垢でツンして別垢でデレたのか。いやーツイッターが引き合わせる交友関係は本当に侮れないなあ。しかし何だろう？まさか「ぜいらむ&月子」「うきしま&皆川」「らくは&月萌」なんていうカップルが成立してるんじゃないだろうな？

「ちょっとカップルだなんてそんなっ、ヤメてくださいよっ//……らくはさんは紳士ですし、とても素敵な方ですけど、わたしにはしゅう(@Syu\_13th\_month)さんという心に決めた方が……」

幽霊少女の頬がほんのリサクランボ色に染まっていた。ツクモさんの”好きな人”はしゅうさんだったのか。しゅうさんってばホントいちいちモテるなー。爆発すればいいのに。

「カッコイイだけじゃなくて、とてもお優しいんですよ？毎朝起こしに来てくださいますし」

朝起こしに来るとか何だそれは？寝起きドッキリか！？

「毎朝8時くらいにツイッターでおはようのリプライが……」

ツイッターかい！……しかし毎朝とはまた随分マメだな。

「ええ、とてもマメな方です。『しゅうさんイケメン』でエゴサーチして、ヒットしたツイートを漏らさずふぁぼった上にセルフつぎやりにしてしまうくらいマメな方です」

マメ過ぎるよ！しゅうさんマメ科かよ！

「あのくらいマメじゃないと女性にはモテませんよ？懸さんも少しは見習ってはいかがですか？」

そうなのか……しゅうさんはマメだからモテるのか……いや待てよ？えーっとあの人確か奥さんいるんじゃないかなったっけ？

「ふっw……ウブなネンネじゃあるまいし……」

不敵な笑みを浮かべると、月萌はビシィィィ！！！！っと、それはもう自信満々といった表情で。人差し指を僕に向けながらこう言い放ったのだった。

「愛は惜しみなく奪うものなのですよ懸さん！」

奪うのか愛を？奪い取ったのか、しゅうさんの愛を！？まさかあの『紅の斧』で？あの斧は愛も奪ってしまうのか！「愛をくれない？」ってか？

「奪います。愛を奪いますとも！紅の斧・最終奥義『愛憎業火（ファイナル・ブレイク）』で！

」

「月萌としゅうさんがドロドロの関係に!？」

ていうか聞いている方が恥ずかしくなるネーミングだった。きっと思いつきだけで喋っているに違いない。

「ちなみに懸さんの左腕を斬り落とした技は『挽肉飛散（カットアップ・カーニバル）』です」

「いや挽肉て……僕の左腕はミンチにされたのか？お化けに食べられてしまうのか？」

「申し訳ありません。先程入った情報によれば懸さんの左腕は魔界の食屍鬼どもがハンバーグの材料にしてしまったようです」

「食屍鬼って料理もするんだ……」

「どうやら『フッキン・アイドル』はあちらの世界でも放送されていたようですね……」

「お前が教えてんじゃねーか！」

相変わらずのお馬鹿トークだった。しかしいくらお馬鹿トークとは言え、冗談が99%を占めるネタトークである（はず）とは言え、残りの1%が実は残酷な真実を指し示すヒントだった……ということがないとは言い切れないので、つまり「挽肉」のことが物凄く気になったので、僕としてはその辺りの事情をもう少し詳しく聞いたかったのだが、飽きっぽい二人は、さっさと話題を変えてしまったのだった。

「ときに懸さん、解説会の打ち合わせの首尾は如何でしたか？」

「ああ、それがどうやら僕が解説をするというより微川八段解説の聞き手役らしいんだよ」

「ええっ!?あのプロ将棋を親父ギャグで解説するせいで、言ってることの意味が判らない将棋ファンが騒ぎだし、逆にその親父ギャグの解説でツイッターの将棋TLが祭りになってしまうことで有名なあの微川先生の？」

実に的確な微川解説をするあたり、さすが一部のマニアの間だけで巨匠と並び称されている将棋ブログのカリスマ姫だった。

その後、僕は月萌から微川ギャグへの正しいツッコミ方のレクチャーをいやと言うほど受けることになるのだが――。

その成果が試されることになるのは、それから一ヶ月ほど後のことである。

【8】

「筋井先生すげーーー！」

「きつねかわいい」

TLは祭りになっていた。将棋界振り飛車党のカリスマ、筋井九段の対局がネット中継される時、少なくとも僕のTLではそうなる。アンチ筋井、という人がもしいるのなら、その人のTLではまた別の風景が広がっているのだろうけれど。

「これは……もはや新筋井システムですね！」

「きつねもふもふ」

「筋井システム」という、従来からある「四間飛車戦法」を根本から再構築した画期的新戦法

を引っ提げて棋界を席卷し、タイトル獲得も成し遂げた筋井九段は、その後筋井システム対策の研究が進んだことでタイトルを失い、ひところ勝率を落としていた。つまり現在棋界で起こっている「ゴキゲン中飛車の流行と勢いの失速」現象の先駆者とも言えるわけだ。

しかし最近になって筋井九段は四間飛車の形で角道を止めず早目に角交換するという手法でまた徐々に勝率を上げてきていた。アマチュアには振り飛車党、しかも四間飛車党が多い。故に、一人我が道を行くかのように誰にもマネの出来ない四間飛車の世界を構築する筋井九段はカリスマなのだ。プロ棋士の中にもその序盤理論に心酔している者は少なくない。

「おお……いつのまにか筋井九段が優勢に？」

「きつねぺろぺろ」

「いやー筋井先生の序盤センスはさすがだ……」

「きつね食べたい。○的な意味で」

……ぜいらむ(@Zeirams)たんヒマそうだな。僕が今眺めている「shogiリスト」の中で、そして筋井愛で溢れかえるTLの中でただ一人、きつね愛を叫ぶツイッター民がそこにいた。

ぜいらむ(@Zeirams)。約2年前、僕が左腕を失った事件をきっかけに知りあい、その後ずっとツイッターで相互フォローの関係にある謎の人物。人物かどうかすら判らない。botだという噂もある。将棋クラスタを装った妖怪好きの変なbot。しかし僕は2年前も半年前もそしてつい3ヶ月前にも……妖怪絡みでこの人に相談を持ちかけ、救われているのだ。

「この形は既に筋井先生が圧倒的に優勢ですよ？これは新しい定跡になるかもしれない」

「ちなみに『きつね』というのはその昔、美少女に扮した妖狐が夜な夜な夜這いを掛けてきてはまた帰る……つまり、来て寝る、来つ寝る。来つ寝、きつね……になったという説話があつてですね、要するに何を言いたいかというと、美少女きつねがウチに来ればいいのに」

筋井祭りの最中にきつねハァハァするくらい妖怪に飢えているのなら僕がネタを提供してあげようじゃないか、ぜいらむたん……。

「@Zeirams 今からDしますー」

とまあこうして。

TLではまだまだ熱い筋井祭りが続く中――。

ぜいらむたんとのDMミーティングを開始したのだった。

「日本の年間自殺者は今や3万人を超えていて、うち2/3は縊死、つまり首吊りなのだそうですよ」というのが僕の報告を読んだ後に発せられた、ぜいらむたんからのDM第一声だった。3万人のうちの2/3が首つり……つまり日本では年間2万人もの人が首を吊っているというのか……。

「動機は様々でしょう。事業の失敗、生活苦、家庭不和、いじめ、恋愛のもつれ……これらについて、わたしは語る言葉を持ちません。ここで語ることもないでしょうし。しかし住職は『自殺は苦手』と言ったのですか……相変わらず利いた風な口をききますねあの生臭坊主は。しかしそんなの、得意な人なんていないですよ」

それはそうだと思った。生死は個人的な問題なのだ。価値観も人生観も、宗教観も死生観も全

て一人一人違う。何に絶望し何に希望を見出すかなんて一概に言えるものではないだろう。一言で語れるものではないだろう。何を話しても何をどう考察しても結論なんて出てきそうもない。

「自殺に関する社会や心の問題は置いといてですね……わたしは、そのでっかい顔のお化けの話だけを……ひたすら妖怪の話だけを、ここではすることにします。ていうかそれしかできないので」

と、ここでぜいらむタソは一拍おいて。あの化け物の名を告げた。それは住職が開いた本に載っていた名ではなく……その名は『死神』ではなくて――。

「懸さんが視たという巨大な顔の化け物が奨励会員の自殺未遂に関係しているとしたら、それは繪鬼でしょうね」

繪鬼。くびれおに。いつき。又は、いき。と呼ぶのだという。

ぜいらむタソが語った話は、こうだ。

――江戸時代、ある屋敷の主人が麴町という所で酒宴を開いたが、客の1人として来るはずだった同心（江戸幕府の下級役人）がなかなか現れない。しばらく経ってようやく現れた同心は「急用があるので断りに来た」と言って帰ろうとする。訳を尋ねると「首をくくる約束をした」のだと言う。主人は同心が乱心したと思い、酒を飲ませて引き止めた。

それから数日が経ち、今度は近くの町で首吊り自殺があったという報せが届く。主人は繪鬼が例の同心を殺そうとしたものの、諦めて別の者に取り憑いたのだろうと考え、再度、その同心に事情を聞く。同心は、ぼんやりした状態だったのでよく覚えていないと言いながらも経緯を話した。それによると、ある所で何者かの「首をくくれ」という声を聞いたのだという。同心はその言葉をどうしても拒絶することができず「主人のもとへ言って酒宴を断ってからにしたい」と答えたところ、その声の主は「早く断って来い」と言って同心を送り出した――。

「……という巷説が伝わってたりするわけですが、まあ昔から動機がよくわからない首つり事件がよくあったということなのかもしれませんね。そう言えば、遺書を遺して首を吊った人のうち相当数が『鬼に呼ばれた』って書いてるそうですよ……」

いやそれは都市伝説の類だろう。そんな遺書の話なんか聞いたことがない。勿論、遺書の中身が公開されるなんてことはほとんどないわけであるが。

「ちなみにこの繪鬼というのはですね……」

中国由来の伝承にある妖怪なのだという。

冥界には一定の人口が定められており、これを常に保つ必要があるのだという。従って死者が冥界を去って転生するためには、代わりに後任の死者が冥界に入らなければならない。

「このとき、死者が生者の死をただ待っているだけではなく積極的に自殺や事故死を起こそうとすることがあるらしいんですね。で……縊死した死者が生者に取り憑き、自殺に追い込もうとするのが――その化け物の名が、『繪鬼』というのですよ」

転生するために他者を死に追い込む。それは……それは何と浅ましい考え方なのだろう。同時

にまた、何と能動的な生命への執着のあり方なのだろう……と、そう思う。住職の語った、「輪廻転生」とは違う……解脱するまで逃れられない魂の苦の連鎖の思想とはまるで違う。お釈迦さまが「苦」だと看破したこの世界へ、それでもしがみつこうとする執念。他人を冥界へ送ってでも、それでもこの世にありたいとそう思うのか。そう思うものなのか……。

「で、懸さんはそのキュートな魔女っ子が気になって仕方がないわけですね。キュートな膝小僧が頭にこびり付いて離れないわけですね」

いやそこまでは言ってない。膝小僧に追いかける夢を見たなんて一言も言ってないじゃないですか。

「もしかすると向日葵ちゃんが死神を冥界から召喚した犯人なのではないか、魔女っ子だけに……とか、そう疑っているんですか？」

住職と似たようなことを言う。

「まあ半年前のこともありますし誰が犯人でも驚きはしませんけど、今回はまあ違うと思いますよ」

繪鬼は式神でも召喚魔獣でもないのですから――と、ぜいらむ氏はそう言った。

「向日葵ちゃんが繪鬼の召喚士だとか、実は繪鬼の正体だったり魂を乗っ取られて操られていたり……なんてことは、今回はない、と断言しておきましょう」

断言された。その自信はどこから来るのだろうか？

「たとえ繪鬼が召喚できるモノだと仮定としても、そして向日葵ちゃんが万が一、真正の魔女だったとしても、彼女にはそれは出来ないでしょうね。西洋風の魔女を模した彼女が、中国由来の悪鬼を召喚するだなんて想像も出来ません。つまり……『型』が違うというか、使う『公式』が違うというか……」

PCの前で、きょとんとしている僕の様子が伝わったのだろうか。ぜいらむタソは続けて

「フォーゼ・ドライ〇ーにアスト〇スイッチじゃなくて〇ーメダルを挿しこんでも、何も起こらないでしょう？」

と言った。よく知らなければ、あるいは興味のないものが傍から見る限り、それは行為としては同じようなことではあるけれども、必要な所に必要なモジュールをはめ込まなければ、何も起こらないのだ、と。なるほどこれは判り易い仮面ライ〇ーの喩えであり、恐るべきバン〇イ商法の一端を垣間見た思いがする。

「どうでもいいですけど、繪鬼はかなり危険ですよ。マインド・コントロールを受けているような状態にされるわけで、もし行き逢えば相当精神力が強くないと確実に首つりますね、これは」

他人事みたいに言ってくれる。いや実際他人事なんだろうけど。

中継サイトを確認すると、我らが筋井九段が派手な頓死をくらっていた。繪鬼が将棋盤の上を通り抜けたのかもしれない。筋井九段のまさかの逆転負けを嘆く声がこだまするTLを眺めると、いつの間にかまたDM到着のメッセージが画面に表示されていた。

「田沼さんは何か貸してくれませんでしたか？……ほら『仏頂尊勝陀羅尼經』とか」

住職が「さん」付けになっているな……。いやお経なんて預かってないですけど。

「うーん、どういうつもりなんでしょうねえ……。いえね、田沼さん、ここ数日ツイッターで見

かけないんですよね。生きてるんですかね？」

ツイッター生活が日常化してくると、TLに数日いないだけで行方不明扱いになってしまう人は確かにいる。実際、そのままフェードアウトしたあげくにアカウントが消滅してしまうこともあるにはあるので、絡みの多かった人がいなくなると何かあったのかと心配になることもある。実際には、積み残しのゲームやってました、ていう人も多いのだが。僕のフォロワーさんの場合は。しかし住職、今ツイッター行方不明なのか……。数日前にリアルに会ったばかりだけど。真面目に僧侶としての修行してるだけだったりして。いやそんなはずはない。そんなことはありえない。

「そうですか……。じゃあ念のために懸さんにいいものを差し上げましょう」

いいもの？……壺かな？

訝しがる僕は、次に届いたぜいらむタソからのDMに口から心臓が飛び出るくらいに驚かされたのだった。

「ただし、わたしのことを詮索しないこと。他言しないこと。必要がなくなったら可能な限りわたしに関する記憶を捨てること。……そう約束出来るのなら明日××時に〇〇〇〇の●●●●へ来てください。そこで会いましょう」

【9】

次の日。時刻は××時。

ここは、〇〇〇〇の●●●●である。ぜいらむ氏が「他言するな」というので、僕の語りも「駒.zone」誌上ではきっと、あちこち塗りつぶされていることだろう。一つだけヒントを出しておく、ここは、何のことはない単なるファミ●スだった。

中に入って席を取り、ダウンジャケットを脱いで背もたれにかけた。下はいつもとほぼ同じデザインの服装で、自分のファッションを自分で語ってもしようがないので割愛するが、まあ、どこにでも売っていきそうな、無個性というかいつも変わり映えのしない服を着ている。

席についてとりあえずコーヒーを頼む。メイドじゃなくてウェイトレスさんが注文を取りに来るあたりはさすがファミ●レスである。店内の空気も「萌え～」ではなく落ちついた家族の団欒の波動が広がっていた。よく見ると家族というよりカップル風の男女もいる。新婚さんなのかもしれない、と何となく思う。これからの新婚生活に胸を躍らせているのだろう。

「新婚さんか……いいなあ、ラブラブで」

僕の父と母は再婚なのだ聞いたことがある。父は最初の相手とは事情があって結婚後すぐ別れたのだという。どんな事情があったのかは聞いていないが、機会があれば話してくれることもあるだろう。

そう言えば皆川許心 (@MinagawaMotomi) さんがよくツイッターで「一人でご飯はイヤだなー」なんて呟いているが、そしてその呟きは遠まわしに辻村君に向けているのだと思うが、何しろ彼は皆川さんをフォローしていないらしいので（ブロックしているという噂もある）、その声が届くことはないだろうなー……と思うけれど、それはまあそれとして、こういう場所に一人だと、皆川さんの気持ちが痛いほどによくわかる。食事というのはとても日常的な行為だし、そして人は皆、その日常を分かち合える誰かを欲しているものだ。人は誰も一人では生きていけない。一人で生きようとする必要もない。一人で生きられないなら誰かに頼ってしまえばいいのだと思う。甘えかもしれないけれど、一人で解決出来ないことを無理に頑張らなくてもいいし、上手に他人に甘えることも幸せに生きていくためには必要なのではないかと、僕は思うのだ。

この2年間、ずっとそうやって、僕は誰かに助けられながら生きてきた。助けられなければ生きてこれなかった。そういう出逢いを、僕はしてきたのだ。

しかしこれからは、これまでのようなどこか殺伐とした出逢いじゃなくて、もっとこう、甘酸っぱい出逢いとか、人と人との暖かい触れ合いとか、そういうのがいいな……とも思う。

切実に。かなり真剣に。……以下、色々と今後の人生設計について真剣に構想を練っているうちに、やがて僕の脳内では、僕と弥内さんが1個のコップに注がれたアイスティーに2本のストローを挿し、2人で仲良く飲み始めていた。首から上が、お湯が沸騰した薬缶のように火照り、左胸がまるで和太鼓の鼓動のように激しく鳴り始める。

——僕は父とは違う、一生あなたと添い遂げます！ そう心に固く誓って。……ポケットの中の婚約指輪を握りしめながら、いよいよプロポーズの言葉を発しようとした。

——その時だった。

「なるほど……いかにも邪な妄想に耽っている……という顔をしている。しかも聞いていたとお

り左腕がないな。……お主が香太郎か」

中学2年3学期の数学の期末テストで赤点ギリギリの成績を取ってきた弟の今後の進路を本気で心配して、暗澹たる気持ちになっている3つ年上のお姉さんみたいな表情をして、その人は現れた。

その人は僕の正面の席に腰を下ろした。

一目見て、息を飲んだ。意表を突かれた。

暗幕を連想せずにはいられない、漆黒で染め上げられた膝下丈の黒い長袖ワンピースとケープ付きコート。同じく深い黒の高帽子。その縁から腰までかかろうかというほどに長く伸びた絹のように滑らかなストレートのロングヘアーは、春の陽光のように光り輝くプラチナブロンドに染め抜かれていた。

突然の謎の人物の登場に二の句が告げずに、ただただ唾を飲み込んでいると、その人の白い細面にそっと結わえられていたような唇が開き、その虚から、これから生き血をすすろうとする吸血鬼の牙のような八重歯が覗く。

切れ長の瞳の奥から射してくる光は包容力があるようにも、高圧的であるようにも感じられた。率直な感想を言えば、殺人的とも言えるオーラがあって、じっと見つめられていると、いつか食べられてしまうのではないかという悪寒がした。性的な意味ではなくそのままの意味で。

ムシャムシャと。あるいはガツガツと。

「こんにちは」

――にっこりと。いや、むしろ……ニタリ、と、その人は嗤った。

「ぜいらむさん、ですよ？……あの、いつもお世話になっています」

しどろもどろだった。当たり前である。目の前に突然、銀河鉄道から下車してきたような格好の人物が現れたら誰でも驚く。これを見て驚かないのは車掌と鉄郎ぐらいのものだ。

が、その人は特に挨拶を返すでもなく

「ツイッターでも話したと思うが、縊鬼は危険だ。そして恐らく今回はあの生臭坊主は出てこないだろう……ほっといても良かったのだが、気が向いたのでお主を助けることにしたらしい……いや助けることにした」

しかし実在したのか「おぬし女子」。女子だったのかこの人。ていうか台詞がところどころ怪しい。怪しすぎる。ホントにぜいらむタソなのか？

「気が向いた？」

「うむ。直前にSHOGIウォーズで3連勝していて機嫌が良かったそうだ」

SHOGIウォーズとは持ち時間10分切れ負けルールで行われる携帯端末用の通信対局アプリである。最近、将棋ファンにやたらと人気らしい。

しかし危ねえ……。負けてたら助けてもらえなかったのか。ありがとうSHOGIウォーズでぜいらむたんに負けてくれた人。これからも僕が妖怪の事件に巻き込まれた時は誰かぜいらむたんに負けてやってくれ。

「魔除けの霊符を持ってきた」

スカートの中に手を差し入れてもぞもぞし始めた。何をやっとなるんだ何を……。

中から出てきたのは小さな木箱だった。将棋の駒箱2つ分くらいの大きさの白木の箱と蓋が臙脂色の紐で結ばれている。しかしどうなってるんだあの衣装。謎のお姉さんはかなりスレンダーな体型で、箱を収納するスペースがあったようには見えない。中に四次元ポケットでも入ってるんだらうか？

「霊符——ですか？」

月萌の「お方様」が「護符」によって天野宗歩の呪いから逃れた話を思い出す。

「そう、霊符。今さらお主が魔法や呪法が使えるようになるわけでもあるまい。これを携帯して事にあたれば、後は心意気で何とかなるだらう」

後は心意気なのか。それが一番問題のような気もするが。ぜいらむ氏(?)は紐を解いて蓋を外し、中から数枚の紙——霊符を取り出した。

「繪鬼対策だけでは物足りないかと思って、ついでなので色々持ってきた」

ニタリ、と笑みを浮かべる。

「まずは『消滅衆悪章』。多くの悪難を消滅させる。まさに一家に一枚の有難い霊符だ」

なるほど……これは汎用性が高いということか……。

「棋士としてはこれが良いのではないか？『精神百倍符』。棋力が上がるわけではないが、プレッシャーの掛かる状況で強い精神力が得られるらしい」

なんとっ！来期、昇級の掛った対局をこれで乗り越えられるかもしれない！

「『比類敬恭符』。人に好かれ、一目置かれるようになる。キモオタロリコンがバレて棋界で白い目で見られている今の立場が少し改善されるかも……」

おおっ！ ていうか僕ってばいつの間にそんな立場に！？

「そしてこれが……思いを寄せる相手を自分に惹きつける効力があるという、ある意味禁断の『蠱惑誘引符』。これでお主の愛しいあの人も……後は言わなくても判るな？」

何だと？ 弥内さんが何だと！？……ぐはあ！ ぐはあ！ ぐはあ！

店内の暖房が効きすぎたせいだらうか、上せた僕が鼻血を吹いたので、ぜいらむタソがウェイトレスさんを選んでくれた。いや、そこは人を呼ばずにそっとティッシュペーパーを渡してくださいよ……。

鼻に丸めたティッシュを詰め込んだ姿で僕は言う。

「ぜひ欲しいです。何としても入手したいです、さあはやくそれを寄こせください」

「無論だ。そのために私はここへ来たのだから。……1枚3万円」

え？

「ちなみに税抜で」

税抜か！ じゃあ税込で1枚3万1,500円か！……高っ。

「要らんのか？」

「要りますけど！」

全部は買えない。財布の中身を確認すると全然入っていなかったの、一旦外へ出てATMまで走って預金を下ろし、帰る道すがらどの霊符を購入するか検討しつつ、また○○○○の●

●●●へと戻り、ぜいらむタソが効果を保証すると断言した霊符を1枚、購入したのだった。

「言っておくがその霊符は今はまだ、ただの紙切れだぞ？」

……え？

「別に詐欺を働いたわけではない。霊符というのは、御霊入れをしなければ効力を発揮しないとっているのだ」

ミタマイル、とは。

「話せば長くなる。御霊入れの作法についてはこの小冊子に書いてある。よく読んでおけ」

ほおほお……それは。

「……これは税抜5千円」

やっぱり金取るのか！助けにきてくれたのか弱みに付け込まれているのか分からない。凄まじい商魂というか、このお金への執着は月子さんといい勝負である。金本月子さんと金取ぜいらむさんだった。なるほど2人は気が合うわけだ。きっと某SNSとやらできゃっきゃウフフとお金のお話をしているに違いない。

それにしても。

こういうことに詳しい人だとは思っていたが、霊符なんてのを作れるほどの人だったなんてな。びっくりだな。ちょっと尊敬しちゃうかもな。

「いや、それは私が作ったものではないぞ」

は？

「ツイッターで知り合った陰陽師の方をお願いして譲ってもらった」

陰陽師って実在したのか……。しかも陰陽師もツイッターやってるのか。

「しかもタダで。今度、礼を兼ねてネタツイートを連発してやらなくては……」

何その転売。しかも元手はネタツイートかよ！どんだけ面白いんだよそのネタは！つぎやらないと！

何だかんだで商談が成立してご機嫌になったぜいらむタソは、その後ランチを注文し、ゲ●ゲの鬼●郎の話題をのべつ幕なしに喋りながら、イタリアンハンバーグステーキのBセットをたいらげ、デザートショコラケーキを幸せそうにほおぼり、そして最後に、香ばしく匂いたつカップチーノをしっかりと2杯飲み干していた。さらに3杯目のおかわりを頼んでいる。実に幸せそうである。普段、ちゃんと食事してないんじゃないかと心配になるくらいの、それはいい表情だった。そう、一人ではなく誰かと食事をしたいの、こんな幸せそうな顔を見たいからなのかもしれないな、とそう思い、皆川許心 (@MinagawaMotomi) さんの気持ちがさらによくわかったのだった。よし、今度食事に誘ってみるか。皆川さんじゃなくて月子さんを。

ちなみに僕は生姜焼き定食と食後に焙じ茶だった。

絵画は完全に銀河鉄道コ●プレお姉さんとの会食である。20代半ばから後半というところか。そもそも女性であったことに驚きを禁じ得ないのだが。……いや、そもそもこの人が本当に女性であるとは限らないし、実のところぜいらむタソ本人だという確証もないのだった。正体を知らない人物に対する予断は禁物だ。そのぐらいの慎重さを、僕はこの2年間の経験によって身につけていた。それに。

「その目を見たことは何も信じてはいけない」と、半年前にツイッターのインターフェースの向う側から、そう僕に教えてくれたのは他ならぬぜいらむタソ自身なのだから。

しかし僕の周囲の人ってコスプレマニアばかりだな……。おいおい、おかしいぞ？もしかすると、田沼泥鰯も本当は住職ではなくて、住職コスプレが趣味の変なおっさんなのかもしれない……。

「その霊符を持って、蒲尾向日葵と会うことだ。喧嘩をするんじゃなくてちゃんと将棋の対局をするのだぞ？」

それはまるで姉が弟にちゃんと言い付けを守りなさいよ、と諭しているみたいな声色だった。

あの日、向日葵ちゃんを泣かせた事を知っているのだろうな、と思った。別に喧嘩をしたいわけではないんだけど……。ていうか、将棋指さないとダメなんだろうか？

「思うに今回、絵鬼は誰かが将棋指してる時にしか現れていないようだし、そもそもお主の場合、将棋以外の用件で女子を誘うのは無理だろう？」

すっかり非モテキャラにされていた。まあ確かに僕はしゅう (@Syu\_13th\_month) さんじゃないので、いきなり向日葵ちゃんをデートに誘うとか無理だ。将棋を指そうと言うしか方法はなさそうだ。

「では香太郎……縁があれば、また会おう」

3杯目のカプチーノを飲みほした謎のお姉さんは、何故か名残り惜しそうな口調でそう言うと、まるで封じ手の局面で別室へ向かう埴生名人を思わせるような優美な動作で立ち上がった。

そして、にっこりと。いや、むしろ……ニタリ、と。

残酷さの漂う、そしてどこか蠱惑的な笑みを浮かべ、プラチナブロンドのロングヘアをなびかせながら、このファミレスー〇〇〇〇の●●●●から出て行ったのだった。

やっと終わった……と、安堵した。

何だか地味に怖かった。ずっと怒られているというか、隙あらば小言を言われてしまいそうな、そんなオーラをずっと浴びていたような気がする。

それから数十秒後。

暗幕を思わせるような黒い不吉な姿が窓の外の雑踏に消えかかろうとするころになって。

ようやく僕は重大な事に気づいたのだった。

「ここ！僕が支払うんですかっ！？」

——お二人様、合計4,680円（税込）だった。

## 【10】

お膳立てをしてくれたのは辻村君だった。その日将棋会館で、相変わらず両足にスネコスリを巻き付かせたまま颯爽と闊歩する辻村充四段を見かけた僕は、藁にもすがるような思いで彼に相談を持ちかけてしまったのだ。何となく彼がスネコスリに憑かれる理由がわかったような気がする。

「……懸さんも、ああいう子が好みなんですか？」

と、何だかロリコンをこじらせたアニメオタクを遠くからこっそり眺めるような視線で言われたりもしたが

「いや僕が愛する人は弥内さんだけだ」

と即答するあたり、僕にもなかなか男らしいところがあるのだった。しかもその後すぐに「い、今の……弥内さんにはまだ内緒だからな!？」

と口止めするあたり、やはり僕には抜かりがない。この抜かりのなさが新人王戦優勝に繋がったといっても過言ではないだろう。我ながら「ものぐさ将棋観戦ブログ」でネタにしてもらいたいほどの抜かりのなさだった。

ここは将棋会館2階の一室である。

普段はアマチュア対象の将棋教室等が行われるその部屋で、長机の上の卓上将棋盤を挟んで僕は彼女と対峙していた。

僕の正面に座っている小柄な少女は――蒲尾向日葵。

やや暗めの黄色い魔法衣に同系色の三角帽子。首にはいつもの丸いペンダント。よく見ると丸の中に四角い図形が四つ並んでいた。彼女がいつも携帯している座布団の紋様――魔法陣とは印象が異なり、それはまるで日本の旧家に伝わる家紋のようにも見える。

彼女はパイプ椅子の上に例の座布団を敷き、その上にちょこんと座って一心に盤上を注視していた……というか僕と視線を絶対に合わせたくないという空気がぷんぷんしていて地味に傷ついた。

――それはともかくとして、だ。

な、何をした辻村充? 一体どんなマジックを使ったというのだ! ? 周囲には誰もいない。部屋が貸切なのである。確かに僕は蒲尾向日葵と将棋を指したいので機会をつくってくれと頼んだが、この手際はいささか鮮やか過ぎるのではないか? 女性の扱いに慣れているのだろうか。

僕が見るところ辻村には角交換系の将棋で自陣角を打った後、その角の捌きにやや難があるような気がしているのだが、今日のこのセッティングの鮮やかさを見ていると、どうやら彼は角より女性の扱いの方が得意なようである。捌きのアーティストならぬ口説きのアーティストだった。もしかすると、しゅう(@Syu\_13th\_month)さんといい勝負かもしれない。

くそー、辻村なんて爆発すればいいのに。しゅうさんは大爆発すればいいのに。……なんてことを悶々と考えていると。

「……あの……振に駒ですか? レディーファーストですか?」

相変わらずの鼻声だった。

ということで、ようやく僕は蒲尾向日葵との初対局にこぎつけることに成功した。謎のお姉さんの言いつけどおりに、ちゃんと将棋を指すことになったのだった。

「よろしくお願いします」「よのしくお願いします」

作法に従い礼をする。レディーファーストルールで先手番となった蒲尾向日葵が、黄色い魔法衣の袖から伸びた瑞々しい右手を伸ばし、可憐な指で7七の歩をつまみあげて。

――ぺし

という何だかよく判らない駒音とともに初手▲7六歩が指されて。

対局が開始された。

戦型は後手番である僕の「ゴキゲン中飛車」となった。ほとんど居飛車党の僕がこの戦型を選択した理由は勿論「向日葵ちゃん、君と将棋が指せて僕はとってもゴキゲンだよ♡」という遠まわしのアピールだったのだが、対する蒲尾女流名人の方は一刻も早くこの部屋を出なければ色々な意味で危機が訪れるとでも言わんばかりに甚だ不機嫌そうだった。

ゴキゲン中飛車対フキゲン居飛車の対抗形だ。

中央に飛車を配置し、角道は開けたまま5筋を伸ばして玉の囲いに移る。ゴキゲン中飛車お決まりの手順に対して女流名人は▲3七銀から▲4六銀の手順でスルスルと銀を前線に繰り出してきた。一時期大流行したゴキゲン中飛車の勝率を一気に引き下げた「超速」と呼ばれる手法である。そしてそれは、ゴキゲン中飛車を得意とし三段リーグ入り目前だった樹原九郎二段の調子を狂わせた悪夢のような作戦の名でもあった。

あの日。将棋会館の一室で行われた練習将棋の一局で樹原は誰とどんな将棋を指していたのだろうか？居飛車の戦型だったのか、それとも新しいアイデアが浮かんで、夢よもう一度とばかりにゴキゲン中飛車に打って出ていたのだろうか？樹原が指した最期の（いやアイツまだ死んでないけど）将棋の戦法を知りたいと、僕はその時切実に、そう思ったのだった。

「……何ということでしょう……樹原さんが自殺すぬ直前に私と指した将棋と全く同じ形になってしまいましたっ！」

「やっぱりお前が相手だったのか……」

縊鬼に遭遇する直前に彼は蒲尾向日葵のすぐ近くにいたのだ。2人で将棋を指していたのだ。待てよ？辻村君が「懸さんも」とか言ってたな。「も」とは何だ「も」とは……もしかして、樹原も辻村君にセッティングしてもらったことがあるのか？

……そう言えば樹原から「死のうと思ったことはあるか？」と聞かれたのはいつだったか？、樹原は2回以上、もしかするとそれ以上、蒲尾と何度も会っているのかもしれない。

「ひょっとして樹原と同じ研究会に入っていたりする？」

「いえ、特にそういうわけではないですけど、樹原さんかなは将棋に限らずよくお誘いさねてました」

「将棋に限らずだって？」

「ここだけの話ですが、そねとなく『付き合ってください』的なことも言わねたかも」

何だと！？

「……つ、付き合ってたの？」

「いえ、わたし、振に飛車男子はちょっと……」

「振り飛車男子ってなんじゃそりゃ。ていうか筋井先生に喧嘩売ってんのか？」

「筋井先生はベツバナです！」

別腹なのかよ。食うのかよ。この魔女め。

そうか、樹原は魔女っ子にご執心だったか。案外、あいつが居飛車党に転向しようとしていた

のは向日葵ちゃんへの恋慕が原因だったのかもしれないな。

恋は振り飛車党を盲目にするのだ。

「……念のために聞いておくけど、先日女子トイレで一人……」

「作田さんですよ。実はあの人も直前にわたしと対局してゴキゲン中飛車を指してました」

あの人、作田さんって言うのか。やっと名前が判った。忘れないようにしよう。

「懸先生！……ゴキゲン中飛車は、ののわねていぬのです！危ないですか、今すぐトウニョウしてください！」

「糖尿？」

「まいにました、と言えはいいんですっ」

「ふざけんな！」

棋士は負けず嫌いなのだ。

「ていうか、そっちもお前絡みか。……蒲尾、お前、縊鬼の正体を知っているな？」

「イツキ？あのお化けのことですか？そ、そんなのしにません！」

”死にません”に聞こえるが、きっと”知りません”なのだろう。しかし化け物の存在は知っているらしい。

「どうにも怪しいな……ゴキゲン中飛車じゃなくてお前が誰かに呪われてるんじゃないのか？」

「ひ、ひどい！わたしだって気にしてぬのに！んもお！懸先生なんか首吊って死んじゃえ！」

蒲尾向日葵が泣きだしてしまった。この時僕は、要するに月萌と話す時と同じノリで喋っていたわけで、よく考えたら腹黒い悪霊である月萌とは違い、純粹で傷つきやすい、まだ15歳の女子高生に向かって年上の男がとっていい態度ではないのだった。

そうは言ってもこの時は頭に血が上っていたので、つい勢いで口喧嘩を続けてしまっていた。もう将棋どころではない。

「ひ、ひとに死んじゃえとか言っちゃいけないんだぞ！このコスプレ女！」

「コ、コスプレじゃないもん！ていうかコスプレして何が悪いんですか！？……なによ！そっちは一年中同じ服しか着なくせに！大体ちゃんとおフノ入ってぬんですか？そう言えば何だか変な臭いがしますよ……うわっ何だか臭いですっ、この不潔男！」

「何を！これはいつもと同じ服に見えるかもしれないが全く同じ服じゃないんだぞ！つまり同じデザインの服を10着ぐらい部屋に常備しているという、いわばバツ●マン・システムなのだ！」

「は？バ●トマン・システム？何そねダサッ！しかも弱そう！っていうか臭そう！筋井先生の筋井システムの方が100倍かっこいいです！」

「将棋関係者にしか判らん上手いことを言うな！ていうかバツ●ンと筋井九段を同じ文脈で語るな！あといちいち臭いとか言うなバカヤロウ！」

「何よっ！バカっていうほうがバカなのよ！懸のばーかばーか」

「そっちこそ、ばーかばーか！」

小学生の会話だった。ていうかどっちもバカだった。

その後も文字に変換すると「ふぎゃー！」とか「がぉー！」としか表現しようのない不毛な会話を続けていると。今年度の新人王と現役の女流名人が微笑ましい口喧嘩をしていると。

――唐突に、ソレが現れた。

――出し抜けに。やぶから棒に。

部屋の温度が一気に下がったような感覚が走り、首筋から背中にかけて強烈な寒気を覚える。全身を震わせたその冷気が、頭の悪そうな会話でヒートアップしている僕たちの頭を瞬間冷却する。口角泡を飛ばして論戦(?)を展開していたバカ二人がさすがに異変を感じて部屋の入り口近くを見ると、そこにソレがいた。アレが、ふわりと浮かぶように、いた。

平均的小学高学年生の身長程の大きさの凶悪な顔。不吉な白い死装束を纏い、見る者をうすら寒くさせずにはおかない圧倒的な負のエネルギーを放散して。

赤ん坊の頭ほどの大きさの、ホウズキのように赤い目玉をぎらつかせた死神。

――そこにいたのは、絵鬼だった。

【11】

「懸先生、逃げてください！死にたくなければですけど！」

振りかえると蒲尾向日葵はすでに僕の近くにはいなかった。絵鬼の現れた位置から最も遠い対角線上の部屋の角に魔法陣の描かれた座布団を敷いてその上にちょこんと正座している。体育座りだったらパンツが見えたのに……等という冗談を口にするヒマはなかった。絵鬼は僕を無視して一気に蒲尾の方へと突入していったのだ。

「そうだ！ぜいらむたんからもらった霊符！」

あの時、ぜいらむタソ(?)から数々の霊符を提示されたものの、予算に限りのあった僕は、将棋指しらしい大局観と冷静な判断力でもって「蠱惑誘引符」を買ったのだが、そのときぜいらむタソから「……これは初回購入キャンペーンというか、特別サービスだ。事件が収束するまで肌身話さず持っている」と1枚の霊符を譲り受けていたのだ。さすがぜいらむタソ。ツイッターでは変態だが根は真面目で優しい。ツイッターでは変態だが根は真面目でとても優しい。ツイッターでは変態だが根は真面目でイザという時頼りになる。……しまった3回も誉めてしまったぜ！

ということで特別サービスの霊符「除生死靈魂邪氣御秘符」を取りだした。邪気の災いを祓い清める霊符。これで絵鬼を封じ込められる……はずであった。

はずであったが大事なことを忘れていた。

「しまった！御霊入れしてない！」

例の解説書を特別割引価格で買わされて一応は目を通していたのだが、何しろ暦がどうか時間帯があだとか、その他作法が細かすぎて、結局やっていなかったのだった。こんなことなら御霊入れまで委託しておけば良かったか……300万円ぐらい掛りそうな気がする。そんな大金はともじゃないが支払えない。新人王戦の賞金を使い果たしてしまいそうだ。

護符、霊符の類は御霊入れをしなければただの紙切れだと、ぜいらむたんが言っていた。つまりこれは、今はただの紙切れなのだった。深く後悔し反省するとともに「蠱惑誘引符」だけはしっかり御霊入れをしておこうと、そう心に誓う僕だった。このように一度の失敗にめげず、次の機会にその反省点をしっかり活かそうとする心がけが新人王戦優勝という結果に繋がったと言っても過言ではないだろう。

とは言え、霊符が使えなくなった今の僕は単なる役立たずのクズだった。紙切れ以下の紙クズだった。それでも、せめて応援だけでもしてあげようと思い

「蒲尾！！」

と一応声だけは出してみたものの、だからと言って縊鬼が止まってくれるわけがないのだった。僕の心からの心配も虚しく、縊鬼が魔女っ子に襲いかかろうとしたその時。

「どっひええええええええー—————」

頭を抱えた蒲尾向日葵の叫び声が部屋中に響き渡ったその時。

座布団の角から紫電が走った。バチバチバチィ……という雷音とともに房の一束が中空を舞い、床に焼け落ち、そして縊鬼の動きが停止した。

なるほど、魔法陣とは縊鬼除けの結界だったのか……霊符より役に立ちそうだ。あの座布団、一体どこで手に入れたんだろう？

「やった！また助かった！ぜいなむたん、いつもあにがとう♡」

ぜいらむタソかよ！何で僕にはあの座布団譲ってくれなかったんだよ！？

「15万円（税抜）支払った甲斐があにました！」

高っ！ぜいらむたん、女子高生から15万円もせしめたのか……しかも（税抜）か！じゃあ15万7千5百円か！……よく払えたなあ。女流名人位戦の賞金って幾らだっけ？今度、賞金情報にやたら詳しい金本月子(@tsukiko\_sann)さんに聞いてみよう。

蒲尾向日葵から返り討ちを受けた縊鬼は、そのまま退散してくれるのかと思いきやそうはいかなかった。先日の女子トイレの時のように消えてくれたりはしなかった。縊鬼は……僕の方へと向かってきたのだ。

そう……。こうやって縊鬼は——蒲尾を襲撃したものの、あの座布団の力で目的を果たせず……同心を誘惑し、その目的を果たせなかった代わりに別の者を自殺に追い込んだという江戸時代の説話と同じように……蒲尾の代わりに近くにいた樹原や作田さんを襲ったのだろう。蒲尾向日葵は2度襲われ2度助かり、2度他者がとぼっちりを食った。そして今日が3度目なのだ。

座布団の護法は、あくまでも一時的にその身を護るためだけのものであって、縊鬼を封印してしまうだけの力はないのだろう。15万円（税抜）もするのに。あるいは15万円（税抜）しかないからなのか。どうでもいいが縊鬼が現れた時に向日葵ちゃんの近くにいた人間にとっては、それは災難だった。そしてその災難は今、僕の方へと向かってきているのだ。

縊鬼の巨大な目玉と僕の視線が交錯する。その瞬間、二人の奨励会員を自殺未遂に追い込んだ死神——縊鬼の悪相から放たれる邪気が僕の全身に絡みついてきた。「首をくくれ」という声が、執着と悪念に満ちたおぞましい声が、頭の中で反響する。精神が蹂躪されていく。体中から力が抜け落ち、視界の明度が下がり、意識は徐々に揺らいでいった。

——これからどんなに頑張ってもタイトルなんか取れっこないよ埴生世代強すぎるもん

——左腕はもう元にはもどらないんじゃないか？……ハンバーグにされたらしいし

——三東先生の部屋のロフトには月子さんが装備されてていいな—

——それに引き換え僕の部屋には悪霊が憑いてるなんてイヤだな—

——部屋に悪霊が遊びにくるから毎日気が休まらないな—

——僕なんか一生彼女もいなくてさ——結婚とか出来そうもないな——

——いいな——辻村君ばっかモテて。辻村爆発！辻村爆発！辻村爆発！

——ああ……あと一局だけでもいいから将棋指したかったな……

——死んだら住職の言ったように輪廻転生して生まれ変わったりするのかな

——あ、そうだ……生まれ変わったら、袴になりたい

そんな言葉たちが頭の中でグルグルしていた。思い返せばそれは。その思いは。

……ただの愚痴で。

……ひとりよがりだ。

……悩みですらない悩みで。

……乗り越えられるはずの問題で。

……乗り越えられなければ、受け入れるしかない現実であって。

……受け入れようと思えば受け入れられるはずの小さな小さな障害で。

それでも僕はその時、その思いに囚われてしまっていた。その重さに潰されていた。この程度の重さにすら耐えられずに僕は「死のう」と、そう呟いていたのだった。

気がつくと奇妙な感覚に捉われていた。はるか上空から、将棋会館の2階にいる自分自身の姿を眺めているのだ。懸香太郎はどこから取り出したのか、いつの間にか太い荒縄を持って長机の上に立っていた。天井の排気溝の隙間から縄の一端を通して下に垂らす。先方を固く結んで輪を作り、その中に首を通した。その時、長考寺の住職の「首くくるヒマがあるなら、まあ坐れ」という言葉を何となく思い出したりしたけれど、もうどうにもならなかった。僕の眼下にいる懸香太郎は

「弥内さん、先立つ不孝をお許してください」

とわけのわからないことを呟いて。

強く、勢いよく、自分が立っている長机を蹴り倒した——。

「——螺旋運命（スパイラル・ミゼラブル）！！！！」

グワキャ！という鈍い音とともに視界が急降下する。上空にあった僕の意識は消えさっていた。肉体の感覚が戻ると、荒縄の輪の位置で停止するはずだった——その位置で首からぶら下がるはずだった僕の身体は、そうはならず高速で床まで落下していた。

「ぐはっ」

急激に夢から醒める。したたかに強打した腰、それと後頭部を代わる代わる右手でさすりながら振りかえると、そこには。

透き通るような白地に薄緑色の鶴を染め抜いた千早。鮮やかに映える紅い——緋袴。黒の浅沓。水引で結わえたツーサイドアップの髪を微かに揺らし、肩に担いだ斧の柄を両手でしっかり握りしめ、朱色に染まる双眸で射るように敵を視る巫女装束の少女——そこに、月萌が立っていた。

「ちょっとそこの絵鬼！懸さんはアナタの獲物ではありません！わたしのお方様のい……あ…  
…えーと、えーと……以下略です！」

悪霊が何やら不穏なセリフを吐いていた。

「とにかく！」

月萌は右肩にかついだ斧の柄を片手で抑えると、絵鬼へ向かって左手を伸ばし、それから  
ビシィィィっという感じで、というか今しがた発した怪しいセリフをごまかそうとする気満  
々の様子で、元気ハツラツ敵を指差した。

「さあ！アナタの詰みを数えなさい！」

こうして文字にしないと判りにくいのだが、仮面ラ●ダーWの決め台詞を将棋風味に改変して  
いた。というか「ツミ」の音は同じなので、事実上の丸パクリだった。

天井の荒縄を結んだあたりを見るとざっくり割れている。月萌が荒縄ごと叩き割ってしまった  
のだ。いずれにせよ……動機が何であれ、彼女は半年前の事件の時と同じように、またあのおか  
しな斧で、僕を救ってくれたらしい。いやしかしこの天井どうしよう？事務室に報告したら修繕  
費用を弁償させられそうで怖かった。一体幾ら掛かるのだろうか？月子さんに聞いた話だと三東  
先生に上目遣いでおねだりすればいくらでもお金を貸してくれるらしいのだが。

……額によっては相談してみるか……。

絵鬼の処遇は月萌に任せることにして、とりあえず僕は蒲尾向日葵へ声をかける。

「蒲尾！大丈夫か？」

「見てのとおに、わたしは全然平気です。懸先生こそ大丈夫なんですか？」

確かに蒲尾より自分のことを心配してろ、という話だった。

「そねよに……あのおかしなコスプレ女は誰なんですか？」

魔女っ子は自分のことを棚にあげていた。この厚かましさが女流名人位奪取に結び付いたとい  
っても過言ではないような気がする。

「……視えるのか？」

「あんなに大暴ねしてぬのに見えないわけないでしょう？」

おっしゃるとおりだった。というかそもそも彼女には絵鬼が視えていたのだから、同じように  
月萌が視えても不思議ではない。常人には視えないはずの、この世ならざる存在を彼女は知覚出  
来るのだろう。魔女っ子コスプレはダテじゃない。

「先日話したる？あの子が……僕の左腕を叩き斬った悪霊だよ……」

これ以上ないというくらい判りやすい、これ以上があるとすれば筋井九段の解説しかないだ  
ろう、というくらい判りやすく過不足なく月萌を紹介した僕に向かって、向日葵ちゃんは

「ほえ？」

とカードキャ●ターさ●らみみたいな声を発してきょとんとしていた。

一方、月萌はのたうち回る絵鬼を、まるでネズミをいたぶる猫のような表情で追いまわしなが  
らとても楽しそうに紅の斧（アックス・トルネード）を振り回していた。というか床を叩き割っ  
ていた。

「妖魔連斬（ダークムーン・ワルツ）！」

ドカ。

「妖魔連斬（ダークムーン・ワルツ）！」

バキ。

「妖魔連斬（ダークムーン・ワルツ）！」

ボコ。

「妖魔連斬（ダークムーン・ワルツ）！」

ガキィ。

一振りごとに床に穴が空いていく。霊的な存在同士の戦いなのに、化け物二人は全くの無傷のまま、将棋会館の2階の一室の床にだけ物理的なダメージが蓄積していくその光景はワルツというより、つるはしで掘削工事をしているみたいだった。

……もうこの部屋は修繕とかじゃなくリフォームした方がいいな。料金は三東先生持ちで。

そうやって、その後もしばらくの間ドカバキドカバキと工事を続けていた月萌だったが、やがてそれにも飽きてきたらしく、今度はこちらへ無茶ぶりをしてくるのだった。

「懸さん！このままではラチがあきません。穴はあいてもラチはあきません。ってことで懸さんが絵鬼を羽交い絞めにしておいてください！」

「つまり僕が後ろから取り押さえてる間に、お前が奴を封じ込めると？」

「いえ、わたし封じるとかそういうの出来ませんので、懸さんもろとも叩き斬る勢いで！」

「僕を助けに来たんじゃないのかお前は！？」

そもそも片腕のない僕に羽交い絞めは無理なのだ。こうなったらもう、向日葵ちゃんを連れて部屋から逃げ出そう、そうしよう、とそう決心した矢先に。

「懸先生、こねであのお化けの動きを止めなねぬかもしねません」

蒲尾向日葵が座布団を僕に差し出してきた。一つだけ残った房が淡い光を放ち始めている。

——そうか。蒲尾を絵鬼から守った雷光。どういう経緯なのかは謎のままだけど、ぜいらむタソが向日葵ちゃんに託した……というか15万円（税抜）で売りつけたマジック・アイテム。

恐らくこれまでの自殺未遂事件の都度、彼女を死神から守ってきた護法。その角に取り付けられた房の一つ一つが、彼女の生命を繋ぎとめてきたのだろう。座布団を受け取った僕は、つい今しがたまで向日葵ちゃんが座っていたせいで生温かさの残っているその感触を楽しむ暇もなく絵鬼へと突進すると、顔だけが巨大な悪念の塊のような化物のその背後から忍び寄り、座布団越しにしがみついた。

バチバチバチバチッ！！——紫電が走り、その場で絵鬼が固着する。

その時僕の全身を刺激した微かな電流は割と気持がよくて、何だか肩こりが治ってしまいそうだった。



「月萌！房は1つしか残ってないんだからな！一発で仕留めろよ！」

「承知しました！ところで懸さん、わたしがガン●ムで一番好きなキャラはリュ●さんです！」

「犠牲になって死ぬのは嫌だ————！！！！！」

「喰らえええ！！！」

「ぬううううあああああああああああ！！！」

奇しくもハモ●のマゼラ・●ップにコア・ファイ●ーで体当たりをかまして名誉の戦死を遂げた●ユウさんと同じ叫び声をあげている僕のことなどこれっぽっちも気にかけていないとしか思えないようなもの凄い勢いで、月萌は「紅の斧（アックス・トルネード）」を容赦なく振りおろして――。

「妖魔連斬（ダークムーン・ワルツ）！」

ざっくりと。

ぱっくりと。

2人の奨励会員を自殺未遂へと追い込んだ憎っくき悪鬼の、その巨大な頭を叩き斬ったのだった。

「ッ！？……って……………ほえ？」

真っ2つに割れ、少しずつその輪郭が薄らいでいく縊鬼の残骸を前に茫然としつつ、ここぞとばかりに向日葵ちゃんの台詞をマネしてみた相変わらず抜かりのない僕に向かって、ツーサイドアップに髪をまとめ上げた巫女装束の幽霊少女がにっこりと笑いかけてきた。

「懸さん……大丈夫だったみたいですね？」

「……ああ、当たらなければ、どうということはない」

ここで放った赤い彗星シャ●のセリフは、腰を抜かしてへたり込んでいる僕の、精一杯の強がりだった。

【12】

「さぁみんな！腹筋タイム♡始まるよ～！」

「……お前、中継見てる？」

動画配信サイトで『フッキン・アイドル 憑く！突く！ツクモさん！』を観ていた僕は、千場さんからの電話を受けて、慌てて別のブラウザを起動し、棋王戦最終局の中継サイトにアクセスした。なお『フッキン・アイドル』を放送しているサイトは「ニコ●コ動画」ではなく「似孤似孤動画」だった。検索エンジンにも引っ掛からない謎のサイトで、何故アクセスできてしまったのか僕にも判らない。魔界からの通信を偶然キャッチしてしまったとしか思えない。

さて、棋王戦の方は綾小路棋王の手中に残った最後のタイトルの行方を懸けた大一番である。

局面を見ると、棋王の「ゴキ中」だった。先手の銀の動きに呼応して、角道を止める手法に出ている。――環流、と言うのだそうだ。環五段が研究会等で指していた手で、「超速」に対して「ゴキ中」側が提示した最新の対策だった。公式戦に登場するのはこれが初めてなのだという。この新手法に綾小路棋王はタイトル防衛を託したのである。これが成功すれば、また「ゴキ中」が勢いを取り戻すかもしれない。

「まあこうやってさ、対策の対策のそのまた対策、って感じで、将棋の定跡の進歩は止まらないよな」

「ですね。必勝戦法なんてないです、将棋には」

横目で『フッキン・アイドル』をチラチラ観ながらも、僕は将棋の定跡の変遷に思いを馳せるのだった。

「アイツも中継見てるだろうな……」

樹原は「超速」対策に行き詰まって居飛車への転向を模索していたと、今でも千場さんは思っているのだろう。実は「魔女っ子に恋して居飛車転向」だったのかもしれないのだが……。真相は闇の中だ。あえて暴くことでもないだろうし、それを暴く権利は僕にはない。あの時、樹原に「まあ坐れ」と言ってやれなかった僕には、その資格はないのだった。

「樹原のことだけど……何で自殺しようと思ったのか覚えてないって言ってるらしい。心因性のショックとか後遺症とかで記憶がなくなったのかな？」

樹原はきっと「縊鬼の声」を聞いたに違いないのだが、その記憶もないということか。それはそれで都合がいいのかもしれない。あんなモノ憶えていたって何もいいことはないし。機会があった

ら樹原本人に聞いてみるか。会ってもらえるかどうか怪しいけど。最初に相談を受けた時、あんなふざけた受け答えをした僕を樹原はどう思ったのか。どう思っているのか。

「昨日退院したけど対局はまだ無理だってさ。そりゃそうだ。……で、奨励会はしばらく休会するそうだ」

後遺症は……多少手の痺れがあるという。唯一の救いは本人が将棋を指したがっているらしい、ということだろうか。彼がまだ将棋を指したいと、そう思ってくれていることが嬉しい。同じ将棋指しとして素直に喜ばしかった。一方、作田さんの方は樹原よりも症状は軽く、もう普通に生活できているとのことだったが、聞けば田舎へ帰ることにしているそうだ。それもまた仕方のないことだ。あの事件を、そして縊鬼の声を各人がどう受けとめたかなんて僕には決して知りえない。僕が立ち入れるスペースはそこにはない。

「じゃあな。たまには研究会に顔出せよ？」

はい、と言いながら、僕は棋王戦の中継サイトを映しだすブラウザをタスクバーに納めて『フッキン・アイドル』を全開にした。

……やべえ、これ面白え！月萌さんが「FKN48」としてデビューする日は意外に近いのかもしれない。

「それにしても……」

腑に落ちないことが残っていた。向日葵ちゃんの座布団の房の数が合わないのである。

僕が蒲尾向日葵と最後に会った時、房は2つ残っていた。今回、縊鬼は”蒲尾向日葵を襲い、撃退された後、別の誰かを襲う”パターンだった。樹原は少なくとも2回、縊鬼に行き逢っているはずだから、作田さんの分を合わせるとそれで最低3回。その全てに蒲尾向日葵が関わっていたのなら、僕と会う前に座布団の房は既に1つだけになっているはずである。だが、実際には2つ残っていた。つまり、蒲尾向日葵が最初に襲われた時、彼女——と樹原を救ったのは座布団の護法以外の何か、という可能性があるのだ。

そして最大の謎は”何故、蒲尾向日葵は縊鬼に狙われていたのか？”という点だ。都合4回彼女は狙われているわけで、いくらなんでもしつこすぎる。

「まさか……膝小僧が欲しかったとか……」

あの縊鬼、下半身がほとんどなかったし。女子高生の膝に憧れていたのかもしれない。いやそんなまさか。気持ちはわかるけど。

「うーん、どう考えてもぜいらむタソが絡んでるよなー」

”1回目”の時、何らかの方法で向日葵ちゃんを救い、死神に取り憑かれてるとか何とか言って、あのマジックアイテムを売り付けたのだろう。15万円（税抜）で。詳しい経緯は判らないし、向日葵ちゃんもこのことについては話してくれないので、何があったのか判らないままだけど。

「まあいいか」

何にせよ……ぜいらむタソは僕を、そして蒲尾向日葵を、氏なりのやり方で救ってくれたのだから。約2名、棋士としてはほぼ再起不能に陥った者がいるのは残念なことではあったが、それでも生命は救われた。何より、将棋界の明日を担う期待の若手棋士と女流名人の健康的な膝小僧が守られたのだから良かった良かった。

「あ、そう言えばまだぜいらむタソに報告してなかったな」

連絡手段はツイッターしかないので、いつものようにDMを送った。

実は御霊入れをサボってしまったこと。月萌が現れて『紅の斧』を振り回したこと。何だかんだで助かったこと。そして未だ効力を試していないあの霊符を使うのが楽しみだ――そんな話を。

しばらくして返事が返ってきた。返ってきたが、そのDMときたら、縊鬼の蘊蓄の続きとか、それに関連して行逢神がどうかという妖怪ツイートが果てしなく続くのだった。

「そんなことより向日葵ちゃんの座布団のこととか聞きたいんだけど、そんな空気じゃないな、これは……ブロックしようかな……」

とそんな悪態をついた僕は、数分後そんな自分を大いに恥じることになる。

何故なら。

妖怪DM39連発の後、最後に送られてきたメッセージにこそ、重大な情報が記されていたのだから。

「そうか……問題にすべきは座布団じゃなかったのか……」

ていうか、その情報いつから知ってたんだろうと思うが。もっと早く言えよとも思ったが。そもそもこの人は、いつから何をどこまで知ってこの件に関わっているのだろう？……まあいいや。何だかんだで今回も色々と助けてもらった。いつもながら、ぜいらむタソには感謝感謝である。

「な、なに言ってるんですか！縊鬼やっつけたのわたしじゃありませんか！」

バン！バン！バン！とツーサイドアップの幽霊巫女がテーブルを叩いていた。

「いつからいたんだお前は！勝手に入るなと何度言えば……」

慌てて画面を覗いたら、幸い『フッキン・アイドル』の放送は終了していた。さすが今年度の新人王戦で優勝しただけあって、僕には運も味方してくれているのだった。

「僕もろとも叩き斬る勢いだったじゃないか」

「あれは冗談に決まっているでしょう？」

月萌さんが朱色の瞳の三白眼になっていた。やっぱり本気で叩き斬るつもりだったんだな……。

「いやあ、まあ助けてもらって感謝してるよ、ありがとな」

一応、礼を言っておいた。何だかよく判らないけれど、僕はいつも色んな人に助けてもらっているな、とそれは素直にそう思う。色んな人に素直に騙されてる感もするんだけど、きっとそれは気のせいなんだろう。

それはそれとして、いきなり部屋に入ってくるのはもういい加減にして欲しい。

「今さら何を言ってるんですか？まんざら知らぬ仲でもあるまいし」

「いや、まあ確かに知人ではあるけれども」

知人ではあるが友人ではない。むしろ仇敵と言ってもいい。……ってこのやりとりはずっと前にもあったような気がするな。第2章あたりで。

それにしても、月萌はいったい何度この部屋に忍び込んだのだろうか？彼女は、いつの間にか見たこともないような怪しげなルータを設置してPC周辺機器のほとんどをワイヤレス化してしまっている。ケーブル類がほとんどなくなってすっきりしたのは確かなのだが、それはそれとして、何となく部屋の中に知らない荷物が増えた気がする。部屋の奥に変な柄のボストンバッグとかあるし。

「しかし懸さん、この部屋も手狭になってきましたねえ。……そろそろ新人王戦の賞金をぱーっと使って引っ越しませんか？」

……何言ってんだコイツ？

「懸さん」

カタカタカタ……と、恐らくはブログ記事を書き始めたのであろう月萌のキータッチの音が響く中、大橋分家の元メイドは

「月子は、三東先生の家のリフトに住んでるそうですよ？」

とのたまったのだが、聴こえないフリをした。フリじゃなくて本当に聴こえなかった。幽霊の言葉は全て幻聴なのだ。

そう言えば月萌は、長考寺に入れなくなった……って言ってたな。「帰る場所」がないのかもしれない。ここより他にいく所がないのかもしれない。……いや居候先を探してないで早く成仏しろよ、とも思うが。……待てよ？もしかしたら本格的に僕に取り憑く気なのかもしれないぞ。そもそもこいつ悪霊だし。

――ところで。実は、僕の懐には「禳精魅鬼符」という霊符が入っている。雑霊、妖怪、死霊などの訪れを断ち、身を守る効力があるのだという。

そう……つまりこれは月萌封じの霊符なのである。あの時、ぜいらむ氏(?)に土下座して定価の半額以下という格安で売ってもらっていたのだ。相変わらず僕は何事にも抜かりがない。

ちなみにぜいらむ氏(?)との会食シーンでこのことを語っていないのは月萌を欺くための一種の叙述トリックという奴で、彼女がこれ以上僕に取り憑く気ならこっちにも考えがあるということだ。……まあ、しばらくは様子見で。

いざとなったら住職かぜいらむタソに相談してみよう。正直、この幽霊少女は僕の手に残る。

頼れる人には頼りまろう。僕はもう自分一人では生きていけない。困ったら誰かに助けを求めよう。その代わりに自分が手を差し伸べて救える人がいたら、これからは目を背けずに手を差し伸べよう。

それが僕の樹原へのせめてもの罪滅ぼし……になるのかどうか判らないけれど。一人では乗り越えられない問題も、人と人のつながりがあれば乗り越えられるかもしれない。助からない生命も助かるかもしれない。救いようのない状況から救ってあげられるかもしれない。

ふと、住職のあの言葉を思い起こす。

あの時、住職は「人の絆は悪念の連鎖で繋がっている」と言ったのだった。また「無意識のうちにはびこる悪念が、奨励会員たちの周囲に死神を呼び寄せたのかもしれない」とも。

そうなのかもしれない。人が心の奥で一瞬たりとも悪念を抱かないなんて僕は断言できない。

だけど、それでも僕は人の善意を信じたいのだ。

そして僕は棋士だ。棋士だから、何より将棋が好きで、強い奴と力一杯、心一杯、体一杯、手当たり次第にぶつかり合いたいという、そんな将棋指しの本能を信じているのだ。

因縁生起——じゃなくて。

因縁生棋。

棋士はきっと将棋を指すことで繋がれるはずだと、そう思う。そう思うことにしよう。

そう思うことにしたので僕は早速ケータイを取り出して、世界一可愛い白鬼院りりち●様の待受画像をしっかりと舐めるように眺めてからアドレス帳を開き、そこに映ったある名前を選択してTELを入れた。今回の事件のもう一人の被害者であり当事者でもある人物。二人の奨励会員を巻き込んだことで、恐らくは僕以上に心に深い傷を負っているであろう一人の少女。……だからこそ、今の僕が手を差し伸べてあげるべき少女。

「蒲尾か？……ああその件は全部終わったよ。もう何も心配しなくていい。うん、終わった。全部解決」

僕の自己犠牲を厭わない崇高なる行為の結果、緋鬼を退散させたあの日、部屋を無茶苦茶にしたことを理事にこっぴどく叱られたりしながらの混乱の中、どさくさに紛れて女流名人のケー番を聞き出していたのだった。「妖怪のことも含めて色々後始末があるから後でまた連絡する」とか何とか言いながら。相変わらず僕には抜かりがない。この抜かりのなさがあれば、来季順位戦で僕が昇級するのは間違いないと、そう断言しても過言ではあるまい。「ものぐさ将棋観戦ブログ」の順位戦展望記事が今から楽しみだ。UPされたら、正座して拝読させていただこう。

「あのさ……ウチの……千場さんと一緒にやってる……研究会があるんだけど、入らない？」

今度は嘸まずに言えた！「男子三日会わざれば刮目して見よ」とはまさに僕のためにある言葉なのだった。どうだ？辻村！僕にも言えたぞ！……とこんなところで辻村充と張りあいながら、そして月萌の刺すような（というか射殺すような）朱色に染まった視線を浴びながら、僕は向日葵ちゃんからの

「……け、研究会ですかっ！？わ、わかにましたっ！よ、よのしくお願いしますっっ」

という言質を取ったのだった。いや言質というのは言いすぎだが。それにしても相変わらずの鼻声だ。風邪が治っていないのだろうか？暖めてあげたくなるなあ。特に膝のあたりを。

何故か心臓の動悸がおさまらない中、僕はこっそりと2年前に知ったツイッターまとめサイト「togetter・消えた大橋分家の墓の謎」にアクセスしていた。

「確かあのまとめの中に写真が載っていたような記憶が……」

大橋分家に関するツイートが続々と呟かれる中ひっそりと差し込まれた一つの呟き。生前の月萌とも因縁浅からぬ関係にある、江戸時代の天才棋士にして、月萌の「お方様」・大橋宗珉を死に追いやったとされる謎の人物・天野宗歩。その墓に刻まれた家紋は「丸に隅立て四つ目」なのだという。その紋は……蒲尾向日葵の、あのペンダントに刻まれていたものではなかったか？

さきほどもらったぜいらむタソからの最後のDMをモニタに表示する。もう一度そのメッセージを読み返してみる。その言葉の意味するところを噛みしめながら。

そしてモニタ越しに、ブログ記事の執筆に勤しむ月萌の表情を伺いながら。

そのDMには、こう書かれていた。

「ところで懸さん、これは知人の、とあるお寺の生臭坊主に聞いた話なのですが……蒲尾向日葵さんの母方の姓は……『天野』というらしいですよ」

(了)

イラスト：まるぺけ

---

この物語はフィクションです。実在の人物、寺院、経典、ツイッター、ネット将棋サイト等とは関係ありません。実在するツイッターさんがゲスト出演していますが、ツイッター上でそうしたやりとりがされたわけではなく、また作中でのキャラ描写とご本人は一切関係ありません。いずれもご本人の了承を得た上での単なる楽屋ネタであることを申し添えます。

「謝辞」

発表の機会をいただいた駒zone編集部の皆様へ。

本作へのゲスト出演にご快諾いただいた皆様へ。

そして年末のご多忙の最中にたくさんのイラストと貴重なご助言をいただいた、まるぺけ様へ。

その他、執筆にあたってご支援いただいた全ての皆様へ。

心より感謝申し上げます。

[参考文献]

霹靂火雷公「陰陽符聚」 <http://p.booklog.jp/book/42315>

大宮司朗（2011）「増補改訂 霊符全書」学研

九耀木秋佳（2004）「陰陽道呪占具四宝真書[第3版]」二見書房

京極夏彦/多田克己編（1997）「竹原春泉 絵本百物語 -桃山人夜話-」国書刊行会

村上 健司（2011）「怪しくゆかいな妖怪穴」毎日新聞社

水木しげる/村上健司（2005）「日本妖怪大事典」角川書店

清水らくは「五割一分」/「七割未満」 <http://rakuha.web.fc2.com/>

shogitygoo「ものぐさ将棋観戦ブログ集成」 <http://p.booklog.jp/book/50363>

yamajunn21「銀冠ショップ」 <http://www.upsold.com/dshop/mygoods/yamajunn21>

togetter「『ファンシーショップ・銀冠』へようこそ！」 <http://togetter.com/li/44902>

togetter「消えた大橋分家の墓の謎」 <http://togetter.com/li/38257>

「平成23年の地域における自殺の基礎資料」 <http://www8.cao.go.jp/jisatsutaisaku/toukei/index.html>

「社会実情データ図録」 <http://www2.ttcn.ne.jp/honkawa/index.html>

将棋短歌

団体戦隣に君がいるだけで角一枚分強くなるんだ  
盤上を睨む君の眼差しがその眼差しが僕は好きだ

跳馬

こぼれた想い無棋力な手ですくい月へとかえす坂の途中  
冬囲い余映の盤上外見やりあなたの気持ち知らず穴熊

どっともっと

艶やかな駒の音色の響くとき長い黒髪はらりと落ちる  
指先に駒の重力感じつつ開戦間近に触れる唇  
淡々と駒音響く千日手我が妹よまっすぐ育て

しむしむ

正式な名称でほぼ呼ばれない角をしずかにつかむ(かくこう)

松木秀

わたくしとあなたの角を交換し始まる日々を勝負と呼べり  
恋人の車は飛びて雲の線越ゆれば龍となりし春の日

こでまり

ちはやぶる神武以来の天才をひふみんと呼ぶ。テルミンに似る

tree\_frog\_o

遠き日の暮れて静まる教室に二十一手を読み切る攻防

Sean

穴熊は苦しかりけり金銀にとり囲まれてたまらなき夜  
五五歩のつき捨てありきかの年の名人戦の霞たなびく  
冥府にも名人戦はあるらむか細く鋭く米長邦雄  
荒野にも一本の道あらあらと三七銀は猟犬のごとし

加藤治郎

将棋宇宙・駒.zone合同企画

# BattleSanctuary

## 六人タッグ戦

人々け、  
聖域へ  
踏み込んだ。

ベテランチーム

赤松保之九段 古溝光雄八段 峰塚優紀子女流四冠

関東若手チーム

川崎周五段 辻村充四段 皆川許心女流1級

関西若手チーム

新井安浩五段 若竹宣四段 上園水仙女流初段

奨励会員チーム

磯田瑠宇徒三段 岩井臣三段 金本月子3級

総当たり	
リーグ戦	
3勝	5点
2勝	2点
1勝	1点

七割未満(六)

清水らくは

ジャガジャーン、というギターの声。アンコール三曲目、今度こそ最後の音だろう。

拍手の中、手を振りながら帰っていく三人。汗だくだった。

「ねえ、どうだった？ どうだった？」

隣で沖原が目をキラキラさせている。それも当然、ライブに誘ってきたのは沖原さんなのだ。

「良かったよ」

「でしょー」

今日の沖原さんは変な英語の描かれた白いシャツに襟が豹柄の白いカーディガン、赤いチェック柄のサスペンダー付き赤と黒が折り重なるイレギュラーヘムのスカート、ドット柄のファー付きブーツという出で立ちだった。かなり過激な格好に見えたけど、会場に来てみたら溶け込んでいた。

さきほどまで演奏していたのは、シカゴスプレーというスリーピースバンドだ。ギターボーカル・キーボード・ベースというあまり見たことのない構成だったけれど、三人のバランスが良く、聴いていてとても心地よかった。

ライブハウスを出ると、辺りは真っ暗、上空には丸っこい月が光っていた。

「遅くなったね。電車はどれ？」

「何言ってるの、だべるところまでがライブですよ」

「遅いと親心配しないの？」

「……しないよ」

沖原さんは少しうつむいた。

「帰らない日もあるし」

「不良なんだ」

「そう。不良品」

自分だって家族のもとへ帰るわけじゃない。これ以上この話はしないでおこうと思った。

「辻村はさ……棋士で決まりなんでしょ」

「何が」

「しょーらい」

「そりゃあ、ね」

「いいなー」

沖原は喋りながらも、一直線にコントロールコーヒーに向かっている。人の話を聞かないんじゃない、聞くことを省くタイプのような。

「みっちゃんは、意外としっかりしてるよね」

「意外とって」

「だって、いろいろと苦手そうなのに得意なもの見つけてるじゃん。私はわかんないからなー」  
店内に入った沖原は、何やら呪文のようなものを唱えている。注文するだけで疲れてしまうため、こういう店はできれば避けてきた。

「みっちゃんはどうするの？」

「あ……同じのを」

出てきたのはソフトクリームの下にコーヒーが添えられているような飲み物だった。いや、飲み物なのかこれ。

「あ、あそこ空いてる」

奥の席へと駆けていく沖原。俺はプレートを持ってその後を追う。

「……辻……村？」

「あ、皆川さん」

なんと、目の前に皆川さんがいた。今から出るところだったのだろう、バックを手にして席を立ったところだった。

「だれ、知り合い？」

そして、空になったカップを捨てた後、こちらに向かってくる男性がいた。小顔で妙な形の淵なしメガネをかけている。

「あ、あの……弟子」

「へー……あ、見たことあるな。辻村……君？」

「はい。失礼ですが僕も見たことあるような気が……」

「ああ、俺は薦原。囲碁棋士」

そうだ、薦原二段だ。雑誌の若手特集で見たような気がする。

「そうでしたか。改めまして、辻村充です」

「あれだ……高校生棋士なんだよね」

「でした。中退しました」

「あら」

俺たちが話している間、皆川さんはそわそわしているように見えた。こちらを見たり、奥の方を覗いてみたり。

「あ、すみません。人を待たせてるんで」

「ああ、呼び止めてごめんね」

「皆川さんもまた」

「え……あ、うん。またね」

店を出る二人。ひょっとして付き合ってるのかな。

「ごめんごめん」

「誰？」

「姉弟子……えーと、将棋の知り合いと、囲碁の人」

「ふうん。めっちゃにらまれた」

「え」

「彼女かと思っちゃった。綺麗だよ、あの人」

「まあね。化粧濃いけど」

「うん」

沖原は、皆川さんが立っていた場所をずっと見ている。そんなに気になる感じだったろうか。俺はといえば、この店の雰囲気慣れない。だいたい知り合いにあってしまうような店は俺にとっていい店ではない。

「さ、復習よ」

「え」

「ライブの感想を話し合おうの。とことん楽しまなきゃ」

「はあ」

ライブにも感想戦があるとは知らなかった。しばらくこの店から逃れることはできなさそうだ。

バトル・サンクチュアリ。

この名前を聞いて、将棋の団体戦だとわかる人がいるだろうか。

橘さんいわく、「12人参加だから思いついた」そうだが、まったく意味が分からない。

とにかく、『将棋宇宙』企画の大会が決まり、俺は川崎さん、皆川さんと一緒に「関東若手チーム」として出場することになった。

「いやあ、それにしてもすごいなあ」

目の前でうなっているのは若竹四段。関西若手チームの一人で、今日は対局で遠征してきていた。似合っているとは言えないツーブロックの髪を撫でながら、メンバー表を食い入るように見ている。

「たしかに、びっくりですねえ」

俺らが驚いているのは、ベテランチームのメンバーだった。大将は赤松九段。二冠を獲ったこともある強豪である。現在もB級一組上位で昇級争いを繰り広げている。そして、副将、古溝八段。いわゆる「定家世代」の一人で、何度もタイトル戦に登場している。毎年高勝率で、若手の壁になっている存在である。早指しとはいえ、この二人がいる時点でベテランチームが優勝の大本命だろう。

しかし最も驚いたのは、女性枠である。峰塚女流四冠。最強の人が出てきてしまった。絶対王者ともいえる存在であり、タイトルをほぼ独占しているため若手は対戦することすらできない。おそらくはそのことを踏まえて、橘さんが口説き落としたのだろう。

「水仙と女帝かあ」

水仙とは関西若手チーム代表の上園水仙女流初段、女帝とはもちろん峰塚さんのことだ。

「皆川さんもか……」

やはり、実力差は相当ある。そしてもう一人はつっこちゃん。彼女は一度ネット対局で皆川さんには勝っている。プロ四段を目指す、ということは峰塚さんに軽くあしらわれるわけにはいか

ないだろう。

チームとしては苦戦必至だが、外から見れば面白い対戦だともいえる。若手がどこまで女帝に通用するのか。

まあ、その前に自分のことを考えないといけない。古溝八段とそこにいる若竹四段、そして奨励会チームの岩井三段と対戦することになる。三人とも初対局であり、今から棋譜を研究しないといけない。

「そういえばさ、金本さんって一緒に研究会してるんでしょ」

「はい」

「皆川さんは姉弟子で」

「そうですね」

「ややこしない？」

「え」

「こう、女の子はなんやかんやなときがあるやんか」

「なんやかんや……」

皆川さんはともかく、つっこちゃんにはそういうややこしさはまったくない気がする。見た目や性格は本当に女の子らしいのだけれど、将棋に取り組む姿勢は完全に「四段」、もしくはその先をを目指したものだ。

……つまり、俺自身皆川さんがややこしいかもしれないことは否定できない。

「特に皆川さんは気が強そうやし」

「確かに」

「あれやで、メンタリティっっちゃうのが大事やからね。団体戦は特に」

「そうですねえ」

そんな気がしてきた。もちろん俺と川崎さんが頑張ることも大事だが、どうすれば皆川さんが気持ちよく指せるか、というところが鍵となるだろう。

しかし、改めて考えるとどうすればいいのかよくわからない。長い付き合いだけれど、皆川さんについてはよくわからない点も多いのだ。

「辻村君は女心についても要研究やな」

若竹先輩も詳しいようには見えませんが、という言葉は飲みこんだ。上下関係については研究済みなのである。

引力を感じた。

いつも歩かない場所。何気なく通り過ぎようと思っていたのだけど、立ち止まってしまった。背中を引っ張られるようにして、振り返る。

ガラス越しに、店の中が見えた。白と黒を基調にしたインテリアに、白と黒を基本とした服が陳列されている。色合いはとても地味なのに、目を惹かれるのはその形からだろうか。気が付くと俺はすでに、店の中に入っていた。

この感じは何だろう……そうだ、先日聴いたギターだ。落ち着いた中にもエッジが利いていて、内側からロックが響いてくるような気がする。

俺は、一着のピーコートを手にしていて。一列に並んだ飾りボタンが、果てしなくカッコいい。値段は……16万円。銀行から下ろせば、買える。

店を出て、ATMを探して走った。運命の出会いを感じながら。

いよいよ一回戦。関東若手チームは、奨励会チームとの対戦である。

負けるわけにはいかないのだが、楽な戦いとも言えない。三段といえばプロと遜色ない力を持っているからだ。

大将戦は、川崎対磯田。磯田三段は、新人戦でプロに何勝もしている。俺も三段リーグで負けたことがある。ちなみに名前が「瑠宇徒」と珍しいことから、将棋ファンからの認知度も高いようだ。

副将戦は、辻村対岩井。岩井三段は14歳。若い。公式戦ではまだ自分より若い人と対局していないので、貴重な体験になりそうだ。

女性枠は、皆川対金本。再戦である。前はネット対局だったので、対面しての勝負は初めてということになる。

ベテランチーム対関西若手チームの対局は別室ということになり、対局室には三つの盤が並べられた。いつもと大して変わらないのだけれど、これから団体戦をするんだ、という気分が高まってきた。

のだが。

「大丈夫かなあ」

川崎さんが心配そうに扉の方を見る。無言で控室を出て行った皆川さんは、すでに二十分ほど戻ってきていない。そういえば顔色があまり良くなかったし、挨拶の声も小さかった。体調が悪いのだろうか。

奨励会員たちはすでに全員対局室に入っているようだ。雑誌に棋譜が載るということ自体が初めてということで、三段二人は相当気合が入っているようだ。つっこちゃんはずっと通りちょっとおどおどしていたけれど。

「辻村！」

突如戻ってきた皆川さんは、なぜか俺の名を叫んだ。

「な、なに」

「あ、あのね、気にしてないし、気にしなくていいから！」

「え？」

「それだけ。さ、頑張ろ」

一人で勝手に納得して、何やら頷いているいる皆川さん。川崎さんもぽかんとしている。

とはいえ気にしている余裕もない。時間が近付いてきたので、三人で対局室へと向かう。

部屋に入ると、対局相手、記録係、そして記者の上石さんがすでに準備万端で待ち構えていた

。それぞれ一礼をして、上座に着く。

団体戦は大將戦だけ振り駒を行う。川崎さんの歩がつまみあげられて、シャカシャカと混ぜられる。歩が二枚。俺は後手、皆川さんは先手だ。

岩井三段はブレザー姿、中学校の制服だった。若さをアピールされているかのようだ。

「それでは、始めてください」

よろしく願います、と皆が頭を下げる。岩井君は少し息を吸って、ゆっくりと吐きながら初手を指した。川崎さんのところを見ると既に四手進んでいた。皆川さんは目をつぶったまままだ駒に手を触れていなかった。

俺のところは角換わりへ進んでいった。後手番の千日手狙い待機戦法で行く予定だったのだが、岩井君はすぐに気合よく仕掛けてくる。そうだった、彼は定跡を気にしないんだ。とらわれない、のとは少し違う。あんまり定跡を研究していないっぽいのだ。それでも若さは彼に抜群のひらめきを与える。無理っぽい仕掛けも、こちらが受け間違えれば破壊力のある攻めになる。

ただ、とても落ち着いていた。強い人とだけでなく、級位者と研究会をしていたことが役立っている。大振りを避けるすべを学んだのだ。

川崎さんのところは相振り飛車。普段指さない戦法だから、何か思うところがあったの事だろう。勝つのは当たり前、勝ち方が問題、ということかもしれない。

皆川さんはゴキゲン中飛車、つっこちゃんは玉頭位取りで対抗していた。昔よく指されていた形だけど、今はめっきり見なくなった。相手に捌かれたら終わりの危険な指し方なのだ。でも、彼女らしいともいえる。つっこちゃんに最新形は似合わない。

岩井君はどんどん攻めてくるけれど、どんどん苦しくなっていた。それは、かつての俺の姿でもあった。同年代では誰も受け止められない重いパンチも、プロにとっては普通のジャブなのだ。

決め手は自陣飛車だった。何もさせない。

「……負けました……」

一番早く終わった。内容自体は危なげなかったけれど、勝てるまではやはり緊張した。

「負けました」

連鎖反応のように、磯田三段も頭を下げた。悪い局面をずっと粘っていたようだが、岩井君の投了に気持ちが切れたのかもしれない。

チームの勝利は決まった。残るは女性卒。局面は、少し皆川さんがよさそうだった。馬を作られているものの、飛車交換に持ち込んで側面から攻めていけそう。玉頭戦に持ち込むのが居飛車側の狙いだが、飛車を渡した状態では反動もきつい。これは皆川さんやったか……と思ったのだが……

つっこちゃんの目は、じっと自陣の右側をとらえていた。いったいそこに何があるというのか、俺にはよくわからなかった。そして細い腕が左側に伸びて、馬をつまんだ。右下へと引っ張られてくる馬。

▲3九馬。

十秒ほど、凝視してしまった。一秒も考えなかった。今からまさに玉頭を攻めようとしてい

た馬。自玉の守りにも利いていた馬。それを、単騎遠い場所へと引っ込ませたのである。

皆川さんも目を丸くしていた。予想していなかったのは明らかだ。

そして、じっくりと考えてみると好手かもしれなかった。相手に飛車を打ちこませないようにし、自分はゆっくりと攻めていけばいい、そういう考え方なのだろう。いやでも、最善手だとは思えない。

皆川さんも必死で手を作ろうとするけれど、相手に歩を渡すのは危険でもあった。龍は作れたものの駒を取れない。そしてついにつっこちゃんに攻めの番が回ってきた。攻め方もセンスがいいし、三九馬は遠くまで利き相手の逃げ道を塞いでもいた。

全員が見守っていた。空気が、盤に吸い込まれていくようだった。

皆川さんも頑張った。だから、美しく終局していった。

「負けました」

下げた頭を、なかなか戻せないようだった。

実力差があるのだ。そうとしか言いようがなかった。

結果は2勝1敗、勝ち点2。優勝を目指すには苦しい出だしなのかもしれない。

ただ、そんなことよりも。勝負の世界は厳しい、ということを実感していた。多分もう、皆川さんはつっこちゃんに勝てない。

残酷な企画だ。けれどもこれを乗り越えたとき、皆川さんは何かを手に入れているかもしれない。

ちなみに隣は2-1でベテランチームの勝ちだったらしい。若竹四段が古溝八段に一発入れ、残り二つはベテランが力を見せた、ということのようだ。やはり女流四冠の壁は厚かったようだ。

次戦は、関西若手チームとの対戦。絶対に負けたくない相手だ。そして皆川さんの真価が問われる対局になるだろう。

「辻村……」

ひどい顔をしていた。悲しそうなことはもちろんだけれど、髪はぼさぼさ、目元にはあざができていた。

「けがはないの？」

「してるかも。でも、ここまでは歩いてこれた」

突然呼びされた。住宅地の公園で、彼女は待っていた。

「勘違いしないでよ、彼氏じゃないから。今は付き合っていないはずの人」

「そう」

「大事なところだから」

「女の子を殴るやつは関係なくくずだよ」

少しでも微笑んだものの、すぐに険しい顔に戻った。そういえば中学生の時、よくこんな顔をしていた気もする。

「なんでこうなっちゃうんだらうねー」

「わかってるんじゃない？」

「え」

「考えれば、わかるかもよ」

「そうかな」

会わなければ、殴られない。簡単なことだけれど、きっと簡単ではない。俺には恋愛のややこしいことはよくわからないけど、やっぱり、殴るような男に近付く必要なんて一つも思い浮かばない。

「みっちゃんはさ……ちょっと謎だった」

「え、なんのこと」

「きっと頭いいはずなのに、成績はたいしたことなくて、でもなんか頑張ってる感じがしてさ、今から思えば将棋だったんだけど」

「まあ、そうかな」

「うらやましいって言うか、うん……いいなって思った」

「そんなことないよ」

「いや、いいよ」

月は薄かった。星はいくつか見えるけれど、名前とかは知らない。沖原さんは、ブランコに腰を掛けた。遠い街灯の光が、片方の頬を照らす。

「あのさあ……」

「なに」

「みっちゃんは、やっぱりいろいろ勉強しなきゃいけないことあるわ」

「よくわかんない」

「いいよ。来てくれてすごい嬉しいから」

東京の夜は、思ったよりも暗いのだ。空が狭いからだろうか。

俺もブランコに座った。何か見たことがある光景だと思っていたのだけれど、それは、カーテンを付ける前の俺の部屋だった。何か怖くて、何かを得たくて、カーテンを付けなかった。

沖原さんのことをゆっくり知っていこう。そう思った。

マンションの玄関前に、人影が見えた。怪しい。だがそう思ったのも一瞬で、その背格好から、そのたたずまいから誰だかわかって腰を抜かしそうになった。定家五冠だ。

定家さんは俺を見つけると、にやり、と笑った。怖い笑みだ。

「辻村君、遅いじゃないか」

「定家さん、なんでこんなところに……」

「もちろん君を待っていたんですよ」

「僕を？」

「見させてもらったよ。君たちの棋譜を」

「え、それって……」

「とりあえず、家に入れてくれると嬉しいんだけど」

「え、は、はい……」

オートロックにナンバーを入力して、将棋界の宝を俺の住むマンションへと招き入れる。どうやってここを知ったのか気になるところだったが、定家さんが知りたいと言えば誰だって教えてしまうだろう。

「いいマンションですね。一人で住んでるんですか」

「はい」

「まだ高校生でしたよね」

「やめました」

「そうですか。それもまたいい。辻村君は学校に行くよりもいろいろな人と会う方が勉強になるタイプだと思いますよ。私はね、学校が楽しかった。当時将棋はあまり好きではなくてね。でもあなたは将棋が好きそうだし、行かなくてもいいでしょう。ちなみに昔川西さんという先輩がいたんだけど、学校に行くふりをして麻雀ばかりやっていたということで、先輩たちは武勇伝として語るんだけどそれで成績が上がったわけでもなく……」

ちーん。

「この階です」

「ほう」

定家さんは放っておくといつまでも喋り続けるので有名だった。誰かがギネスにも載るんじゃないかと言っていた。

「ここです。そこそこきれいにはしてありますのでどうぞ」

「まあ、君はそうでしょうねえ」

とはいえ、五冠を迎え入れるにふさわしい部屋なわけがない。とりあえず座椅子を引っ張り出し、腰掛けてもらった。

「ふうん」

「あの、お茶を入れますから……」

「いいですよ、私はお茶は飲まないの。コーヒーも牛乳も飲みませんよ」

そういえば定家さんは対局の時、外国のミネラルウォーターを大量に持参することで有名だった。そしてそんなものはわが家にあるはずもない。

「そんなに長居はしません。君にアドバイスを与えに来ただけですから」

「アドバイス？」

定家さんは俺に座るようにと合図したので、対面して腰掛けることになった。対局もしたことがないのでこのような状況になるとは。

「バトル・サンクチュアリ、君たちはまだあの企画の恐ろしさをわかっていないようなのでね。団体戦というのは、自分が勝ってもチームが負けることがある。自分が負けてもチームが勝って喜んでいることがある。自分の力ではどうしようもないところで勝負が動いていくというのは、恐怖じゃないですか」

「それは……」

「君達はただ対局に没頭しているつもりかもしれませんが、世間は団体の結果にも注目する。このままいけば皆川さんは勝てないでしょう。それが原因で優勝できなかったら……彼女本人だけでない、あなたと川崎君も傷を負うことになる」

言っていることは、まあ、そうなのかもしれない。ただ根本的に、なぜわざわざそんなことを言いに来たのかがわからない。

「それを伝えて……僕に、何を望んでいるんですか」

「つまらないじゃないですか、こんなところで若手がつまずいたら。君と川崎君は、いずれ私に挑戦できる器だ。でもここで余計な傷がつけば、それが五年遅れるかもしれない。少なくとも名人挑戦は、五年遅れるでしょうね」

「なんでそんなことが」

「いいかな、順位戦で二年に一回ずつ昇級する人がいますか？ 多くの人は一気に駆け上がっていく。一度つまずくと何年も足踏みする。勝率六割を超えている若手が一度も昇級しないままベテランになっていく時代です。彼らは一流になれる実力があつた。それなのにいろんなことがきっかけで取り残されてしまった。そういうのは、あんまり見たくないですよ」

目つきがあまりにも鋭かったので、俺はまるで射止められた獲物のように身動きが取れなくなった。

「いいですか、私は中学の時、全国大会に出れなかった。エリートとは縁遠かった。でも、その後は全てのチャンスをつかんだんです。君たちはエリートとして出発できたのに、多くのチャンスを逃して、一流になる途上で迷っているように見えます。私は同世代とやるのは飽きてきたんですが、待っても待っても誰もやってこない。だから特別に、アドバイスしに来たんですよ」

そこまで話すと名人は立ち上がった。

「あとはあなた次第です。では……五年以内にタイトル戦で会えるのを待っていますよ」

そのまま定家さんは帰ってしまった。残された俺は、しばらく金縛りにあつたままだった。

少女の追い越すスピード ――バトル・サンクチュアリー・一回戦――

上石三郎

棋士たちによる団体戦、バトル・サンクチュアリーが開幕した。

大ベテランから奨励会員まで、十二人のプロが今まで誰も経験したことのない聖域(サンクチュアリー)で戦う、というのがこの企画の売り文句である。

そのあたりは『将棋宇宙』で触れられていると思うので、『駒.zone』では注目の一局を中心に一回戦の結果を確認していきたい。

## ベテランチーム 2勝(2点) ― 1勝(1点)関西若手チーム

赤松九段○―●新井五段

古溝八段●―○若竹四段

峰塚女流四冠○―●上園女流初段

事実上の決勝戦とも言われたこの対戦は、ベテランが底力を見せた。

大将戦では赤松九段が終始新井五段を圧倒した。早指しでも力の差を見せつけたことになる。新井五段は目立つ活躍が多いもののムラがあり、勝率が伴わないことから「打点王」というありがたいかどうかよくわからないあだ名を付けられている。今回は打点も挙げられなかった。やはり常に一定以上の力を出せる安定感が必要となるだろう。

副将戦では若竹四段が意地を見せた。難しい局面が続いたが、きっちりと古溝玉を寄せきった。実績はそれほどでもないが、実力はずば抜けているとの噂であり、若竹四段の今後に期待である。また、古溝八段としては負け越すわけにはいかず、残り二戦は非常に緊張したものとなるに違いない。

女性枠は、峰塚女流四冠の強さばかりが目立った。局面的には上園女流初段が食いついていた場面もあった。しかし、常に四冠が冷静に対処し、最後は相手が自爆するのを見るばかりだった。上園さんは期待されている若手だが、今回ばかりは悔しさにまみれたことだろう。それを味わえるだけでも、この企画はいいものだったと言える。

こうしてベテランチームが勝ち点2、関西若手チームが勝ち点1となった。参照すれば勝ち点5なので、一気に逆転が可能であり、まだまだ今後どうなるかわからない。

## 関東若手チーム 2勝(2点) — 1勝(1点)奨励会チーム

川崎五段○—●磯田三段

辻村四段○—●岩井三段

皆川上流1級●—○金本3級

今回最も注目されたのが、奨励会チームではないだろうか。プロ相手にどこまで力が通用するのか。特に三段陣は、四段以上の力がありながら上がれない者が出ざるを得ない、と言われている。その真偽を図る意味でも画期的な対戦であったと言える。

大将戦は、川崎五段が丁寧な指し回しを続けた。磯田三段も鋭い手を放ったものの届かず。力の差がはっきりと出ていた将棋だった。将来タイトル挑戦も期待されているだけに、川崎五段はこんなところで負けるわけにはいかなかっただろう。

副将戦、辻村四段は序盤からリードを保った。目立つ将棋ではないが、常にきっちり読んでいるのがわかる。対する岩井三段は最年少三段で才能は誰もが認めるところだが、まだ粗さがあるように見受けられる。辻村四段に軽くいなされているように見えたが、これでは天才と呼ぶのはまだ早そうだ。

さて、今回は女性枠、皆川女流一級と金本3級の将棋に特に注目してみたい。

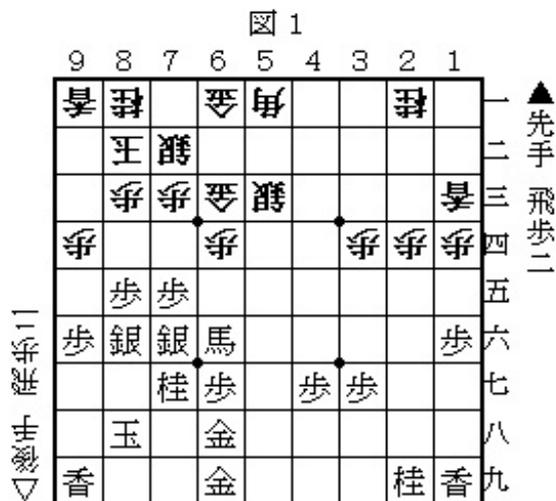
二人はネット棋戦の竹籠杯で対戦経験がある。その時は金本3級が勝ったが、その後皆川さんの成長も目を見張るものがあるとの評判だった。関東の若手女流棋士には他にも活躍する者も多かったが、将来への期待を込めての選出だったと思う。それに対し金本さんは関東奨励会所属唯一の女性であり、また経歴が謎のベールに包まれている。アマチュア大会には一切出場したことがなく、将棋関係者が全く知らない中入会。最新定跡に詳しい若手の中で、古典的な将棋を好んで指している。

また、皆川さんは辻村四段の姉弟子であり、辻村四段と金本さんは研究会仲間である。辻村四段は二人を共によく知る関係性であり、本局のキーマンであったとも言えるのではないか。

将棋は皆川さんのゴキゲン中飛車に、金本さんの玉頭位取りという戦型になった。ゴキゲンが流行り始めた頃によく見られた形であり、金本さんらしい戦型選択と言える。皆川さんの方は慣

れない形に少し面食らったのだろうか、序盤から小刻みに時間を使っていた。

馬を作られ少し抑え込まれ気味だった皆川さんだが、飛車交換に持ち込み勝負形になったかと思ったのが図1。



後手からは次に飛車を打ちこみ桂香を拾う手や、角をぶつける手がある。うまくさばいたかと思ったが、次の手がハイライトだった。図1の局面から金本さんが指したのは▲3九馬。(図2)



なんと玉頭と敵陣右辺をにらんでいた馬を、自陣深くまで引き上げたのである。指されてみるとなるほどという手で、これで後手からの飛車打ちを消している。それでも先手が特に有利になったという局面ではないが、皆川さんは方針を決めなければならず、かなり迷わされたことだろう。歩を使って打開を図るが、渡した歩は玉頭攻めに逆用されることとなった。

図2のような陣形は、研究の果てには現れないだろう。女性初の正会員という期待とともに、将来もっと上で活躍できるだけの才能を金本さんは持っているかもしれない。

他方皆川さんは金本さんに連敗となってしまった。このまま差を付けられては、女流棋界で活躍することにも支障が出るだろう。次戦は峰塚女流四冠と。勝つつもりで挑んでほしい。

一回戦を終え、ベテランチーム・関東若手チームが2点、関西若手チーム・奨励会チームが1点となった。どのチームが3勝して5点をもぎ取るか、それが次戦以降の見どころである。

～チェックメイト・ミステリー（？）～

フォーチュンテラー・奈々

「避暑地でチェックメイト」の巻

皐倫藍那（Sawatomo Aina）

## 1. 奈々、チェスの問題を出題される

「では、チェスなど如何でしょう？」

退屈だ……何かないのか？という黒麹町財閥令嬢・奈々の問いに、執事の逢坂航はそう答えた

。

ここはN県にある避暑地に建てられたやたらと無駄に豪華な別荘で、幼少の頃から現代医学では治療不可能と医者から見放された、ちょっと他人には言えないかなり意味不明な奇病を抱えている奈々は、季節を問わずよく静養に来るのだった。

8月初旬。今年中学生になったばかりの彼女の通う関東地方のとあるお嬢様学校は夏休みに入っている。とは言え、小学校の頃から学校を休みがちな奈々にとっては、今が夏休みかどうか等あまり関係がない。

「チェス？……とはまた地味なものを持ちだしてきたものだな」

食堂で3時のおやつを食しながら、お嬢様はそう言った。

「それでもありません。中々奥が深いですし頭脳スポーツとして世界中で人気です。お嬢様のような知的で瑞々しい女子中学生にピッタリのゲームかと」

”瑞々しい女子中学生”の辺りで逢坂の口の端から二股に割れた細長い舌がチロチロ覗いたような気配がして奈々は一瞬背中に寒気が走り、思わず執事を蹴り倒そうかという衝動に駆られたが、「淑女の品格……淑女の品格……」とブツブツ呟くことで何とか自重した。”蹴り倒そう”等という発想をしている時点で既に淑女失格ではあるのだが。

それはともかく、奈々は「チェス」の方に興味をそそられていた。実は小学5年生の時に父から手ほどきを受けて、しばらく凝っていたことがあるのだ。体調が悪化する等して、一年以上チェスからは離れているが、父がいつも「奈々はスジがいい。天才かもしれない！天才美少女チェスプレイヤーかもしれない！」という感じに過剰に誉めてくれていたことを今でも覚えている。奈々の父は「誉めまくって育てる」主義なのだった。でもアレはいくらなんでも誉めすぎだろう

。

「宜しければ私がお相手しましょうか？」

「いや……ちょ、ちょっと待て」

目付きが怪しい。瞳と書いてサディスティックと読む、というぐらいに視線が冷たい。コイツさては腕前に自信があるな？ボクをぼっこぼこにする気じゃ……。

何しろチェスを中断して一年以上が経過しており、ルールは憶えていても実戦のコツなど忘れ

てしまっている。奈々は改めて執事の様子を伺った。長身でスマートな体型。銀縁片眼鏡の奥に光る瞳は知性に溢れている。というかドSに見える。年齢は30代半ばだったと記憶している。妙に落ち着いた雰囲気執事を見ていると、奈々はとても勝てる気がしないのだった。

実際、逢坂はかなりの腕前でネットのチェス対局サイトのレーティングは軽く2000を超えている。いくら筋がいいとは言っても、まだまだ初心の域を出ていない奈々が勝てる道理がないのだが、財閥令嬢だけあって、使用人に負けてなるものかというしょうもないプライドがあるのだった。

「なるほど。ブランクが空きすぎたので、いきなりの実戦はキツイということですか……お嬢様も意外とヘタレですね。ではウォーミングアップを兼ねて、私からエンドゲームの問題をお出ししましょう」

「エンドゲームの問題？」

”ヘタレ”という単語が聴こえたが、それはきっとチェス用語の一種に違いないと思い込むことにして奈々は尋ねた。

「ええ、まあチェスのルールを用いて行う、終盤……特にキングをメイトする直前の局面を扱った問題です。一種のパズルとだけ思っただければ」

「ふむ……良い頭の体操になりそうだな」

「ええ、お嬢様の頭も少しは良くなるかもしれません」

「……何だと？」

「失礼、口が滑りました。お嬢様の肌のあまりの美しさに涎が出てしまって舌が滑って……」

「全っ然フォローになってないし、気持ち悪いわボケ！」

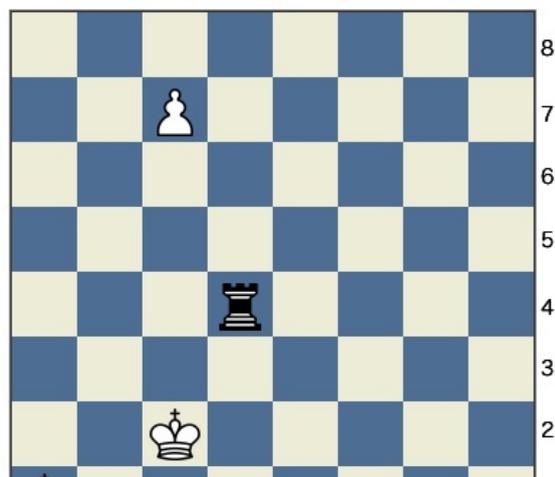
奈々に蹴り飛ばされた逢坂は、何故か嬉しそうな表情をしながら部屋を出ていき、しばらくして真鍮製のチェスセットを持ってきた。

執事はそれをテーブルの上に置き、それからチェスピースを並べた。

「こちらです。お嬢様、白番を持って勝ちに導いてください。ルールを知ってさえいれば、サルでも解ける問題です」

こいつ、いちいちカンに触る奴だなあ……と思いながら奈々が盤上に目をやると、そこにはこんな局面が出来上がっていた。

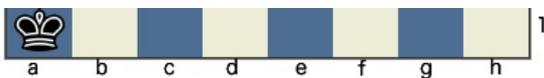
問題図



POSITION

白 : Kc2 Pc7

黒 : Ka1 Rd4



「逢坂」

「何でしょう？お嬢様」

「……ふっ、国際大会に出場した経験もある父上から直々に手ほどきを受けたこのボクをナメてもらっては困るな」

「お嬢様、私はまだお嬢様のおみ足を舐めたことはございませんが」

「誰が足の話をしとるかボケ！君なんか舐めさせる足はないっつーの！」

「何ですと！？……だ、誰になら舐めさせるおつもりなのですか、お嬢様！！」

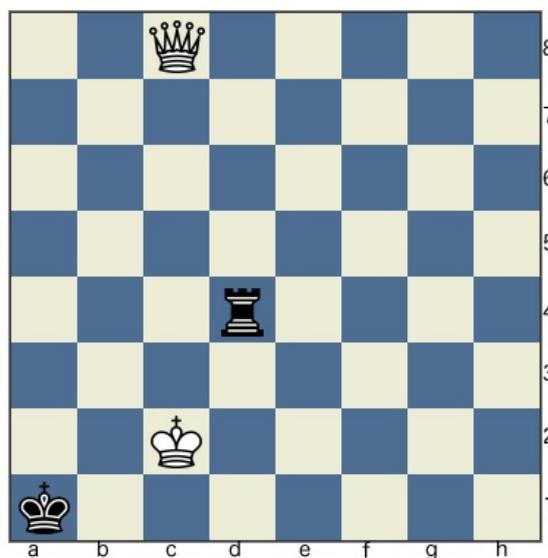
「そうじゃなくて！その話はおしまい！ボクのチェスの力を見くびるなって言ってんの！」

「ああ何だチェスの話でしたか。失礼しました。……ではこの問題を一目で？」

「当然だ。この局面、いきなりのチェックメイトはなさそうだが、盤上に白ポーンが残っている。このポーンをクイーンにすれば、クイーン対ルークの戦力差になる。つまり！」

奈々は白ポーンをつまみあげるとボードの脇に置き、代わりに白クイーンをつまみあげ、それをc8のマス目に置いた。

図2



1.c8=Q

白はクイーンを作った。次に 2.Qc3 とチェックをかけたから

一気にチェックメイトの狙いがある。（例：2...Ka2  
3.Qb2#）

「ポーンを進めてクイーンへのプロモーション。これで後は、目隠ししてても白の勝ちだな」

「目隠し？……おおっ！偶然ですが私のポケットにちょうど目隠しプレイに最適の手ぬぐいが」

「ボクを目隠ししてどうする！ていうか、君はいつもそんなものを持ち歩いているのか？」

「いつなんどき目隠しプレイを求められるか判りませんので」

「何がどういう状況になったら目隠しを求められると思うんだ？君は変態なのか？」

「そんな.....お嬢様が目隠しの話私に振るから.....」

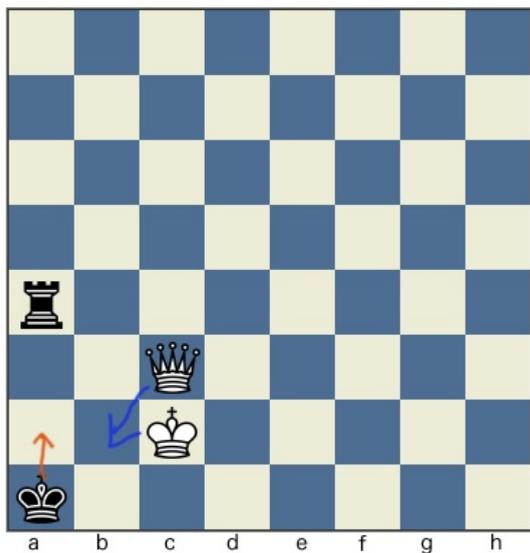
「ボクはチェスの話をしているんだ。1.c8=Q とクイーンを作れば簡単に勝てるって言ってんの！」

「ああ何だチェスの話でしたか。なるほど 1.c8=Q。その後は？」

「例えば、こう黒が 1...Ra4とすると、白は 2.Qc3(図3)。これがチェックになるから黒キングは 2...Ka2と逃げるしかなくて、次に白が 3.Qb2 と指してチェックメイトだな」

「なるほど.....」

図3



問題図から

1.c8=Q Ra4

2.Qc3

と進んだ局面。

c3のクイーンでa1の黒キングにチェックがかかっている。黒キングは Ka2 と逃げるしかないが、Q b 2 とクイーンを移動してチェックメイト。

「実にお見事です！お嬢様」

逢坂の口の端が皮肉な笑みをたたえて吊りあがっていた。それには気付かず鼻高々になっている奈々に向かって、逢坂は

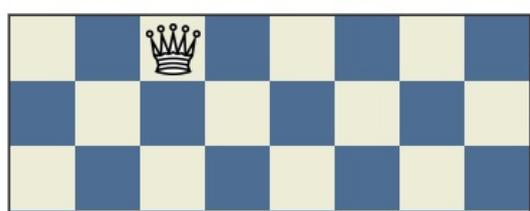
「ぷっw.....勝てるゲームをわざわざドローにしてしまわれるとは。お嬢様はかなり度の過ぎた平和主義者とお見受けしました」

「なにっ？」

何を言っているのだこの男は？黒はしっかりメイトされたじゃないか！

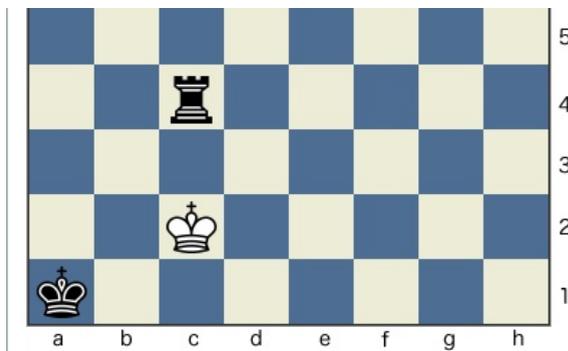
訝しがる奈々の目の前で、逢坂は左目に掛かった片眼鏡にそっと左手をやり、それから、しなやかな右手で黒ルークをつまみあげた。

図4



問題図から

1. c8=Q Rc4+ の局面。



5 黒はルークで白のキングにチェックを掛けた。しかしこの位置には白クイーンの効きがあるので、この黒ルークは次手で取られるのだが.....？

「チェックです、お嬢様」

「何をやっている。クイーンで取り返して白の楽勝じゃないか」

すかさず 2.Qxc4と、ルークを取り除く奈々だったが.....。

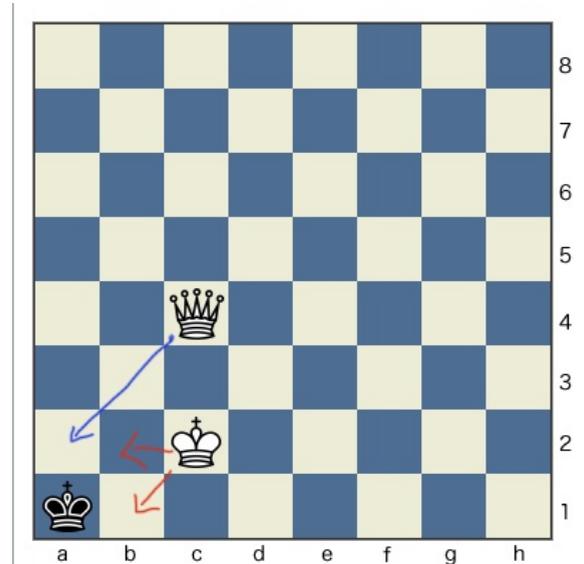
「お嬢様、ステールメイトです」

「.....へ？」

\* 図面はここで黒番。

- ・ 黒が動かせる駒はキングのみ
  - ・ ただし黒キングはどこに動いても白クイーンか白キングの効きに入って取られてしまう。
  - ・ チェスでは動いた先でチェックが掛る位置にキングを動かしてはならない。つまり「キングの自殺」はルール上認められていない。
- .....この状態を「ステールメイト」と言いドロー（引き分け）となってしまう。

図5



「引き分けなのか？.....引き分けじゃ.....ダメか.....」

「私はチェスのドローは決して嫌いではありませんが、しかし楽に勝てるゲームをステールメイトにされるのは好みませんね。好みと言えば、ステールメイトよりはアキバのメイドの方が好みます」

いやそんな情報知らないから。中1女子に向かってメイドカフェの話をするなよ。

「そうそう、そう言えば、メイドの人選をちょっと考え直した方がいいと、先日お父上に進言させて頂いたのですが」

「何のためにそんなことを！？」

「いや、”避暑地の萌え別荘”って新しいかなって.....」

「誰得なんだそれは！？」

観光客でも呼ぶ気なのか？ボクの居場所がなくなるじゃないか！

油断するとこの別荘が全て執事の趣味で覆い尽くされてしまいそうだ。奈々は心ひそかに、父の良識にあらん限りの声援を送るのだった。

「それはそれとして、お嬢様が自らの意思でこのゲームをどうしてもドローにしたい、とそうおっしゃるのでしたら、あえて 1.c8=Q を正解と申し上げても構いませんか？」

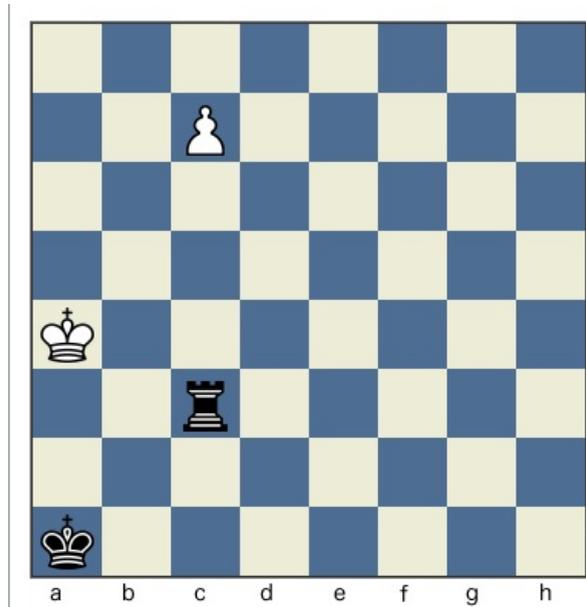
嫌味なヤローだなー。

奈々は改めて盤面を凝視するが、しかし他の手は浮かばない。自分の考えた手順に間違いがあるとは思えなかった。もしかして、いきなりポーンを使うのではなくて一旦、1.Kb3、と動かしたりするのだろうか？しかしそれは以下、 1...Rd3 (チェック) とされて、

2.Kc2 は ..Rd4 で元に戻るからレピティション (同一局面3回でドロー) になる。

2.Ka4 と上に上がると、今度は 2... Rc3 (ポーンが必ず取られるの図) とされて、次にどうやっても白ポーンが取られてしまう……。その局面は、白「キングのみ」vs 黒「キング&ルーク」になってさすがにこれは負けだろう。

### ポーンが必ず取られるの図



白は次に必ず c8=Q とクイーンを作れるが、xR8とすぐ取り返されてしまう。

ここからは例えば以下の手順で黒の勝ちになる。興味のある方は盤で並べてみてください。

3.c8=Q xRc8

4.Kb5 Kb2

5.Kb6 Kb3

6.Kb7 Rc1 (キングの当たりからルークを逃がす)

7.Kb8 Kb4

8.Kb7 Kb5

9.Kb8 Kb6 (白キングは動かせるスペースがほとんどない)

10.Ka8 Rh1 (ここでルークを端へ。次の狙いを白は受けることが出来ない)

11.Kb8 Rh8# 0-1 (チェックメイトで黒の勝ち)

「……これ、ホントに白が勝てるのか？」

「ぷっw……当たり前じゃないですか、お嬢様」

コイツ！笑いやがった！くそっ！馬鹿にして！

生まれてこの方お金で苦労したことなんか0.1秒もない超絶大富豪のお嬢様はイラつく余りにテーブルの下で貧乏ゆすりを始めていた。

「一つ確認しておきたいことがあるのだが……もしかして君はボクの事がキライなのか？」

「そんなまさか！」

執事は心底驚いたような表情をしてこういった。

「黒髪ロングのボクっ娘中学生をキレイな人間の男子など、この地球上には存在しませんよ、お嬢様！！」

何だか微妙に会話が成り立っていない気がする。というか、聞きたい事を聞いたら聞きたくない話を聞かされた気分だった。あと、ボクのことを「ボクっ娘」と呼びながら熱い視線を飛ばすのはやめろ。どうも最近、この執事の変態度が増してきたような気がするな。コイツ、ウチに来た当初からこんなキャラだったっけ？執事の仕事が忙しすぎておかしくなってしまったのだろうか？

再び盤上に視線を戻す奈々を見つめる執事の口の端からは、二股にわかれた細長い舌がチロチロ、チロチロ……と蠢いていた。次の一瞬、彼の瞳はまるで、あの足のない爬虫類の如く虹彩は赤く染まり、そして瞳孔は縦長の楕円形に変化していた……のだが、奈々はそれに気づいていない。

「正解を申しあげましょうか？」

「うるさい！うるさい！うるさい！……もうちょっと考えるからあっちへ行ってて！」

お嬢様はキレた。逢坂は「お嬢様がキレた……ハア……ハア……」という気持ち悪いセリフを呟きながら――そしてまたあの先端の割れた不気味な舌をチロチロさせながら――食堂から叩きだされたのだった。

2.奈々、ヒントをもらう。ただし占いで。

「さて……。さっぱりわからないな。……しかしギブアップなんかしたらあの変態執事に何を言われるか……。仕方ない、アレを使おう。インチキっぽいけど、これは正義のためなのだ」

とわけの判らないことを呟きながら、奈々は懐から小さな紙箱を取り出した。

手のひらに乗る程度のサイズである。蓋を開け彼女が中から取り出したもの――。

――それは、一そろいのタロット・カードだった。

指し手がわからないので占いで決めようという、まあ浅はかと言えば浅はかな考えである。

というか、チェスの問題を解こうという時に自分で考えることを放棄しているのだから、もしこれで正解が判ったりしたらやはりインチキかもしれない。ルール上、対局中のタロットが禁止されているかどうかは不明であるが……。

体調を崩して自宅やこの別荘で、財力に物を言わせた豪華絢爛な引き籠り生活をしている時の奈々の趣味の一つがこのタロットである。

家族の他は、執事その他使用人の一部にしか知らされていない、不可解な奇病に罹っている黒麴町家の令嬢は、いつも自分の健康や将来に不安を抱えながら生きていた。タロットを用いて行

う観想は、そんな彼女の不安を癒すとても大事な儀式なのである。奈々にとってこれは、決して吉凶を占うためのツールではない。抗うことの出来ない運命にどう向き合えばいいのか、そのためのアドバイスをくれるパートナーであり、優しく、時に厳しい家族であり、そしてまた自分の中の内なる精霊の声である。

迷ったらタロットで決断する。それが奈々の生き方だった。

「将来は、占い師になろうかな……」

と考えたことも何度もある。実際、親が超絶大富豪なので、なろうと思えば、というか店を構えて占い師の看板を出しただけなら今すぐでも出来そうだ。ただし客が付くかどうかは自分の腕次第。だから彼女は、彼女なりにずっと真剣に勉強しているのだった。「スジがいい」とあれだけ父に褒めそやされたチェスのことをずっと忘れていたほどに。ただ人を相手に鑑定をするためにはそれなりの人生経験を積んでいく必要があるかもしれない。

それはともかくとして、チェスの問題如きでタロットに頼る人生観というのもアレだが……そこはそれ、まだ中学一年生の13歳の少女である。しかもボクッ娘である。大目に見てやってほしい。

タロットカードは大アルカナ22枚と小アルカナ56枚、計78枚で1つのセットになっている。大アルカナだけを用いたり、あるいは78枚全てを用いたり、その他スプレッド（占うためにカードを場に展開する方法）の種類は数多くある。何を占うのか、どういう問題を扱おうとしているのかによって、それらを上手く使い分けるのが理想なのだが、全てを完璧にマスターしている人は、専門家であっても、そう多くはいないかもしれない。とにかく色々な方法論、解釈がありまたタロットカード自体にも様々な絵柄の種類がある。全てを網羅するのは中々困難だ。チェスと同じくらい……あるいはそれ以上に奥深いのかもしれなかった。

そんな中、大アルカナと小アルカナを分けてシャッフルし、大アルカナで大まかな現状認識をする、または現在起こっていることの問題点の洗い出しを行い、次いで小アルカナで具体的なイメージを得ようとするのが、奈々の一番好きなリーディング法だった。

「今日は、全部使ってワンオラクルで行くか……」

奈々は78枚のカードをシャッフルする。テーブルに深紅のタロット・クロスを広げ、目を瞑ってクロスの上でゆっくりと、精神を研ぎ澄ますように混ぜ合わせていく。チェスボードを思い浮かべつ、深く深く観想する。

「ボクが……見落としている手は……何だろう？」

カードを揃えカッティングし、再び揃えカードの天地を決定してから、今度はそれをクロスの上に扇形に広げた。眼を開けると、その中に……奈々には淡く光るカードが1枚見えるのだった。

——あのカードが、ボクを呼んでる。

奈々はカードを抜き取って自分の前にそっと置くと、それからゆっくりと表を向けた。

—— Strength。

「力」のカードの正位置だった。

そのカードには白い衣装を纏った女性が獰猛な獅子をやさしく手なずけている様子が描かれている。

日本語ではただ「力」のカードと呼ばれるが、それは決して対象と戦ってねじ伏せる「Power」の力ではないことを意味する。湧き上がる精神性、全てを包み込む包容力、忍耐力、根気、抑制……そういう力。ネガティブな情動や獣性の力ではなく、むしろそうした暴走しがちな力を御するためのエネルギー。その象徴が「Strength」なのである。

——ボクの内なる精霊は、このカードで何を伝えようとしているんだろう……。

奈々にとってタロットは内なる声との「対話」の場でもある。自分の精神が不安定な時、理不尽な怒りや妄念で心が満たされている時、その声は遠くへ行ってしまう。そうならないために、自分自身を見失わないために、あるいは……生まれながらの奇病を抱えた自分を嫌いになってしまわないために、奈々はタロットを友としているのだった。もはやもはや心の拠り所であり、あるいはもう、これに「すがっている」とすら言えるのかもしれない。

「白は、ポーンをクイーンにするという当たり前の手を指しただけなのに、その力のせいでステールメイトになって勝てなかったんだよね……」

チェス盤上における最強の力の行使……それでは決して事態を解決できないことの暗示なのだろうか。このカードの女性がそうしているように……力を抑えなくてはいけない？ポーンが持つ能力の一つ、クイーンへのプロモーション。その最強の潜在能力を正しく導いてあげるには、どうしたらいいのだろうか？

カードを見つめ、再び目を閉じて観想に入る。そして奈々は、今一度プロモーションのルールを反芻した。

「ポーンは、再後段に進んだ時、キングとポーン以外のピースに昇格する——んだっただ、そう言えば」

奈々に天啓が降りた。眼を開き、呟く。

「……そうか。ボクは力を正しく使えていなかったのか……」

### 3. 奈々、解決する

次の朝。

「如何でしたかお嬢様？」

逢坂はとても気分が良かった。彼は、朝のお嬢様が大好きなのだ。奈々には内緒にしているが、というかバレたら解雇ものの不祥事なのだが、不祥事というかほとんど犯罪まがいの行為で

もあるのだが、特に起きる直前の様子が大好きで、明け方こっそり部屋に忍び込んで寝顔を覗きこんだこと、その回数は10や20どころではない。毎日かもしれない。執事としては有能ではあるのだが、実に気持ち悪い奴で、これから執事を雇おうと考えている人は、こういう男だけは選んではいけない。

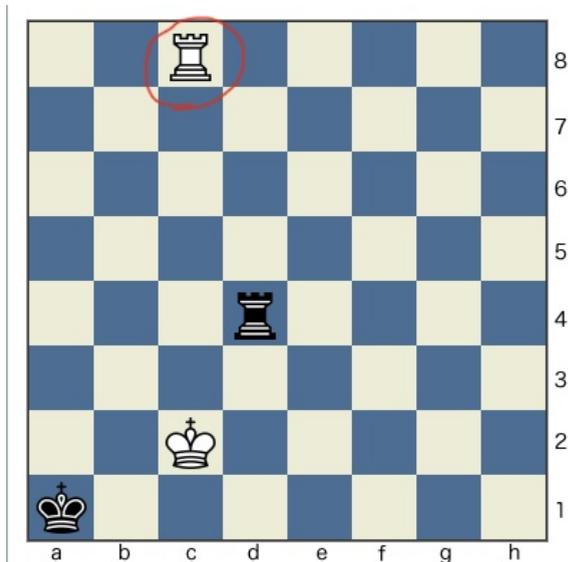
「如何とは？」

「昨日のチェスの問題です。あれから随分お考えになられていたようですが……」

——どうせ出来なかったんだろう、アホだから、とか思っているなこの野郎。

執事の表情を伺い内心イラッとしながらも、奈々は無言のままテーブルに置かれたチェスボードを指し示した。

(図6)



\*白が、問題図から1.c8=R と指した局面。

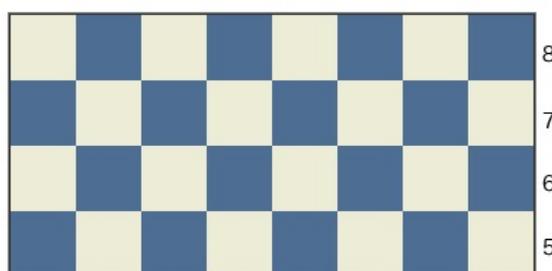
「ポーンをクイーンにするのではなく、あえて1つ弱いルークへのアンダープロモーション。まさか君がそんなシャレた問題を作るとは夢にも思わず、うっかり油断した」

タロットを使ってヒントをもらったことを内緒にしているが、実のところ彼女には後ろめたい気持ちなど微塵もないのだった。あれは……タロットは、彼女の分身なのだから。

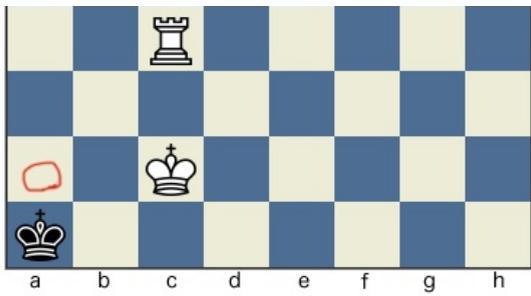
「……では、昨日と同じくここで黒が1...Rc4 とすると……」

「白が2.xRc4 と取れば、今度はステールメイトにはならないだろう？」

図7



\*ルークとクイーンの力の差で、黒キングにはまだ逃げるスペースがあるため  
ステールメイトにならない。



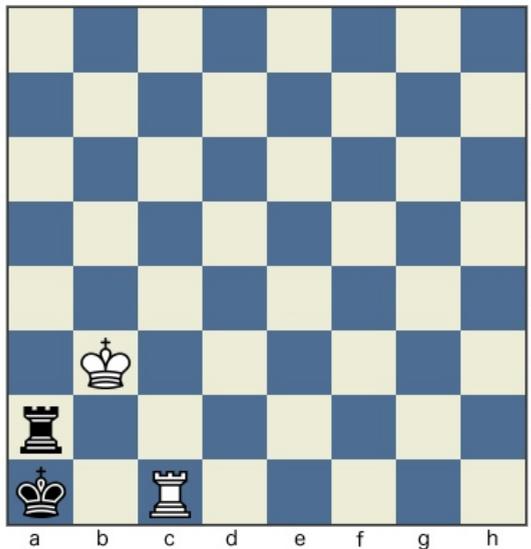
4 以下

2. ...Ka2 (唯一、黒キングを動かせる場所)

3.Ra4# 1-0 (チェックメイトで白の勝ち)

「1...Ra4なら 2.Kb3 Ra2(黒ルークが逃げる手。ここ以外のどこへ動いても、結果はほとんど同じになる) Rc1でチェックメイト(図8)。黒ルークを動かさない手、例えばKb1なら Ka4と黒ルークを取って(図9)白の勝ちだ」

図8



問題図から

1.Rc8=R Ra4

2.Kb3 Ra2

3.Rc8# でチェックメイトとなった局面

=====

問題図から

1.c8=R Ra4

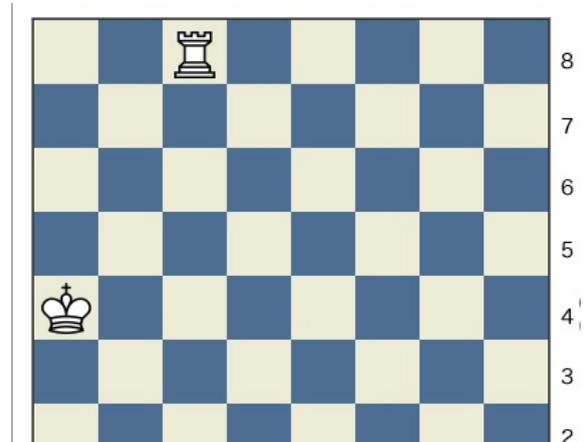
2.Kb3 Kb1

3.Ka4

となって白がルークを取った局面。

ここからは

図9



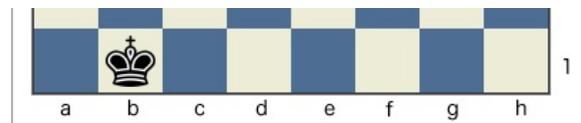
3. ..Kb2

4.Kb4 Ka2

5.Kc3 Ka1

6.Kc2 Ka2

7.Ra8# 1-0 (チェックメイトで白の勝ち)



「お見事です、お嬢様」

「ふっ、当然だ。次はもう少し骨のある問題を持って来るのだな」

「確かに私は美少女の鎖骨が大好きですが、しかもネットで『美少女 鎖骨』の検索をしてしまうくらいの鎖骨フェチですが、しかしお嬢様、鎖骨を持ってこいと言われても、そう簡単に生贄の美少女は見つかりません」

「誰が鎖骨の話をしとるか！」

怒鳴りながら、自分がノースリーブのサマードレスを着ていることに気づいて反射的に肩に手をやる奈々だった。

そう言えば、メイドたちが隙あらばボクにノースリーブの衣装を着せたがるのは、コイツの差し金だったのか！？ていうか、ノースリーブ以外の衣装ってこの別荘に置いてあるのか？

「ボクの鎖骨をジロジロ見るな、このド変態！……もう少しレベルの高い問題を用意してみろと言ってるんだ！」

「つまり問題のレベルが上がるに従ってお嬢様の鎖骨もどんどん露わになっていくと……」

「だから鎖骨の話はしてねえーっつーの！」

あと、これ以上露わに出来るかバカ！ 駒.zoneに掲載出来なくなるわ！

「承知いたしました、お嬢様。……ではまた後日、今度はもっと興味深い問題をご用意させていただきますよ……」

朝の紅茶を奈々のカップに注いだ後、変態執事・逢坂航は踵を返して食堂の出口へと向かって行った。

その時――。

黒麴町家のお嬢様が思いっきり”あかんべー”をしているその視線の先で。

逢坂航の双眸は、まるで蛇のような縦に細長い瞳孔へと変化し、虹彩は赤く染まり、そして吊り

あがった口の端からは、先端の裂けた細長い紐のようなどす黒い不気味な舌が、チロチロ、チロチロ

と蠢いていた……。

fin...

## 月子のチェス日記

---

皆様、お久しぶりです。月子です。

チェスを始めて一年以上たちますが、実は……まだ棋譜をうまく読めません。

情けないことですが……

将棋をする人にとってチェスはなじみやすいようできて、将棋のくせが足を引っ張ることもあるようです。

ルールを覚えるうえでも、表記の違いなどで戸惑います。

そこで今回は皆様にチェスを楽しんでもらうため、「将棋ファンにわかりやすいチェス入門」に挑戦してみようかな……と、思います。

まずは、下の図を見てください。

【図1】

8	飛	子	馬	○	王	馬	子	飛
7	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩	歩
6								
5								
4								
3								
2	ポ	ポ	ポ	ポ	ポ	ポ	ポ	ポ
1	飛	ナ	角	Q	玉	角	ナ	飛
	a	b	c	d	e	f	g	h

これは、将棋風にチェスの初期配置を示したものです。なんとなくイメージできませんか？

チェスと将棋の大きな違いは以下のようなようです。

- 1 マス目が8×8の64マス。
- 2 取った駒が使えない。
- 3 金銀に相当する駒がない。

というわけで、せまくて駒が少なくて守るのも難しい、そういうところに最初戸惑うのではないのでしょうか。

まずは、駒について説明してみたいと思います。

図1において、将棋にない駒が何種類かありますね。まずはこれらの駒の動きを把握することが大事です。

**P**=ポーン 将棋では歩に相当します。動きは前に一つですが、最初だけは前に二つも動けます。また、ポーンは斜め前の駒を取ることができます。私はこれに慣れなくてよく駒を只取りされました。また、8段目に到達すると好きな駒に成ることができます。普通はクイーンですが、場合によっては別の駒に成ることもあるようです。（ひとつ前の小説をチェック！）

**N**=ナイト いわゆる八方桂と呼ばれる駒です。横も後ろも桂馬の動きで動けます。チェスの場合ポーンが二段目なので、初手からナイトを動かすことができます。この駒をうまく使えるようになると上達できそうですね。

**Q**=クイーン 飛車と角の両方の動きができる最強の駒です。攻めの中心となります。クイーンがなくなると突如として詰ます（チェックメイトする）のが難しくなります。

また、飛車はルーク、角はビショップと呼ばれていて、動き方は同じです。あと、玉はキングです。

将棋の場合飛車と角は価値がほぼ同じですが、チェスの場合はかなり飛(ルーク)の方が重要視されています。これにはいくつか理由が考えられますが、一番大きな理由は「持ち駒での間駒がない」ことだと思います。チェスは持ち駒がないので、王手(チェック)に対しては逃げるか駒を移動させるしかありません。ただしポーンは二段目から前に出ているので、飛(ルーク)による横からのチェックに役に立たない場合が多いのです。ルークによる攻めは受けにくいのです。

それに対して角(ビショップ)の攻めは斜めなので、ポーンやナイトで防げることが多いです。また、角(ビショップ)は斜め移動なので、半分のマスには絶対に移動することができません。角(ビショップ)の王手(チェック)に対して縦か横にキングが逃げれば、そのビショップではどう動いても玉に対して王手(チェック)することができないのです。

そんなわけで.....将棋をしている人ならここまでだけでも何となく方針が見えてきたのではないのでしょうか？ では、始める前に細かいルールについても確認しておきましょう。

・移動間違いや王手放置はやり直し 動けないところに駒を動かしたり、王手を見逃して受けなかったりしたら将棋だと反則負けですね。でも、チェスだとやり直します。また、王手(チェック)のかかる位置に玉を動かしてもいけません。まあ、将棋でもあまりいいことではありませんが.....

・いくつかの条件下では引き分け(ドロウ)となります。まず、片方が玉(キング)だけになって、動く場所がなくなってしまった場合。将棋だと持ち駒があるのでなかなかそういう状況は起こりませんが、チェスだとたまに起こります。この場合は「スティルメイト」と言って引き分けになります。

また、同じ局面が三回出現した時、指摘すると引き分けになります。チェスの場合王手(チェック)による繰り返しも反則となりません。

あと、50手の間ポーンが動かず、たがいに取った駒がない場合、指摘すると引き分けになります。これは経験がないのでどういうパターンで出現するかはよくわかりません。

さらに、戦力的にお互いがチェックメイト困難な場合、同意の上で引き分けにすることができます。

チェスは将棋の千日手や持将棋よりもドロウが多い競技だと言えます。(N瀬先生を除く)

・重要かつややこしいのがキャスリングです。

【図2】

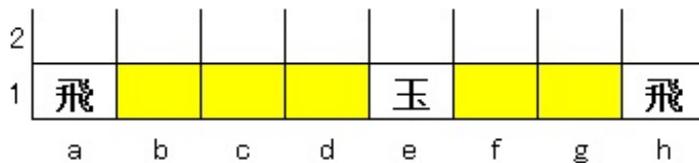


図2のように玉(キング)と飛(ルーク)の間に駒がない場合、一度に玉(キング)と飛(ルーク)を動かすことができます。この時、玉(キング)と飛(ルーク)は一度も動かしていないこと、また王手(チェック)がかかっていないこと、玉が通るマスに敵の駒が利いていないことが条件となります。

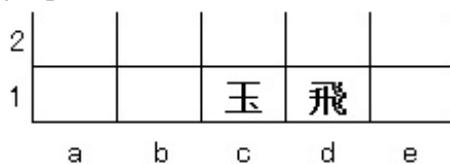
図2から右側(クイーンのいない側)でキャスリングすると、図3のようになります。

【図3】



また図3から左側(クイーンのいない側)にキャスリングすると図4のようになります。

【図4】



キャスリングすることにより玉(キング)の安全度が上がることも多く、飛(ルーク)を中央付近の戦いに参加させることができるようになります。どこでどちらにキャスリングするかというのが、将棋で言うところの「囲い方」に相当するものだと思います。

さて、だいたい想像がついてきましたか？ まだもう少し細かいルールもあるのですが、おおむねここまで理解できれば、観戦して楽しむこともできるのではないのでしょうか。私も細かいと

ころはよく忘れまし.....

初心者心得としては、1.ポーンを前に進める 2.ナイトと角（ビショップ）を動かして、攻めの準備をすると共にキャスリングの準備をする。 3.キャスリングをして玉（キング）を中央からどかす 4.クイーンを効率よく働かせることを意識する などが大事だと思います。

また機会あれば、続きを書きたいと思います。

1.

冬というのは全く救いのない季節だ。呼吸をするだけで喉が痛くなり、体がこわばって思うように動かず、小指を角にぶつくと猛烈に痛い。

そして冬の雨というのは更にひどい。

着ているダウン・ジャケットは水分を吸って重たくなり、体の芯から体温を奪い取られていく。今こうして大学からの帰り道を歩いているだけでも疲労の色を隠せず、心はつまらない哀しみに囚われて沈み込んだまま抜け出せない……はずなのだが。

「だから先輩、聞いてますー？タカハシ先輩？」

苦悶の表情を気にもとめず軽々しく話しかけてくる女は、立河ミズキ。オレの後輩だ。

「聞ってるよ！だから天ぷらは茄子が一番だって言ってんじゃない！てか、お前の家、あっちじゃなかったの？」

「えー、でも、この間はキスが一番だって言ってたじゃないですかー」

ミズキは今年アニメ同好会に入ってきた一年生で、自称ゆるふわ系女子である。

アニメ同好会はほとんどが男子部員なので、女子の存在はそもそも珍しい。だから女子部員というだけで必然的に人気が集まるし、まあ客観的に見てもかわいい部類に入ると思う。そんなミズキがどうしてオレなんかに興味を持ったのか、全く謎なのだが…。

「キスも好きだけどさ。高いじゃん。キスのてんぷら。スーパーに売ってないし」

「えー、私売ってあるお店知ってますよー。衣がサクサクの」

「サクサク…」

キスの天ぷらの食感を想像すると、ゴクッと唾を飲み込まずにはいられない。あれは人を過ちへと導きかねない食物だ。恐ろしい。

「ここからそう遠くないところですけど。今から行きます？」

意味有りげな笑みを浮かべて聞いてきたが、

「行かない」とオレは付け入るスキを与えないように断った。まったく油断ならない。

「えー？キス、好きなんでしょ？」

「好きだけど行かない」

ミズキのいたずらっぽい上目遣いに「まあ、そこまで言うなら」と思わず言っしまいそうになるが、容易に屈してはいけない。ような気がする。

「好きなのに？」

「……」

無言で歩くペースを上げる。

「タカハシ先輩って普段夜ご飯とかどうしてるんですか？」

「夜ご飯？」

ミズキが攻撃の矛先を変えてきたので、オレは少し慌てた。

「夜ご飯なんて適当だよ、だいたい」

「適当って具体的にどんなのですか」

別に見栄を張っても仕方ないと思うけれど、半額になったスーパーの弁当でほぼ毎日生活しているという実態はなかなか明かしづらい。

「どうしてそんなこと聞くの？キミには関係無いでしょ」

思わず突き放した言い方になってしまう。

「……」

無言になるミズキを見て少し悪かったかなと思いかけるが、いや、このくらいで丁度いいと思いつく。

「ふええ、そんなに怒らなくていいのに…」

ミズキは手で顔を覆い、泣く仕草をする。

「泣き真似してんじゃねえよ」

「うう、先輩、ひどいです。うう…」

なかなか泣き真似をやめないミズキ。本当に泣いてたらどうしようという不安が一瞬よぎる。

「ほら、なんか俺が泣かせたみたいに思われそうだから早く泣き止んで」

人通りは多くないが、チラチラと見られている気がする。

「ぐすっ。大丈夫です。先輩がウチに来てくれたら」

顔から手を離し、ニッコリと笑うミズキをみてオレは少し安心する。

「行かねえつつたろ」

「ふええ」

「二度目は面白くない」

「ちっ」

「ねえ今ちって言った？ちって言ったよね？」

「そんなこと言ってないですう。聞き間違いですう」

「はいはい、わかったから、もう帰れ。お前んち、あっちだろ」

「そこまで嫌われているなら仕方ないですね…」

「いや、別に嫌ってるわけじゃねーけどさ、」

「あーあ、少しくらい相手してくれてもいいのに」

言うとミズキは立ち止まり、手でコートの裾を払った。

帰られたら帰られたでもったいないような…気はしないけどな。

なぜだかよく懐いてくれているし、ミズキみたいな彼女がいれば…と思うこともないではない。

ただ、それはできないことなのだ。進んではいけない分岐なのだ。

なぜなら、ミズキにはちゃんと彼氏がいるのである。

あれは一。そう、2ヶ月ほど前のコンパの時だったか。オレとミズキは偶然隣の席になって、自分を含めた上級生数人と一年生のミズキで卓を囲む形になった。

同好会のコンパで新入生に振る話題といえばだいたい相場は決まっている。コイバナである。

「ミズキちゃんさあ、どんなタイプが好み？」

部内随一のモテ男と評判のサトウが話しかける。

「えーっとお、年上の人で、頼りになる人っていうかー。大人っぽい人がイイいですかねー」

「ほほう。何歳くらい上までオーケーなのですか？」

珍しく酒に酔ったナカムラが続けて聞く。

「ええ？年齢ですかー？う〜ん。だいたい父親の年齢までっていうかー、ハゲてたらNG、的な？」

「ふーん。じゃあ、ハゲてなければOKなの？」

これはオレの言ったセリフだが、思い出してみるとやや間の抜けた質問だ。

「あっはは！そうかもしれませぬねー」

「ミズキちゃん、高校生の時は彼氏とかいなかったの？」

この発言もオレだ。

「え？あ、てゆうかー、今付き合ってる人は高校から付き合ってた人なんでー」

「え？じゃあ今彼氏いんの？」

ミズキは少し躊躇するような表情を見せたが、悪びれる様子もなく言った。

「いますよー。あっは。もしかしてガッカリさせちゃいました？えへへ、すみませんー」

「いや、別に…」

このときの出来事がささやかなトラウマになって以来、自分からミズキに話しかけたことはない。ないのだが…。

たぶん、からかわれているのだろう。適当な暇つぶしの相手にちょうどいいと思われたのかもしれない。こいつなら、少々ちょっかいを出してもやけどする心配がないと。

今きたばかりの道を引き返していくミズキの後ろ姿を眺めながら、オレは考える。なんだかちょっともったいない、というか、ちぐはぐなことをしている気がする。いろいろと。そう、いろいろと。

2.

古いエアコンがごうごうと音を立てる部室に15、6人の部員がテーブルを囲んでひしめきあっている。

アニメ同好会の定例部会。

基本的に自由奔放な活動スタンスをとっているアニメ同好会において、唯一参加が義務付けられている集まりである。

「次に、諸君から意見を募っていた模擬店の件だがー」

司会を務めるのは我らがアニメ同好会の部長、オオヤマである。

この男、一応れっきとした学生なのだが、その外見は明らかに大学生のそれではない。

ゴツイ黒縁メガネに着流し姿、恰幅の良い体型、腕を組んで部長専用アームチェアに座る様はカタギの者とは思えぬ風格を漂わせている。

実際オオヤマの年齢がいくつなのか、何度となく部員たちの間で話題になっているのだが真実を知るものは誰もいない。

そして服装や立ち居振る舞いもさることながら、頭頂部のハ○が彼の年齢を考察する上で避けて通れない問題となっていた。

というか、オレも入部したばかりの頃は顧問の先生か何かだと思い込んでいた。

「今日の部会で結論を出そうと思う。諸君、よろしいかな？」

その言葉は重々しく、いかにも老成している。

「現在までにメイド喫茶、フィギュア展示会、コスプレ撮影会...等々が候補に上がっている。この中から、多数決で選ぼうと思う。ミズキくん、意見の集計を頼んでもいいかな？」

「は～い、部長」

「ではさっそく始めよう。順番に意見を言ってくれ」

かくして、アニメ研究会の命運を決する投票が開始されたのであった。

この投票の結果が、あのような悲劇を生むことになるかと一体誰が想像したであろうか…

その場にいた15人の部員全員の投票が終わり、ミズキが集計結果を発表した。

「メイド喫茶9票、フィギュア展示会2票、コスプレ撮影会4票です」

結果を聞いた部員たちから「おおっ」と軽いざわめきが起こる。

「うむ。では、今年の模擬店は、メイド喫茶に決まりだな。異議のある者はいるか？」

「あの一、部長、メイドカフェをやる部活って他にもありそうじゃないですか？」

とサトウが口を開いた。

「確か去年、メイド喫茶やった部活けっこうありましたよ」と1年生のスズキが付け足す。彼らはコスプレ撮影会を主張していた少数派だ。

「ふむ。たしかに普通のメイドカフェでは目立たないかもしれんな…」とオオヤマ。

「しかもさ、俺らの部活女子ほとんどいないじゃん。肝心のメイドはどうすんの？」

4年生の御意見番的存在、アベが口を挟んだ。

「現役的女子部員はシミズ先輩とミズキちゃんしかいないですね」とオレ。

「さすがにメイドが二人だけでは厳しいでありますか…」とナカムラ。

「厳しいかもな。メイドカフェのコンセプトを保ちつつ、男子部員を活用する方法があればいいんだが」とアベ。

「最近はやりの猫カフェとか…」

「どっから猫連れてくんだよ。それに保健所の許可が降りない」

「外部からメイドさんを雇うとか」

「だからどっから連れてくるんだよ？」

「いっそビジュアル系執事カフェにしちゃえば」

「お前、鏡見たことある？」

雑多な意見が出され、議論の雲行きが怪しくなってきたその時。

「男子が女装して『男の娘カフェ』にするってというのはどうっすか？」とサトウが言った。

「おお!」、「それだ!」と一部の部員達から歓声上がる。

同時に「ええっ?」と疑問を呈する声も聞かれる。

賛成、反対と意見がはっきり二分されたかに思えたが、やがて「仕方ない」、「他にやりようがない」という声が大勢を占め始めた。

「.....どうやら決まったようだな」と静かに議論に耳を傾けていたオオヤマが言った。

部員たちから再び歓声が上がった。

「おいおい、マジかよ」

オレはつぶやいた。

## <幕間1>

ある休日の午後。

オレとナカムラは、とある用事でアニメ同好会の部長オオヤマの自宅に招かれていた。

大学から3駅分ほど離れた住宅街にあるオオヤマの自宅は想像を絶する豪華さの日本家屋で、オレとナカムラはまずそのことに驚かされた。

歴史を感じさせる木造二階建ての母屋に、それを取り囲むように広がる緑豊かな日本庭園。格子戸を開けて中に入ると、まずオレの部屋より大きいんじゃないかと思えるほど立派な玄関があり、そこから板張りの廊下が奥へと続いている。

オレは日本の伝統家屋には全然詳しくないが、この家がおそらく途方も無い価値を持つ邸宅であろうことは容易に想像できた。

「部長、こんなところに住んでたんですか!」

「ひょっとして、資産家の息子だったとか?」

オレとナカムラが興奮気味に疑問をぶつけると、

「株とFXで一山あててな...。まあ、ポロ屋だが」とオオヤマはさして誇らしげな風でもなく淡々と説明した。

「ちょうどコレクションの置き場所に困っていた頃にな。国税庁の差し押さえ物件をヤ○オクでみつけたのよ」

「差し押さえ物件ってヤ○オクで買えるんですか？」

確かに築年数はずいぶん経っていきそうだが、半端な額ではないだろう。

「それに差し押さえられた民家って、ちょっと怖すぎる気が…」

「そうか？俺はそういう細かいことは気にしない主義だから」とオオヤマは平然と云ってのけた。

オレとナカムラは目を丸くするばかりである。

オオヤマの案内で洋間に通されると、そこでしばらく待つように言われた。

部屋の中央には年季を感じさせる立派なウッドテーブルが鎮座し、両脇には上品な光沢を放つ革張りのソファが置かれている。

あまりの豪華さに、座ることさえためらわれた。

縁側の向こうに目を向けると、日本史の教科書にでも載っていきそうな純和風の庭園が広がっている。岩で周囲を縁取られた池と、枝がうねうねと曲がりくねった大きな松の木がなんとも荘厳な雰囲気を持っている。

「……すごい」

オレは思わずため息をついた。

やがて、お茶と和菓子をお盆に載せたオオヤマが現れた。庭のことについて質問すると、

「前の住人が好きだったみたいでな。せっかくだから暇な時に手入れしているんだ」と照れ隠しのように笑った。

お茶菓子も食べ終わり一段落つくと、オオヤマが本題を切り出した。

「今日呼んだのは他にもない、君たちにオレのコレクションの一部をやりようと思ってな」

「コレクション？部長のですか？」

「そうだ。長年かけて集めた品だが一さすぐに数が増えすぎてな。少し整理しようと思ってるんだ」

「しかし、大切なコレクションでは…、良いのですか？」

「ああ。遠慮は無用。好きなだけ持って行ってくれ」

オオヤマのコレクションルームに案内されたオレたちは再び仰天することになった。

大広間を改装したスペースに、人の背丈ほどもあるガラスケースがズラリと並んでいる。まるで博物館の展示室のようだ。

それぞれのケースはジャンルごとにコンパートメントで区切られ、フィギュア、プラモデル、食玩などがびっしりと並んでいた。

思わずナカムラと顔を見合わせた。

「これは…」

ひと目見ただけでは把握しきれないが、おそらく相当に貴重な名品ばかりが集められているようだ。

正直、オオヤマという人間を甘く見ていた。

「どうも古い作品ばかりになってしまっただけでな。自分では捨てられないから、欲しい人がいればあげることにしてるんだよ」

そう語るオオヤマは子供を慈しむような目で自らのコレクションを見つめている。

「君は確かフィギュアを蒐集してるんだっけな」とナカムラに訊ねる。

「はい、そうですが…」

「今では手に入りにくい品もあるはずだ。好きなだけ持って行ってくれ」

「本当によろしいのですか？」

ナカムラが遠慮がちに答える。

「ああ。君も蒐集家なら分かるだろう。数ばかり増えたコレクションは美しくない。かといって、新しい作品を探し求める楽しみも捨てられない。だからこうやって、定期的に人に譲り渡すのが一番なんだ。もちろん、その価値が分かる人に、ということだが」

二人は神妙な表情になってオオヤマの話聞いた。

言われてみれば納得のいく理由のようでもあり、単なる口実のようにも思われた。

蒐集を極めた人間は皆同じ考えにたどり着くものなのか、それともオオヤマが特殊なのかオレには分からないが、そこには確固たる思想のようなものが感じ取れた。

「自分にはコレクションを他人にあげるなんて、想像もできないです…」

ナカムラは腑に落ちないといった様子で言った。

「ふふ。オレも若い頃は数を増やすことに必死だった。好きな作品もたくさんあったしな。良いフィギュアを選ぶというよりは、悪いフィギュアを選ばないように自戒する—そういう感じだったな。むろん、失敗も数え切れないほどしたが」

オオヤマの表情は何か遠い昔の出来事を思い出しているかのようだ。

「部長…」

もっと深く話を聞いてみたい気持ちもあったが、なんと尋ねていいかわからなかった。

この人はおそらく、只者じゃない。あなたは一体、何者なんだ…？

その後、ふと気になったことを質問してみた。

「ところで部長、つかぬ事をお伺いしますが」

「なんだ、言ってみろ」

「ひょっとして将棋を指されたりしませんか…？」

「将棋？いや、ほとんどやったことがないな。前も聞かなかったか？」

「そうでしたっけ…。いえ、なんとなく思っただけです」

将棋は指さないのか。なんとなく強そうなイメージがあったのだが。

「変なことを聞くやつだ」

オオヤマはふふっと楽しそうに笑った。

## <幕間2>

それは嵐のような出来事だったという。

理学部B棟104講義室ではアニメ同好会の模擬店設営が進められていた。

部員の多くが講義を受けている時間帯で、残った数人だけが作業にあたっていた。

悪魔は、突然やってきた。

「ちーっす。アニメ同好会って、ここっすか？」

学園祭準備中の講義室を訪れたのは若者向けファッション誌に載っているような格好をした、見るからにチャライ外見の男女だったそうだ。

彼らとはある運動部の部員であることを名乗ると、こう言った。

「あの一、ここ俺らが使うんでえ～、今日中に出ていってもらえますか？」

「！？」

凍りつく部員たち。

「この講義室、ウチらが使うことになったんでえ～。替わってもらっちゃう感じでいいっすか？」

「それは、どういうことでしょうか？」

その場に居合わせたアベは、拳を震わせながらもあくまで冷静な対応に努めたそうだ。

「俺ら、喫茶店やることになったんでえ～。立地的にこの教室がいいじゃん？みたいな？」

この重大さに気づきはじめて部員たちが集まってくる。

「そんな、急に替われっていわれても、準備をはじめちゃってるし…」

「そもそも、許可もらったのはウチらのはずなんですけど」

口々に反論を述べる部員たち。

しかし、

「許可？許可証ならさきほどもらってきましたわ」

マネージャーを名乗る女が掲げた書類は、確かに大学が発行した許可証だったそう。

「そっちが持っているのは仮許可証でしょう？あなた方アニメ同好会の仮許可は本日付けで取り消していただきましたわ」

「どうして、そんなことが...」

予想外の事態に困惑する一同。

「なんか〜、こいつのカレシが学祭の実行委員長？みたいな。それで、顔パス？的な？」

あまりに理不尽な理由に部員達は必死に抗議したが、全く聞き入れてくれなかったそうである。

「ていうかあなた方、そんなダサイ服装で本当に大学生なんですか？男子校の高校生と間違われますわよ。キャハハハッ」

最後にそう言い残して、二人組は去っていった。

連絡を受けたオオヤマが慌てて駆けつけた時には、絶望した部員たちが呆然と立ち尽くしていたということだ。

<幕間3>

ふええ、学祭の準備終わらないよお

@Takahashi\_85hi 学祭なにすんの？

@ShimShim78男の娘カフェ...

わあい女装、タカハシ女装だあい好き

なわけねーだろ

@Takahashi\_85hi きも

待ってくれみんな誤解だ

@Takahashi\_85hi タカハシさん、学園祭にお邪魔してもいいですか？

ほえ...

@TKS\_shogi もちろんです！！全力でお待ち申し上げます！！

アワワワ((((；° ㊦°))))トウヨヨ

アハヽ(㊦`ヽ彡ノ'㊦)ノヲ

3.

11月の下旬、季節がすっかり冬めいた頃、秋玲祭は行われる。キャンパスに林立するイチョウの紅葉も見頃となり、模擬店の列に彩りを添えている。しばらく前と比べるとめっきり寒くなったが、それでも大学生、親子連れ、近所の高校生などで会場はにぎわっていた。

よくもまあ、あの状況から準備したものだ。

代わりとなる教室を手配し、机や椅子を移動させ、調理器具や食器を運び込み、まさに部員総出の作業だった。

コスプレ衣装についても全員分揃えられるかどうか懸念されていたが、日ごろの活動の成果なのか、意外にもあっさり集まってしまった。部員たちはセーラー服だったり、魔女っ子姿だったり、思い思いのコスチュームに身を包んでいる。客観的に見てかなりシュールな光景だ。はっきりいって周囲から浮いている。ちなみにオレの着ている衣装はというと――某人気学園アニメの主人公たちが着ているブレザー（ミニスカ+ニーハイ）である。

「部長、お時間です」

サトウに呼ばれ登場したオオヤマは、タキシードに蝶ネクタイという出で立ちだった。

普段の格好からすると相当ギャップがあるが、不気味に似合っている。

しかしこのタキシード、どこかでレンタルしたのだろうか。ひよっとすると部長のことだから自前のもを持っていたのかもしれない。

オレは思わずぷっと笑い声を漏らしたが、他の奴らはいたって真面目な顔をしている。なんて精神力だ。

やがて開店の時間となり、部員たちが店内に整列した。

「貴様ら、準備はいいか」

皆の前に立つオオヤマが重々しく言った。

「今日の日を迎えるための準備、まことにご苦労だった。心から感謝する。しかし、あの日の屈辱を忘れる訳にはいくまい。本当の戦いはこれからだ。この戦、勝つも負けるも諸君らの働きにかかっている」

オオヤマは一度氣息を整えると、あたり一面に響き渡る大声で言った。



14時を回った頃、ついにつかさたんの姿が見えた。

メイド（スズキ）に案内されて席に座ると、キョロキョロと周囲を見回している。もしかしたらオレのことを探しているのかもしれない。

まってね、つかさたん、今行くからー！

心のなかで叫びながらハッピーマジカルレモンティーを作る作業に戻る。

「ちょっと、先輩、紅茶こぼれてますよ！」

ああっ、またやっちゃったよ...

慌てて別のカップを用意する。どの辺がハッピーでマジカルなのかよくわからないが、通常の紅茶にシナモンだのローズマリーだのを配合してふりかける工程が入っているので地味に時間がかかるのだ。

ようやく作業を終えてホールの方を見やると、つかさたんが真剣な表情でメニューを見つめているところだった。おそらく、うかつなものを注文してはまた変なおまじないを唱えさせられるかも知れないと思って警戒しているのだろう。

キモかわいいと一部のコアな層を取り込んだ本日午前の指名ナンバーワン男の娘メイド、スズキが注文を取りに行く。

つかさたんは何か気になることがあるのか、なにやら熱心に質問しているようだ。もしかしたらおまじないの有無でも確認しているのかもしれない。

今回のメニューにはあんなハードなおまじないは含まれていないが、一部キワモノと呼べるような品もあるから、事前に中身を確認しておくのは賢明な判断だろう。

引き続き手元で作業しながら様子を伺っていると、つかさたんはおもむろに携帯を取り出してスズキとのツーショット写真を頼もうとしている。つかさたん、まさかそういうの好きだったの...

注文を取り終えたスズキが帰ってくる。

つかさたんが頼んだメニューは、『ツン☆デレぶるーべりいていー』と『店長の愛情たっぷりリンゴのタルト』。長考しただけあってなかなかいいチョイスかもしれない。

『ツン☆デレぶるーべりいていー』は要するにロシアンティーで、市販のセイロンティーにブルーベリージャムを大きじ一杯分ドカッと投入したもの。リンゴのタルトは調理場で作ることができないため、冷蔵庫にストックしたものを提供している。オオヤマが知人のツテで大量に仕入れてきたらしいのだが、スタッフによる試食の段階であまりにおいしかったため、どこぞの有名店から裏ルートで仕入れたのではないかと噂になっていた。曰く、生地ของ甘さとリンゴの酸味との絶妙なバランスを追求した逸品だのなんだの...

「スズキ、これはオレが運ぶから」

注文の品を作り終えたオレはそう言うと、「接客は僕の仕事ですから」というスズキを押しつけてテーブル席へ向かった。

「見築先生、本当に来て下さったんですね」

「タカハシ...さん？」

つかさたんは怪訝な表情でオレの方を見つめている。

「あ、この服装は...」

午前中からずっと着ていたので、コスプレしていたことをすっかり忘れていた。

「みなさん女装してるんですね。ふふっ」

「いや、その」

「タカハシさんもその制服、お似合いですよ☆」

「見なかったことにしてください」

冷静に考えると少しマズイ姿を見られてしまったかもしれない。

目を細めてにやにやしているつかさたんから、何やら不穏な空気が漂っている。ような気がする。

「えー、もっと自信持った方がいいですよ。すごくカワイイし」

どうやら楽しんでもらえている？ようなので、気を取り直してメニューの説明に移る。

「こちらが『ツン☆デレぶるーべりいていー』、そしてこちらが『店長の愛情たっぷりリンゴのタルト』になります」

「きゃー、カワイイ。写真撮っていいですか？」

「ええ、もちろんです」

喜んでもらえて何よりだ。

「タカハシさんも入ってください」

「え？写真にですか？」

戸惑いながらもカメラの正面に移動する。

「何かかわいいポーズしてください」

「かわいいポーズ...？」

突然のリクエストに思わず苦悩の表情を浮かべると、

「ほら、もっと笑顔で」

すかさず注意された。

ダメ出しの末に必死に可愛らしい？横ピースをきめ、なんとかつかさたんの満足のいく写真に収まった。

「あの、これ本当においしいそうですね」

リンゴのタルトを見つめながらつかさたんが言った。

「お褒めに預かり光栄です。ウチの店長が謎の...、いえ、丹誠込めて作った逸品ですから」

「食べるのがもったいないくらい」

「そりゃもう、愛情込めて作ってますから」

本当は冷蔵庫に保管してるだけけど。

「そうだ。なんか、おいしくなるおまじないとかしてくださいよ」

「そんな、イキナリっ!？」

つかさたんが再び攻勢に出た。

今日の彼女はなんというか...暴君だ。

「タカハシさん、今日はメイドさんなんですよ？」

うっすらと笑みを浮かべる表情に背筋が冷たくなる。

「いやー僕、そろそろ厨房に戻らないといけないんで」と逃げ切りを試みたが、

「ムービーで撮りますから。合図したらおまじない始めてください」

再び携帯のカメラを構えるつかさたんに妥協する様子は全く感じられなかった。

仕事に戻らないといけないというのは別にその場しのぎの嘘という訳ではなく、実際さっきから「ちょっと一部長見てくださいよータカハシ先輩が全然仕事してくれないんですよー」というミズキの声が奥から聞こえている。いろいろな意味でヤバイかもしれない。

しかし、その後もつかさたんから解放されることはなく、理不尽ないじめは続いたのであった...

#### <幕間4>

「いつものアレを」

「かしこまりました」

静かな店内にカクテルを作る音がひびきわたる。

「大丈夫なのか?.....経営とか」

カウンターに座る男が言った。

「ご心配には及びません。今日はたまたまお客様が少ないだけですから」

「少ないっつーか、オレしかいないみたいけど」

「まだ早いんですから。じきに増えるはずです」

マスターは柔和な表情を保ちながら言った。

「おまたせしました。当店のシークレットカクテル『静思萬考』でございます」

「今時シークレットカクテルって...自分で言っていて恥ずかしくないか？」

「余計なお世話でございます。それに注文したのはお客様です」

「まあ、それはさておき」

「さておかないでください」

「この間の件の事だけだな」

「はい」

「直接会って話した方が早いんじゃないか？」

「ほう。では、ご協力いただけるということでもよろしいのですね」

マスターの顔がほころぶ。

「まだ協力するとは言ってない。まずは会って確かめる。話はそれからだ」

「かしこまりました」

「そんな嬉しそうな顔をするな。まだどうなるかは分からない」

「分かっていますよ」

「あいつのことだから、このまま放っといたらいつまでかかるか」

「ほう...。なんだかんだ言って、随分気にかけていらっしゃるのですね」

「別にそういう訳じゃない。まあ老婆心だよ」

男はカクテルグラスを持ち上げ、そっと口に運んだ。

「ではそういうことで...よろしく頼む」

「まったく、敵いませんね。オオヤマさんには」

オオヤマと呼ばれた男は、ニヤリと笑った。

花瓶に挿してあった牡丹の花がぽとりと落ちた。

#### 4.

オレは今、東京将棋会館に来ている。なぜかって、それを話すと随分長い話になってしまう一ことも別にないのだが、まあ、要するにアレだ。いわゆるひとつの出待ちというやつである。

この案は実は「Bar 千駄ヶ谷」のマスターからの強い勧めによるもので、「学園祭でせっかく交流を深めたのにそれで終わりなんてもったいない。原始棒銀でもいいから攻め続けろ」という力強いお言葉とともに命じられた作戦なのだ。自分で将棋会館まで来ておいて偶然もへったくれもな

いと思うのだが、そんな細かいことを気にしていただけるほど余裕はない、ということらしい。

女流棋聖戦の本戦第1回戦。初のタイトル挑戦を目指すつかさたんにとって重要な一戦である。対戦相手の茨城女流四段はタイトル経験者のベテランだが、つかさたんにも勝機は十分にあると見られている。

つかさたんの対局が終わるまでの間、オレは将棋会館の道場で時間を潰すことにした。が、しかし、もちろん将棋には全く集中できていない。目の前の相手が一生懸命将棋を指している間にオレは違うことばかり考えているのだから、負け続けるのは当然だった。

自分の対局が終わるごとに携帯を開いて棋譜中継をチェックする。何度か繰り返しているうちに、つかさたんの将棋も終盤に差し掛かってきた。

徐々に将棋を指している心境ではなくなってきたのでオレは一旦将棋をやめ、道場の外に出た。

再び携帯の画面を開き、棋譜をチェックする。

難しい局面だ。

しばしの間画面を見つめながら考える。

分からない。

子供のはしゃぐ声が聞こえるので何ともなしに視線を向けると、小学校低学年くらいの男の子たちが廊下を歩いてくる。

楽しそうに将棋の話をする様子を目で追っていたが、じきに通りかかったおっさんに注意されてしまい、皆シュンとした表情で道場に入っていった。

棋譜中継の画面に戻ると、局面はまた少し進んでいる。もう最終盤だ。

オレにはどちらが勝っているのか全く理解できないが、局面は緊迫している。おそらくギリギリの勝ち負けになるだろう。

いてもたってもいられずに側にあった自販機でコーヒーを買い、プルタブを開ける。

淡々と指し手が進んでゆく。

あと少しで決着が付く。

見築女流1級投了の表示を確認して、オレはふーっとため息を付いた。

どうしようか。

いろいろと計画が狂ってしまった。

せっかくだから一言くらい声をかけて帰ろうか。それとも、下手なことはせずさっさと撤退した

ほうがー

自動販売機の側面にもたれかかりながら、オレは迷った。攻めるべきか、引くべきか。様々な情景が頭に浮かび、様々な希望と不安が渦巻いた。遠くで響く駒の音を聞きながら、オレの思考は少しずつ弱気に傾いていった。

☆

30分後、オレはBar 千駄ヶ谷にいた。  
マスターと反省会である。

散々悩んだ末、つかさたんにはツイッター上でリプライを送っておくことにした。  
ひとまず、「お疲れ様でした」と一言だけ。  
つかさたんの目に触れるかどうかはわからないが。

「タカハシくんはどこまでヘタレなんだい？」  
とマスターがいかにもがっかりしたような口調で言う。  
「だって仕方ないじゃないですか」  
オレはため息をつく。  
「まあ無理攻めだったしね」  
「マスター、ひどいっす...」

携帯の画面を無言で眺めながらストローの袋を弄んでいると、マスターが声をかけてきた。  
「そもそもなんで、タカハシくんは見築先生のことを好きになったんだい？女流棋士とファンの恋愛なんて、はじめから難しいに決まってるじゃん」  
今さら身も蓋もないことを言う人だ。  
「つかさたんは…見築先生は、オレの希望なんです。あんなに美しくて、可愛くて、将棋が強い人が存在しているだけでも奇跡なのに、あんなに一生懸命将棋を指してるんですよ。好きになるに決まってるじゃないですか」  
「でもさ、そんな人は他にもいっぱいいるわけでしょ？どうして見築先生だったの？」  
「それは...」  
「それは？」

「一目惚れですっ！」

「……」

「笑わないでください」

「いや、失敬。あんまり真剣な顔して言うもんだからつい」

「別に、オレの勝手なんだからいいでしょ」

「もちろん、好きになるのはタカハシくんの勝手だよ。でも」

「でも？」

「相手の気持ちってものも、少しは考えないとね」

「わかってますよ」

「しつこい男って結局嫌われるんだよ」

「何気にひどいこと言いますね」

「嫌われるっていうか、相手にされなくなるっていうかね」

「それはっ…」

すかさず反論しようとしたが、マスターがくるっと後ろを振り返って空のグラスを磨き始めたので、オレは黙ってストローの袋をいじり続けるしかなかった。

「見築先生が帰ってくるまで駅で待ってれば？」

「は？」

グラスを磨き終えたマスターが唐突に口を開いた。

「見築先生、実崎駅が最寄りのはずだからさ。改札の前で待ってればたぶん会えるよ」

「そんな、いつ帰ってくるかもわからないのに」

「対局が終わったのが1時間ちょっと前だろう？感想戦を仮に30分やったとして、そろそろ駅についてもおかしくない。見築先生はたぶん、負けたときはまっすぐ家に帰るはずだ。飲みに行くような時間でもないしね」

「……」

「ま、私の想像だけど」

「……」

「でも、そういうのってストーカーじゃないですか？」

「ストーカーだよ」

「……」

「でもね、ストーカーになるかどうかはケース・バイ・ケースだ。見築先生がストーカーだと思えば君はストーカー。でも、そう思わなければそうじゃない」

「じゃあどうすればいいんですか」

「偶然を装えば問題ないよ」

「そんな、安易な」

「とりあえず偶然出会ったってことにすればいいじゃない。そんな些細なことなんかどうでもいいんだよ」

「……」

些細なこと、か…。マスターの真意がなんとなく分かるような気もしたが、しかし自分が一体何を期待されているのか、考えてみてもやはりよく分からなかった。

☆

結果的にマスターの言うことには逆らえず、オレは実崎駅の改札前で立ち尽くすこととなった。駅前のスペースは風をさえぎる障害物もあまりなく寒さがこたえたが、人通りはそれほど多くなく、利用客を見分けることにそれほど苦労はしなかった。

重くのしかかるような曇り空を眺めながら、その時が来るのをじっと待った。

つかさたんが現れたのは、20分ほど過ぎたときだった。

他の利用客に追い越されながら歩いてくるその様子は、いくぶんか疲れて見えた。

オレはそっと近づいて声をかけた。

「あの、見築先生」

「あ、タカハシさん」

近くで見るとつかさたんはやはり消耗した様子で、力なく微笑した。

落ち着いた表情ではあったが、平静さの裏には疲れが感じ取れた。

「今日は、対局だったんですか？」

「ええ」

「じ、実はオレもちょうどウチに帰るところで…」

何とか話しかけたものの、自分の言葉がやけに空々しく聞こえた。

駅の利用客達が周囲を足早に歩いて行く。

なんだか自分の振る舞いを責められているような気持ちになった。

次の言葉を発することができず、しばらくの間沈黙が続く。

暗くなったせいか駅前の街灯に明かりが付き始め、あたりが少し明るくなる。

「今日は、ちょっと負けちゃって」

つかさたんがポツリと言った。

「そ、そうだったんですか」

「あの…」

つかさたんは何か話し始めようとしたが、すぐにまた沈黙した。

「あの、よかったら、ちょっとお茶でもどうですか？」

思わず勢いで言ってしまうしてから、少し後悔した。

つかさたんは怪訝そうな顔をしてオレの方を見たが、こくりとうなずいた。

オレとつかさたんは駅の近くにある喫茶店へと入った。

以前マスターから薦められたことのある店だ。

おそらく断られるのではないかと思っていたので（なんといっても対局の直後だし）、誘いに乗ってくれたのは本当に僥倖だった。

店内は暖かく、席に座ると少しほっとした。

注文を考えるふりをしながら、オレは再び作戦を練った。

どうにかもう少し気の利いたことを言えないものだろうか。

無い知恵でも振り絞れば何か出てくるかもしれない。

いや、やっぱり無理だろうな。

いままでの自分の行動を振り返れば容易にわかる。いつもいつもその場しのぎのことしか考えていなくて、そして、自分ことしか考えていなかった。

相手の気持ちを推し量る努力を、そろそろした方がいいのかもしれない。

二人ともしばらく無言で座っていたが、ウェイターが注文を取りに来たのでホットコーヒーを注文した。

「この店、何度か来たことがあります」

つかさたんが口を開いた。

「仕事の後とか、すぐウチに帰りたくない時とか」

「帰りたくないとき...？」

「そういう時ってあるじゃないですか。タカハシさん、ありません？」

「ありますよ、ええ。お気持ちはわかります」とオレは慌てて言った。

今がその時なのかどうかは、怖くて聞けなかった。

やがて、さっきのウエイターがコーヒーを運んできた。

湯気の立ち昇るカップを包み込むようにして手を温めてみる。熱い。

つかさたんの方を見ると、銀の容器に入ったミルクを躊躇なく注いでいる。

「いつもその位入れるんですか」と聞くと、「たくさん入れたほうがおいしいじゃないですか」

と拗ねたように言って、少し笑った。

熱いコーヒーを少しずつ味わっていると、つかさたんが話を切り出した。

「ちょっと突拍子のないこと聞いてもいいですか」

「もちろんです」とオレは答えた。

「タカハシさんは将棋に勝てないとき、どうします？」

「叫びます」とオレは即答した。

「ふふっ」とつかさたんが笑った。

「オレはアマチュアですけど、負けると死ぬほど悔しいです」

「ふふっ。そうですね」

つかさたんは柔らかい口調で言った。

「私、プロだけど...プロなのに、たぶんそういう覚悟ができてないんです」

「それは、どういうことでしょうか？」オレは真意を探りながら慎重に尋ねる。

「私、これでも昔と比べると全然強くなったと思うんですよ。殻を破りきれてないってよく言われるけど、自分の中ではちゃんと成長してるはずなんです。将棋の中身も、以前に比べると随分ましになっていると思います。でも、トップの人たちには全然届かないんです。対局するとはっきりわかります。読みの深さとか、正確さとか、ほんと、足元にも及んでないです」

「.....」

オレは曖昧にうなずいた。

「将棋って、結局は才能の世界じゃないですか。だから、その差を埋めるためにも頑張らなきゃって思ってるんですけど、でも、自分より何倍も才能のある人が一生懸命やってて」

オレは黙ってつかさたんの言葉を待った。

「勝てるわけないです。もともと。でも、最近すごく怖くなる時があるんです。このままこの感じで...ずっと続いちゃうのかなって」

そこまで言うと、つかさたんはズズッとコーヒーをすすった。

「どうしたらいいと思います？」

少しおどけたような口調だったが、泣き出しそうな表情にも見えた。

違う、と声を大にして言いたかった。

多くの将棋ファンがつかさたんの将棋に注目している。独創的な序盤に驚き、緻密な作戦に息を呑み、時間が経つのを忘れるほど盤面に釘付けになる。そんな将棋ファンがたくさんいることをオレは知っている。みんなつかさたんの才能を感じ取り、期待している。

でも、そのことをきちんと正確に伝えるのは難しかった。それに、つかさたんが意図していることはそれとは少し違うものであるような気もした。

オレは言葉を選びながら慎重に言った。

「見築先生は才能ありますよ。誰にも負けないくらい。オレ、先生のファンだからわかります」

つかさたんはじっとこちらを見つめている。

「大丈夫です。もしタイトルを取れなかったらオレが責任とります」

つかさたんはゲホッと一瞬むせそうになってから、にらみつけるような表情で言った。

「責任取るって、なんですかそれ。意味がわかりません」

「わからなくてもいいです。でも、本当のことです」

「.....」

少し思い切った事を言い過ぎただろうか。さすがのつかさたんも意表を突かれたようだ。別に変な意味で言ったわけではないのだけど。

唇にそっと手を当ててうつむく姿は将棋を指している時のつかさたんを連想させたが、その柔らかな雰囲気は対局室でのそれとは全く違うものだった。

何か言葉をかけようと思ったが、思い直してやめた。

オレは両手で抱えるようにカップを持ち、ゆっくりとコーヒーをすすった。

5.

店の外に出るとあたりはすっかり夜になっていた。

「寒いですね」と言うと、つかさたんは「そうですね」と短く答えた。

駅からまっすぐに伸びる大通りを連れ立って歩く。

通り沿いにはレストランや雑貨店などが立ち並び、各々工夫を凝らしたイルミネーションがちかちかと光を放っている。

「見築先生、ケーキでも買って行きませんか？」

オレは一件のケーキ屋を指さした。『アプリコット』という名前で、近所では密かな人気店である。

「またですか・・・？」

何かを思い出したのか、明らかに乗り気でない様子のつかさたん。

「疲れてる時は、甘いモノがいいんですよ」と誘惑を試みるも、反応はいまひとつだ。

「タルト系がおいしいらしいですよ。あの店。リンゴとか」

「タルト...」

猫にまたたび、つかさたんにタルト。

「ほら、前の時は結局そのまま帰っちゃいましたし」

「あれは、タカハシさんがヘタレだったからでしょう？」

「へ、へたれ？」

予想しない不意打ちに一瞬動揺したが、すぐに体勢を立て直す。

「そんなことはないです。オレは紳士ですから」

わざとらしく余裕ある素振りを見せるオレに、

「わかりました。リンゴのタルト買ったらタカハシさんの家に行きましょう。それなら付き合っ  
てあげます」

つかさたんが弾むような声で言った。

「ダメなんですか？」

「え、いや、ウチ、今散らかってるから…」

「片付け、手伝いましょうか？」

「その、片付けは、そのっ、いろいろマズイっていうか」

「冗談ですよ」

「え？」

「冗談です。ふふっ」

「くうっ…」

「ほら、寒いから早く入りましょう」

つかさたんが小走りで店へ向かう。

後を追いかけてながら、オレはふと空を見上げた。

やはりというべきか、真っ暗闇の中にぼうっと浮かび上がる雲の他には何も見えなかった。

## 鑑賞物としての詰将棋作品論

会場健大

役にたたないものは 愛するほかはないものだから 一寺山修司「小指を探せ」より

はじめに

みなさん、詰将棋はお好きですか？

こう聞くと、「苦手だ」とか「11手までならなんとか……」「強くなるためには、もっと解いたほうがいいんでしょうけどね」とおっしゃる方が多いようです。

こうした方にもう少しお話を聞いてみると、将棋が強くなりたいから、そのトレーニングとして、受験勉強をするみたいに嫌々詰将棋と向き合っている方が大半のようです。これは詰将棋を作る人間として少し寂しく思います。というのも、多くの作家は一少なくとも私はということですが一将棋のために詰将棋を作ってはいないからです。

私はこういう例え話をよく使います。

将棋のルールをスケートリンクだと考えてみてください。ある人たちは、その上で競争をすることを思いつきました。スピードスケートの始まりですね。これが言ってみれば指し将棋のようなものです。盤上というスケートリンクで己の持つ力を最大限に発揮して相手に勝つことが目的なわけですね。

一方で、氷の上ではもちろん競争も出来るけれど、こんなステップを踏んでみても楽しいんじゃないか、スピンもできる、ジャンプだってできちゃうかも、と思いついた人達がありました。フィギュアスケートの始まりです。まずは可能性を楽しむということ、これは詰将棋の精神にとってもよく似ています。相手のことは関係ない、ただ盤上でこういう演技を実現してみたいと考え、その表現を可能にするために自分の技術を磨くのです。

もっと近い例えを使えば、サッカーの基本練習にリフティングというのがありますね。ボールを地面に落とさないように延々と蹴り続ける練習です。あのリフティングも、単なる練習というだけに終わらず、いろいろ複雑なテクニックが生まれるようになりました。うまくできると楽しい

からです。今ではパフォーマンスとして、より難しい技を編み出して実演してみせる人たちがいます。ボールをまたいでから蹴ったり、頭に載せてみたり。ブレイクダンスしながらリフティングする人もいます。ああいうのは単に楽しいからやっているのであって、それ以上でも以下でもありません。だから、「そのテクニックは確かにすごいけどさ、それを試合のどこで使うって言うんだい」とか言われるとちょっぴりがっかりしてしまいます。

何が言いたいかということ、こういうことです。

将棋と詰将棋とは、完全に別物なのです。将棋はストイックなもの、詰将棋は、楽しむものです。

だから、詰将棋と向き合うとき、必ずしもそれを与えられた試練のように考える必要はないのです。スピードスケートの選手がフィギュアに苦手意識を持つことなどないのと同じように、将棋ファンが詰将棋を眺める時も、もっと肩の力を抜いていいのではないのでしょうか。

そうした詰将棋との付き合い方として、私は「鑑賞」を提案します。詰将棋の図面を見たとき、つい考えてしまうという方は多いでしょう。解けるまで答えは聞きたくないとか、何手詰かも知りたくないという方はたくさんいらっしゃいます。けれど、それが詰将棋を辛く苦しいものにしてるのであれば、ちょっともったいない。

答えを見てしまいましょう。そして盤に並べてみてください。本当に優れた詰将棋というのは、それだけで十分楽しめます。並べてみてもピンとこない作品もあるでしょう。それは駄作です。そんなものをうんうんうなって解かずに済んでよかったと思ひましょう。

そして優れた作品に出会ったら、人に教えてあげましょう。その人がどうしても解きたいと言ったら解かせてあげればいいし、お手上げだというのであれば答えを教えてあげてください。こうして、詰将棋というものが、一人きりで自分と戦うものというだけで終わらずに、人の心をつつにする歌のように、美しい広がりを見せていったなら、こんなに嬉しいことはありません。

そこで、そうした取り組みをまず自分ではじめてみようということで、今回本稿を書かせていただくことにしました。詰将棋史上の優れた作品を、皆さんと一緒に楽しんで鑑賞したいと思います。

はじめに、の次に

では詰将棋鑑賞をしていきましょう。詰将棋には様々な価値観があります。数多くの作家が自らの理念に従って創作をしています。そうした作者の主張や鑑賞のツボを押さえながら解説できれ

ばと思います。

詰将棋には大きく分けて二つの流れが存在しています。一つは終盤のトレーニングのために作られる詰将棋で、プロ棋士の名前でまとめられ出版されているものです。手数は3手～17手くらいで、実戦形から実戦的な手順で詰むものが多いですね。こうしたものは「問題」と呼ぶのがふさわしいと思います。もう一つの流れは、アマチュア作家によるものです。詰将棋パラダイスや将棋世界の詰将棋欄などにアマチュアの手による詰将棋が投稿、発表されています。こうした詰将棋の特徴は、実戦からいかに飛躍した手順を実現できるかということに全精力を傾けているところにあります。こうした詰将棋はしばしば実戦には何の役にも立たず、またしばしば解答者にとって読みの訓練にはならないほど簡単であったり、そうかと思えばある時には実戦でこのような局面に出くわすことはありえないのではないかというほど複雑であったりします。こうした詰将棋は、将棋の訓練という外部的な目的から離れて、詰将棋自体の面白さを自由に表現するものです。またそれに接する者に対し、それによって何を得るかという功利的な態度ではなく、ただ純粋にその表現を楽しむ態度を要求します。こうした性質はそのまま芸術作品のそれにあたります。したがってこのような流れで作られた詰将棋は往々にして「作品」と呼ばれます。本稿では、指将棋を中心に楽しまれる皆さんにとって、親しむ機会が少ないと思われる詰将棋「作品」のご紹介をしていきたいと思います。

さて、すでに述べたように詰将棋は芸術の要素を持っていますが、芸術の評価というのは時代相対的なものです。したがって、詰将棋を鑑賞していただくためには少し詰将棋の歴史についても触れておく必要があるでしょう。第一章では、「問題」として出発した詰将棋が「作品」になってゆく様子を、純粋な歴史的事実の羅列ではなくて恐縮ですが、感覚的な説明として与えられればと思います。また以下で指将棋ファンの方の意見を代弁する存在として、AくんとBくんに登場してもらうことにしましょう。ところどころで私の説明に対して茶々を入れてもらうことにします。

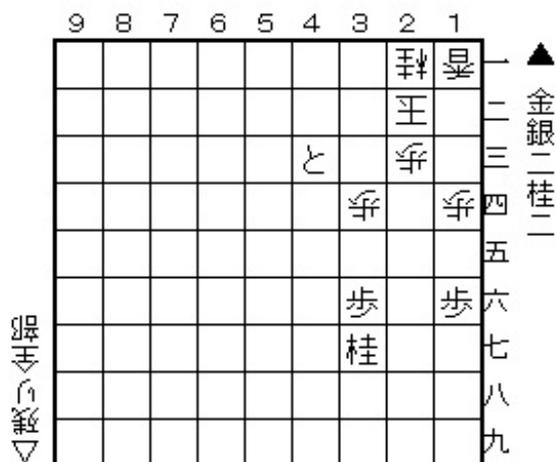
さて、このあと出てくる作品の解説は、図面をできるだけ多くしたつもりですが、読むだけで手順を追うのはつらいところもあるかもしれません。ぜひ、ご面倒でもできるだけ盤に並べてご鑑賞いただきたいと思います。その方が捨て駒の手触りなどをより楽しめると思うからです。

## 第一章 詰将棋はどのようにして指将棋の世界を飛び出したか

「実戦形は詰将棋のふるさと」という言葉があります。詰将棋はまず実戦の終盤において、王様を捕まえる訓練として登場しました。また、指将棋ファンの方にとっては、実戦形の詰将棋は指将棋と詰将棋の橋渡し役として適当であると考え、これを第一章に持ってくることにしました。この章では、3つの詰将棋を見ていただきます。順に「指将棋の練習問題以上の意味を持たなかった頃の詰将棋」「現代的価値観において詰将棋作品としての性質を備え、また同時に指将棋ファ

ンからも好意的に迎えられるであろう作品」「実戦形の形式を借りてはいるが、純粋に詰将棋的な手順で指将棋ファンには理解しにくいであろう作品」です。詰将棋作品が次第に将棋との結びつきから離れて、詰将棋のための詰将棋になっていく様子を、実戦形という制約のもとで疑似的に体験していただければと思います。

では、最初に「指将棋の練習問題以上の意味を持たなかった頃の詰将棋」です。現存する最古の詰将棋文献は初代大橋宗桂（1555～1634）によるものです。その中から一題。



大橋宗桂作 （1703年[1]、象戯力草 第89番）

▲ 3一銀 △ 1二玉 ▲ 2二金 △ 1三玉 ▲ 2五桂打 △ 2四玉  
 ▲ 3三銀 △ 同 桂 ▲ 2三金 △ 同 玉 ▲ 3三桂成 △ 1三玉  
 ▲ 2五桂打 △ 2四玉 ▲ 3四成桂 △ 同 玉 ▲ 3三桂成 △ 2四玉  
 ▲ 2五歩 △ 1三玉 ▲ 2二銀不成 △ 1二玉 ▲ 2四桂  
 まで23手詰 （一步余る）

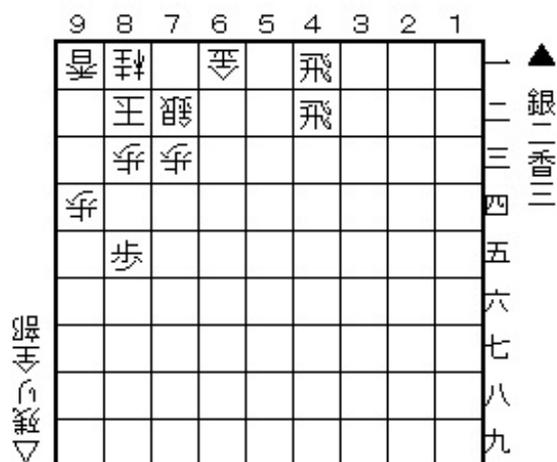
[1]没後まとめられたもの。

- A 手順もすごく実戦的だね。▲ 3一銀は捨て駒ではあるけど、実戦でも頻出の手筋だし。
- B 駒が余ったよ？

当時は駒余りも許容されていたんですね。あくまで練習なわけだから、詰みさえすればいい。本作の手順について言えば、3四成桂から3三桂成と桂を活用して2五に歩を打つスペースを空けるところなんかは面白いといえるでしょう。しかし全般的に草創期の詰将棋には妙手もほとんどなく、ただ力任せに詰ます手順が多く見られます。しかし、歴史的なことを言うところの大橋宗桂という人は幕府から初代の将棋所に任じられ、将軍に詰将棋作品集を献上するというしきたりを

作りました。この将棋所としてのプライド、将軍に下手なものは見せられないという義務感、それにこのあと長く続く江戸時代という平和な時代によって、詰将棋は華麗なものへと変貌していくこととなります。その詳細な歴史は語ればきりがありませんが、第二章で少し触れます。

では次に、「現代的価値観において詰将棋作品としての性質を備え、また同時に指将棋ファンからも好意的に迎えらるであろう作品」です。



相馬康幸作 詰将棋マニアックス Anthology No.19 初出調査中

B きれいな美濃囲い！

A これくらいなら盤駒使わずに解けるよ。きれいに詰むね。

▲7一銀 △9二玉 ▲9三香 △同 玉 ▲8二銀打 △9二玉  
 ▲9三香 △同 桂 ▲8一銀不成△同 玉 ▲7二飛成 △同 金  
 ▲8二香 △同 金 ▲同銀成 △同 玉 ▲7一銀 △7二玉  
 ▲6一飛成 △同 玉 ▲6二金  
 まで21手詰

A こういうのいいんだよ！ 実戦で役に立ちそうじゃん。まあ実戦では持ち駒が銀銀香歩歩とかなんだらうけど。将来この筋で詰ますことがあるかも！ っていう問題は解いてよかったって思うよね。

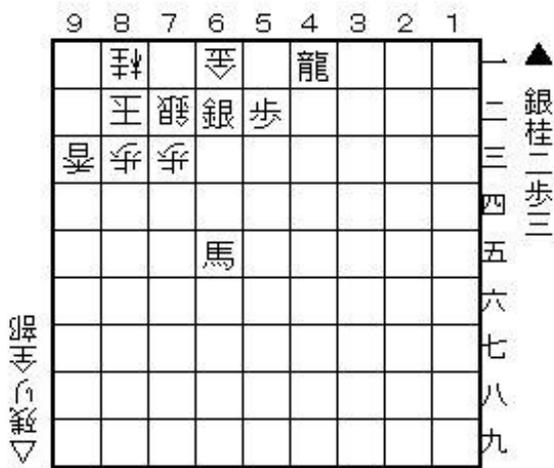
やっぱりこういう作品の需要が一番大きいですよ。きれいな初形で程よく読みの練習になり、解いた後にちょっと気持ちいい作品。しかし作家の立場から言うと、ここまでよくできた作品はめったに作れるものではありません。

B さっきの作品はべったり詰んじやったけど、こっちは同じ実戦形でもきれいに捨て駒が出てくるんだね。この捨て駒っていう感覚がやっぱり詰将棋には大事なのかな？



以下の手順

▲ 8二銀成 △同 玉 ▲ 7二桂成 △同 銀



この図と最初の図を見比べてみてください。

B 6三の銀がなくなってる！

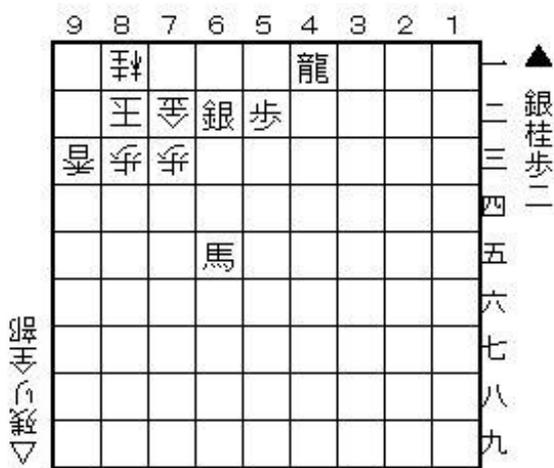
A 持ち駒も桂と歩が減ってるけどな。

B あまり状況が変わってる気がしないけど、もう一回▲ 7一銀打しか手が無いよね。

以下の手順

▲ 7一銀打 △ 9一玉 ▲ 9二歩 △同 玉 ▲ 8四桂 △ 9一玉

▲ 8二銀成 △同 玉 ▲ 7二桂成 △同 金



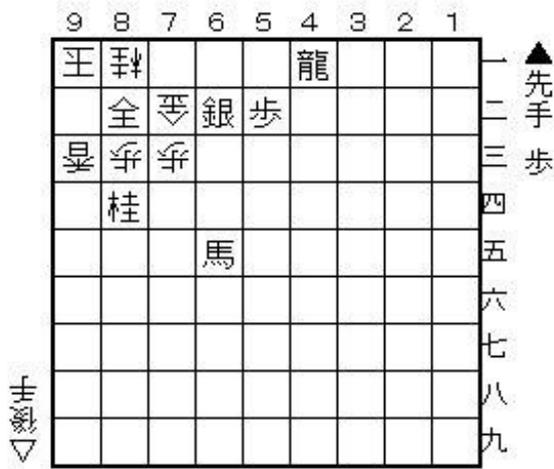
B もう一セット同じ手順が出てきた！

A その結果、今度は7二の銀も消えて金に変わってるわけだね。

以下の手順

▲ 7一銀打 △ 9一玉 ▲ 9二歩 △同 玉 ▲ 8四桂 △ 9一玉

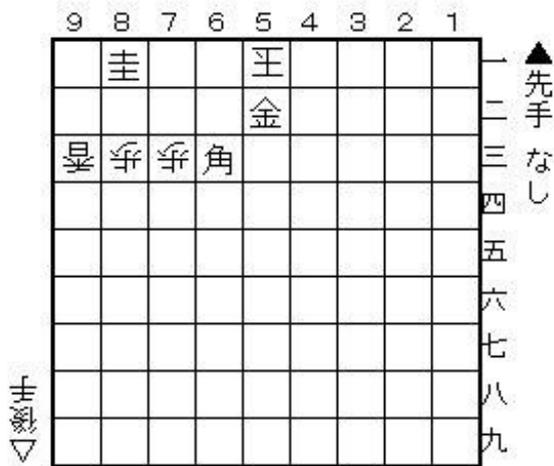
▲ 8二銀成



さらにもう一セット繰り返しますが、今度△同玉では▲7二桂成以下簡単ですね。したがってこれを同金と取ることになって打歩詰が解消されます。以下は収束手順に入ります。駒がきれいにさばけて詰み上がりますので、並べてみてください。

以下の手順

△同 金 ▲9二歩 △同 金 ▲8一龍 △同 玉 ▲9二桂成  
 △7二玉 ▲5四馬 △6三角 ▲6四桂 △6二玉 ▲5三金  
 △7一玉 ▲7二桂成 △同 角 ▲同 馬 △同 玉 ▲6三角  
 △7一玉 ▲8一成桂 △6一玉 ▲5一步成 △同 玉 ▲5二金  
 まで51手詰



B 51手もかかったんだね。なんだかそんな気がしないよ。

局面局面で必然の手が多かったこともあるでしょうし、反復趣向の作品は一度サイクルがわかるとだいぶ読みを省けますから、実際の手数ほどには難しくないものなのです。この辺も指将棋ファンが誤解していることのひとつかもしれませんね。100手を超える詰将棋は考える気も起きない方とか。実際には20手くらいの詰将棋よりよっぽど簡単なことだって、往々にしてあるものですよ。

A 最後は解説ずいぶんさらっと流したな！ もう少し解説するところあるんじゃないのか？  
 まあそうなんですけど、メインテーマの部分が終わったので、鑑賞としてはちゃんと詰むことさ

え確認できれば……。ああ角合も出るんだ～うまくまとまってるね～みたいな。

## B メインテーマ？

この作品においては、銀剥がし趣向というのがテーマになっています。剥がしとは文字通り、玉方の駒を一枚一枚取っていくことだと思ってください。そしてそれを反復させるのが詰将棋らしい遊び心で、ふつうこういう繰り返し手順を「趣向手順」と呼びます。この作品では銀を剥がす趣向手順なので、銀剥がし趣向というわけです。個人的には、趣向という言葉はまさにぴったりだと思います。「ああ、ちょっとした趣向だね、面白いね」という感じが詰将棋への態度としてちょうどいいのです。

テーマと言いましたが、草創期の詰将棋になくて今の詰将棋にあるもの、それこそがテーマなんです！ つまり作図する側は、単に王手の連続で詰むというだけではなく、手順や配置の中に何かしらのテーマを表現していなくてはならない。こういう流れが江戸時代の将棋所や民間の愛棋家の間で醸成されていきました。表現するテーマは、今までほかの人によって図化されているものでは作る意味がない。したがって詰将棋のテーマはどんどん奇抜になってゆきます。これが詰将棋が単なる練習問題から離れていった理由なんです。いつしか詰将棋が表現する手順は、絶対に実戦では現れないようなものになっていきました。

先に難しい問題だと書きましたが、捨て駒というのはテーマの一つであると思ってください。実は詰将棋作家の中には「ただの捨て駒なんてテーマでも何でもない」という立場の人も多いのです。捨て駒の連続で詰むような作品は手筋物と呼ばれています。手筋物しか作らない作家もいる一方で、「手筋物の価値を認めないわけではないけど、自分で作る気には全くなならない」という作家も多く、論争のあるところ（まあはっきり言って詰将棋界なんて論争だらけです）。イメージとしては、手筋物は娯楽小説で、解答者にとって無難に楽しめるものですが、予定調和な部分もあり新奇性には欠けます。それ以外のテーマで作られた作品は純文学のようなもので、常に新しい表現を求めて進化を続けますが、そのよさを理解することは難しく、指将棋ファンにはあまりウケがよくありません。もちろんテーマをしっかり表現した作品が捨て駒もきっちり決めていたら評価が上がるのは疑いない事実です。芸術的な文学が大衆的な面白さも持っていたら絶対に売れます。当たり前ですね。

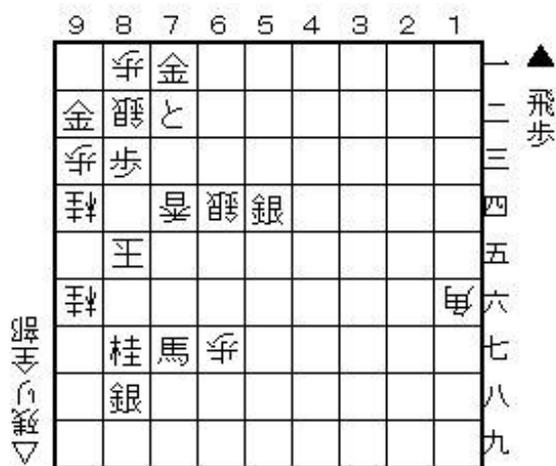
とりあえず、指将棋ファンの方に少しでも興味を持っていただきやすくするために、実戦形の作品から導入しましたが、実戦形という非常に強い制約のもとでは、表現できるテーマが限られてきます。ということでここからは恐ろしい顔をした作品が数多く登場することになると思いますが、心配することはありません。しつこいようですが、鑑賞とはその作品と対決することではなく、仲良く遊んでやることなのです。その作品のことを深く知れば知るほど、なんで作品がそんな顔をしていなければならなかったのか理解できますし、恐ろしいと思った顔が美しく見えてくることさえあるでしょう。



B そういわれればその手順しかないような気がする。

A ここで手拍子に▲9五角成とすると△7六玉で打歩詰だけど.....

▲6六龍 △同 龍    ▲9五角成 △7六玉    ▲7七歩 △同 龍  
▲同 馬    △8五玉



▲6六龍が好手で、ここに龍を呼んでおけば打歩詰を打開できます。

B なるほど、いい手だね。

と、ここまでが序ですね。

B 序って？ 序破急の序？

まあだいたいそうですね。特に古典詰将棋の場合、メインテーマに入るまでに少し手を入れておくのが流儀だったんですね。むき出しの趣向は品がないというわけです。古典的な趣向作の作りは序→テーマ→収束という構成がふつうだったんです。最近では、ずっとテーマ部分に入る人も多くなってきました。これはどちらがいいというものでもなく、考え方の違いですね。本作の序ですが、これ以上は望めない序なのではないでしょうか。要の押さえ駒になる銀を打つところから始まり、その銀打ちに必要なだった龍を捨て駒でさらりと消してしまいます。

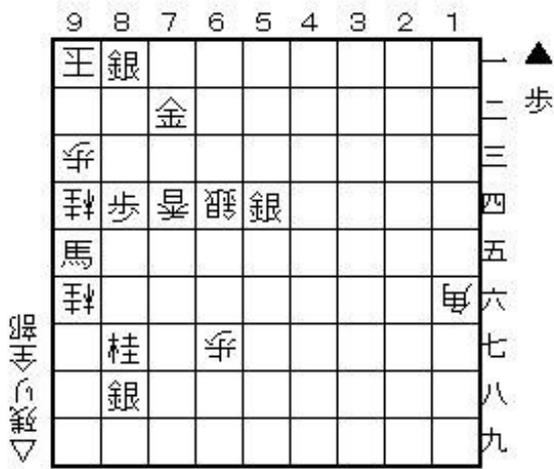
A じゃあここからが本番なわけか。うーん。▲8四飛なんかそれっぽいんだけど。

B ねえねえ、▲9五馬～▲7七馬ってずっと繰り返せるよ！

A アホか、連続王手の千日手でこっちが負けになってしまうわ。

以下の想定手順

▲8四飛    △同 玉    ▲9五馬    △8三玉    ▲8二金    △同 歩  
▲8四歩    △9二玉    ▲8一銀    △9一玉    ▲8二と    △同 玉  
▲7二金    △9一玉



A 打ち歩詰だ.....

B 打ち歩詰ってホントにあるんだねえ。実戦では出たことないよ。

打ち歩詰は詰将棋のためのルールと言われるくらい、詰将棋の豊かな発展に貢献しています。打ち歩詰関係の作品だけで、全体の1割くらい行くんじゃないかな。さて、本作はこの打ち歩詰をどう打開するかというのがテーマです。さっきBさんが惜しいことを言っていましたよ。

B ホントに？ やったー。さっき反復趣向ってのやったからね。

A しかしただ反復するだけでは趣向にならないからな。

その通りです。趣向手順というのは、同じことを繰り返しているようでいて少しずつ局面が変化していることが大事。序が終わった部分を再掲します。



～数分経過～

A 分からん！ でもきっと詰将棋らしい手が出るんだと思うけど.....

B 実戦だったら▲1五飛って打って角抜いちゃうのにね。

A こら、身もふたもないこと言うな。

ちょっと待ってください、▲1五飛にはどう受けるんですか？

A そりゃもう△2五歩合くらいで全然.....。お？

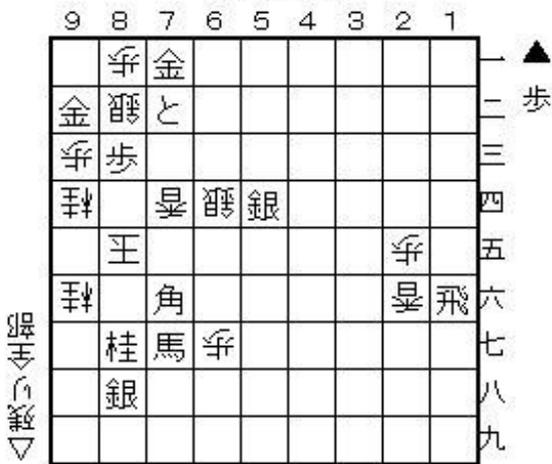
B なになに？

(以下ちょっと難しいです)

想定手順

▲1五飛 △2五歩 ▲9五馬 △7六玉 ▲1六飛 △2六香  
 ▲7七馬 △8五玉 ▲7六角

【途中図】



A 途中図で△8四玉は▲9五馬△8三玉▲8二金△同歩▲1三飛成で7三の駒数で勝ってるから詰みだな。

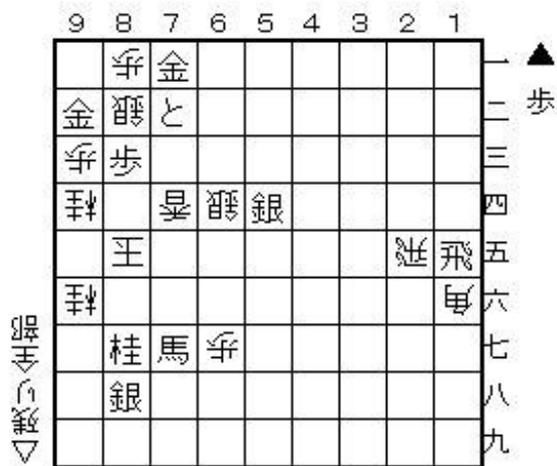
△同 香 ▲9五馬 △7四玉 ▲9六馬 △8五金 ▲同 馬  
 △同 玉 ▲9五金 △7四玉 ▲6六桂 △8三玉 ▲8二金  
 △同 歩 ▲8四歩 △9二玉 ▲8一銀 △9一玉 ▲8二と  
 △同 玉 ▲1二飛成



A これは変化多いけど詰んでる。  
 B 難しいよ～。途中の金合は何？

A 桂合とかだと取らずに▲6六桂以下進められて早い。馬が9五にのぞけるからな。さて、歩合だと詰むことがわかったわけだけど、何合が正解なのかな。前ページの途中図で△8四玉引いたときに▲9五馬をされなければいいから、飛車合かな？

▲1五飛 △2五飛



A これできっきの変化が詰まない。

【仮想図】



A 以下△9五同飛で逃れ。

B じゃあせっかくの飛車合だしてもらっておこうよ。

▲同 飛 △同 角



これで問題設定の局面から持ち駒が変わらず、角の位置が1六→2五に変わったわけですね。

A どうやら狙いが見えてきたぞ。こういうことなんじゃないか？

▲ 9五馬 △ 7六玉 ▲ 2六飛



B また合駒？

A まあ、ここもとりあえず歩合しておくか。

仮想手順

△ 3六歩 ▲ 7七馬 △ 8五玉 ▲ 2五飛 △ 5五歩 ▲ 7六角  
 △ 同 香 ▲ 9五馬 △ 7四玉 ▲ 9六馬 △ 8五香 ▲ 6六桂

【仮想図】



A 以下ほぼ同様に詰みか。ということは、仮想図で桂を取れるように.....

B 3六の合駒は飛車だね！

ここまでくれば解けたも同然ですね！ この手順を繰り返せることがわかったので、角をおびき寄せてください。

B まだよくわかんないよ？

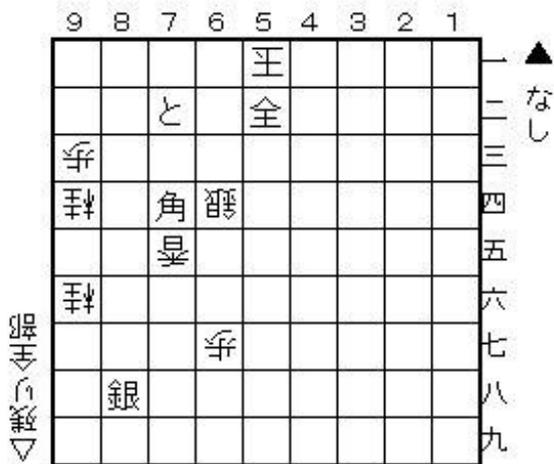
△ 3六飛 ▲ 同 飛 △ 同 角 ▲ 7七馬 △ 8五玉 ▲ 3五飛  
 △ 4五飛 ▲ 同 飛 △ 同 角 ▲ 9五馬 △ 7六玉 ▲ 4六飛  
 △ 5六飛 ▲ 同 飛 △ 同 角 ▲ 7七馬 △ 8五玉 ▲ 8四飛



B あ～！ 歩が打てるようになってる！

この歩打ちを作るために、飛車打ち飛車合を繰り返して角を5六まで呼ぶという壮大な構想だったのです。しかも馬を支える機構になっていた桂を跳ね捨てる味のいい手まで交えています。とても江戸時代の作品とは思えない完成度です。さて、ここからは収束。これもなかなかきれいにまとめています。

△同 角 ▲同銀成 △同 玉 ▲7四角 △9一玉 ▲8二金  
 △同 玉 ▲8三步成 △7一玉 ▲6二馬 △同 玉 ▲6三銀成  
 △6一玉 ▲7二と △5一玉 ▲5二成銀  
 まで69手詰



A 出たよ、以下詰み。

B 最後に趣向手順の核になっていた馬を捨てて仕上げるとうまいね。もう取り残される駒になるのかと思ってたよ。

看寿の作品は特に、テーマを構成していた舞台装置の駒をきっちりさばいて収束する作品が多いようです。その影響もあって、趣向作ではテーマの部分で主役だった駒を収束で消すのが一つの作り方になっています。それはともかく、こうした謎解きをじっくり追いかけていくのはどうでしたか？ 優れた詰将棋ほど、ややこしい変化で目くらましをするようなことをせず、一つの大きな謎の設定と、そのスマートな解決が用意されているものなのです。本作は特に優れた達成の一つで、昭和の詰将棋界に大きな影響を残しました。内藤國雄がこの作品に感銘を受けて将棋の道に入ったのも有名な話ですね。

また、すごい形に見えた初形ですが、鑑賞し終わってみてどうですか？ 一つ一つの駒が最大限に働いていることがお分かりになったのではないのでしょうか。駒の機能を理解し、その配置の必然性に気づけば、見かけの複雑さとは異なってむしろ簡潔で効率のよい表現であることがお分かりになると思います。そして、そうした表現の技術そのものが、表現されているテーマと同じくらい、感嘆すべきものであることに気づくのではないのでしょうか。そういった意味で、これから詰将棋をご覧になるときは、配置の妙にも注意していただきたいと思います。

さらに江戸時代の達成として、伊藤宗看の作品を挙げておきましょう。伊藤宗看は看寿の兄で、終身制だった時代の七世名人です。その作風は豪放かつ難解です。看寿と同様に雄大な構想を盤上に描きましたが、看寿と決定的に異なるのは、その作品の力強さです。紛れの非常に多い局面から、強引とすらいえるような妙手の連発で局面を切り開いていく作品を多く残しています。こうした妙手主義、難解主義は看寿の華麗な作風と並んで、後世に影響を与えました。そんな宗看の代表作がこちらです。



伊藤宗看作 (1734年 将棋無双 30番)

▲ 2三金 △ 2五玉 ▲ 2四金 △ 同 玉



初手からいきなり四手かけて2二の金を消してしまいます。途中さまざまな変化がありますが略。ともあれ、このような捨て駒の押し売りは宗看の得意技の一つです。この金を捨てる手は将来の伏線になっています。以下飛車をもぎ取って左辺下部へ追い込みます。

- ▲ 3四飛成 △ 同 玉      ▲ 3三飛 △ 4五玉      ▲ 3五飛成 △ 5六玉
- ▲ 5五龍 △ 6七玉      ▲ 6六龍 △ 7八玉      ▲ 7九香 △ 同 玉
- ▲ 6八銀 △ 8八玉      ▲ 7七龍 △ 9八玉      ▲ 9九歩 △ 同 玉
- ▲ 9七龍 △ 9八銀成



この局面から、雄大な趣向手順が実現します。主役はいま4八にいる馬です。

- ▲ 6六馬    △ 8九玉    ▲ 5六馬    △ 9九玉    ▲ 5五馬    △ 8九玉
- ▲ 4五馬    △ 9九玉    ▲ 4四馬    △ 8九玉    ▲ 3四馬    △ 9九玉
- ▲ 3三馬    △ 8九玉    ▲ 2三馬    △ 9九玉    ▲ 2二馬    △ 8九玉
- ▲ 1二馬



合駒が利かないことを見越して、馬が一路ずつじりじり離れていきます。途中▲5六馬に△7八歩合なら▲同馬△同玉▲7七竜以下作意に短絡するわけです。攻め方もそんなことは百も承知で「合駒をくれないなら、1二に落ちている歩を自分で取りに行きますよ」と馬を遠ざけていくわけです。

A このとき▲2二馬とするために、初形の2二金は邪魔駒だったというわけか。

そういうことです。初形からは見えない馬のラインを開けるための伏線を、宗看らしい捨て駒でもって表現した味わい深い序でした。序に将来の伏線を入れておくという作り方も、一つの作り方として現代詰将棋に受け継がれています。さて、1二の歩を拾った馬が戻ってきますよ。

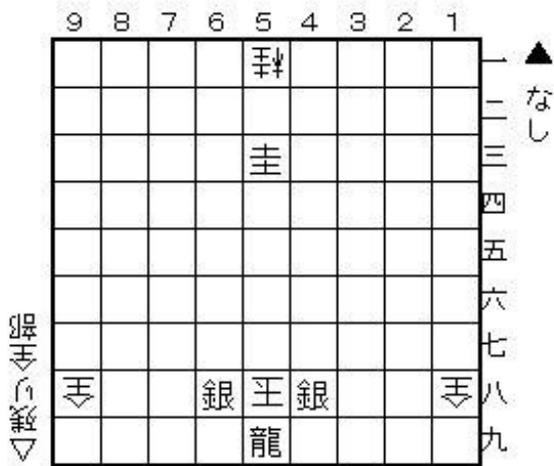
- △ 9九玉    ▲ 2二馬    △ 8九玉    ▲ 2三馬    △ 9九玉    ▲ 3三馬
- △ 8九玉    ▲ 3四馬    △ 9九玉    ▲ 4四馬    △ 8九玉    ▲ 4五馬
- △ 9九玉    ▲ 5五馬    △ 8九玉    ▲ 5六馬    △ 9九玉    ▲ 6六馬
- △ 8九玉    ▲ 6七馬    △ 9九玉    ▲ 7七馬    △ 8九玉    ▲ 7八馬
- △ 同 玉





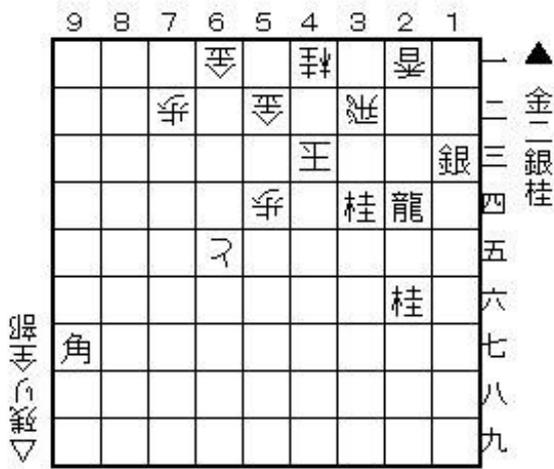
はたせるかな、右側で先ほどと同様の馬鋸が出現しました。今度は玉を3八に引っ張り出すためだけの片道馬鋸です。以下収束してみるとどうでしょう。

△同玉 ▲3七龍 △4九玉 ▲3九龍 △5八玉 ▲5九龍  
 まで119手詰



**B 左右対称形！**

そうです。成銀ということまで一致しています。左右で同じ趣向が出る作品で左右対称形の詰上がりにするというのは作者の美意識が感じられますね。なお、この作品では宗看特有の難解さはあまり発揮されていません。というのも、私が難解なだけの作品が嫌いだからなんですが、「詰むや詰まざるや」とまで称された宗看流難解作の片鱗だけでも味わいたいという方は、無双の一番でも少し考えてみるとよいかもかもしれません。一応11手詰ですから。



伊藤宗看作 (1734年 将棋無双 1番) 解答本章末尾にて

A 一応って何さ？

きれいに詰む順が作意で11手とされているんですが、変化手順（玉方の作意とは異なる逃げ方、受け方を詰ます手順）が平気で17手とか19手とかだったりするので。そして全部が変化の変化なども伴っていて超難解です。でもとにかく全部詰むことは詰みます。本当に読みの訓練というだけならもってこいです。

B そういえば図巧、無双の二冊を解けば最低でもプロ四段にはなれるって有名な言葉があるよね。

そうですね。でもウソです。第一、図巧と無双には何作か不詰作があるし。それはおいておいても、読みの力をつけるためだけに図巧や無双を解くというのは、なんだか漫画で漢字の勉強をするような、変な感じがします。もっと肩の力を抜いて詰将棋と向き合ってほしいなあというのが僕の願いです。

さて、古図式を語る上でもう一人、避けては通れない作家がいます。久留島喜内です。彼は江戸時代の高名な和算家でもあり、作品にも数学的思考が反映されていると言われています。その代表作のいくつかは、味つけもそこそこにむき出しの論理の積み重ねで構成されており、その手法は知恵の輪に例えられました。詰将棋を高度に論理的なパズルとして提示した最初の人物であると思います。



久留島喜内 (年代不詳、将棋妙案79番)  
本作は「馬知恵の輪」と呼ばれる作品です。

A 年代不詳？

久留島喜内は細事にこだわらない天才タイプで、数学の業績も詰将棋作品も記録に残さなかったそうです。自分の頭にあればそれでいいという感覚だったんでしょうね。「将棋妙案」をはじめとする作品集は、後年に弟子がまとめたものとされていますが詳細は不明です。では作品に入りますよ。

▲ 5七金 △ 同 玉 ▲ 4七香 △ 同 玉 ▲ 4八馬 △ 3六玉



ここから馬で玉を追い上げる回転が始まります。その回転の間に、いくつかの鍵が散りばめられています。その鍵はいずれも論理的に繋がっていて、一つ前の鍵を見つけないと次の鍵を開けることはできません。

▲ 3七馬 △ 2五玉 ▲ 1五馬 △ 3四玉 ▲ 2四馬 △ 4三玉  
▲ 4二馬 △ 5四玉 ▲ 5三馬 △ 6五玉 ▲ 7五馬 △ 5六玉  
▲ 6六馬 △ 4七玉 ▲ 4八馬 △ 3六玉

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
龍	馬						銀		▲ 桂
				と		銀			二
卒	卒								三
				玉				と	四
	と		玉	卒	玉				五
		銀		玉	王				六
		金	銀					玉	七
		玉			馬		金		八
		龍	歩		歩			歩	九

最初の鍵は簡単です。回転の仕組みを確認しながら一回転している間に、6六の桂を入手できます。これを使って次の鍵を開けます。

- ▲ 3七馬    △ 2五玉    ▲ 1五馬    △ 3四玉    ▲ 2四馬    △ 4三玉
- ▲ 4二馬    △ 5四玉    ▲ 5三馬    △ 6五玉    ▲ 7五馬    △ 5六玉
- ▲ 6八桂    △ 同銀成

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
龍	馬						銀		▲ なし
				と		銀			二
卒	卒								三
				玉				と	四
	と	馬		玉	卒	玉			五
		銀		王	玉				六
		金						玉	七
		玉	玉				金		八
		龍	歩		歩			歩	九

▲ 6八桂と捨てて、銀を移動させました。これによってどのような効果をもたらされるのか、次の回転に入りましょう。

- ▲ 6六馬    △ 4七玉    ▲ 4八馬    △ 3六玉    ▲ 3七馬    △ 2五玉
- ▲ 1五馬    △ 3四玉    ▲ 2四馬    △ 4三玉    ▲ 4二馬    △ 5四玉
- ▲ 5三馬    △ 6五玉    ▲ 6八龍



この瞬間に▲6八竜と取るために、銀を動かしておく必要があったんですね。この銀をどう使うのでしょうか。

- △同 と ▲7五馬 △5六玉 ▲6六馬 △4七玉 ▲4八馬
- △3六玉 ▲3七馬 △2五玉 ▲1五馬 △3四玉 ▲2四馬
- △4三玉 ▲4二馬 △5四玉 ▲6三銀



▲6三銀と鋭い手が入ります！これを△同玉は▲5三馬以下簡単ですね。

- △同 角 ▲5三馬 △6五玉 ▲7五馬 △5六玉 ▲6六馬
- △4七玉 ▲4八馬 △3六玉 ▲3七馬 △2五玉 ▲2一龍



角が移動したことにより、竜を活用できるようになりました。▲2一竜と銀を取って迫ります。ここで△同銀は▲1五馬△3四玉▲2三銀△4三玉▲5二馬で、3四がふさがったので一回転して詰みます。したがって合駒ですが、▲1五馬△3四玉▲3二竜に備えて2三に銀を合駒するのが正解になります。

△2三銀打 ▲1五馬 △3四玉 ▲3二龍 △同銀 ▲2四馬  
 △4三玉 ▲4二馬 △5四玉 ▲5三馬 △6五玉 ▲7五馬  
 △5六玉 ▲6六馬 △4七玉 ▲4八馬 △3六玉



こうして銀を二枚手に入れたことで、最後の鍵を開けることができます。先ほど6八で銀を取ったときは一枚しか手に入らなかったことに注意してください。

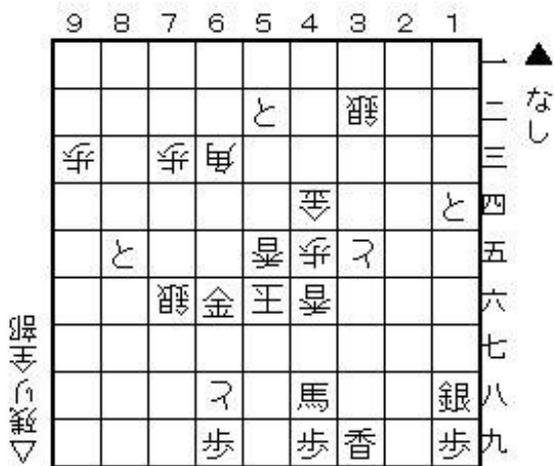
▲2七銀 △同成香 ▲同金 △同玉 ▲1八銀 △3六玉  
 ▲3九香



成香を清算して、▲3九香を据えることができました！以下は回転ルートがふさがったので一回転して詰み上がります。

△2五玉 ▲1五馬 △3四玉 ▲2四馬 △4三玉 ▲4二馬  
 △5四玉 ▲5三馬 △6五玉 ▲7五馬 △5六玉 ▲6六馬  
 △4七玉 ▲4八馬 △5六玉 ▲6六金

まで119手詰



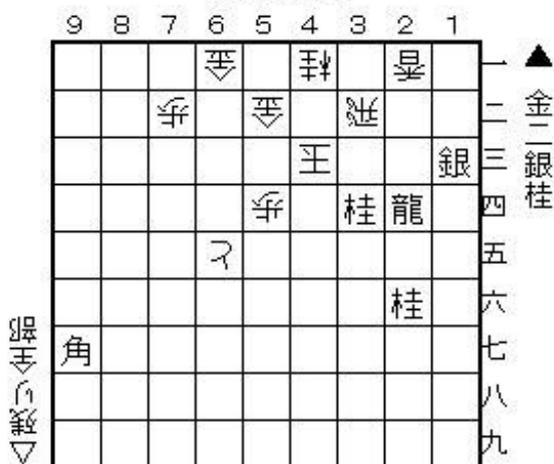
A 本当にパズルって感じだね。入れ替えパズルとかあるじゃない。それを将棋のルールを使って作りましてって感じ。

B 単純に馬がぐるぐる回るのが面白かった。何回転したかな。

鍵が六個で、回転数も六回ですね。一回転のうちに鍵が二個入っちゃうと面白くない。あくまで一サイクルに一個の割合で鍵が入ることで、手数も伸ばせるし単純に構成として面白くなります。このような久留島喜内の創作法もまた、後世の長編作家に大きな影響を与えました。

江戸時代の三大作家の作品を見ていただきましたが、いかがだったでしょうか。作風をまとめると、華麗な看寿、豪快な宗看、緻密な喜内といったところでしょうか。このように栄華を極めた江戸詰将棋ですが、この後、将棋所が献上図式を廃止してしまったこともあって、しばらく低迷期に入ります。しかし昭和の作家たちには時代を超えて看寿、宗看、久留島喜内らの作品の良さが伝わり、現代詰将棋の基礎となりました。現代詰将棋の価値観のほとんどは、これら古典のうちにすでにあると言っていいでしょう。次の章からは、そうした古典の影響を消化しさらに進化した昭和～平成の作品を見ていただきます。

【再掲図】



無双1番 正解

- ▲ 4 二桂成    △ 同 金    ▲ 3 三金    △ 同 金    ▲ 4 四銀    △ 同 金
- ▲ 3 三龍    △ 同 玉    ▲ 4 五桂    △ 同 金    ▲ 3 四金

まで11手詰

変化手順[2]

四手目 △同飛には▲4四銀△5二玉▲4二角成で

△6二玉なら▲7四桂で

△7三玉なら▲8三金△同玉▲3三龍△同桂▲8一飛以下

△6三玉なら▲3三龍△同桂▲5三馬△7四玉▲8五金以下

△6三玉なら▲3三龍で

△同桂なら▲9三飛△7三合▲5三馬△7四玉▲6六桂以下

△5三桂合なら▲同龍で

△同桂なら▲同馬△7四玉▲8五金△7三玉▲9三飛以下

△7四玉なら▲8五金△同玉▲8七飛△8六合▲8三龍以下

△同桂には▲4四銀△5二玉▲5三金以下

△5二玉には▲5四龍で

△6二玉なら▲6三歩△7一玉▲8二銀以下

△5三歩なら▲同角成で

△同金なら▲6三金△5一玉▲4三桂まで

△同桂なら▲6三金で

△5一玉なら▲4二金△同飛▲4三桂△同飛▲4一金△同玉▲4三龍以下

△4一玉なら▲4二金△同飛▲3三桂△3二玉▲2三銀以下

六手目 △5二玉には▲5三金△同桂▲同銀成△5一玉▲2一龍以下

八手目 △5二玉には▲5三金△同桂▲同龍△4一玉▲3三桂以下

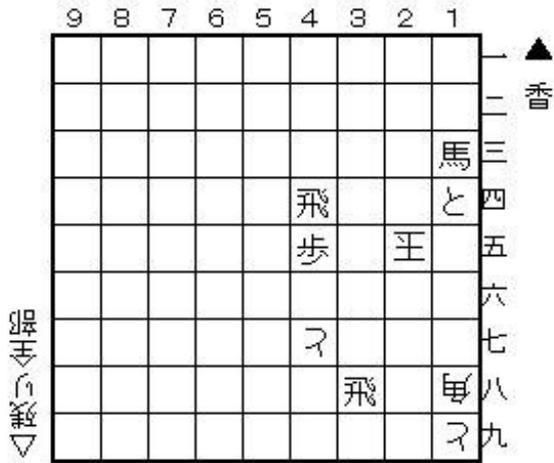
---

[2]変化手順の詳細は「詰むや詰まざるやー将棋無双・将棋図巧」（門脇芳雄、1975、平凡社東洋文庫282）によった。

### 第三章 構想派作家の黄金期

古典詰将棋の代表的な作品群を見ていただきました。こうした作品群にすでに表れていた、詰将棋の論理的な側面は昭和に入ってさらに研究されてゆきました。これに影響を与えたのはたとえばすでにご紹介した看寿の図巧一番のような作品です。あの作品のように、将棋のルールなどを論理的に利用して巧妙な手順を成立させたり、解答者へ謎解きを提供する作品を志向する作家は構想派と呼ばれています。彼らは競うように、新手筋や既存のルールに新しい視点を投げかける手順を開発してきました。ここではそうした作品を鑑賞していくことにしましょう。

まずは変則合駒の出る作品を見ていきましょう。特に昭和に入って、合駒を作品内で巧妙に処理する技術が進歩しました。ある時期には、森田正司や北川邦男らを中心に、変則的な合駒を取り入れることで短編中編に新味を出そうとする試みが活発になされました。その中から一作をご紹介します。



北川邦男作 (近代将棋1961年2月号、第17期塚田賞短編賞)

B すごくシンプルな図に見えるよ！ 今なら簡単に解けそう。

A ずっとすごい盤面を見てきたからなー。

そう思うのも無理はありませんが、これは解こうとすればなかなか手ごわいですよ。

A まずは単純に▲2八香とか打ってみるか。

△1六玉は▲1五と△1七玉（同玉は▲1四飛）▲3五馬までですね。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
									▲ なし
									▲ なし
					飛				▲ なし
				歩	馬		と		▲ なし
									▲ なし
				王					▲ なし
				飛	香	馬			▲ なし
								王	▲ なし
								王	▲ なし

そこで△2七合駒を考えます。金合以外なら何合でも、▲同香に対して△1六玉で捕まらなくなります。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
									▲ 銀
									▲ 銀
								馬	▲ 銀
					飛		と		▲ 銀
				歩					▲ 銀
								王	▲ 銀
				王					▲ 銀
				飛	香				▲ 銀
								馬	▲ 銀
								王	▲ 銀

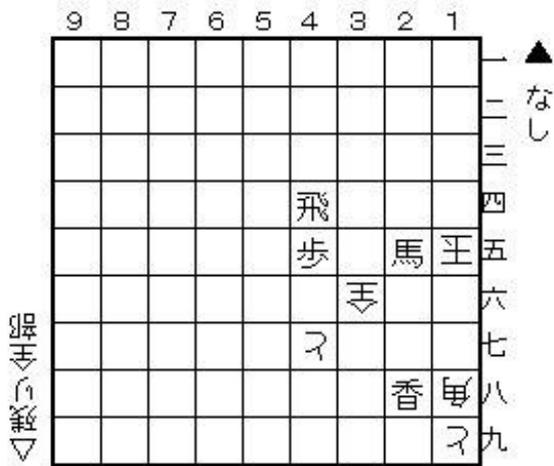
2七から3八への脱出を防げませんね。そこで合駒を取らずに攻める必要があるわけですが.....

△2七歩合は▲3五馬△1六玉▲3六飛まで。金合でも結局2六の駒数が足りてるから詰みます。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
									▲ なし
									▲ なし
									▲ なし
					飛			と	▲ なし
				歩	馬				▲ なし
						飛		王	▲ なし
				王					▲ なし
				飛	香				▲ なし
								馬	▲ なし
								王	▲ なし

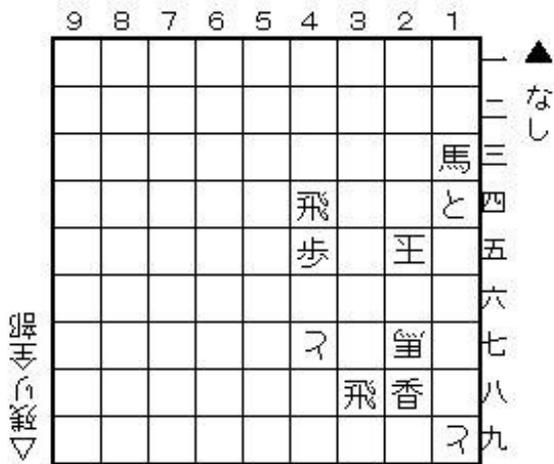
B なるほど、じゃあ△2七銀合かな？

それも残念ながら▲3五馬△1六玉▲3六飛△同銀成▲1五と△同玉▲2五馬まで。



A わかった、きつとこうするんだ。

▲ 2八香    △ 2七角成！

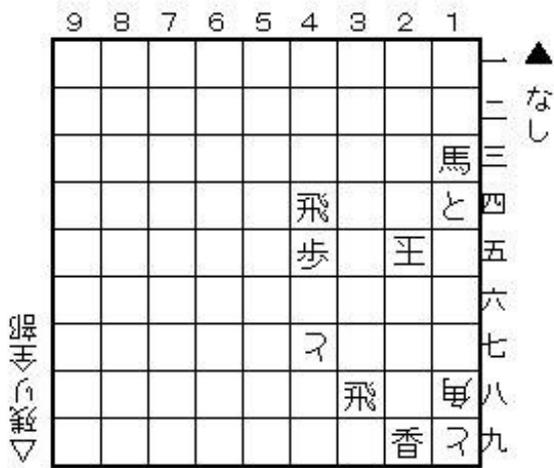


A これなら▲ 3五馬△ 1六玉▲ 3六飛△同馬で、▲ 1五と△同玉としても馬が2五に利いてて詰まない。この図で単に▲ 1五ととしても、取れば詰むけど△ 2六玉で詰まない。あとめぼしい手は……。▲ 2四飛は△ 1六玉▲ 1五とで、これも取ってくれば詰むけど△ 1七玉▲ 2七飛△ 1八玉で詰まない。



このように、▲ 2八香には△ 2七角成が最強の抵抗で詰まないのです。では何がおかしかったの

でしょうか。上の図に気づきのヒントがあります。この変化で、初手に香を2九から打っていたらどうでしょうか。この1八の空間は飛車が利いていて、この変化も詰みではないでしょうか。



B 二枚も利いてるところに打つの？

A なるほど、ちょっと浮かびにくいけど△同とは▲2四飛△1六玉▲1八飛で簡単か。△同角成なら▲3五馬△1六玉▲3六飛△2七玉▲2四飛△1八玉▲1六飛まで。これは取れないんだね。

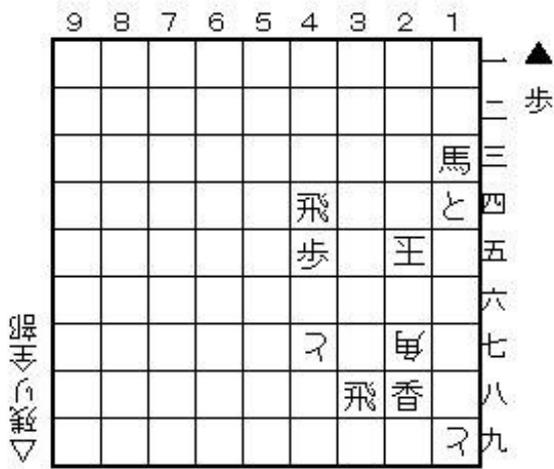
B 本当だ。これで△2七角成も詰むし、これが正解？

残念ながら違います。玉方は△2八歩合と落として抵抗します。



これを▲同香と取らせてさらにすごい手が出ます。

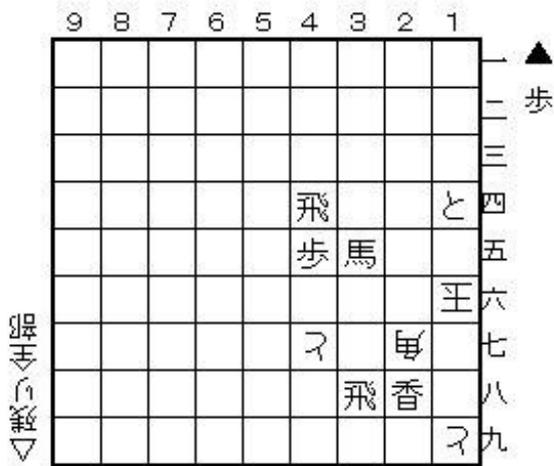
▲同 香 △2七角不成！



**A 移動中合を不成で!!**

そうです。先に△2八歩を落としておいた効果で、この図から▲2四飛が詰まなくなっています。1八に潜り込めるスペースが復活したからです。そのかわり、先ほどと違って一步渡しているので、次の手順が生じています。

▲3五馬 △1六玉

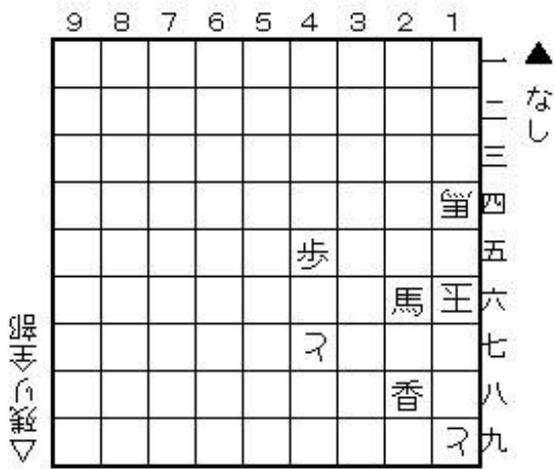


この時、角が成っていると▲1七歩△同馬▲2五馬までですね。したがってこの手順を避けるために、角は不成でなくてはならないのです。この四手は中編の内容と言ってもいいくらい密度の濃い攻防で、短編詰将棋史に残るものです。この図以下、二枚の飛車をさばいて軽快に収束します。

▲3六飛 △同角成 ▲1五と △同 玉 ▲1四飛 △同 馬

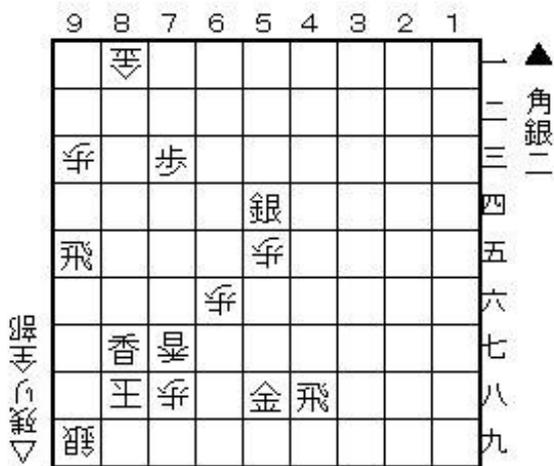
▲1六歩 △同 玉 ▲2六馬

まで15手詰



A とてもじゃないけど15手の内容とは思えなかったな。

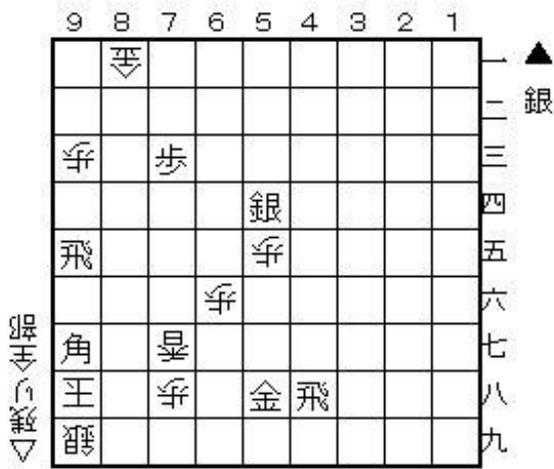
変化紛れが複雑に絡み合っ、相当の手を読まされているからですね。またこの絡み合いを分析すればするほど、奇跡的なバランスでこの作品が成立していることがわかります。北川邦男はこのような高度な構想に基づいた不思議な手順を、簡潔な構図と短い手数ですっきりと表現してみせ、一世を風靡した短編作家です。夭折が惜しまれます。



「ハレー彗星」 森長宏明作 (近代将棋1980年8月号、第56期塚田賞長編賞)

森長宏明は昭和詰将棋を語る上で欠かせない作家のひとりです。その才能は特に構想中編や長編趣向作などで発揮され、数々の名作を残しています。その中から代表作の一つをご紹介します。

▲ 9七角 △ 8七玉 ▲ 9八銀 △ 同 玉



序が終わり、ここからが主題です。

A とりあえず自然に▲5三角成としてみるか。

想定手順

▲5三角成 △8九玉 ▲4九飛 △7九歩成 ▲9八銀 △7八玉  
▲7九飛 △同 玉 ▲3五馬

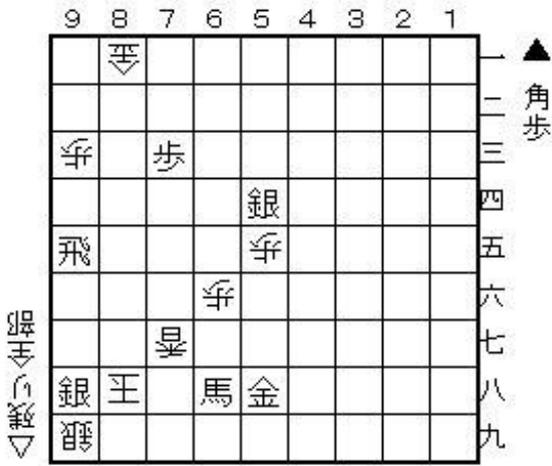
【仮想図】



ここが問題の局面です。△8八玉は▲8九歩△7八玉▲6八馬で簡単、また△7八玉は▲6八金△7九玉▲6七金と金を繰り替えるのが好手で、以下△7八玉▲6八馬△8八玉▲7七馬△7九玉▲6八馬△8八玉▲8九香まで。したがって玉方は工夫します。

△6八角! ▲同 馬 △8八玉

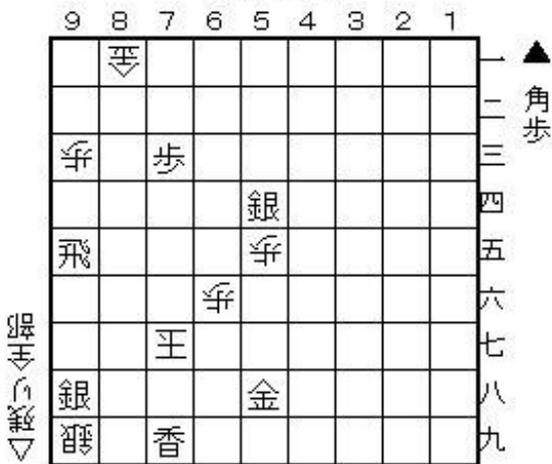
【仮想図】



△6八角の捨て合が急所。これを▲同馬と取らせてしまえば、先ほどの金の繰り替えで香に狙いをつけることができません。上図で打ち歩詰めのようなのですが、打開策があります。

▲7七馬 △同 玉 ▲7九香

【仮想図】



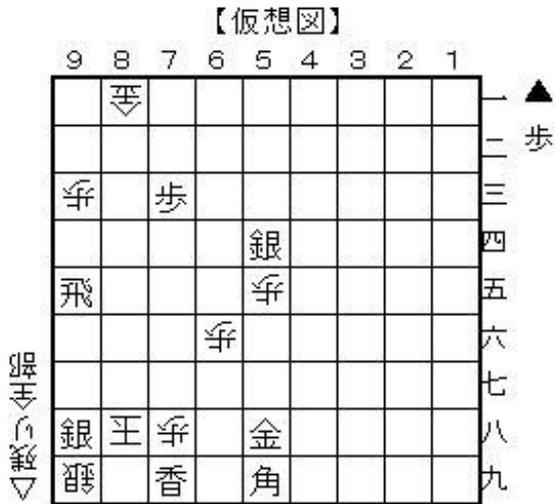
ぱっさり▲7七馬が唯一の手です。同玉に対し、あわてて▲6八角と打つと△7八玉に▲7九香と打たされ（7三に攻め方歩があることに注意）△8八玉でまた打ち歩詰めになってしまいます。

【仮想図】



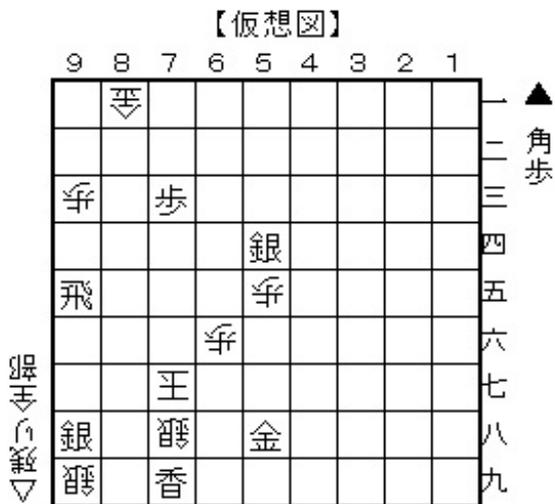
したがって先に▲7九香と据えて合駒を尋ねるのが正解です。歩合なら今度は7九に利かないよ

うに▲5九角と控えて打ちます。以下△8八玉で次図。



以下▲8九歩△7九玉▲6八角△6九玉▲5九金までです。この▲5九角に備えて8九に利く駒を合駒する必要があるようです。この場合は銀合が正解です。

△7八銀



さて、これで▲5九角は詰みませんが、そのかわり8九に玉方の利きが発生しているので打ち歩詰を打開することができます。

▲6八角    △8八玉    ▲8九歩

【仮想図】



以下清算して上部に追い出します。

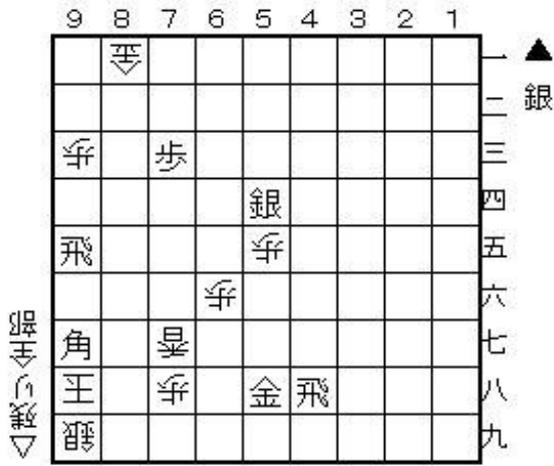
- △同銀成 ▲同 銀 △同 玉 ▲7八銀 △8八玉 ▲7七角
- △7九玉 ▲9九飛 △7八玉 ▲6八金 △8七玉 ▲8九飛
- △7六玉 ▲8五銀 △7五玉 ▲8六角 △8五玉 ▲5三角成
- △9四玉

【仮想図】



さて、順調に追ってきたのですが、ここではたと手が止まります。もう、うんともすんとも手が続きません。したがって解答者はここで今までの手順を点検する必要に迫られるわけです。しかしこれは鑑賞ですから、ネタばらしをしてしましましょう。ここであと一歩あれば、▲9五歩以下詰むのです。その一歩をどこで稼ぐか？それが作者が設定した本作の謎解きです。それには打ち歩詰に関わるある構想を看破する必要があります。仮想図手順が始まる前の最後の図、問題設定図に戻ってみましょう。

【再掲図】



ここで▲5三角成と開いたのでしたね。

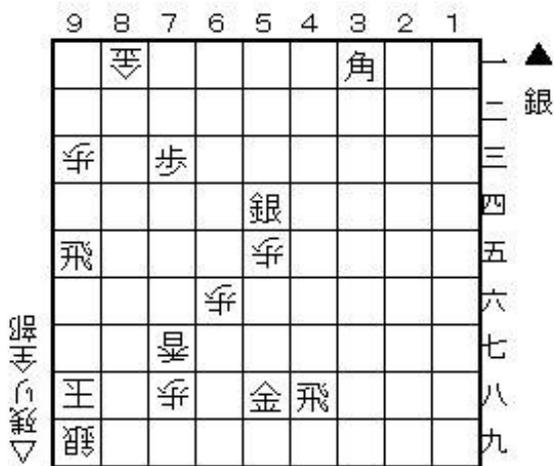
B でも、角の開き場所で一步変わってくるって言われてもピンとこないけど.....

角の開き場所だけが問題なのではありません。開き場所と開き方が問題なのです。

A 開き方って言ったら、あれしかないじゃないか。

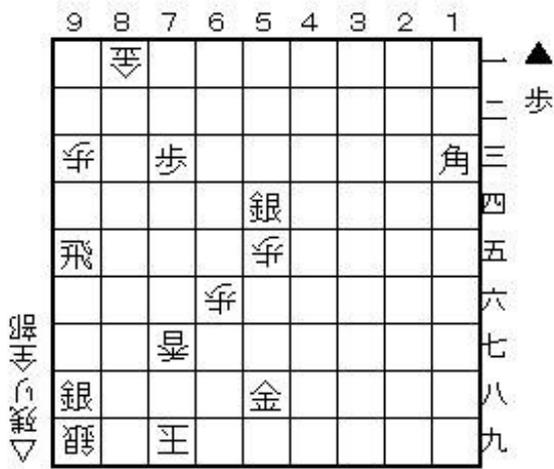
正解手順

▲3一角不成！



B 一番遠くに不成で開くのが唯一解なのか！ でもどういう意味？  
手順を追ってみましょう。

- △8九玉    ▲4九飛    △7九歩成    ▲9八銀    △7八玉    ▲7九飛
- △同 玉    ▲1三角不成！



ここで▲1三に生角の状態をしたい、というのが攻め方の目論見なんです。つまり、この状態からならこのあと角にも馬にもなれる。そのための唯一の組み合わせが▲3一角不成から▲1三角不成だったんです。

A 角を選べることのメリットが歩の入手になにか結びつくの？

まず、△8八玉や△7八玉が先ほどの変化と同様に詰むことを確認してください。この変化では6八に馬が来れることが重要なわけですね。したがって、先ほどの手順では△6八角合と受けていたのですが、角のままというオプションも選べる状況ではどうでしょう。

仮想手順

△6八角 ▲同角不成 △8八玉 ▲8九歩

【仮想図】

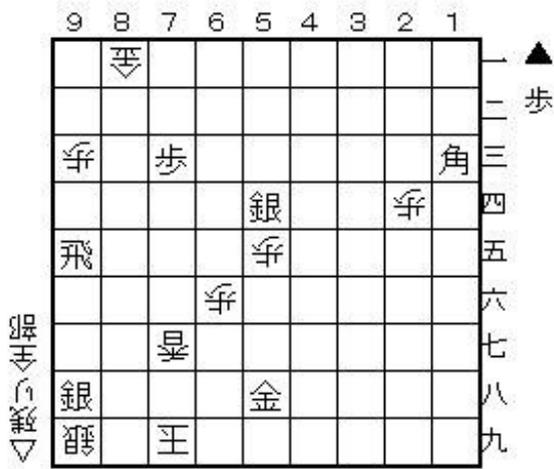


B ▲8九歩が打てる！

A △以下7八玉に▲8七角か。▲6八同角不成に△7八玉なら▲8九角以下だね。

そのようなわけで、角も馬も選べるという状態を玉方は許しちゃいけないわけです。そこで次のような手が必要になります。

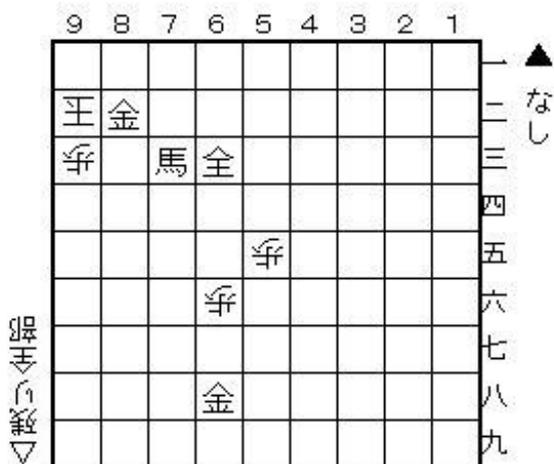
△2四歩！



△2四歩。味わい深い手ではないでしょうか。1三の角というのは玉方が△7八玉か△6八角合かを見極めてから態度を決めますよ、という手なわけです。それに対し、いえいえ、そちらが先に態度を決めてください、こちらはそれを見て手を選びますから、というのがこの△2四歩の意味なのです。このような手筋を打診中合と呼びます。棋は対話といいますが、まさにそんな感じの攻防ですね。さて、これを▲同角不成では今度こそ△7八玉で詰まなくなるので、▲同角成が必然になります。そして先ほどの仮想手順に合流するわけですが、違うのは打診中合をさせた分、一步多く入手できたことです。したがってさきほどの最後の仮想図で▲9五歩が叩けて収束します。以下長手数になりますが並べてみてください。

- ▲同角成 △6八角 ▲同馬 △8八玉 ▲7七馬 △同玉
- ▲7九香 △7八銀 ▲6八角 △8八玉 ▲8九歩 △同銀成
- ▲同銀 △同玉 ▲7八銀 △8八玉 ▲7七角 △7九玉
- ▲9九飛 △7八玉 ▲6八金 △8七玉 ▲8九飛 △7六玉
- ▲8五銀 △7五玉 ▲8六角 △8五玉 ▲5三角成 △9四玉
- ▲9五歩 △同玉 ▲8六馬 △8四玉 ▲8五馬 △8三玉
- ▲8四馬 △9二玉 ▲7四馬 △9一玉 ▲8一飛成 △同玉
- ▲7二歩成 △同玉 ▲6三銀成 △8一玉 ▲7二金 △9一玉
- ▲7三馬 △9二玉 ▲8二金

まで65手詰



打診中合自体は、江戸時代の古典にその最初の作品が作られています。本作ではそれを含みに一歩を探す伏線構想作としてまとめたところにオリジナリティーがあります。しかもその表現として、最遠への不成限定移動というインパクトのある手を導入したのはすばらしいセンスです。また、ハレー彗星というタイトルも、最遠移動したかと思うと大きな弧を描いて戻ってくる角の軌跡を見立てたもので、論理的にも感覚的にも大変美しい作品になっています。

A 収束は特に面白い手もないみたいだけど。

確かに妙手と言えるような手はありませんが、詰上がり図を見ていただければわかるように、構想の舞台を全部処理しきってさっぱりとした詰上がりになっています。特に現代詰将棋において、テーマを演じた部分と収束の部分を同一の空間でこなすという構成法の評価は非常に高いです。要するに、収束用の駒だとかは、少なければ少ないほどいいわけです。駒数さえ増やしていれば、作者の技量をもってすれば収束に妙手を入れることは簡単でしょう。しかしそれでは演出が過剰になると感じてこの簡潔な図を選んだはずです。そういった作者の美意識も鑑賞してほしいですね。



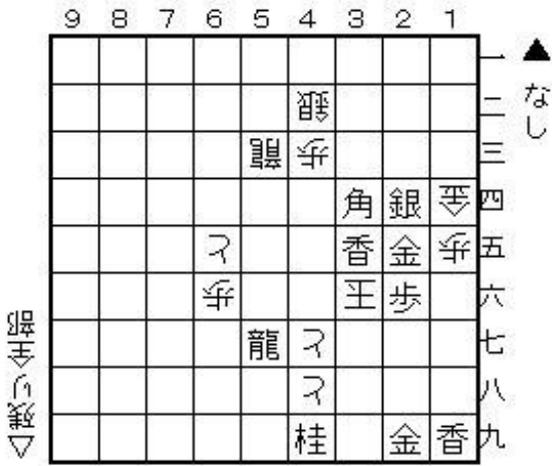
市島啓樹作 (詰将棋パラダイス1997年11月号)

これも打ち歩詰に関連した作品ですが、作例の非常に少ない手筋が出てきます。まずは自然に進めてみましょう。

初手からの仮想手順

- ▲ 7一角      △ 5三歩      ▲ 同角成      △ 同 竜      ▲ 4五歩      △ 同 玉
- ▲ 3四角      △ 3六玉

【仮想図】



この順は駒不足のようです（なお、この逃れ手順はこの後の手順と比較しやすいものを選んでいきます。実際には▲7一角に△4五玉くらいでも逃れ）。それではどうすればよいのでしょうか。玉方の1四金に狙いがつけられる方は鋭いです。

正解手順

▲ 3四金 △ 4五玉 ▲ 4四金 △ 同 玉 ▲ 7一角

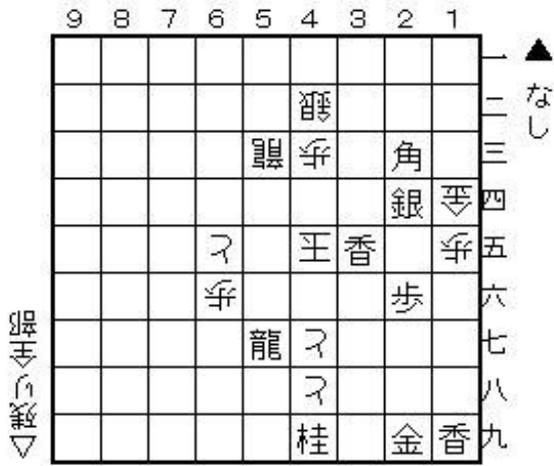


なんと初形から2五の金が邪魔駒。以下玉方が平凡に対応するようになります。

想定手順

△ 5三歩 ▲ 同角成 △ 同 竜 ▲ 4五歩 △ 同 玉 ▲ 2三角

【仮想図】



以下△3六玉には▲1四角成（これが2五金を消去しておいた効果）△4五玉▲2三馬△3六玉▲3七金以下ですね。したがってここで玉方は金を取られないような着手をする必要があります。それが次の手。

△3四歩

【仮想図】



これは▲同角成と取らざるを得ません。以下△3六玉で金は取れませんが、さらに続けて▲3七歩△2六玉（△同とは▲同竜まで）▲1五銀△同金とすると次の図になります。

【仮想図】



以下▲2七歩△同玉▲4五馬△2六玉▲3六馬までですね。

A 金消去の伏線はともかく、その後はずいぶん単純に詰んだ気がするけど、こんなものなわけ？  
もちろん違います。玉方には▲7一角の王手に対して巧妙な延命手段があるのです。上の図は重要な変化図ですから覚えておいてください。後に戻ってくるようになります。

【再掲図】



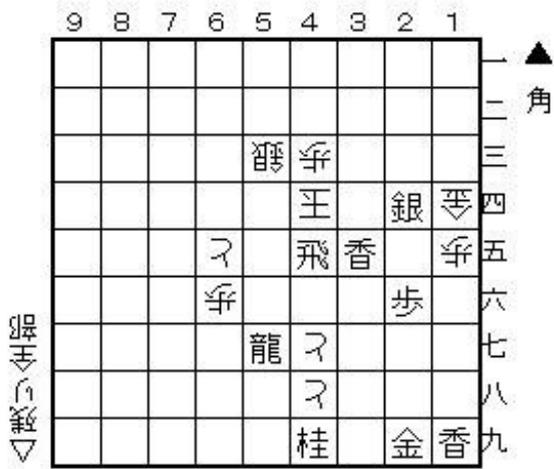
正解手順

△5三龍！



竜を移動合するのが正解です。これだけでは狙いがはっきりしませんからもう少し進めましょう

▲同角成 △同 銀 ▲4五飛



B あれ、結局この飛車を4五に捨てるしか手がないんだね。

そうなのです。先ほどは歩合→4五歩でした。しかしこの局面を冷静に見れば、何合でもその合駒を取ってすぐ捨てるしか手がないことに気づくはずですよ（桂合を除く。なお桂合は上の局面から▲3六桂で早い）。ということはどういうことになりますか？

B どういうこと？

A .....4五で捨てさせる駒は、玉方の意思で決定できるってことか！

その通りです！

B それが詰むかどうかにどう繋がるの？

玉方にはどうしても飛車を捨ててほしい理由があるのです。

△同 玉 ▲2三角 △3四飛！



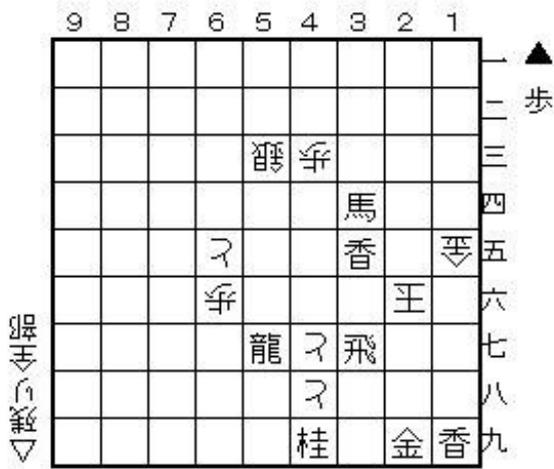
B 飛車の捨て合だ！

先ほどはこの捨て合が歩でしたので簡単に詰みました。しかし飛車ならどうでしょうか？

A ふつうはより強い駒が入手できたらより簡単に詰むとしたものだけれど。

そう思うのがふつうですよ。では実際に、先ほどと同様に進めるとどうなるのでしょうか。

▲同角成 △3六玉 ▲3七飛 △2六玉 ▲1五銀 △同 金



B ▲ 2七歩が打てない！

その通り、この局面で攻め方は打ち歩詰に誘導されてしまっているのです！ △5三歩合だったときの図と比較してみてください。

【再掲仮想図】

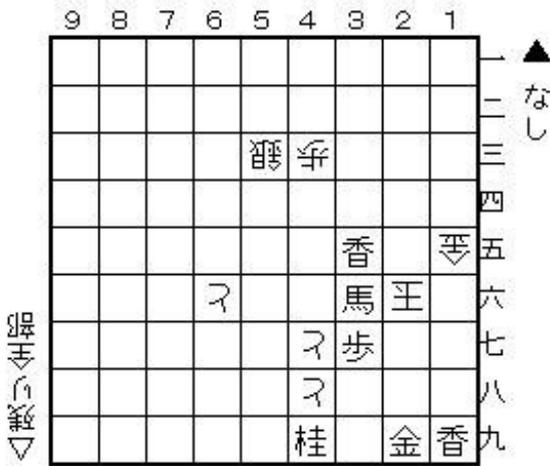


整理しましょう。①玉方は上の再掲仮想図の局面を打ち歩詰にしたい。②そのためには3七に打たれる駒が飛車であればいい。③攻め方が3七に打つ駒は、玉方が3四で捨て合として渡す駒。④3四に飛車合をしたいが、飛車は盤上にすべて出払っていて、駒台にない。⑤そのために玉方はあえて盤上の竜を合駒として用いて、攻め方にとらせる！⑥攻め方はその手に入れた飛車をすぐ捨てるしか手がない。⑦結果として、玉方は盤上に落ちていた飛車を駒台に乗せることに成功する！という筋書きになっているわけですね。分かりましたか？

A 分かった。作者は別の世界の住人だ。

いえいえ、そんなことはありません。しかし、ほかの人がまだ構成していない論理を図化するのが構想作の肝ですから、あるいは別世界の発想というのも褒め言葉になるかもしれませんね。一応専門的なことを言えば、前半のメイン、移動合によって玉方が将来の合駒を盤上から回収しておく手筋と、後半のメイン、歩ではなく高い合駒を渡すことによって打ち歩詰を誘導する手筋はそれぞれ別々に作られています。しかし、それを接合できると考え、実際にそれを盤上に表現した作者はやはりすごいと言えるでしょうね。ところで、部分的には打ち歩詰に誘導された上図ですが、別にこれで不正解というわけではありません。この後、飛車を歩に打ちかえて収束します。並べてみてください。

▲ 3六飛 △同 玉 ▲ 3七歩 △ 2六玉 ▲ 6六龍 △同 と  
 ▲ 2七歩 △同 玉 ▲ 4五馬 △ 2六玉 ▲ 3六馬  
 まで29手詰



A ▲ 6六龍に△ 4六飛合だと？

それは▲同飛△同と▲ 2七歩△同玉▲ 2八飛までですね。

A それは分かるよ。でもそれって同じ29手詰じゃないの？ それで駒が余れば玉方が逃げ間違えたんだって分かるけど、この作品の場合は駒が余らないから正解なのかそうじゃないのか判断できない。

変化同手数と呼ばれる問題ですね。これは詰将棋の厳密なルールを作ろうという運動の上で常に問題になってきたものです。

B 厳密なルールってまだないの……？

ありません。慣習というか、その場その場の空気でなんとなく判断されてきたのです。ですから、ルールに基づいてどちらが正解と強制することはできません。どちらも正解です。また同様に、この作品がルールに基づいて不完全作となることもありません。そういう厳密な議論の道具がまだ出そろっていないのです。まあしかし、この作品について変化同手数を云々する人がいない理由は説明できます。まず第一に、テーマと関係ない部分で発生した変化同手数だということ。メインとなる部分で変化同手数が存在し、メインテーマを解答者に見せることなく終わってしまう可能性がある作品は問題です。また、変化同手数の部分があまりに長い場合も毛嫌いされますが、この場合は収束の5手なのでほとんど気になりません。第二に、変化同手数の中に余詰があることです。△ 6六飛合に対して、▲同飛と取らずに▲ 2七歩と叩く手があります。以下△同玉▲ 4五馬△ 2六玉でさらに以下▲ 3六馬でも▲ 4六飛でも詰みます。つまりこちらの方はもとより詰将棋の体を為していないので、完全作を作る義務のある作者がどちらを作意手順に設定していたかは明らかだというわけです。このような変化同手数の中の余詰を変化別詰と呼びます。これを正解とするか誤解とするか、ということも実はその場の空気で判断されてきた事情があって統一見解はありません。

B ややこしいよ……。

このような規約のあいまいさが詰将棋の敷居を高くしているという意見もありますが、当分詰将棋規約が制定されることはないと思われます。まあ私としては細かいことにとらわれず、ただただ楽しんでほしいという一心です。でもルールの不備ということ言えば、将棋それ自体だって怪しいものですよ。

A そんなことないよ！ 言うに事欠いて将棋の侮辱とは許せん。

まあそうムキにならずに、次の作品を見てください。

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		と		歩	銀			と	飛	▲
			歩			銀		歩	歩	▲
		歩				歩		歩		▲
		金			歩		歩	銀		▲
	桂		歩			王				▲
				銀			歩			▲
					玉		歩	歩	歩	▲
				歩		歩			歩	▲
					歩	歩		歩	桂	▲

「最後の審判」 縫田光司作 (詰将棋パラダイス1997年1月号)

この作品は、詰将棋のルールではなく、「将棋自体のルールの不備」によって、詰むか不詰か決定できないとされています。そのようなわけで、現時点では厳密に言えばこの作品は詰将棋ではありませんが、一応作者の主張を追う形でご紹介いたします。なお作者本人による詳細な解説が<http://www2u.biglobe.ne.jp/~nuida/h/syokei.htm>にありますのでご参照ください。余談ですので細かい変化は省略させていただきます。簡単に手順を追いましょう。

▲ 5 六角

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		と		歩	銀			と	飛	▲
			歩			銀		歩	歩	▲
		歩				歩		歩		▲
		金			歩		歩	銀		▲
	桂		歩			王				▲
				銀	角		歩			▲
					玉		歩	歩	歩	▲
				歩		歩			歩	▲
					歩	歩		歩	桂	▲

初手は▲ 5 六角。これを▲ 6 七角と打つと不詰なのは後ほどご説明します。

以下の手順

△4 四玉 ▲3 三銀引不成 △5 三玉 ▲4 二銀引不成 △5 二玉 ▲7 四角  
 △6 三角 ▲同角成 △同 玉 ▲8 五角 △6 二玉 ▲5 一銀不成  
 △5 三玉 ▲4 二銀上不成 △4 四玉 ▲4 五歩 △同 玉 ▲6 七角

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	と		銀				と	飛	▲なし
		銀			銀		銀	銀	
	銀				銀		銀	銀	
	金			銀		銀		銀	
桂		銀			王				
			銀			銀			
			角	玉		銀	銀	歩	
			歩		王			銀	
				歩	銀		歩	桂	

銀の階段を上下させて角合を奪い、▲8五角と据えなおすのが基本となる手順。これは将来4九の金に狙いをつけるための打ち替えです。ここで黙って△4四玉と逃げると早く詰んでしまいます。したがって上図の局面で4九の金から角道をそらすため、5六に捨て合が必要です。なお、玉方の持ち駒は飛角歩しかありません。したがって△5六歩。これを取るとどうなるでしょうか。

△5六歩 ▲同 角

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	と		銀				と	飛	▲歩
		銀			銀		銀	銀	
	銀				銀		銀	銀	
	金			銀		銀		銀	
桂		銀			王				
			銀	角		銀			
				玉		銀	銀	歩	
			歩		王			銀	
				歩	銀		歩	桂	

B 初手を指した局面に戻っちゃった！

A そんなばかな……。局面が何一つ変わらず同じなんて、無駄な手順じゃないのか？  
 しかしこの作品では、全く同じ局面を繰り返すことにこそ意味があるんですね。

以下の手順

△4 四玉 ▲3 三銀引不成 △5 三玉 ▲4 二銀引不成 △5 二玉 ▲7 四角  
 △6 三角 ▲同角成 △同 玉 ▲8 五角 △6 二玉 ▲5 一銀不成  
 △5 三玉 ▲4 二銀上不成 △4 四玉 ▲4 五歩 △同 玉 ▲6 七角

△5六歩 ▲同 角

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
			と	歩	銀			と	飛	▲
			歩			銀		歩	歩	二
		歩			歩		歩	歩		三
		金			歩		歩	銀		四
	桂		歩		王					五
				銀	角		歩			六
					玉		歩	歩		七
				歩		歩			歩	八
					歩	歩		歩	桂	九

全く同じ手順を繰り返して、この局面は三回目ですね。

B 何がしたいのやら。

- △4四玉 ▲3三銀引不成 △5三玉 ▲4二銀引不成 △5二玉 ▲7四角
- △6三角 ▲同角成 △同 玉 ▲8五角 △6二玉 ▲5一銀不成
- △5三玉 ▲4二銀上不成 △4四玉 ▲4五歩 △同 玉 ▲6七角

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
			と	歩	銀			と	飛	▲
			歩			銀		歩	歩	なし
		歩			歩		歩	歩		三
		金			歩		歩	銀		四
	桂		歩		王					五
				銀			歩			六
				角	玉		歩	歩		七
				歩		歩			歩	八
					歩	歩		歩	桂	九

さて、この局面で今まで通り△5六歩と捨て合できるでしょうか。それが最後の審判です。

B できるに決まってるじゃない。

A 待て待て、何のために今までの手順を繰り返したのかだよ……。△5六歩と打たれた時、攻め方の着手は▲同角しかないわけだ。これは詰将棋だから王手を続けるためにというよりは、自分の玉に対する王手への対応としてこれしか手が無いわけだよ。

B そうだけど……

A そこで問題になるのは、何のために今までの手順を繰り返してきたかっていうことだけど……。確か一つ前の図はすでに三回出てるんだよね？ じゃあ、仮に玉方が△5六歩を打つと、必然的に指さなければならない▲同角の局面が四回目になる。

B 千日手か。

A 違うよ。ただの千日手なら問題ないけど、この場合は連続王手の千日手になるから、攻め方の反則負けになっちゃう。

B え～、じゃあ、この△5六歩は取れないの？ それで逃れか。

A ちょっと待って、その場合先手玉はどういう扱いになるの？ △5六歩を▲同角と取れないとなると、先手玉は詰んじゃってるんだけど……。ただ、その詰ませ方が「歩を打つ手」になるじゃないか！

そのとおりです。この作品の構造とそれを支える作者の主張を整理しましょう。この作品の場合、攻め方は同じ手順を何回も繰り返すこと自体が知恵の輪の鍵になっているわけです。玉方の抵抗である△5六歩は、歩を打つ手でしかも攻め方玉への王手であり、それを外す手もまた玉方への王手しかない。したがって同じ手順が三回繰り返された瞬間に△5六歩は打ち歩詰の禁手になる、というのが作者の主張です。なぜならその歩に対する合法手は▲同角しかないわけですが、それが合法なのは三回目までで、四回目は反則手になってしまうからです。したがって△5六歩に対して攻め方は合法手が存在せず、すなわち詰みになります。しかし△5六歩が詰みならば、それは打ち歩詰の反則手です。結局、四回目のループに入ることはできず、玉方の方が捨て合の延命手段を放棄して手を変えることになります（なお、初手を▲6七角と打っていると、△5六歩▲同角以下一步多く手にしてループに入りますが、上図の▲6七角自体が四回目の着手になってしまい反則で指せません。これが初手▲5六角が限定である理由です）。それによって攻め方は当初の目論見通り4九の金を入手して詰上がります。収束を確認しておきましょう。

△4四玉 ▲3三銀上不成△3五玉 ▲2七桂 △2六玉 ▲1六金

△2七玉 ▲4九角 △同 と ▲2八金

まで69手詰

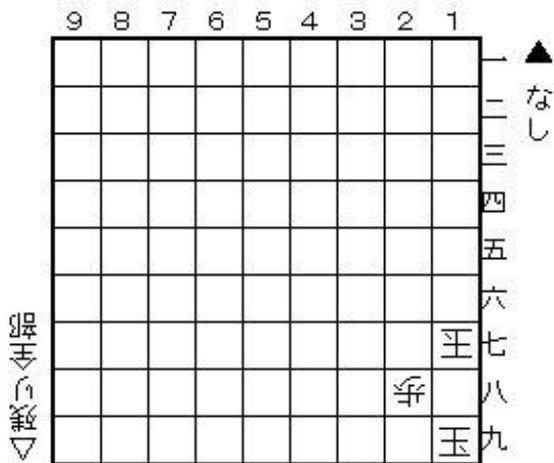
	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
		と		歩	銀			と	飛	▲なし
			歩			銀		皇	皇	二
		皇			歩	銀	歩			三
		金			歩	歩				四
		桂		歩						五
				銀			皇		金	六
					玉		皇	王	歩	七
				歩				金	歩	八
					歩	王		歩		九

本作は作者の意図とは異なり、幅広い議論を呼ぶことになりました。結論として、この作品を詰むとも詰まないとも言えないということになりました。この作品と、それを巡る一連の論争によって、結局次のような将棋のルールの不備が指摘されることになりました。すなわち、「王手の状態から逃れる手が反則手しかない場合、それは詰みとするのか」という部分が、将棋のルール上定義されていないのです。

A そりゃそうなんだろうけど、別にめったに起こることじゃないし、わざわざ取り決めを作るの

もばからしくない？

まあこういうことに面白味を感じるのが詰将棋作家という人種です。そのくせ詰将棋自体のルールは固まっていないわけですが、それは興味がないからというよりはみんな一過言持っているの  
一つに決められないという理由の方が大きいですね。あと、細かいことを言うと将棋ではステ  
イルメイトの扱いも定まっていないですね。これはチェスにある概念で、合法の着手が一つも存  
在しない状態をいいます。将棋では次のような局面で先手番だった場合がそれにあたります。



先手は持ち駒もないし、玉を動かす手は全部反則だし、指せる手がないわけです。

A こんなもん投了しろよ。勝てる可能性がない局面はすなわち負けということだよ。

そう思うのは自然ですが、チェスプレイヤーに対してもそう言えますか？ 実はチェスではステ  
イルメイトの局面は引き分けになります。ですから、負けている方はステイルメイトを狙うのが戦  
術の一つになります。つまり、こういうことです。直観的にはいくら自明なことであっても、そ  
れは実際にルールとして明文化されていない限り、いかなる判断も下せないのです。構想作の話  
からだいぶ脱線してしまいましたが、将棋ファンの方にこそぜひこういうことを考えていただき  
たいと思います。

ちょっと理屈っぽい話が続きましたので、次の章ではもっと単純に楽しめる作品群をご紹介します  
ことにしましょう。

#### 第四章 詰将棋で描くストーリー

さて、先ほどの作品群は非常に論理的なテーマの作品で、作品の狙いをシンプルに言語化するこ  
とができました。しかし、詰将棋のテーマというのは必ずしもここまで論理的である必要もない  
んですね。なんとなく駒が描く軌跡が面白い、といったようなことでもいいわけです。あるいは  
そうした駒の運動の中に詩情を見出す人たちも現れてきました。黒川一郎や初期の山田修司をは  
じめとする、浪漫派と呼ばれる作家群です。まずは小品を一つ。この駒数でシンプルな追い趣向  
が展開される様子を、純粋に楽しんでください。



あとは引き戻すだけです。

△1二玉 ▲2二と △1三玉 ▲2三と △1四玉 ▲2四と  
△1五玉 ▲2五と △1六玉 ▲2六と △1七玉 ▲2七と  
△1八玉 ▲2八と

まで33手詰



B これはずいぶん簡単だね。

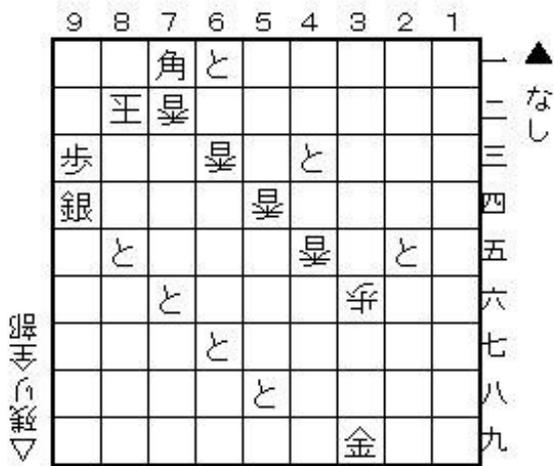
A 全然考えるところがないじゃないか。こんなん詰将棋って言えるの？

浪漫派が登場したころは、古典詰将棋の影響が特に強いころで、序、趣向、収束、さらにたとえば伏線手だとか、難解な妙手が散りばめられた重厚な長編作が優れた作品であるとされていたころでした。そこへ現れた浪漫派の作品は、基本的に難しい手はあまりない。そしてむき出しの趣向が始まったかと思うと、あまり味付けされていないあっさりした収束手順で詰み上がります。過剰な修飾を排除し、シンプルな趣向手順がさらさらと流れていく様子を無心に楽しむことで、そこにある種の詩情が見出される、というのがこの浪漫派の作風でした。したがって、難解至上主義の解答者からは、激烈な批判を受けることも少なくなかったようです。それでも批判にめげず、浪漫派は優れた作品を次々に発表してゆき、次第に市民権を得るようになりました。その作品のいくつかを、その作品に込められた思いとともに鑑賞していきましょう。



「晩鐘」 黒川一郎作 (近代将棋1952年11月号)

- ▲8一步成 △同 玉 ▲8二歩 △9一玉 ▲8三桂打 △同 銀
- ▲同桂不成 △同 馬 ▲8一步成 △同 玉 ▲8二銀打 △同 馬
- ▲同銀成 △同 玉 ▲7一角



上部で守備駒を清算する、率直に言ってあまりひねりのない序から始まって趣向の舞台が整います。▲7一角と打って玉は上がる一手。

B 6一、4三、2五のと金が利いているから馬で追えるんだね。

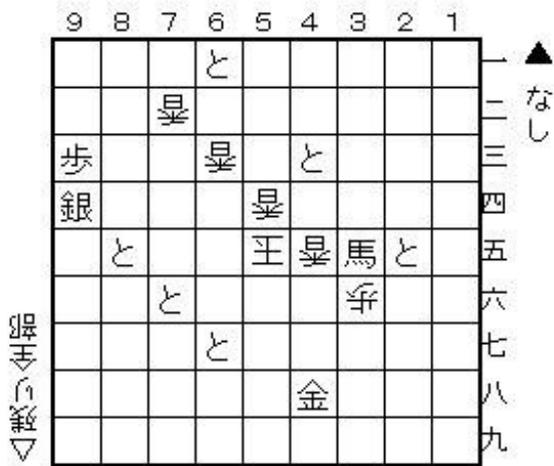
- △7三玉 ▲6二角成 △6四玉 ▲5三馬 △5五玉 ▲4四馬
- △4六玉 ▲3五馬 △3七玉 ▲2六馬 △4六玉



B 途中王様が逆走するとどうなるの？

A それは折り返し趣向に早く入っちゃうから損なんじゃない？ この後の手順を見ればわかるよ。ここから六手一組の捨て絞り趣向が始まります。

▲4七と △同 玉 ▲4八金 △4六玉 ▲3五馬 △5五玉



B なんかこう.....動いた!!

A 4七とにすぐ5五玉と逃げると、5六と～6五と～7四と～以下だね。

▲5六と △同 玉 ▲5七金 △5五玉 ▲4四馬 △6四玉  
 ▲6五と △同 玉 ▲6六金 △6四玉 ▲5三馬 △7三玉  
 ▲7四と △同 玉 ▲7五金 △7三玉 ▲6二馬 △8二玉  
 ▲8三銀成 △同 玉 ▲8四金 △8二玉 ▲7一馬 △9一玉  
 ▲9二歩成 △同 玉 ▲9三金 △9一玉 ▲8二金

まで61手詰

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	王		馬	と						▲
		金	皇							なし
			皇		と					三
				皇						四
					皇		と			五
						手				六
										七
										八
										九
▽										

その趣向手順のまま、詰み上がりました。古典的な作品のように趣向の舞台から追い出して外部で詰ますのではなく、趣向の中に収束も入っているという作り方は、後世の作家に影響を与えました。さて、こうした作品を見て、あなたはどのように感じたでしょうか。作者がこの作品に寄せたコメントがあります。

西空が茜に染まり、鴉が<sup>ねぐら</sup>埒に急ぐ……。遠く鳴り出す山寺の鐘。そう、と金の一つ一つが夕もやに溶けこむ鐘の音。摺りあがる金<sup>ゆうげ</sup>がその余韻を含んで、また一つ鐘が泌みるように鳴る。農夫は鍬を洗い、童らは手をつないで、夕餉の香りを思い浮かべながら家路へ……[3]

B へえ～。情緒があるね。

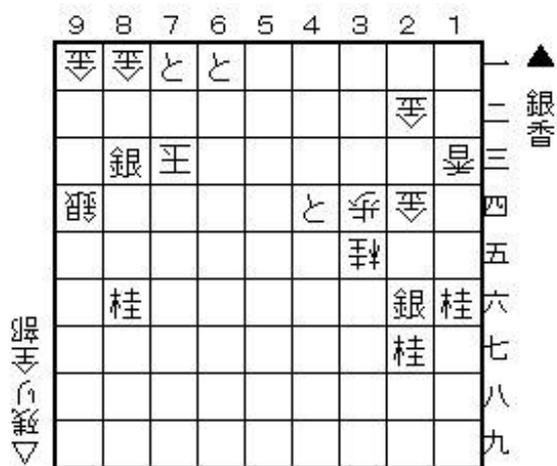
先ほど詰将棋を娯楽小説と純文学に例えましたが、黒川一郎は「詰将棋で詩を書く」と評された作家です。作品のシンプルに感覚に訴える力と、優れた命名も手伝って、ある情景を詰将棋作品の中に詩的感覚でもって体現させることに成功しています。

A 引用の文章は確かに美しい光景だと思うけど、詰将棋を解いた人にこの光景を想像しろって無理じゃない？

いや、それはそれでいいんです。必ずしも作者と同じ光景が脳裏に結ばなければならないというわけでもない。要するにこの作品から、論理的なことを超えて感覚に訴えるものが何かあれば、それでいいわけです。それこそ詩と読者の関係に近いものがあります。もちろん作品に作者の意図はありますが、それに接した人がどのような感覚を抱くかは自由なのです。作者の意図を超えた美しさを感じ取る人もいるかもしれないし、言いたいことはわかるが、まるでつまらんということもあるでしょう。ただこのような観点で詰将棋創作をする人も存在することと、そうした作品の前では無心に楽しむことを覚えていただきたいなと思います。

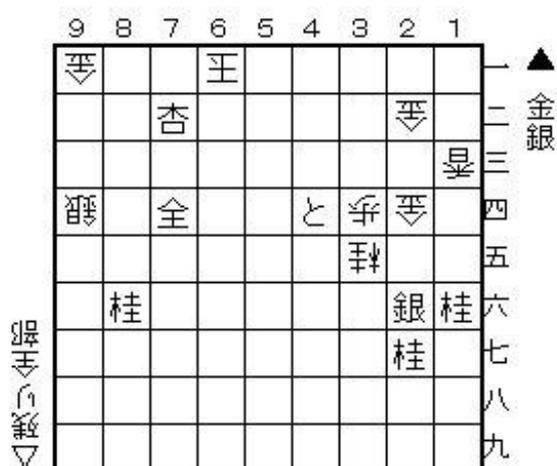
[3]本引用は「近代将棋図式精選」（森田銀杏、1983年、西東書房）からの孫引き。引用先に明記がないが、「将棋浪漫集 趣向型詰将棋百番」（黒川一郎、1973年、西東書房）からの引用と推測される。将棋浪漫集が入手困難で調査できなかった。

浪漫派の作品からもう一作。



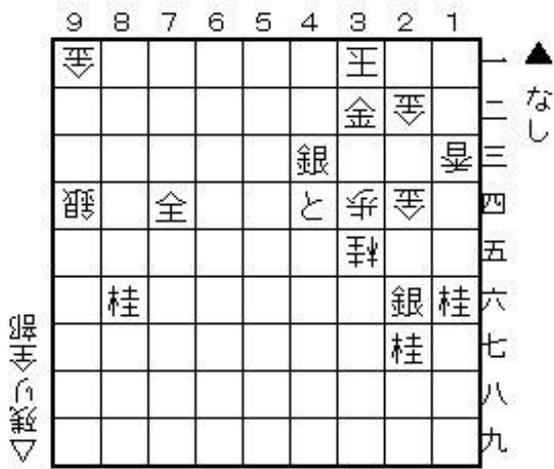
「死と乙女」 山田修司作 (詰将棋パラダイス1951年10月号)

▲ 7 四銀成 △ 8 二玉 ▲ 8 一と △ 同 玉 ▲ 7 一と △ 同 玉  
▲ 7 三香 △ 6 一玉 ▲ 7 二香成



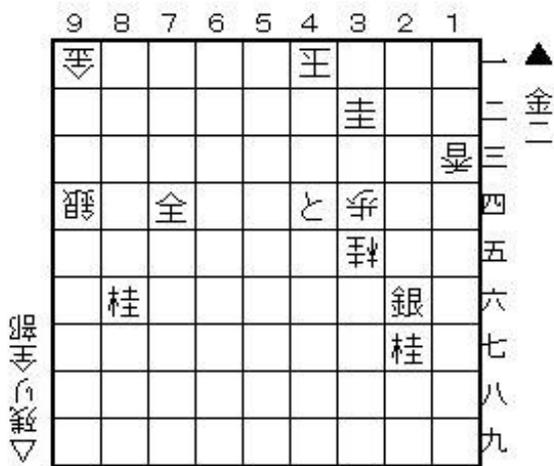
さらっと主題に入ります。この成香が王様を単騎追撃するという趣向。取ると金駒二枚で簡単ですね。

▲ 5 一玉 ▲ 6 二成香 △ 4 一玉 ▲ 5 二成香 △ 3 一玉 ▲ 4 二成香  
△ 同 玉 ▲ 4 三銀 △ 3 一玉 ▲ 3 二金



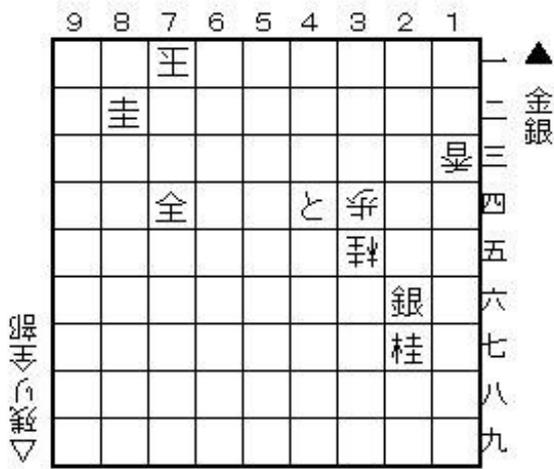
4二まで追ったところで成香を取らざるを得なくなります。2一にかわせば▲3二金以下。同玉にも銀金と重ねて2二の金と清算します。1六に桂が控えていることに注目してください。

△同 金 ▲同銀成 △同 玉 ▲2四桂 △4一玉 ▲3二桂成



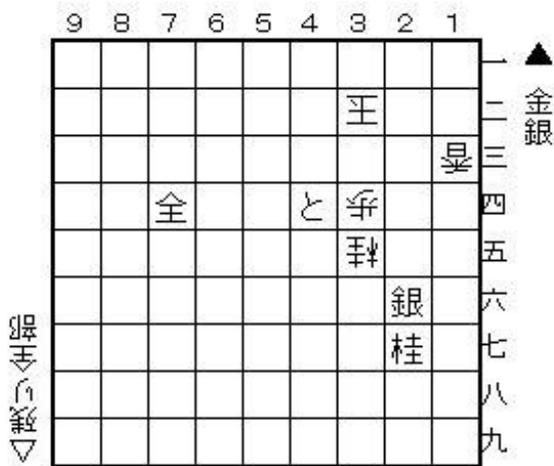
いま来た道を今度は成桂で追い戻す往復趣向になるわけです。持ち駒金金ですからこれも取れませんね。それだけでは終わりません。右辺の折り返し部分と同様に8六桂が待機していることがわかりますね。

△5一玉 ▲4二成桂 △6一玉 ▲5二成桂 △7一玉 ▲6二成桂  
 △8一玉 ▲7二成桂 △同 玉 ▲7三金 △8一玉 ▲8二金打  
 △同 金 ▲同 金 △同 玉 ▲9四桂 △7一玉 ▲8二桂成



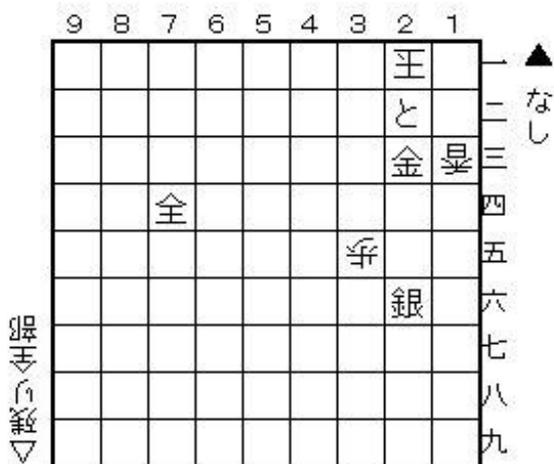
左辺の金銀を清算してもう片道の趣向を実現するわけです。

△ 6一玉 ▲ 7二成桂 △ 5一玉 ▲ 6二成桂 △ 4一玉 ▲ 5二成桂  
 △ 3一玉 ▲ 4二成桂 △ 2一玉 ▲ 3二成桂 △ 同 玉



3二まで追ったところで玉はこの成桂を取るしかなくなり、以下収束。

▲ 3三銀 △ 2三玉 ▲ 3五桂 △ 同 歩 ▲ 3四金 △ 1二玉  
 ▲ 2四桂 △ 1一玉 ▲ 2二銀成 △ 同 玉 ▲ 3三と △ 1一玉  
 ▲ 1二桂成 △ 同 玉 ▲ 2三金 △ 2一玉 ▲ 2二と  
 まで71手詰



説明は不要なほど易しい作品だと思えます。しかし美しい。

B こういうの楽しいね。ひものついてない駒が取れずに逃げ回る王様ってなんだか不思議。しかもそれが三回も出てくるなんて。

A 金駒二枚あれば取れないのは当然だから不思議な感じは受けないけれど、確かに単純に面白い。死と乙女っていう題名にはどんな意味が込められてるのかな？

これは作者本人の命名ではなく、発表時の解説者である土屋健が感激のあまり命名してしまったようです。その解説は名文として名高いので、少し長いですが引用します。

何と云ふ美しい旋律に満ちた作であろう、小さな駒が奏でる悲しい迄に麗しい調べは魂を揺り、見る者をして恍惚と酔はさずには置かない。詰手順が面白い、最初の駒配りに無理がない、詰上り亦美しい、二回往復する玉の画く軌跡を夫々妙手と見たい、など言ふ事は蛇足である。まして平易であるの妙手が無いのと論ずるに至つては烏滸おこの沙汰である。現在迄に発表された山田君の数ある作中でも 突兀とっこつとして聳ゆる最高峰である。(中略)より重視しなくてはならぬのは、この作が醸すアトモスフェアであり歌ふ詩である。預言者イザヤではないが、かつてこのことあるを予言した選者の言は適中した。山田君はまづそれを為した。小さな駒々が織りなす階調と色彩は永遠の栄光と生命を唱い尽きるところを知らない。山田君が本作品に「小独楽」と題したのは、小駒作品である事と独り楽しむと云ふ点より名付けたものだが、楽しむ事は詰将棋の本質だ。然し本図は独り楽しむ境地を遙かに脱し、解く者総てに楽しみを与へずには置かない。その点不適當であると考へ、図面に傍注しなかつた。「死と乙女」これこそ題するとすれば最もふさはしくはないだろうか。選者はロマンチストではないが反射的にこの題が脳裏に仄めいた、と云ふより全身を以つて感得したのである。「死と乙女」これはシューベルトのクワルテット(四重奏)であるがセロは常に死の如く甘く、低く誘ひ、バイオリンは不協和音を以つて乙女の儂い抵抗をすすり泣く如く亦訴へるが如く救ひを求める。遂に死の勝利の円舞曲で終る。本図では香と桂が取れ取れと玉を誘惑する。取れば即ち死を意味する。右に左に救ひを願ふ玉の悲しい反抗も、勝利の円舞曲を表現する右側に於ける折衝で死の凱歌を以つて終る。簡単な序曲より直ちに主題に入り軽快なワルツで幕となる本作品に陶醉したのは選者独りではあるまいと思ふ。近代詰将棋中のロマンスを代表する佳作である。

某作家が本題に酔ひ己が作風に思を致し「止んぬる哉」の一言と共に駒を投じたと言はれて居るが、選者は決してそれが誇張とは思えない。再び言ふ、この傑作を題して「死と乙女」[4]

A ここまで一つの詰将棋に惚れ込めるものなのか。

B しかし作者の命名があるのに選者が勝手に取り下げてしまうってのもどうなのかな？

今だったら黙ってそんなことは許されないでしょうね。しかしこの文章には圧倒的な説得力があります。本作の発表時、作品自体の美しさとともにこの選者の熱のこもった解説、というより評論が話題を呼び、「死と乙女」という題名が定着することになりました。

浪漫派のその後ですが、最近では浪漫派と呼ばれる作風の人あまり見受けられなくなりました。これはシンプルで新鮮な趣向手順が発掘され尽くして、見つけにくくなったことによるところが大きいと思います。次第に趣向手順の美しさだけで新鮮な作品を作ることが難しくなっていたのです。黒川一郎の編み出した趣向手順は後進の作家に模倣され、陳腐化していきました。また山田修司はしばらくの沈黙を経て浪漫派的趣向作を離れ、構想派中編作家として一時代を築くこととなります。この結果、昭和も後期に入ると趣向手順にも合駒を取り入れたりして複雑化させるのが主流になっていきます。そんな中、浪漫派の構成法自体は幅広く浸透してゆきました。

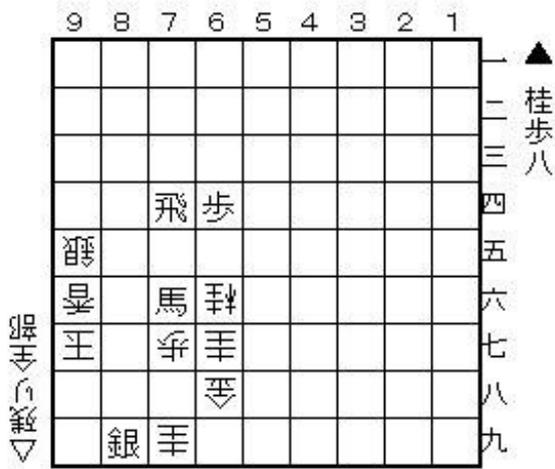
そうした方法論を代表する一人として、相馬康幸がいます。おそらく時代が違えば浪漫派の創始者になっていたであろうこの作家については、先に実戦形の項目で二作品を引用しています。しかしあれは作者にとって裏芸のようなもので、本職ともいえる領域では、一切の修飾を排した舞台上ただただ駒が躍動する趣向作を数多く発表しています。しかし浪漫派と決定的に異なる点として、相馬康幸は作品にあまり情緒的な思い入れを与えることはしません。浪漫派と同じような発想で作られた作品であっても、駒の描く詩情を感じるどころか、むしろ無機質な機械仕掛けの歯車が正確にカチリカチリと動作する様子を見ているような、不思議な手触りがあります。作品を一つ引用します。

[4]「夢の華」（山田修司、1998年、毎日コミュニケーションズ）から孫引き。引用の際に原文から省略、補足した部分があるとのこと。なお本引用における中略は会場による。オリジナルの文章は掲載号調査中。



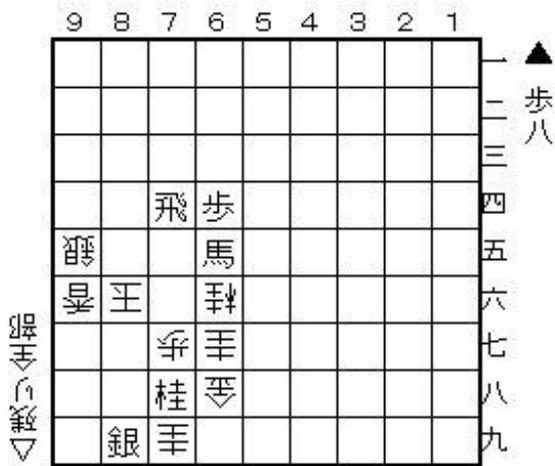
相馬康幸作 Collection No.31

- ▲ 8六金    △ 9七玉    ▲ 9八歩    △ 同成桂    ▲ 8七金    △ 同 玉
- ▲ 7六馬    △ 9七玉    ▲ 9八馬    △ 8六玉    ▲ 7六馬    △ 9七玉



軽い序が終わりました。ここから打ち歩詰を打開するため馬が離れてゆきます。▲7五馬に対し、合駒はその瞬間▲9八歩があるので利きません。△8六金合は▲9八歩△8七玉▲8六馬以下です。飛車合もほぼ同様。

▲7五馬 △8七玉 ▲6五馬 △8六玉 ▲7八桂



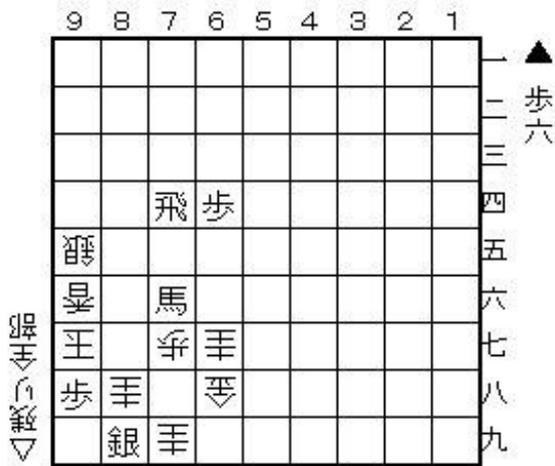
合駒が利かない玉は馬に連れられて移動してゆきます。8六まで玉が来たところで▲7八桂。

△同桂成 ▲7五馬 △8七玉 ▲8八歩



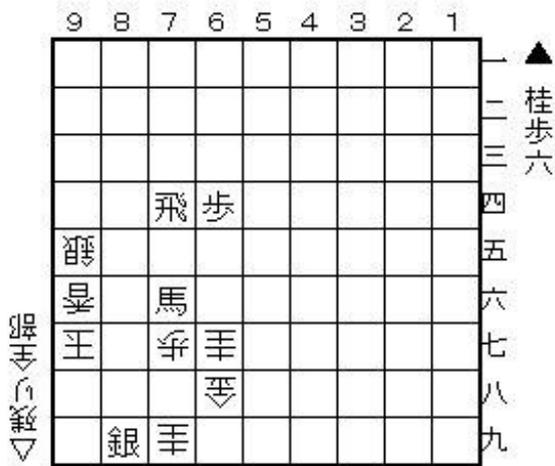
馬が再び王様を追い落としにかかって、このタイミングで▲8八歩を入れます。

△同成桂 ▲7六馬 △9七玉 ▲9八歩



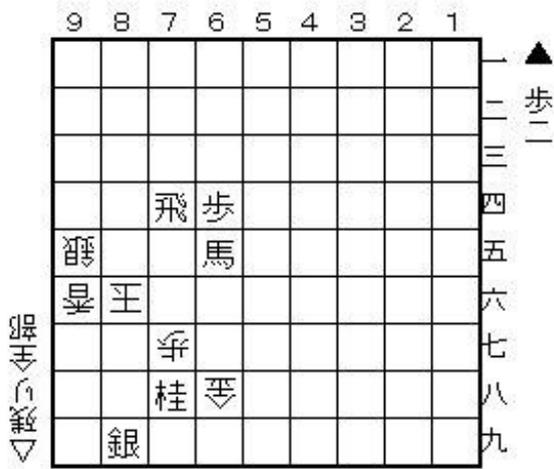
序が終わった局面と比較してみてください。この局面で▲9八歩が打てるようになっています。これで成桂を一枚剥がすと...

△同成桂 ▲同 馬 △8六玉 ▲7六馬 △9七玉



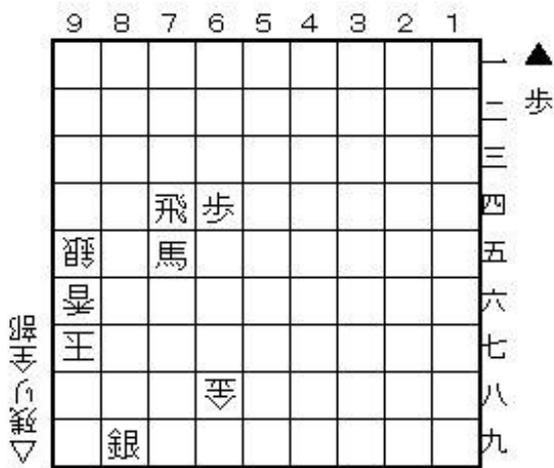
序が終わった局面から6六の桂が消えた局面になりました。この手順を数回繰り返して6七の成桂、7九の成桂を順次剥がしてゆきます。

- ▲7五馬 △8七玉 ▲6五馬 △8六玉 ▲7八桂 △同成桂上
- ▲7五馬 △8七玉 ▲8八歩 △同成桂 ▲7六馬 △9七玉
- ▲9八歩 △同成桂 ▲同 馬 △8六玉 ▲7六馬 △9七玉
- ▲7五馬 △8七玉 ▲6五馬 △8六玉 ▲7八桂 △同成桂
- ▲7五馬 △8七玉 ▲8八歩 △同成桂 ▲7六馬 △9七玉
- ▲9八歩 △同成桂 ▲同 馬 △8六玉 ▲7六馬 △9七玉
- ▲7五馬 △8七玉 ▲6五馬 △8六玉 ▲7八桂



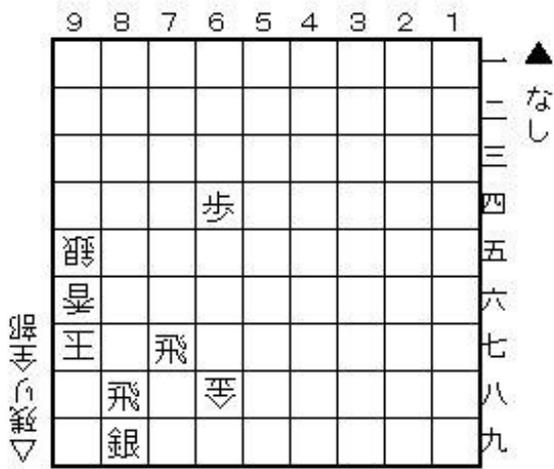
すると今度はこの桂を歩で取らざるを得なくなります。△7八同金は以下同様に進めて金が剥がせるので早くなります。

- △同歩成 ▲7五馬 △8七玉 ▲8八歩 △同 と ▲7六馬
- △9七玉 ▲9八歩 △同 と ▲同馬 △8六玉 ▲7六馬
- △9七玉 ▲7五馬



するとこの局面で、今までは▲8七玉と打ち歩詰の状態に逃げ、▲8八歩を食らわないようにしてきたわけですが、7七の歩が消えたこの図では▲8八歩が打ち歩詰になりません。以下△7七玉▲7六馬まで。したがってここで合駒をせざるを得なくなります。▲9八歩△8七玉に▲7六馬がありますから、横に利く合駒が必然。飛車が最長手順になることがわかれば、以下収束です。

- △8六飛 ▲同馬 △同玉 ▲8七歩 △9七玉 ▲9八飛
  - △8七玉 ▲8八飛 △9七玉 ▲7七飛
- まで95手詰



打ち歩詰を回避する馬の運動と、成桂をおびき出して剥がす一連のやり取りが歯車のように連動して、時計仕掛けの本作における時間を進めてゆきます。気づけば趣向の雰囲気壊さぬままあっさり詰み上がります。収束に余計なアクセントを持ってこないことで、駒が連動する趣向部分と収束とがひとつながりの構造物として見えてきます。こうした構成の作品を作者は「ピュアな詰将棋」と呼んで志向しているようです。ここには古典詰将棋の構成を古いものとした浪漫派と同質の美的価値観が見て取れるように思います。現代詰将棋作家の最重要人物の一人ですので簡単ですが取り上げさせていただきました。

また逆に、構成法はさておいても、詰将棋で物語を描くという思想はさらに拡大し、多くの名作が残されています。



「ボディガード」 波崎黒生作 (詰将棋パラダイス1996年10月号 看寿賞中編賞)

▲ 2九香 △ 2八銀



合駒で発生したこの銀が王様のボディガード。あたかも銃で撃たれる瞬間に身を投げ出すかのようなインパクトある登場です。このあと押し寄せる敵の攻撃を防ぎ続けます。

▲ 3七金 △ 同 龍 ▲ 1六角 △ 3六玉 ▲ 3七銀 △ 同銀不成



まず王様の右腕(?)である龍を巡る攻防。龍は討死にしますが、ボディガードの銀が不成で王様だけは助け出します。

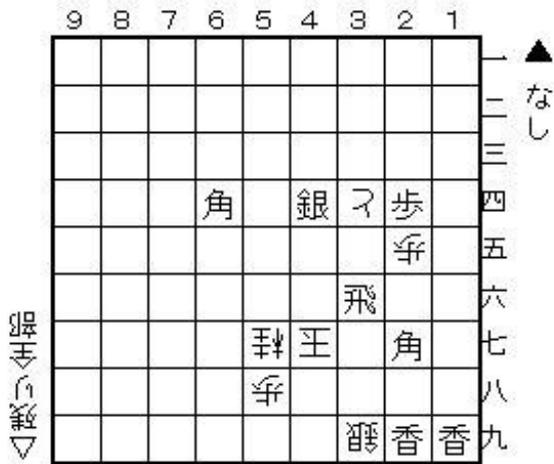
▲ 2七角 △ 4七玉 ▲ 4八歩 △ 同銀不成 ▲ 5七金 △ 同銀不成

▲ 4八歩 △ 同銀不成



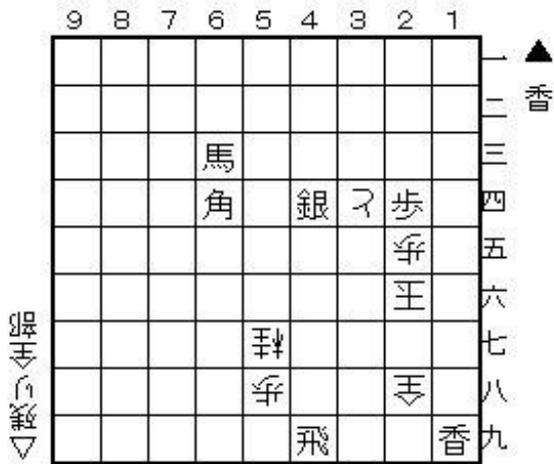
さらに連続で襲い掛かる鉄砲玉たちを軽く切り払います。これも全部不成。

▲ 6七飛 △ 5七桂打 ▲ 4六飛 △ 3七玉 ▲ 5七飛 △ 同桂不成  
 ▲ 3六飛 △ 4七玉 ▲ 3九桂 △ 同銀不成



敵に寝返った桂もばっさり不成で切り捨て御免。手順中、桂不成のおまけつきです。これは直後の4九桂を同桂成で逃れるため。

▲ 4六飛 △ 3七玉 ▲ 4九飛 △ 2六玉 ▲ 6三角成 △ 2八香  
 ▲ 同 香 △ 同銀成



ここに至ってついに成らざるを得なくなります。

B 6回動いて、成銀になって最初に現れた場所に帰ってきたんだね。

▲ 4六飛 △ 3七玉 ▲ 3九香 △ 同成銀 ▲ 3六馬 △ 3八玉 ▲ 4七馬 △ 2七玉 ▲  
 2六飛 △ 同 歩 ▲ 3七馬

まで45手詰



さらに一回動きますが、飛車捨ての鋭手などもあって、ついに王様を守り切れず詰上がります。でもボディーガードのはかない奮闘は楽しんでいただけたのではないのでしょうか。

## 第五章 条件作の世界

さて、詰将棋のテーマとして、論理的なもの、情緒的なものをそれぞれ見ていただきましたが、もっと違ったテーマの立て方も存在するんですね。それは条件作図というものです。さまざまな条件を設定し、その中で詰将棋を成立させること自体がテーマになっているわけです。もちろんこういう作品に対しては、「こんな制約でこんなにいい手順が出るのか」という風に鑑賞していただければ幸いです。そのでは、条件作の代表的なものをいくつかご紹介していきましょう。なお、この章あたりから解説がほとんどなくなってただの作品紹介になってしまうと思われまます。というのも筆者の修論がいよいよやばくなってきたので……

A 修論なんかやめちまえよ。

とにかく、並べるだけで良さが分かる作品ばかりですので、一つ一つ盤に並べていただければ嬉しいです。

### 初形条件作

使用駒の種類や、配置の形などに制約をつけたものです。具体的にどんなものがあるか見ていきましょう。

#### ・飛角図式

初形で盤上にある駒が、飛車と角（あるいは龍馬）だけの詰将棋です。持ち駒は自由に設定できるとされることが多いため作りやすく、作例の多い図式です。



「セブン・センス」 山田康平作 (詰将棋パラダイス1989年1月号 看寿賞中編賞)

▲2五馬 △1三玉 ▲3五馬 △1二玉 ▲1一桂成 △同 玉  
▲2一金 △同 玉 ▲2五香 △2二桂 ▲同香成 △同 玉  
▲1四桂 △1二玉 ▲4五馬 △3四歩 ▲同 馬 △2三歩  
▲同 馬 △同 玉 ▲3二銀不成△1二玉 ▲1三歩 △1一玉  
▲2一銀成 △同 玉 ▲1二歩成 △同 玉 ▲3二龍 △1三玉  
▲2二龍 △1四玉 ▲1五歩 △同 玉 ▲2五龍

まで35手詰

手が限られているため先ほどより易しいですが、歩の連合から清涼詰など見応えのある内容です

。

・豆腐図式

盤面初形が歩とと金だけで構成された作品。ふつう持ち駒はなんでもよい。



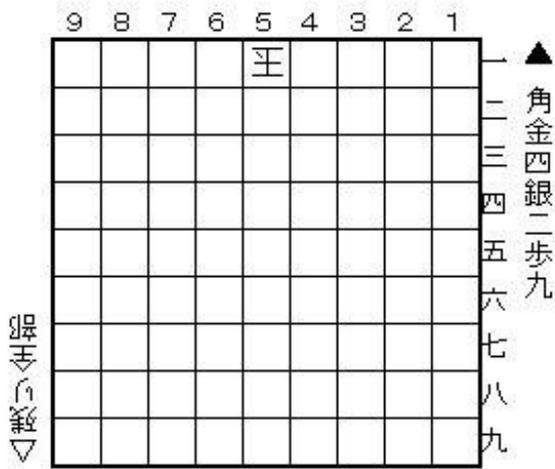
「Fireflies」 岡村孝雄作 (詰将棋パラダイス2010年4月号)

- ▲4五と上 △6四玉 ▲7四と上 △5三玉 ▲4四と直 △4二玉
- ▲3三と △5三玉 ▲6三と上 △5四玉 ▲6五と △同 玉
- ▲6六と左 △5四玉 ▲4五と △同 玉 ▲5六と上 △4四玉
- ▲3四と △同 玉 ▲2五と直 △4三玉 ▲4四歩 △同 玉
- ▲5五と左 △4三玉 ▲3四と △同 玉 ▲4五と上 △3三玉
- ▲4四と左 △4二玉 ▲5二と △同 玉 ▲6二と上 △4二玉
- ▲4一と △同 玉 ▲5一と寄 △3二玉 ▲2三と △同 玉
- ▲3四と上 △1三玉 ▲2四と上 △2二玉 ▲3三と左 △1一玉
- ▲1二歩 △2一玉 ▲2二歩 △3一玉 ▲4二と △同 玉
- ▲5二と寄 △3一玉 ▲4一と寄 △2二玉 ▲3三と直 △2一玉
- ▲3一と △同 玉 ▲4二と寄 △2一玉 ▲3二と寄 △1二玉
- ▲2二と上

まで67手詰

これは同じ作者の「海雪」と合わせて豆腐図式のあり方を根底から覆した傑作です。ぜひ並べてみてください。

・裸玉



「驚愕の曠野」 岡村孝雄作 (詰将棋パラダイス2003年11月号 看寿賞特別賞)

B 盤上に王様だけだ！

こんなのが人間に作れるんだなあという、ただただそれを味わう作品です。ちなみにこれはコンピュータでも解けません。少なくともうちのPCでは。

- ▲3三角 △4二角 ▲同角成 △同 玉 ▲6四角 △5三角
- ▲4三歩 △3二玉 ▲3三歩 △2二玉 ▲2三歩 △1二玉
- ▲1三歩 △2三玉 ▲2四歩 △同 玉 ▲2五歩 △同 玉
- ▲3六銀 △同 玉 ▲3七金 △2五玉 ▲2六歩 △3四玉
- ▲4五銀 △同 玉 ▲4六金 △3四玉 ▲4五金打 △2四玉
- ▲3五金上 △同 角 ▲2五金 △1三玉 ▲3一角成 △2二歩
- ▲1四歩 △1二玉 ▲1三金 △同 角 ▲同歩成 △同 玉
- ▲1四歩 △1二玉 ▲2三角 △1一玉 ▲2二馬 △同 玉
- ▲1三歩成 △同 玉 ▲1四金 △2二玉 ▲3二角成 △1一玉
- ▲1二歩 △同 玉 ▲2三金 △1一玉 ▲2二金

まで59手詰

収束に角捨てもびしっと入って、これが唯一解として成立してるんだから恐れ入ります。

初形の使用駒趣向には他にも、鶯図式（歩桂香のみ）、金銀図式、一色図式（初形ある種類の駒のみ）、無防備図式（玉以外の玉方駒なし）などなどがあります。

B 鶯図式はなんかいい感じのネーミングだけど、なんでこう言うの？

歩桂香で「ホーホケキョ」っぽいからです。

B ……。

僕に言われても困ります。

曲詰

先ほどの作品は初形に意味がある作品でしたが、詰上がりにも意味がある作品もあります。あぶり

出し曲詰と呼ばれる趣向で、これは特に解答者から人気が高く、数多くの作品が作られています。



北原義治作 (近代将棋1959年1月号 第13期塚田賞中編賞)

- ▲4六馬 △3四玉 ▲2五銀 △同 玉 ▲3六龍 △3四玉
- ▲4三桂成 △同 玉 ▲5四銀 △同 玉 ▲6四馬 △4三玉
- ▲4二馬 △5四玉 ▲6四金 △5五玉 ▲4七桂 △同 馬
- ▲5四金 △同 玉 ▲8四龍 △7四金 ▲同 龍 △同 馬
- ▲6四金 △5五玉 ▲6五金 △同 馬 ▲6四馬 △同 馬
- ▲5六龍

まで31手詰



盤上を大きく躍動する馬の動きに見とれつつ、小味な小駒捨てや玉方の移動合という妙防に感心しているといつの間にか盤上に大きなYの字が浮かび上がります。

さて、数ある条件作の中でも、一番人気を集め、一つの世界を築いてきたのが「煙詰」という条件です。それについては、章を改めて取り上げることにしましょう。

## 第六章 煙詰という神話

煙詰という存在については、有名なのでご存知の方も多いかと思います。これは初形に全部の駒が配置されていて、それが詰上がりで最小限な三枚を除いてすべて消えてしまうというもので、第一章に出てきた看寿の代表作です。

	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	王		と					将		▲
			香	と			香	香		なし
	王					と	と		歩	三
	馬	歩	歩	と	銀		龍	馬		四
	桂	歩		銀	と	歩	馬		馬	五
			香	馬		馬	と		と	六
▲	歩	香		金		と		桂		七
		香	桂		歩					八
▼	角									九

伊藤看寿作 (1755年 将棋図巧 99番)

- ▲8一と △同 玉 ▲7一香成 △9一玉 ▲8一成香 △同 玉
- ▲7二と △9一玉 ▲8二と △同 玉 ▲7三歩成 △9一玉
- ▲8二と △同 玉 ▲7三と △9一玉 ▲8二と △同 玉
- ▲7二香成 △9一玉 ▲8二成香 △同 玉 ▲9三馬 △同 玉
- ▲7三飛 △9四玉 ▲8三飛成 △8五玉 ▲8四龍 △同 玉
- ▲5四龍 △9五玉 ▲9六香 △同銀成 ▲同 歩 △同 玉
- ▲8七銀 △9七玉 ▲9四龍 △8七玉 ▲8五龍 △7八玉
- ▲8八龍 △6七玉 ▲6八銀 △5八玉 ▲5七銀 △4七玉
- ▲4六と △5七玉 ▲5六金 △同 と ▲同と引 △6七玉
- ▲7六銀 △同 玉 ▲6六と △同 玉 ▲7七龍 △6五玉
- ▲5五と △同 玉 ▲6六龍 △4五玉 ▲4四と △同 玉
- ▲5六龍 △5五歩 ▲同 龍 △3三玉 ▲5三龍 △3四玉
- ▲4四龍 △2三玉 ▲2四龍 △同 玉 ▲1五と △3四玉
- ▲4四金 △2三玉 ▲2四歩 △1三玉 ▲2三金 △同 銀
- ▲同歩成 △同 玉 ▲3五桂 △1二玉 ▲1三歩 △同 玉
- ▲1四歩 △1二玉 ▲1三銀 △同 桂 ▲同歩成 △同 玉
- ▲2三桂成 △同 玉 ▲3三金 △1二玉 ▲1三歩 △同 玉
- ▲2五桂 △1二玉 ▲2三金 △同 玉 ▲3三角成 △1二玉
- ▲1三桂成 △同 玉 ▲2四と △1二玉 ▲2三と △1一玉
- ▲2一香成 △同 玉 ▲2二馬

まで117手詰

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
							王		▲ なし
							馬		二
							と		三
									四
									五
									六
									七
									八
									九

この作図条件、すなわち39枚の駒を配置し3枚まで減らして詰上げるという条件は、看寿以降200年近く誰もなしえませんでした。しかし黒川一郎が1954年に第二号局「落花」を発表して歴史に新しいページを書き加えると、以降煙詰のノウハウは広く研究されて煙詰量産時代と言われるまでになりました。そうした量産化の中でも、詰将棋作家は同じような作品を作ることをよとせず、今までと違ったテーマを取り入れることに腐心し続けた結果、かつて不可能と言われた構想を次々と実現してしまいました。そんな現代煙詰の最高レベルのものをご紹介します。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	早	丕		と	角				▲ なし
		歩	歩	香	料	手	歩		二
	丕		歩	歩	歩	と	丕	銀	三
と	と			と	飛				四
		桂		早	杏		丕	王	五
銀			桂						六
					丕	と			七
丕		と					角		八
			と	銀	と	丕	龍	と	九

「大航海」 添川公司作 (近代将棋1992年11月号 看寿賞長編賞)

七種合+還元玉という壮大な煙詰です。

A どういう意味？

七種合とは、詰手順の中で玉方が飛角金銀桂香歩の七種類の合駒を全部駆使する詰将棋の条件作の一つです。そして還元玉とは、初形配置で玉がいるまさにその位置で詰上がりますよ、という条件というか作品の付加価値ですね。ただ煙詰の場合盤上を広く使うのが当たり前なわけですから、還元玉というのはかなり難しい条件になります。

▲ 1 八龍 △ 1 六と ▲ 2 四銀不成△同 と ▲ 2 六と △同 玉

▲ 2 四飛 △ 2 五銀

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	早	玉		と	角				▲
		歩	歩	香	料	玉	歩		▲ 歩
	玉		歩	歩	歩	と			▲ 三
と	と			と			飛		▲ 四
		桂		早	杏		龍		▲ 五
銀			桂				王	玉	▲ 六
					玉				▲ 七
玉		と					角	龍	▲ 八
			と	銀	と	玉		と	▲ 九

まず銀合。 飛×角×金×銀○桂×香×歩×

- ▲ 2七歩    △ 1五玉    ▲ 2五飛    △ 同 玉    ▲ 2六銀    △ 同 と
- ▲ 同 歩    △ 同 玉    ▲ 1七龍    △ 2五玉    ▲ 2六歩    △ 2四玉
- ▲ 3四と

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	早	玉		と	角				▲
		歩	歩	香	料	玉	歩		▲ なし
	玉		歩	歩	歩				▲ 三
と	と			と		と	王		▲ 四
		桂		早	杏				▲ 五
銀			桂				歩		▲ 六
					玉			龍	▲ 七
玉		と					角		▲ 八
			と	銀	と	玉		と	▲ 九

このと金捨ては将来に備えた伏線になっています。

- △ 同 桂    ▲ 3五成香    △ 同 玉    ▲ 1五龍    △ 3六玉    ▲ 2五龍
- △ 2七玉    ▲ 1八と    △ 同 玉    ▲ 1六龍    △ 2八玉    ▲ 3九と
- △ 同 玉    ▲ 1九龍    △ 2九飛

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
	早	玉		と	角				▲
		歩	歩	香		玉	歩		▲ 金
	玉		歩	歩	歩				▲ 三
と	と			と		料			▲ 四
		桂		早					▲ 五
銀			桂				歩		▲ 六
					玉				▲ 七
玉		と							▲ 八
			と	銀		王	龍	龍	▲ 九



香合。飛○角○金○銀○桂×香○歩×

▲8七角 △8九玉 ▲9八角 △同 玉 ▲6八龍 △8八金  
▲9七金 △同 玉 ▲8七金 △同 金 ▲9九香 △9八歩

		早	早		と	角					▲
			歩	歩	香		歩	歩			なし
		歩		歩	歩	歩					三
	と	と			と		歩				四
			桂		早						五
銀				桂				歩			六
王	歩										七
歩				龍							八
香											九

▲なし

歩合です。飛○角○金○銀○桂×香○歩○ あとは桂合だけですね。

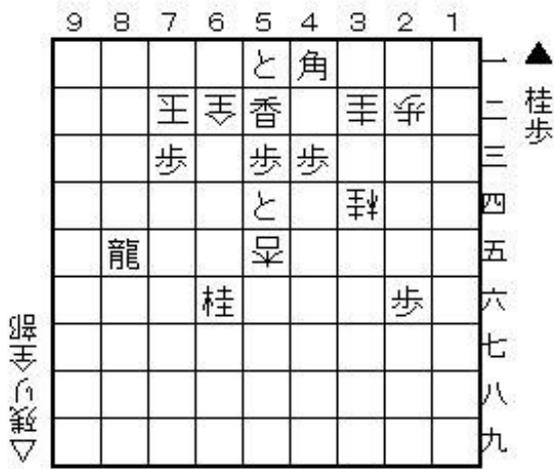
▲同 香 △同 金 ▲7七龍 △9六玉 ▲9七歩 △同 金  
▲9五と △同 玉 ▲9七龍 △8四玉 ▲8六龍 △8五歩  
▲9五金 △9三玉 ▲8三桂成 △同 玉 ▲8五龍 △9二玉  
▲8三金 △9一玉 ▲9二歩 △同成香 ▲同 金 △同 玉  
▲9四香 △9三桂

			早		と	角					▲
王			歩	歩	香		歩	歩			なし
歩				歩	歩	歩					三
香					と		歩				四
金	龍			早							五
			桂					歩			六
											七
											八
											九

▲なし

ついに七種合が出そろいました。あとは煙るだけですね。

▲同香成 △同 玉 ▲9四金 △9二玉 ▲8三金 △8一玉  
▲7二金 △同 玉 ▲6二歩成 △同成銀 ▲7三歩



この局面で、△同玉と応じる手があります。以下▲6四と△同玉▲8四龍△5四玉▲4五桂以下。ところが最初に▲3四とを入れておかないと、今3四にいる桂が4二にいますから、最後の4五桂を△同成香で▲5四龍とできず逃れになるのです。潜伏期間の長い変化伏線でした。

- △同成銀 ▲6四桂 △同成銀 ▲7三步 △同玉 ▲6四と
- △同玉 ▲7四龍 △5三玉 ▲4四銀 △6二玉 ▲5四桂
- △同成香 ▲6一と △同玉 ▲5一香成 △同玉 ▲5四龍
- △4一玉 ▲4二香 △同成桂 ▲同歩成 △同玉 ▲4三銀成
- △3一玉 ▲3四龍 △2一玉 ▲3二成銀 △1一玉 ▲2二成銀
- △同玉 ▲1四桂 △2一玉 ▲1三桂 △1二玉 ▲3二龍
- △1三玉 ▲2二龍 △1四玉 ▲1五歩 △同玉 ▲2五龍

まで145手詰



作者の添川公司は現代詰将棋の最重要人物。煙詰に革新を起こした作家で、今までと全く異なる方法論で煙詰を次から次へと作ってしまいます。しかしこれだけ煙詰が作れると言っても、それは添川公司の才能のほんの一部でしかありません。新機軸の超長編趣向作も数多く発表しています。

次に都煙をご紹介します。都煙とは都の地点、すなわち5五で詰上がる煙詰で、必然的に最

後の駒は4枚になります。4枚残る詰上がりや煙と認めてよいのかという論争が巻き起こりましたが、駒場和男が発表した都煙三部作「夕霧」「かぐや姫」「父帰る」はそんな論争ごときでは揺らがない傑作揃いでした。次第に都煙は市民権を得ていくことになります。その三部作から「父帰る」をご紹介します。



「父帰る」 駒場和男作 詰将棋パラダイス1969年4月号

▲4五と寄 △6五玉 ▲5五と △同 玉



6五の桂を消しておくのが伏線。

- ▲6六角 △同 玉 ▲5七金 △同 玉 ▲5八銀 △6六玉
- ▲7八桂 △同 金 ▲6七銀 △同 玉 ▲7九桂 △同 金
- ▲6八香 △7八玉 ▲7七飛 △同 玉 ▲7九龍 △8六玉
- ▲8五と △同 玉 ▲8四と △8六玉 ▲8五と △同 玉
- ▲9四銀不成△8六玉 ▲7七金 △9七玉 ▲8七金 △同 玉
- ▲6五角

										▲
		と	香	と						なし
	銀	歩	香							
と		香	と	香	香					
銀			歩	歩	と					
桂			角				歩			
香					歩					
	王					歩		歩		
			香					金		
		龍								

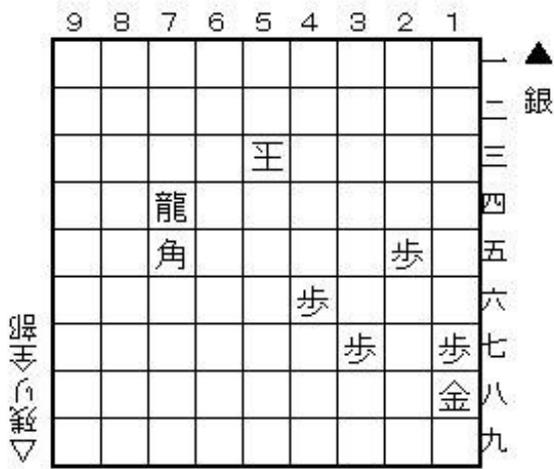
この角を打つために、6五桂は邪魔駒だったんですね。

- △9六玉 ▲8五銀 △同 玉 ▲7六龍 △9五玉 ▲9四と
- △同 玉 ▲8三角成 △同 玉 ▲8五龍 △9二玉 ▲9四龍
- △8二玉 ▲7三と △同 玉 ▲6三歩成 △同 香 ▲同香成
- △同 玉 ▲6四歩 △7三玉 ▲7五香 △8二玉 ▲8一と
- △同 玉 ▲7一歩成 △同 金 ▲同香成 △同 玉 ▲7四龍
- △7二角

										▲
		王	と							金
		馬								
			香	香						
		龍	歩	歩	と					
							歩			
					歩					
						歩		歩		
								金		

角合が出てきました。以下これを入手します。

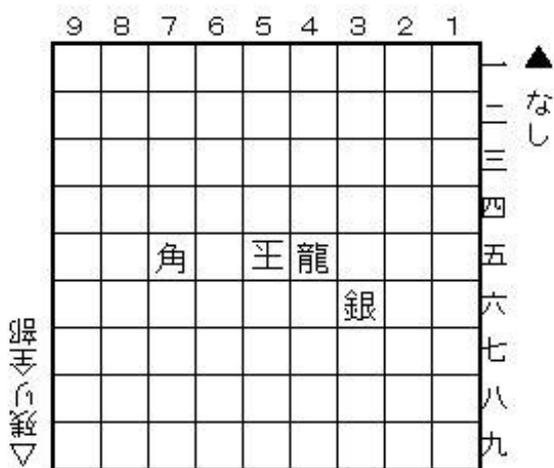
- ▲6二金 △同 玉 ▲6三歩成 △同 角 ▲5二香成 △同 角
- ▲同 と △同 銀 ▲5三歩成 △同 銀 ▲同 と △同 玉
- ▲7五角



この▲7五角が限定打。初形にあった角が戻ってきたことにも注目してください。

- △4三玉 ▲6三龍 △3四玉 ▲4五銀 △2五玉 ▲2三龍
- △2四飛 ▲3六銀 △1五玉 ▲1六歩 △同 玉 ▲2七金
- △1五玉 ▲2六金 △同 飛 ▲同 龍 △同 玉 ▲2三飛
- △3七玉 ▲2七飛成 △4六玉 ▲4七龍 △5五玉 ▲4五龍

まで103手詰



初形で7五にいる角は一度消えますが合駒で復活して再び限定打で7五に復活します。そうして角の待っているわが家へ、盤上放浪の旅を終えた父も帰ってきて5五で詰上がるというわけです。なんと都還元煙というとても難しい難条件作でした。

次は小駒煙です。大駒を使わず、小駒だけで玉を追いつつ駒を消してゆくことは、当初不可能とすらいわれていました。しかしこれもいくつかの方法が見つかり、多くの作品が生まれています。これからお目にかけるのは、その一つの到達点ともいえる作品です。

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
					手	マ	と	金	▲なし
					銀	香	マ	金	
					手	香	と	金	
					と	と	桂	金	
					マ	と	マ	銀	
					と	と	王	王	
					マ	マ	手	マ	
					銀	銀	と	手	
						香	杏	歩	

「月蝕」 伊藤正作 (近代将棋1981年9月号 看寿賞長編賞)

B この初形の前では言葉がないよ。

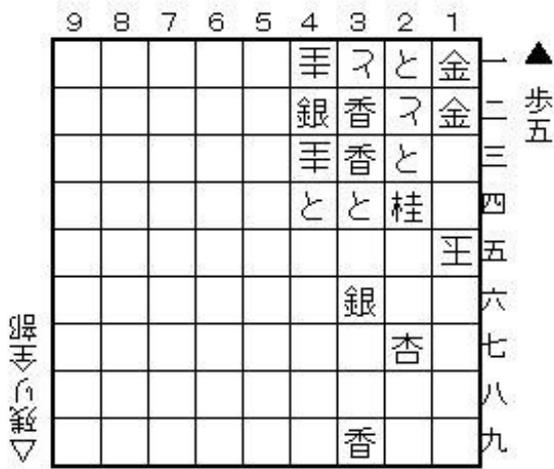
A こんなに密集してて煙るの？

- ▲1七と △同 玉 ▲2六銀 △同 と ▲1八歩 △1六玉
- ▲2六と △同 玉 ▲3七銀左 △同 と ▲同 銀 △1六玉

9	8	7	6	5	4	3	2	1	
					手	マ	と	金	▲桂歩五
					銀	香	マ	金	
					手	香	と	金	
					と	と	桂	金	
					マ	と			
					と			王	
						銀	手		
								歩	
						香	杏		

以下いま3七の銀と2九の成香がじりじりとせり上がっていく仕掛けになっています。

- ▲2八桂 △同歩成 ▲1七歩 △同 玉 ▲2八成香 △1六玉
- ▲1五金 △同 玉 ▲2五と △同 玉 ▲3六と △同 と
- ▲同 銀 △1五玉 ▲1六歩 △同 玉 ▲2七成香 △1五玉
- ▲1四金 △同 玉 ▲1五歩 △同 玉



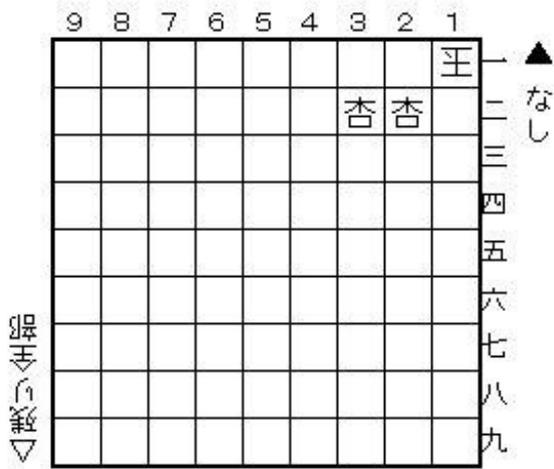
下半分の爆破に成功しました。

- ▲ 1六歩 △ 1四玉 ▲ 1三と △ 同 と ▲ 同 金 △ 同 玉
- ▲ 1二桂成 △ 1四玉 ▲ 2四と △ 同 玉 ▲ 3五銀 △ 2三玉
- ▲ 2四歩 △ 1四玉 ▲ 1五歩 △ 同 玉 ▲ 2六成香 △ 1四玉
- ▲ 1三成桂 △ 同 玉 ▲ 2三步成 △ 同 玉 ▲ 3四と △ 同成桂
- ▲ 同 銀 △ 1三玉 ▲ 1四歩 △ 同 玉 ▲ 2五成香 △ 1三玉



- ▲ 1二金 △ 同 玉 ▲ 1三步 △ 同 玉 ▲ 1四歩 △ 1二玉
- ▲ 2四桂 △ 2一玉 ▲ 3一香成 △ 1一玉 ▲ 2一成香 △ 同 玉
- ▲ 3二香成 △ 同成桂 ▲ 同桂成 △ 同 玉 ▲ 3三銀直成△ 2一玉
- ▲ 2二成銀 △ 同 玉 ▲ 3三銀不成△ 2一玉 ▲ 2二歩 △ 1一玉
- ▲ 2三桂 △ 1二玉 ▲ 1三步成 △ 同 玉 ▲ 2四成香 △ 1二玉
- ▲ 1一桂成 △ 同 玉 ▲ 2一歩成 △ 同 玉 ▲ 3二銀不成△ 1一玉
- ▲ 1二歩 △ 同 玉 ▲ 2三成香 △ 1一玉 ▲ 2一銀成 △ 同 玉
- ▲ 3二香成 △ 1一玉 ▲ 2二成香直

まで109手詰



最後に、全体の追い手順を支えていた3九の香が動き出して詰上がります。奇跡のような作品。

最後に無防備煙です。これは無防備図式と煙詰の融合ですね。

B 無防備図式って、玉以外全部攻め駒っていう図式のことだよな？

A そんなの煙にすることなんて不可能だよ！ だって38枚全部攻め方の駒なんでしょ？すぐ詰んじゃうよ。

小駒煙同様、無防備煙も作図は不可能だと言われていたんですが、駒場和男が最初に「三十六人斬り」を発表して以来、今では完全作が10作ほど知られています。



橋本孝治作 (詰将棋パラダイス1989年6月号 看寿賞長編賞)

B 本当に全部攻め駒だと壮観だなあ……。

- ▲2五と △同 玉 ▲3五と △1六玉 ▲3四桂 △2七玉
- ▲2六龍 △同 玉 ▲5六龍 △2七玉 ▲1八銀 △同 玉
- ▲1六龍 △2九玉 ▲2七龍 △3九玉 ▲4九金 △同 玉
- ▲2九龍 △3九銀 ▲5九金 △同 玉 ▲3九龍 △6八玉
- ▲3八龍 △7九玉 ▲8八龍 △6九玉 ▲5八龍 △7九玉
- ▲8八銀 △8九玉 ▲6九龍 △8八玉 ▲9七銀 △9八玉
- ▲7八龍 △9七玉 ▲9六と △同 玉 ▲9八龍 △8五玉

▲8七龍 △8六歩 ▲8四と △同 玉 ▲8六龍 △8五飛



飛車合が出てきました。

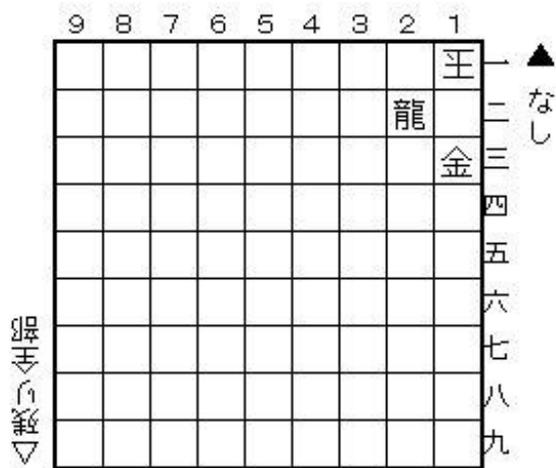
▲7四と △9三玉 ▲9二と △同 玉 ▲9一桂成 △同 玉  
▲9二歩 △同 玉 ▲8三と △9一玉 ▲8二と △同 飛  
▲同 龍 △同 玉 ▲8四飛 △7二玉



ここからのきめ細やかな絞り込み手順が圧巻です。

▲6三歩成 △7一玉 ▲6二と △同 玉 ▲8二飛成 △6三玉  
▲8三龍 △6二玉 ▲5二歩成 △7一玉 ▲6二と △同 玉  
▲8二龍 △6三玉 ▲5三香成 △7四玉 ▲6五と △同 玉  
▲8五龍 △6四玉 ▲7五龍 △5三玉 ▲5二と △6三玉  
▲5五桂 △5四玉 ▲5三と △同 玉 ▲7三龍 △5四玉  
▲6三龍 △5五玉 ▲6六龍 △5四玉 ▲4五と △同 玉  
▲4六金 △4四玉 ▲5五龍 △4三玉 ▲4二桂成 △同 玉  
▲3三香成 △同 玉 ▲3四銀不成△4二玉 ▲3三銀成 △同 玉  
▲3四馬 △同 玉 ▲3五金 △3三玉 ▲4四龍 △3二玉  
▲2三香成 △同 玉 ▲2四金 △2二玉 ▲3三龍 △1一玉  
▲1二歩成 △同 玉 ▲1三金 △1一玉 ▲2二龍

まで129手詰



A うまくできてるもんだなあ。王手はちゃんと続くうえに、玉も攻め方の駒を取れるような絶妙の配置になってるんだね。

無防備煙はただただ駒を取らせるだけの単調な手順になりがちなのですが、本作は合駒なども出てきて手順に深みがあります。また飛車合を奪ってからの絞り込みは細やかな手順で美しい。無防備煙の最上の作品の一つです。なお、玉位置が五段目というのも無防備煙で最も上です。ふつう九段目とか八段目にいることが多いですからね。また、自陣と金がないというのもこの条件では奇跡的。普通の煙詰でも自陣の一番低いところにと金がいたりする作品は多く、実戦をあまり指さない詰将棋派の人間でさえ「どこから引っ張ってきたんだよ」だとか揶揄することがあるものですが、本作は非の打ちどころがありません。

さて、小駒煙を除けば煙詰の主役は龍という時代が長く続きました。一番強い駒で、追いやすいからです。しかし、次第に龍追いによる煙は手順の類型化が目立つようになってきました。そのため、最新のトレンドでは馬追いで煙詰を作るのが主流です。



安武翔太作 (詰将棋パラダイス2008年4月号 看寿賞長編賞)

▲9三歩成 △9一玉 ▲8二と寄 △同 金 ▲同 と △同 香

- ▲9二歩 △同 玉 ▲9三金 △同 玉 ▲8四と △同 香
- ▲8三金 △同 玉 ▲8四歩 △同 玉 ▲8五飛 △7三玉
- ▲6四と △同 玉 ▲7五銀 △6五玉 ▲4三角成 △5六玉
- ▲5七金 △同 玉 ▲6六銀 △同 玉 ▲7六馬引 △5六玉
- ▲5九香



ここで最下段に打つ▲5九香が妙手です。

- △同飛成 ▲4七金 △同 と ▲5七香 △同 玉 ▲8七飛
- △5六玉 ▲4六と △同 玉 ▲4七飛 △5六玉 ▲5七香
- △同 龍 ▲同 飛 △同 玉 ▲5八飛 △同 と

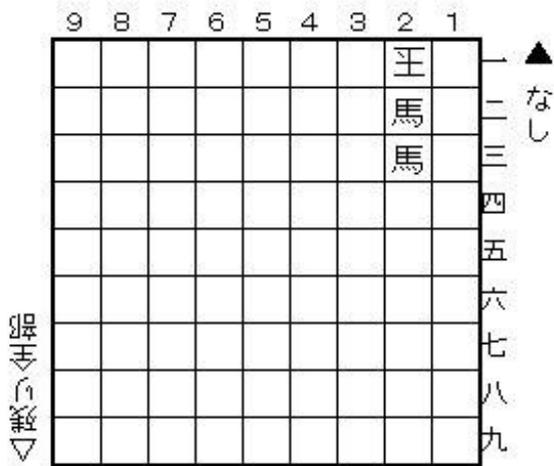


結局竜が出てくることは一度もないまま、飛車が二枚とも消えてしまいました。この後は二度と登場しません。以下は二枚馬の連携と小駒の活用で絞り込んでいきます。この手順がまた圧巻。

- ▲同馬行 △5六玉 ▲4七馬 △5五玉 ▲6五馬左 △4四玉
- ▲4五銀 △3三玉 ▲2二銀不成△同 玉 ▲1二香成 △同 玉
- ▲2四桂 △同 歩 ▲1三歩 △同 玉 ▲1四銀 △2二玉
- ▲2三歩 △3三玉 ▲2五桂 △同 歩 ▲3四銀 △同 玉
- ▲2五馬 △4四玉 ▲2六馬 △3五歩 ▲同 馬 △3三玉
- ▲5五馬 △3二玉 ▲5四馬 △4一玉 ▲4二歩 △同 玉

▲5三馬左 △4一玉 ▲4二歩 △3二玉 ▲3三歩 △同 玉  
 ▲4四馬引 △4二玉 ▲4三歩 △4一玉 ▲5一桂成 △同 玉  
 ▲6二馬 △4一玉 ▲4二歩成 △同 玉 ▲5三馬行 △3二玉  
 ▲3三歩 △同 玉 ▲4四馬 △2四玉 ▲5一馬 △1四玉  
 ▲1五馬 △2三玉 ▲3五桂 △1二玉 ▲1三歩 △同 玉  
 ▲1四歩 △1二玉 ▲2三桂成 △同 玉 ▲3三馬左 △1二玉  
 ▲1三歩成 △同 玉 ▲2四馬行 △1二玉 ▲2三馬行 △2一玉  
 ▲2二馬

まで127手詰



飛車はあくまでアクセントとしてわき役に徹し、二枚馬の連携が前面に押し出された追い手順になっていることに注目してください。このような馬追い煙は新鮮な手順が得られますが作るのが難しいことは間違いなく、爆発的に作例が増えるというところまでは至っていません。今後もしばらく流行が続くでしょう。

### まとめ

ざっと詰将棋のテーマというものについて駆け足で見てきたわけですが、いかがでしたか？ 本当は他にも取り上げたいテーマ（超短編と超長編）があったのですが、それは次回の宿題にしたいと思います。

とにかく、詰将棋の世界が将棋の世界とはほんの少し違うこと、これが分かっていただけで十分です。そして詰将棋を、難しい問題ではなく、美しい作品だと思っていただければすごくうれしいです。さらに、こういう美しい作品をほかにも鑑賞してみたい、と思ってくださったなら最高に幸せです。

もう一度、大事なことなので繰り返させてください。詰将棋は、将棋が強くなるためのテストの問題ではありません。むしろ、テスト用紙の裏にこっそり書かれた落書きなのです。問題を解く

だとか、競争社会を勝ち抜くだとか、そういうことに疲れた一瞬に、ふと想像力と遊び心、それにほんの少しのいたずら心で、すらすらとペンを走らせる楽しさ。詰将棋の世界には、そうした落書きも「面白いね」と受け入れてくれる優しさがあふれています。

ですから、ぜひここは一つ「こんなのテストと関係ない」と怒らずに、詰将棋という落書きを見に来ませんか？ そしてクスリと笑ってやってはくさいませんか？

さらにもしよろしければ……

あなたもテスト用紙を裏返して、夢のある絵を描いてみませんか？

ぼくの名前は「ぽふぽふ」。

これまで小さな公民館で開催されている将棋道場の見学、そして、大会にも参加してみた。人とふれあう将棋の面白さ、楽しさが伝わるといいな。

でも、いろんな理由があって外で将棋を指せない人もいるよね。

なんとなく怖いとか、一人だと心細いとか。

田舎に住んでいて道場や大会の環境に恵まれていないとか。

そんな人たちのために、今回は自宅で将棋を指してみよう。

自宅で将棋といえば、将棋盤を用意して本を見ながら駒を並べることが多いかな。

テレビの講座を見たり、詰将棋の本を読んだり、新聞の将棋欄を眺めたり、なんてことも。

でも、ちょっと待って。これだと、「ふれあい」がないよね？

だから、今回はネットを使って積極的に外に出てみるよ。

とりあえず、外に出る経路はインターネット。

必要なものは、パソコンやスマートフォン。

あとは、対局場を選ぶだけ。

とても簡単だよな？

さて、どこがいいかな。

ひたすら番数をこなしたい人は、対局者がたくさんいる対局場がオススメ。

さあ対局開始だ！ .....その前に、自分の棋力を決めないと駄目なんだよね。

これは実際の道場や大会と同じで、対局相手を決める上で重要だったりするんだ。

自己申告で棋力を決めるところも同じなんだけど、ネットと実世界にはズレがあることも。

例えば、町道場で三段の人が、とあるネット将棋では1級だったりすることは日常茶飯事。

対局場によって棋力の絶対値が変動することは仕方ないんだよね。

さらに、ネット将棋の中でも対局場によって棋力に差が出たりする。

ちょうど、全国のいろんな道場にも差があるのと同じなんだ。

とはいえ、ネット将棋を始めるには、棋力を決めておこう。

ネット将棋における棋力は「レーティング」と呼ばれる点数に換算して評価することが多いよ。

そして、対局結果に応じて、この点数が増減していく。しかも、増減値は相手との棋力差により変わる。

自分より強い人に勝つと大きく点数アップし、弱い人に負けると大きく点数ダウンする仕組み。そうやって対局を重ねていくと、自分の真の実力値がおおよそ定まっていくよ。だから、自己申告の点数が多少違ってても全然大丈夫。

でもでも、残念ながら、ネットの世界には、本当はものすごく強いのに、低い点数で申請する人がいる。

これを「過小申告」と呼ぶのだけど、弱い者イジメするような人たちなんだよね。もちろん、その人たちも勝ち続けていくと点数がどんどん上がってしまうのだけど。他にも、「ソフト指し」と呼ばれる人たちもいる。その名の通り、将棋ソフトを使って対局する人。

とにかく、自分なりの点数を決めたら、まずは対局してみよう。

点数の変動に一喜一憂するもよし、点数に関係なく戦法を試すなど研究に没頭するもよし。ネット将棋の対局に慣れることが大切かな。

特に、実際の駒と違って、画面上の駒をマウスや指で操作するわけだから、感覚が違うよね。操作ミスをして、「成り」と「不成り」を間違えてしまうこともある。

時間に追われて慌てて指したり、知らない間に時間切れになっていることもある。

でも、盤駒を使った対局とは違う独特の雰囲気味わえることが、ネット将棋の魅力のひとつでもあるよ。

ネット将棋の持ち時間は、対局場によっていろいろあるから、自分に合ったものを選べば良いかな。

とにかく早く指したい人は1手30秒、じっくり考えたい人は持ち時間15分とか。

大会を意識したいなら10分切れ負け、もっと早く脳を刺激したいなら3分切れ負けとか。

他にも、1手10秒、1分切れ負け、じっくり30分、長考3時間などもあるから、目的に応じて選ぼう。

対局相手についても、実は人間だけじゃない。

対局場によっては、悪意ある人間の「ソフト指し」とは異なり、正々堂々とコンピュータが対局相手になることもある。

その場合、コンピュータつまりソフトであることが明確に表示されているから、純粋に人間代表として戦えるよね。

将棋ソフトの開発競争が激化している今の時代は、コンピュータ同士の練習対局がネット上で日々行われている。

その対局場に人間代表としてエントリーすることも可能なので、コンピュータと「ふれあう」こと

もできるよ。

残念ながら、多くの人が対局に勝てないかもしれないけれど。

ネット将棋の要素として、レーティング・対局時間・対局相手があり、それらに応じた対局場がある。

もうひとつ大切な要素は、感想戦を含めた検討ができるかどうかという点。

たくさん指して経験を積むことに重きを置く人もいれば、一局を丹念に振り返る人もいるよね。一手一手を確認して、どこが悪手だったか、どう指すべきだったか、相手は何を考えていたかをじっくり検討する。

「感想戦」を大切にしたい人向けに、検討しやすい環境を提供してくれる対局場もあるんだ。そういうところには、同じような仲間が集まってくるので、ネット上で友達ができるかもしれないよ。

あるいは、すごく強い人が指導対局をしてくれるかもしれない。

対局後に感想戦をして、ときには、他の人の観戦をしたり、その感想戦に参加してみたり。

ネット将棋は不特定多数の人と接する機会が増える点も魅力のひとつ。

いろんなサークルもあるし、サークル内外のイベント対局もあったり。

ほとんど町道場と変わらないくらいの充実したサークルもあるんだよね。

個人でネット将棋を楽しむだけでなく、仲間とワイワイするのも面白いかもしれないよ。

とある対局場では、夏にリレー将棋が開催される。

4人一組でチームを作り、15手ずつ指してメンバー交代していくんだ。

チーム構成については、4人のレーティングの合計点数に制約があるんだけど、選び方にも特色が出るよね。

メンバー個人のレーティング、そして、オーダーが勝敗に影響を与えるというリレー将棋。

道場や大会に出られなくても、自宅にしながら参加可能なイベント。

対局やイベントを通して、ネットの向こうにいる多くの人に出会い、ふれあう。

直接ではないけれど、いろいろ楽しい出会いがあるよ。

もちろん、顔を合わせないがゆえに起こるトラブルもあるかもしれない。

言葉ひとつとってみても、真意が伝わらなかったり、誤解を招いたり。

でも、自宅にしながら、ふれあうことができるメリットの方が大きいかもしれないよ。

人と人との「ふれあう将棋」を通して、将棋の面白さを広く伝えられると、また仲間も増えるよね。

将棋を指さないけど、観るのが好きだ、という人もネット将棋はひとつのツールとして活用できるよね。

ネットで知り合って、意気投合して、そのままオフラインで実際に会ってみることもあるよね。

実は近くに将棋を指す人がいることを知るキッカケになるかもしれない。  
そんな可能性を秘めたネット将棋は、いろんな目的の人に役立つといいな。

ぼくは将棋の普及のために未来からやってきた。

道場や大会は人を通して将棋が指せる場所。

そして、ネット将棋もまた、人を通して将棋が指せる場所。

さらに、コンピュータとも将棋が指せる面白い場所。

物理的な距離の制約を受けないネット将棋。

世界中の多くの人たちと出会い、もっともっと楽しんでもらえるといいな。

【「駒.zone」と私～ちょっと私的な清水らくは論】

ぜいらむ

「駒.zone」編集長・清水らくは氏から初めて「駒.zone」への参加を打診されたのは今となっては懐かしいVol.1企画「ツイッター三択将棋」でのことだった。記念すべき創刊号である。なぜ私に声をかけてくださったのかその真意は判らないけれど、いや何となくわかるけれど、いずれにせよそれはツイッターのとりなす不思議な縁であり、そしてあの時のらくはさんの「選択」がなければ恐らく今自分が見ているこの世界の風景は全く違ったものになっていたと思うと奇妙な感覚を味わったりもする。

清水らくは氏は「駒.zone」創刊以前から既に、小説や詩を多数発表（投稿、入選歴あり）されていた。創作についての自身のエピソード、考え方、感じ方、これからの希望、夢、そういったことの諸々をツイッターを通して語る氏の言葉は、多くの人が目にされていたと思う。そう言えば「駒.zone」プロジェクトもツイッター上の何気ない一言から始まったのだった。

やがて「駒.zone」が創刊され、多くの人々の暖かい支援とらくは氏を初めとしたレギュラースタッフ陣のたゆまぬ努力の元、今に至るまで刊行されつづけている。将棋ファンとしての想いと文芸愛好家としての想い。それらが融合した素晴らしい活動だと思う。こういう将棋の楽しみ方があったらなんて……例えばプロ棋士の方々はこういう将棋ファンの在り様を想像したことがあったらどうかと、プロ棋士ツイッターのどなたかに尋ねてみたいと常々思っている。

また「駒.zone」の旗揚げを決意されたらくはさんの行動力に敬礼したいとも常々思っているのだが、後者の方は遠慮することはなさそうなので、明日にでも熊本の方角に向かって敬礼しておくことにしよう。

さて、そんな「将棋クラスタ文芸部の旗手」らくはさんのツイートを眺めていて「何だか、らくはさん楽しそうだなー」と思って「小説寄稿させてくださいな」と連絡したのが確かVol.2公開直後だったと思う。だが私は、すぐにそのことを後悔するハメになった。公開直後すぐに後悔直後だった。

ところで。

私と「文芸」ということで言えば、中学生の時に「ミステリ研究会」的な何かしらをしていたことがあったのだが、これはミステリを読んで「殺人トリック」にハマった馬鹿数名が、ひたすら「完全犯罪トリック」を考え続けるだけの活動だった。ミステリ作品は読んでいたけれど「文芸活動」であったとはとても言えない。むしろ「犯罪活動」と言った方が分野的に近いと言える。ただしそのトリックを実行に移してはいないので警察が我々を逮捕することは出来ないだろう。

というわけで(?)私が「駒.zone」に寄稿した小説はVol.3の「ツクモさん、指しすぎです」というものであったのだが、実は初めはミステリを寄稿するつもりだったし書き始めてもいたのである。

絶対に発表しないつもりなのでここでプロットのネタばらしをしてしまうと、それは――。

「将●連●会●が●●の●●で殺害された。警察の捜査は難航しやがて自殺説まで浮上する。会●●の死に不審を抱いたミステリファンの新四段・江戸川垂歩（仮名）はその謎に挑み、やがて『真犯人は●流棋士全員による共謀』という驚愕の真実に突きあたる……というのが実はミス・リードで江戸川垂歩（仮名）は単なるアホ。事件の真相に気付くもそのあまりに哀しい真実を前に、それを公表することにためらいを覚えた観戦記者・「団栗饅頭」記者（仮名）は、名人戦最終局の観戦記にメッセージ（暗号）を記すのだった……。

ちなみに真犯人は、江戸川垂歩四段（仮名）が●イ●タ●で●●口●している●●●●一の●●●●の●●謀」

というものだった。どうだ面白そうだろう？絶対発表しないけど。ていうかもう出来ないけれど。

小説を寄稿しようと思った時に考えたこと、それは「ツイッターの将棋TLの雰囲気を知りたくて何か持ちこめないものか？」ということだった。元がツイッターでの喧嘩をきっかけにして始まった企画であるし、ここはひとつ「ネタは全部ツイッターから拾う」の精神で書いてみよう、と。

結果的に妖怪うんちくだらけになってしまった。当たり前である。だって私のTLは7割方、妖怪やそれに類する話で溢れているのだから。あとガンダムとか。

さて、小説を書き始めてみて初めて気がついたことがある。ちょっとだけ悩んだこと、後悔したこともあった。

後悔したことは「これを寄稿することで、らくはさんに（もの凄く色んな意味で）迷惑が掛からないか」ということである。気の迷いで「寄稿します」だなんて言わなければ良かったと、これはかなり本気で後悔した。「駒.zone」というのは、将棋と文芸を楽しむためのプラットフォームなのであって、迷惑だとか何とかそんなことは気にせずに気軽に楽しめばいいと思うのだが、深夜に一人思索に耽っているとつい色々余計なことが頭をよぎってしまう。小心者なのである。田沼泥鰯に「坐禅組んでみない？」と言われてしまいそうだ。

ただ、編集者側の立場にたって言えば、一度「寄稿する」と言ったことを「やっぱり止めます」と言えばもっと迷惑を掛けることになりかねないので諦めることにした。好きなように書くからボツにしてくれと、そういう心境だった。まあ結局は（ある意味）迷惑をかけることになってしまったわけであるが。

気付いたこと、悩んだこと。それは「書かないという決断」についてだった。この場合の”書かない”とは「ツクモさんて6万字超えてたじゃん、書かない決断してないじゃん」的な文字数のことではなく、放送禁止用語がありすぎてこのままでは原稿が「ピー」だらけになってしまうぞ！とかそういうことではなく、遊園地で働いているアメリカ生まれのネズミのことには触れてはいけない、とかそういうことでもない。上手く表現できないのだけれど、私は小説というものを初めて書きながら、このステージの上では「言いたいこと」は書いてはいけないという気がしてきていた。「言いたいこと」があってもいけない気もしていた。素人が何を生意気な……と思われるかもしれないし、そしてそれは事実、生意気なことなのだと思うけれど、とにかく素人なりにそういうことを思ったのだった。

でも「良かった」と思えたこともあった。

物語世界を幻視すること（妄想ともいう）。その世界を文字によってデッサンすること。見えているけれど書かない世界。書かないけれど進行していく世界。その体験は現実世界においても「会ったこともないけれど、どこかにいる誰かの人生の物語」へと想いを馳せるきっかけになった。そういう「世界の見方」を、あの夏、私は体験したのだ。

「物語を書く」という行為の後にフィルタリングされた視界の先にあった世界の風景は、だからとても新鮮だった。冒頭で書いた「あの時のらくはさんの「選択」がなければ、恐らく今自分が見ているこの世界の風景は全く違ったものになっていた」とは、そういうことだ。

自分で書いてみて、その「デッサン」の粗さを痛感して「プロの作家さんは凄いなあ……と心から思ったし、一方でこの「創作をする」という行為自体は、作家を目指すとかそういうことではなく、もっと気軽に「趣味」として成立するものなのかもしれないな、とも思ったのだった。これもまた、らくはさんの「選択」によって得られた得難い「気づき」である。

だから「駒.zone」に興味を持った人がいたら、ジャンルや企画やレベルのことなど気にせず気軽に寄稿の相談をしてみたらいいと、そう思う。小説でも詩でも俳句でもイラストでも漫画でも、エッセイでも論考でも。将棋をテーマにした雑誌なのだから「俺様定跡」の発表でもいいじゃないかとも思う。

何でもあり。何であっていいはず。「駒.zone」にはそういう「場」としての良さがあると、そう思うのだ。

その他、色々ある。寄稿に際しての、らくはさんとのメールのやり取りでも色々あった。色々あって。

物語を書くことを通して自分を見つめ直して。

見つめ直してみたらやっぱり自分は馬鹿だったということに気づき直ただけで。

「ツクモさん」なんて特に何のテーマもない単なるお笑い小説だけれど、書いている本人の中では色々な（ちょっとカッコつけた言い方をすれば）哲学的思索が駆け巡っていて。

だから多分、傍から見ればもの凄く気難しいというか、眉間に可愛く皺を寄せながらの執筆だったと思う。

とまあそんな、他人が見たらどうでもいいような、そしてしょうもない私の葛藤を知ってか知らずか、らくはさんは快く、優しく、幾多の指導・アドバイスをしてくださったのだった。

そんなわけで。

今ではらくはさんは、私にとって「部活の優しい先輩」という存在に近いかもしれない。

……いや違う。全っ然近くなかった。何しろらくはさんときたら、ちゃんと「指導」をする人だったのだから。

そもそも部活の先輩と言えば「サボってもキャプテンに怒られないお洒落な言い訳の仕方」とか「10年ぐらい前から我が校に存在する、プール裏の女子更衣室直通の壁の穴」とか「部室の屋根裏部屋に設置された司書のいないエロ本図書館」とか「数学教師がタバコの吸い殻をこっそり廃棄し続けた結果出来あがった、学校裏の山の茂みの中にある謎のアリ塚風モニュメント」とか「授業中に脈絡もなく政府批判を始める国語教師のアイツの正体は実はメン・イン・ブラック

」といったような、とてもトリビアな知識だけを授けてくれる存在のはずである。

私が在籍していたテニス部にはそんな先輩しかいなかった。そんな先輩にばかり目を付けられていたとも言う。

ちなみにその先輩は練習なんかちっともしないのに、誰よりも力強いサーブを打ち込み、誰よりも華麗なスマッシュを決め、誰よりも喧嘩が強くて、誰よりも可愛い男子にモテていた。女子にモテていたかどうかまでは寡聞にして知らないが。天才だったのかもしれないし実家が富豪で庭にテニスコートがあって小さいころから英才教育を受けていたのかもしれないし、人知れず隠れて努力をしていたのかもしれない。人知れず、あのプール裏の空き地で素振りでもしていたのかもしれない。

らくは氏も隠れた努力をたくさんしているのだろう。博士号を持ち大学講師として現場で教鞭もとっている氏は、講義の準備をし、自らの研究も行い、一方で各誌に詩を発表し小説の投稿をし将棋ウォーズで荒ぶり（多分）、将棋倶楽部24でらくは無双して（風の噂）、YouTubeで初音ミクの動画を天網恢恢疎にして漏らさぬほどチェックして（確かな推測）……そして「無責任」や「駒.zone」の編集をしつつ自らも作品を発表し続けている。すさまじいスケジュール消化っぷりであり、氏の時間管理スキルの高さが伺える。らくはさんの使っている手帳を見たい。ていうか欲しい。そして今「一週間の歌」の替え歌「らくはの一週間」がわたしの脳内でリピートし始めた。

日曜日は将棋ウォーズをして、月曜日も将棋ウォーズをして。

火曜日は将棋ウォーズをして、水曜日も将棋ウォーズをした。

金曜日は採点もせず、土曜日は将棋ウォーズばかり。

テュリャテュリャテュリャテュリャテュリャテュリャリャ

いつ小説や詩を書いているのか全く謎だ。……そうか判ったぞ木曜日だなっ！

というのはささやかな冗談であって、そもそも将棋ウォーズは1日3局までしか指せない（無料会員の場合）はずなのでそんなにやっつけられない。推測するに、先輩は脳の働きを違う分野へと切り替えるスイッチが相当に高性能な方なのだと思う。たとえ将棋で悔しい負け方をしたとしても、数秒後には静かな笑みをたたえて教え子のレポートを採点している氏の姿が、隠しカメラの映像を映すモニターを見ているかのように鮮明に目に浮かぶ。鮮明すぎてちょっと怖い。

おいおい、このカメラ性能が良すぎるぞ……って、うわ何をするヤメ（ry……

……ガシャン！……。……破壊された。隠しカメラが……。あれ高かったのに……。

ともあれ。

号を重ねながら少しずつ新しい挑戦を続ける「駒.zone」。将来的には「紙の駒.zone」で文フリへの進出を目指しているとも聞く。氏の人柄と志に惹かれ多くの同志が集まる「駒.zone」の今後の活躍と発展を願い、そして心から応援したい。したいじゃなくてする。応援する。熊本に向かって敬礼しながら応援する。頑張れらくは先輩と仲間たち。

そして私も、らくはさんの足を引っ張らない程度にちょろっと、時々でいいから、気が向いたときにでも参加させていただければな一……なんてことを今は思っているのだった。

2012年某月吉日、窓際で金魚を愛でながら

### 「将棋強迫神経症」

ぼくのツイッターには多くの将棋ファンが生息している。

世界の果てにある将棋の国に

ガリバーがあわてふためいている。

将棋ファンは「将棋のニュース」をリツイートをする。

これは将棋の世界の朝食だ。

みんなが朝を迎えるのに反して

ぼくはだんだん眠たくなっていく。

だれかが「リ्यूオー」と叫ぶ。

ぼくは「リ्यूオー」と、言葉を口のなかでころがす。

だれかが「リ्यूオー」というたびに

ぼくは世界からはずれていく。

### 1. 世界のはんぶんをくれてやろう おれはすべてをえるために 世界をおまえにうりはらおう

将棋ファンって将棋ファン以外からはどうみられているか知りたい。

そんな変態的な要望を友人から受けた。

鏡に映った自分ですらなく、鏡に映った自分を見ている「自分」がどう見えるかが知りたいだなんてなかなかマニアックな嗜好をもっているものだ。

世間にはさまざま趣味をもった人がいる。

ぼくが常々友人に抱いている妙なものにゆわあんという割り切れなさは、趣味を持った人を見る人のもにゆわあんだ。

ある時、家に帰ってきた夫が「鉄分たりてますかー！」とネクタイを脱いだ。

わたしはネクタイをしまいながら、足の先にくるんとまるまった靴下を指差す。

「ちゃんと靴下も脱いでよ。洗うんだから」

「そんなことより鉄分だ！ 鉄分なんだよ！」

興奮する夫はしきりに鉄分だ！と叫びながらテレビのまえに腰をおろし、鉄道ファン向けのDVDを再生する。

そして前のめりに画面を見つめ、野菜スティックを醤油マヨにべたべたとひたしはじめた。

鉄分欠乏症の夫を横目に、わたしも本日の業務を終了しないといけない。

わたしはくしゃっとしてしまったネクタイを綺麗にしまった。

彼の心もまたくしゃっとしていたのだろう。

だからわたしは綺麗に、しわを伸ばしながら、ゆっくりといたわるように、それをしまった。

言ってしまうえば「こんな感じ」なのだ。

どこか隔絶された世界であるのに共鳴を持って接したい気持ちになる。

将棋ファンに将棋分が必要なように文芸ファンにも文芸分が必要だということをどこかで理解しているからかもしれない。

一人が「リユーオー」と叫ぶと、みんなが続けて「リユーオー」と繋いでいく。

これを僕の趣味である詩文芸にあてはめると、谷川俊太郎を「タニー」と呼ぶようなものだ。

.....ちょっと羨ましいかもしれない。

「タニー」といえば「タニー」と返す人のいる暖かさ、そんなものを感じるかもしれない。

けど「タニーとホムホムが好きな少女よ、わたしはあなたの肉体が好き」とも思うかもしれない。

。

いずれにせよ詩人も歌人も、こんなに親しい存在には不思議とならないのだ。

これはなんかちょっと悔しい。（マチちゃんと気軽に呼べない存在だってこの世にはいるのだ）

ぼくも田村隆一をリユーオーと呼んでみようか。

「リユーオーがインドで飲んだくれながら旅行記を書いたんだってさ」

「リユーオーが西脇順三郎のことをコラムに書いておきながら、なぜか南の海で酒飲んでる内容なんだよ」

「リユーオー名言BOT ウィスキーを水で割るように言葉を意味で割ってはいけない」

なんだか素敵になってきた。

どこかむずがゆいというか、かわいらしく思えてくる。

それでも竜王は強い。隆一も言葉が強い。

リユーオーが負けそうになると「リユーオー.....」と淋しげに鳴く人がタイムラインにいた。

ぼくも北村太郎にリユーオーの人氣が負けそうになると「リユーオー.....」と鳴きたくなるのかもしれない。

手を伸ばせ午前6時の網フェンスの向こうへひとり隔たれた朝は（浮島）

## 2. あしながおじさんの足がふみつぶすもの

棋士にきゅんとくるお姉さん方も、ぼくから見るとどこか愛くるしいものがある。

「タイチさんの表紙が！！ けしからん！」といった人が仮にいたとしよう。  
なんかぼくにとってはそれがケーキ屋のガラスケースをまえに小首をかしげている人に見えてしまうのだ。

これは男性でも構わない。  
どのケーキにしようか。

（ショートケーキ？ いやいやモンブラン。秋だし……かぼちゃプリン？ 生クリームなのっかってる……。でも今日はお昼我慢したし、もうすこし高いのでも……）

触れ得難いものに恐る恐る手を伸ばす人は、男でも女でも関係なく、子どものように感じる。

そういった子らには満面の笑みを持って頭をくしゃくしゃしてやりたくなる。  
けしからんと思う気持ちが加速して、まわりまわって残念な雰囲気になってくる。  
街の灯の盲目の少女の前にチャップリンが現れるような展開をみんなが望んでいる。

「はやく助けてやれよ！ チャップリン！」

これがレンタルビデオなら、思わず立ち上がって叫んでしまうだろう。  
街の灯の内容は知っていても、チャップリンを急かしたくなる。

だってその映像をみているぼくは「チャップリン」でありたいと思う以前に、ケーキ屋で首をかしげる人間だからだ。  
こんなえばったことを書いていても、ぼく自身がだれよりも子どもなのである。

それにしてもタイチさんのほっそりとした手。まっしろな砂糖菓子みたいだ。  
銀河鉄道の夜では鳥の足がお菓子だった。タイチさんも氷砂糖みたいだ。  
将棋の世界にも南十字星はあるのだろうか。

こんなに身近に将棋があふれているのに将棋自体にはさして面白さの確信が持てないぼくは、と

っくにカンパネルラに取り残されている。

アキくんは朝日に溶けたひまわりをグラニュー糖でまぶしながら（浮島）

### 3. 面白くなくもない恋人

「やうたん」とはいったい何者だろうか。

将棋ファンに囲まれてから、しばらくの間このことが頭をぐるぐるしていた。

やうたん。ヤウチさん。やうたん。女流。やうたん。やうたん。

一体何者なんだ――やうたん。

周りの人がやうたんのことになると目の色を変えるのである。

「やうたんハアハア」

「やうたん可愛いよやうたん」

「やうたんに指導してもらいたい」

うーん、なんか違う。

もっと熱があるのだ。やうたんツイートには。

もしかしたらやうたんはケルト神話でいうところのリヤナンシーみたいなものなのだろうか。

詩人はその霊的な直感をえるためにリヤナンシーと恋仲にならないといけない。

そうでなければ詩のイメージが濁れてしまうのだ。

将棋ファンへある種の鮮烈なイメージをもたらす人なのかもしれない。

ああ、だったらぼくもやうたんを欲しなければ。

昨夜はごめんよやうたん。ぼくは詩を読まなかった。

勉強に忙しくてごめんよやうたん。最近のコマゾネの原稿も書かないといけないんだ。

やうたにごめん、ごめんやうたん。やうたん。

いくらなんでも無理がある。

こんなのはぼくの深遠にある日常であって、将棋ファンの日常であるはずがない。  
さすがにぼくのプライベートにまでやうたんは責任を持ってないだろう。  
いやでもしかし……みんなのやうたん熱はもっと激しい。  
それでもきっと？ やうたんなら、やうたんならやってくれる……か？  
そんな気もする。

ぼくたちの世界にはやうたんがあふれている。  
でもぼく達は誰一人、やうたんを知らないのかもしれない。

やうたんって何者なんだ。  
やうたんはヤウチさんなのか？ どうもヤウチさん以上の何かの気がする。  
ヤウチさんとやうたんの違いがぼくにはまだわからない。

やうたんに飲み込まれていくある日のぼくのタイムライン。

「ひとつずつ月をあおぐとひとつずつわたしは崩れていなくなってしまう」（浮島）

#### 4. 孔明、泣いて自駒を斬ることに恍惚とす

つい最近、将棋ウォーズなる単語がタイムラインを沸かせた。  
和訳すれば将棋戦争ということになる。  
そんな意味を持っているにもかかわらず、みんな楽しそうに戦争をしている。  
勉強や仕事をそっちのけで将棋という戦争に身を投じる彼ら。  
……いいな。……楽しそうだな。  
輝かしい家族のだんらんを冬の日の窓に見たマッチ売りの少女の気持ちがわかる気がする。

ネット上でもハム将棋というフラッシュがあって、ぼくもそいつで遊んだことはある。  
棋力は駒を動かすことができるという程度だ。  
だから将棋ウォーズに興味があっても気軽に戦争に行くことはできない。

以前コマゾネの企画で跳馬さんから教授をいただいた時では、かの邪知暴虐なるげっ歯類にぼこぼこにされた。

ついさっきまで味方だった飛車が、桂馬が、いつのまにかぼくを追い詰めている。

振るっていた力が奪われ、逆に自分に行使されている。

何もかも捨てて裸で逃げ出したい気分だ。

その不快感は筆舌に尽くしがたい。

戦争しようとするまででかけたら戦車を忘れて三輪車で突撃するサザエさんよりも——ずっと、ずっと！ マヌケでみじめな気分になる！ なんなんだこれは！

そんな気持ちを知っているからだろうか。

将棋ファンの人が将棋を指しているのを聞くとうらやましいな、とってしまう。

なんかこう……あたたかそうだ。

「磯野一！ 戦争しようぜー！」と将棋盤を気軽に広げる文化が身近にあるのだ。

ぼくなんかは下級兵士のそのまた下級みたいなもんだろう。

ドッグタグを首に下げたかどうか確認しているうちに死んでしまっている。

戦争を楽しむことすらできない。

相手に勝てばうれしいし、負ければ悔しい。

そんな単純な図式が、なんの違和感もなくすんなり当てはまってしまう世界だからかもしれない。

ぼくは将棋がおそろしい。

マッチ売りの少女は暖炉と温かい食事、やさしい父親母親のいる光景がだれよりも恐ろしかったんじゃないだろうか。

少女は、その家族の裏にあるものを知っている。

やさしさは肉感的でおそろしい今日の零時は無機質である（浮島）

5. 「将棋の王様って結構優秀なんですよ。シャンチーの王様よりもすごい」

「でも王様、ぼくは時折どこにもいけなくなっちゃいます」

将棋のイベントに出かけてみたいと思ったことがある。

おっかなびっくり将棋という文化に触れておきながら、いまだに足を踏み出していない自分とサヨナラしたかったのだ。

いまでは彼らは彼ら、自分は自分といった感じで、将棋文芸という特殊な環境に身を置いても開

き直っている。

将棋だけでなく文芸もないと将棋文芸じゃないはずだ。

でも俺.....ここにいていいのかな.....。いまだに場違い感がすごい。

将棋のイベントのWEBページをのぞくとぼくが住んでいる近所でもわりとイベントが開催されていた。

子どもの将棋イベントなんかはすぐそばのショッピングモールで開催している。

.....け、見学とかしても大丈夫なのかな。

くらくらと引き寄せられるようなタッチで手帳をひらく。

予定はない。けれど子どものイベントに大人が見学しに行ってもいいものだろうか。

.....子どもの運動会をのぞいていた大人が通報されるといったことも巷ではあるそうだが、ぼくも通報されてしまうんじゃないだろうか。

ぼくはロリコンじゃないし、ショタコンでもない。

むしろコンプレックスは将棋そのものだ！

.....ならなぜ見学に行くのだろう。うまく説明できそうにない。

いきなり息が苦しくなる。こうなるともはや強迫的な病性を帯び始める。

「貴方は一体何しに来たの？」 聞かれたらどうしよう。

将棋好きなひとと話するのが好きです！ だれがそんなことを信じるだろう。

ぼくのような臆病者には、将棋コミュという川のへだたりはなかなか越え難い。

コンビニが込み合っているときに「あんまん」を買う時の緊張に似ている。

のろのろとあんまんを取り出す店員。

タイミング悪く温まってしまうぼくの前のお客さんの弁当。

時計を確認しはじめる背後の人たち。

自分以外の人と、自分。

世界ぜんぶがただそれだけの二元論になってしまう。

まわりが将棋の話題をしているなかで、ぼくはあんまんを食べるのだ。

みんなは「指し筋は」とか「さっきの手は」「長考ですね.....」とか喋ってる。

ひとりで「これはゴマの香りですね」とか「甘みのレヴェルは」とか格好つけて言ってみたと  
ころでどうにもならない。

世の中には110円で買える孤独もある。

安すぎるぞ！ 孤独！

それでもそこに「なにか楽しそうなもの」があるのはわかるのだ。

将棋漫画を読んで、将棋のおもしろニュースを見て、カツラが宙を舞うのを笑い、パンチパーマ  
が盤をねめつける視線に驚嘆する。

それは「なにか面白そうなもの」の感覚を起点にうまれているのだ。

誰もがみな「面白そうなものがある場所」を盛り上げようと頑張っている。

いろんな人にいろんな形で発信している将棋文化……それでもやっぱりおいしいのは具の部分な  
のかもしれない。

将棋の王様は大抵はなんでもできる。上にも下にも左にも右にも行ける。

八方美人な彼はいろんな分野の人間を魅了しつつも、その本質を探らせない。

将棋の王様のなかにはゴマ風味のあつあつアンコが詰まっている。

羨望は肺よりふかくポリ袋をごらんよあれがキミの翼だ(浮島)

6. 「駒とおむすびとペンギンをつかってニコニコ動画の自転車動画みたいなのをやってみよう  
」

世の中には斜め上に行く人がいる。

角道に行くのだ。

逆に斜め下に行く人もいる。

それも角道だが、それは思いがけない逃げ道を己に与える人だ。

編集長がある日ぼくにこう尋ねたことがある。

「駒とおむすびと……えっこれ将棋なの？」

将棋なんだ。ぼくのなかでは「これだけわけがわからないもの」が将棋なんだ。

でも「将棋とおむすびと駒の擬人化ってなんか面白いなー」って思っちゃったんだから仕方ない

。

ぼくは将棋が苦手だが、将棋の駒は好きなのだ。

角とはなにか。

それは斜めの存在だ。

おむすびにだって斜めはある。

おむすび自体が料理なのに、おむすびを料理することもある。

それは焼きおむすびだ。

味付けは味噌がよろしい。

おろししょうがを少しあえて、小ぶりに握った飯の表面にこすって……焼く。

自宅で調理する際はトースターで十分だろう。

まずは握っただけの白いおむすびを3分ほど焼いて乾かす。

味噌は焦げやすい。飯よりもはやく焦げるからだ。

乾いてから味噌をひょうめん塗りに塗り、トースターで恐る恐る焼いていく。

のんびりのんびり、小まめにひっくり返しながらかく。

すると味噌の乾くいい匂いがたちのぼってくる。

あともう少しの辛抱だ。

飯の表面が狐色に色づくまでじっくりと焼く。

できあがったら熱い煎茶とともに食う。

おむすびは「いただく」というより「食う」ものなんじゃないだろうか。

そしてここで焼かれた味噌はとてとてもとても香味豊かなものだ。

常々思うのだが、将棋を楽しむための料理があってもいいと思う。

サンドイッチ伯爵はサンドイッチという名料理を発明したが、将棋にはそれに類するものがおそらくないのではないだろうか。

鍋は差し向かいで食うのがオツだ。

将棋も差し向かいで一局やるのもオツなんじゃないか？

自分たちの好きな駒になぞらえて、いろいろなおむすびを作る。

焼きおむすびを作るみたいにのんびり構えてもいいんじゃないだろうか。

そんな対局だったら、ぼくにも楽しめるのかもしれない。

角は思いがけない発想の駒だ。

年の瀬は吐く息ばかりつめたくて炭酸水におぼれ死ぬペンギン（浮島 題詠：ペンギン）

喚けよ 《これは宝石だ》って手のシトロン水を空へまく女（浮島 象徴詠：角）



手首の力が半端ない角ちゃん

## 次回予告

あらゆる賞を独走する最強のお嬢様がついに本誌に登場！



「うー……なんだかたまーにイヂワルなんだよね」（PN ボク、佐藤紳哉六段を応援して  
るよ！！ さんより）

元気に走り回るボクっ娘をイヂメルお嬢様ランキング 第一位！！

「か、かけっこだったら負けないのにつ！！」（PN 飛び出すなアタシは急にとまれない さんより）

だしぬけに背後から息を吹きかけてくるドSお嬢様賞 2年連続受賞！！

「……怒らせると……怖い……」（PN 漆黒の闇に墮とされし斜陽に生きる青鴉の慟哭 さんより）

中二病患者を精神的に追い詰めるお嬢様グランプリ 優勝！！！！

「……破廉恥ですッッッ！！！！」（PN Ag+ さんより）

艶やかで黄金のお嬢様は素敵に無敵ランキング 独占首位！！！！

というわけで次号は金おぜうさまです。

イラスト 若葉

将棋が流行していると言ってもそれは「増加傾向にある」と言った意味で、やはり知らない人にとってはまだまだ未知のゲームのままである。たとえばメジャーなスポーツは、ニュースで結果が流れたりする。しかし将棋はボードゲームとしてはメジャーなほうだろうが、その結果が報じられることは滅多にない。また、たまたまテレビで将棋の対局を見かけたとしても、多くの人は「へー、将棋か」で終わってしまうだろう。ルールがわからなければ、ほとんどなにをしているかわからない。スポーツは、初めて見た人でもしばらくするとどういう競技かわかってくるものが大半なのである。

その壁を乗り越えるため、ルール自体が異なる将棋が開発されてきた。マス目と駒を減らす、というのが主なものである。将棋の難しさは、その駒の多さにある。例えばRPGゲームで主人公パーティが最初から8種類のジョブによる20人だったとしたら、相当プレイヤーを選ぶだろう。どのような戦術をとればいいのかを考える前に、ジョブの特性を覚える段階で面倒になってしまうかもしれない。そこで序盤では選べるジョブとパーティの人数を減らし、プレイヤーをゲームに慣らしていくのが優しいゲーム製作者側のとる手段である。

さらに将棋は、見た目の固さというハンデもある。木の駒に漢字、これは厳かですらある。カッコいい、と感じることもあるのだが、世の中かわいいの方が流行る時代である。そこで見た目をかわいくしよう、という動きもある。動物をモチーフにしたものが最も流行しており、動物の駒の方に慣れていくという人も増えたのではないか。また、ネット上で対戦できるソフトでも、相手が動物のキャラクターであるものが有名である。弱めに設定してあるそのソフトは、対局中の様子もやはり動物的である。動物を相手にすることにより、人間同士で行う時のような緊張感から解放されるという効果が考えられる。

複雑で奥が深い将棋を、あえて簡単に、見た目もかわいいものにしていくのは言うならば「将棋の動物化」ではないか。ここではあえて「どうぶつ化」とした方がニュアンスが伝わりやすいか。どうぶつ化されることにより多くの人々が接するようになり、何割かの人々はそこから「人間的な」将棋に興味を持っていく。新たなルートを作ったという意味で、どうぶつ化された将棋の果たしている意義は大きい。

そして、どうぶつ化は別のところでも起こっている。ネット対戦である。こちらのどうぶつ化は、見た目ではなくゲーム性そのもののどうぶつ化と言える。

将棋には様々な要素があり、例えば駒を箱から取り出し、並べていく中にも作法があったりする。どちらが王将で玉将か、駒をどちらが振るかも対局前の大事な作業である。しかし、ネット対局にはそれが無い。対局相手が決まると、駒は並べ終わっており、先後も決まっている。チャット欄であいさつを交わすことなどができるが、それもボタン一つで「よろしくお願ひします」「ありがとうございました」が入力されたりと随分簡略化されている。

ネット対戦に慣れることにより、将棋が本来持っていたゲームのルールに含まれない部分が失われた、と考えることもできる。いわばわれわれが将棋に対して抱く美的な部分が、ネット対戦では喪失されていても問題とされないのである。この美的な部分こそが人間的である、とは言えないか。高等な知能を持つ動物でもロボットでも、美的部分をこなすことはできるかもしれない。しかしそれは美的であるが故ではない。あくまでそれすらルールとしてインプットされた場合においてのみ、美しい部分は実践される。

ネット対戦と対面の対戦は、ルールが同じでありながら別の行為がなされるものとなっている。そこでは駒の置き方や駒音も均一化され、相手の顔も見られない。対面ならば勝負に影響するような要素の多くが省かれており、二つはもはや別のゲームと言えるほどである。

そしてさらに、将棋の本質にまで切り込む形式で登場したのが将棋ウォーズ ([ホームページはこちら](#)) である。スマートフォンなどで遊べるこのアプリは、挨拶機能など全くなし、対戦相手は自動で決まり、さらには見知らぬおじさんに合図され10分切れ負け将棋が突然始まる。対戦相手の中にはソフトも混じっており、中にはひたすら玉が突進してくる不穏なロボットもいる。そして何よりすごいのは、「棋神降臨」と称して合法的に五手の間ソフト指しができるのだ。

既存の将棋を知っている者にとって、様々な衝撃が含まれているこのアプリ、ネット上の反応はかなり良いと感じている。礼儀も何もあったものではないが、「そういうもの」として人々は楽しんでいる。そして戦法や囲いのカードを集める、その日の対局結果が順位として表示されるなど、新しい要素が中毒症状を誘引してやまないのだ。

将棋ウォーズは将棋の人間的な部分をあっさり切り捨て、どんどん別の要素を付加してきた。特に新しく導入された3分切れ負けの弾丸ルールは、勝敗のあり方すらも変化させてしまうものだった。対局の多くは時間切れで決まるため、「局面の有利さは有利さの一つでしかない」状況になっている。終盤になりお互いの持ち時間が少なくなってくると、これまでの将棋では考えたこともなかったようなことが重要になってくる。例えば自玉が必至で時間は自分の方が余っている場合、「相手に向けられる王手の数+自玉が詰まされる手数」を瞬時に判断し、相手を時間切れに追い込む試みが始まる。単純に詰まされるまでの時間稼ぎではいけない。たとえば「現状五手詰みだが飛車を渡せば一手詰み」のような場合、相手に飛車を渡す王手は損になる場合がある。その飛車で受けることにより「必至だが詰みの手数が長くなる」場合、そちらが正解かもしれないのだ。ただし、考え過ぎると自分の時間が減ってしまう。「限られた時間の中で、お互いが手抜けない手数について計算する」という、おそらくプロがほとんど考えない領域に私たちは投げ込まれているのである。

そこにさらにトライルールが採用された。これは、「自玉が相手玉の最初居た場所に行けば勝ち」というもので、持将棋などのトラブルを避けるためのルールである。慣れていないため、温泉気分でしたところ玉単騎で突進されて負け、ということをおは何度か経験した。さらに棋神を使用したところ自玉の難しい詰みを読んだために受けてしまい、トライの方は防ごうとせずに負けたこともある。実際の詰み、時間、トライ、(さらには通信切れ)これらいくつもの要素が勝負を決めるといって、「将棋を全く異なるものにした」のが将棋ウォーズなのだ。

一面では、新しい形に進化させた、より人間の英知が練り込まれたとみることもできるだろう

。しかし他方、将棋そのものは最低限のルールだけが採用され、将棋以外のものを付加していったのであって、将棋そのものはどうぶつ化している、と見ることもできる。また付加され要素により、戦法や囲いのカードを集めるために勝敗は二の次にさせる、勝率や順位を気にするあまり対局がやめられなくなる、といった「人間らしい理性を喪失させる」ような現象も見られる。

私たちは、将棋に対して様々なものを求めている。礼儀作法や精神力が鍛えられると言った効果を求め、逆にそれらが備わっていないと将棋に向いていないと判定されたりする。しかし、実はそれは将棋そのものではなく、「将棋道」について語っているのではないか。高校球児の多くが坊主頭であるのに、プロ野球選手も草野球をする人もほとんどそうではないということがある。高校球児たちは、野球とは別に、野球道も受け入れ坊主にしている。それは彼らが自主的に選んでいるのだ。しかし野球を楽しむのに野球道を経由する必要はない。将棋も似たようなところがあるが、参加者が気付かずに将棋道に参加している、という特徴がある。私たちはこれまで、将棋と将棋道を無意識のうちに近づけすぎていたのではないだろうか。それがどうぶつ化により、将棋本来の楽しみ方が「再発見」されたのではないか。

将棋道を学ぶことで得られるものは多い。しかし、将棋道が弾き出すもの、拒むものの影響も大きい。将棋ウォーズなどの登場により将棋と将棋道は分離し、将棋には様々な新しい装いを加えられることがわかった。いや、私たちはそのことを以前から知っていたはずだ。はさみ将棋やまわり将棋から駒に触れてもらったり、王手将棋やトランプ将棋といった変則将棋で楽しむことがある。しかしどこかで、将棋道をたっとび、そこにゴールを定めていたのではないか。アマチュアからプロへと延びる一直線の道の上にこそ将棋の本質はあり、そこから外れることは邪道であるというような、そんな意識はなかったか。

将棋は今やただ観ることを楽しむ人も増え、必然的に変革の時を迎えている。道としての将棋も、当然美しく尊いものである。しかし将棋の楽しみ方は多様であってよいのだ。ひたすら勝ちを目指すのも、将棋の楽しみ方としては間違っていない。ただし知らない他者と対面するときは、当然守るべき礼儀が発生し、お互いが気持ちよく時間が過ごせるよう努力する必要がある。どうぶつ化された新しい将棋は、ネット空間の中に治外法権を築いた。礼儀が必要とされない代わりに、悪意ある無礼な行為をする隙もない。そのような中で、私たちは存分に個人的な目標を追い求めることが許されるのである。

私たちはどうしても、新しいものの出現に戸惑い、それを認めた後も「本流に役立てるにはどうしたらいいか」を考えてしまう。将棋ウォーズなどで将棋に興味を持った人々を、われわれが慣れ親しんだ本将棋に導くには、とってしまうのだ。もちろんそのことも大事だが、新しいものは新しいもの独自の可能性がある、ということも知るべきである。例えばネット上で「弾丸ルールタイトル戦」などができれば、それまでアマチュア大会に興味がなかった人も参加してみるのではないか。また、普通の大会では活躍できない人も、弾丸ルールの大会では勝ちまくってタイトルに手が届くかもしれない。「切れ勝ちの達人」「トライ王」が生まれることだってあるだろう。新しくできた幹が、ぐんぐんと枝葉を伸ばしていくことも大事なのである。

今後将棋が広く一般に受け入れられていくためには、様々な可能性が模索されなければならないだろう。その中でどうぶつ化された新しい将棋のあり方は、大きなヒントを与えてくれている

。人間らしく美しい、格調高い将棋道も必要だが、私たちは時に人間らしさから解放されてもいいのだ。そしてそれを受け入れがたい感情もまた、新しい発見へとつながるだろう。私たちがより人間らしい将棋道を必要とするのならば、その本流をどう守り広めていくかに悩まなければならない。枝葉の茂みに嫉妬せず、幹が幹としての自負を持つのであれば、ゆっくりとでも元々の将棋も太く長く繁栄していこう。最もいけないのは、過剰に枝葉から栄養を奪い取ろうとすることである。葉が落ち枝が枯れば、どれだけ立派な幹も成長することができない。

偶然か必然か、ポスト将棋とも言うべきゲームは非常に成功している。また将棋の楽しみ方自体も非常に多様化している。将棋界の未来は、明るくなる確率がとても高いと思うのである。

Special Thanks みなみん@将棋ウォーズ ([@warsminamin](#)) 様

## 作者紹介

---

清水らくは

詩人・倫理学者。短歌も少々。2011年『詩と思想』読者投欄稿年間最優秀作。最近ちよくちよく詩人としての仕事もあるのですが、締切が決められると焦ることがわかりました。焦ったわりに一か月前に仕上げ、封筒に入れたまま一週間ほど寝かせるという謎行為をしています。

---

浮島

コラムというよりブログ文章になってしまいました。頭の悪い文章になってます。

「ねえスナフキン、文才ってなんだい？」

「きみがもっていないものだよ」

それと最近、名前を変えました。浮島です。

相変わらず好き勝手に短歌や詩やらで遊んでます。

おまえも蠟人形にしてやろうか

---

まるぺけ

今回も表紙とイラスト担当のまるぺけです。表紙遠景のもとみちゃんがギャグ調なのは手抜きじゃないよ。ないったら。月萌さんについては、今回色んなキャラクターを描けて満足しております。懸くんを描いたので次回は表紙に辻村くんを登場させなければと燃えております...！

---

贅楽夢

子どもの頃、浜辺で「首をくくれ」という声を聴いたことがあります。「くくる」という言葉の意味が判らず、ただぼーっとしていると通りすがりの女の子に声をかけられて、そこでハッと我にかえたのですが、私はその時すでに海に入り込んでしまっていて波は胸の高さにまで届いていました。そう言えば、膝小僧に白い布切れが絡み付いていた記憶もあります。

あの子は今どうしているのでしょうか？Facebookで「異業種交流会で人脈を広げ新たなイノベーションを創出しよう」とか言ってる意識の高い人になってたりするのでしょうか？.....刻の流れは美しく、そして残酷なものです。ということで「ツクモさん」続編でした。執筆に際してご支援いただいた多くの皆様にこの場を借りて厚く御礼申し上げます。

---

ジェームズ・千駄ヶ谷

前作『Life is lovely』の続編を書かせていただきました。ジェームズです。

最近、猫を飼いたくて仕方ありません。実現する予定は全く無いのですが、詳細については既に固まっていて、メインクーンという長毛種の猫にするつもりです。それも、なるべく巨大化するヤツに。ところで、成長してデカくなる猫を選ぶポイントは手足の大きさらしいのですが、どうやって見極めたら良いのでしょうか？子猫の手足について気になって仕方ない今日この頃です。

---

会場健大

詰将棋作家見習い。将棋世界誌に入選3回（うち月間優秀作1回）、詰将棋パラダイス誌に入選10回。第六回Tsumeshogi Theme Tourney課題Aにて優秀作。詰将棋解答選手権初級戦2010、2012全国一位。同一般戦2012全国12位。2013年1月より詰将棋パラダイス誌のコーナー「詰将棋デパート」担当。

---

阜倫藍那

(...聞こえますか...今...あなたの...心に...直接...呼びかけています...前回「チェ的」が休載されました。今後の存続も危ぶまれています。...ぶっちゃけ一人でチェスの記事を書くのはツライです。貧乏もツライのですがそっちは慣れました。あなたは...お風呂に入っている...場合では...ありません...いいですか...原稿です...駒zoneの原稿を書くのです...)

という月子さんの声が聴こえた気がしたので寄稿してしまいました。少しでもチェスの楽しさを知ってもらえたら嬉しいなあ.....と思いながら書いたのですが、方向性を色々と間違えていたかもしれません。

さて、今回の問題は19世紀のチェスプレイヤー、サーベドラが実戦の一変化として紹介したものが元ネタとなっているのですが、如何でしたでしょうか。月子さん、解けましたか？ていうか考えてみましたか？

---

ふりごま

「道場編」「大会編」に続いて「ネット編」を書きました。

この3部作をもって、このシリーズは完結です。

ぽふぽふというキャラを活かしきれていない点は反省材料として心にしまっておきます。

ご愛読、ありがとうございました！

---

若葉

趣味に走りました。

---

皆様お久しぶりです、編集長の清水らくはです。

今号も多くの方にご参加いただけて大変うれしいです。

始めた頃は私と浮島さんでどうやってコンテンツを増やすか相談していたものですが、今ではいただいたものだけで何万字にもなるので、自分たちの作品が埋もれてしまわないか心配するほどになりました。

ただ、これだけのものを無料で公開することには、やはり苦悩もあります。良質な作品には対価が支払われる、そのような認識を維持することは創作に関わるものの使命でもあると感じるからです。

フリー雑誌を入り口として文芸に興味を持った方が、売っている作品を買うようになる、今のところそうならば一番幸せかな、と思っています。皆様、アマチュアの作ったものであっても、いいと思うものがあれば買ってあげてください！

.....とここまで書いてしまうと手前味噌になってしまいましたが、今年はいろいろと「売ってみよう」としています。そのうちの 하나가、『紙の駒.zone』製作です。電子書籍は大変便利なのですが、やはり紙の本にも独自の魅力があります。また、物としての本を売買することを通して、人と人が交流するというのも大事だと思います。

というわけで、今年4月14日大阪で催される「第十六回文学フリマ」で本を出したいと思っています。

この本はナンバーに含まれない特別号で、三月初旬を締切に皆さまから原稿を募集したいと思います。「駒損」をテーマとした作品で、字数は4000字まで。小説・詩・短歌・エッセイなど、何でもOKです。興味のある方は是非一度ご連絡ください。

次号の『駒.zone vol.7』は七月ごろ発表を目指します。こちらはテーマ・文字数ともに自由です。引き続き、電子版にもご寄稿よろしく願いいたします。

他にもいろいろと挑戦していく年にしようと思っています。皆様、今後ともよろしく願いいたします！

---

駒.zone編集部

編集長 清水らくは @rakuha

広報 金本月子 @tsukiko\_sann

営業 皆川許心 @MinagawaMotomi

バックナンバー

[vol.1](#)

[vol.2](#)

[vol.3](#)

[vol.4](#)

[vol.5](#)

関連本

[『五割一分』](#)

[『レイピア・ペンダント』](#)

## 駒.zone vol.6

<http://p.booklog.jp/book/57240>

著者：清水らくは他

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/rakuuha/profile>

編集：駒.zone編集部

出版：無責任.zone

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/57240>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/57240>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ